揃はぬ中に彼奴等が城に着かうと、俺達は俺達の體面上、彼奴等を懲らしてやらねばならんのだ。又さうする手段も見つけよう。だから彼奴等をよく見張つて居れ、そして、お前達の中で、一番足の早い者を遣つて、そこいらの郷士共の消息を持つて來させるんだ。」

彼等は全く命令通り實行することを誓つた、そしてそれぞれの使命を果す爲めに氣輕に飛び出して行つた。一方、彼等の首領と今や彼を大いに尊敬もし、又幾分怖れもして來たその二人の連とは、コプマンハーストの御堂をさして路を辿つて行つた。

やがて彼等が一寸した月影の射す樹間の空地——その正面に尊い、けれども荒れ果てた御堂と、苦行の信仰生活に非常に相應はしい粗末な庵とが立つてゐる處に着いた時、ワンバはガースにかう囁いた、「これが若し泥棒の巢窟だとすると、『お寺へ近づく程神樣から遠ざかる』といふ古い諺が證明される譯ぢやて。そして屹度、」と更に附け加へて言つた、「それに違ひなからう？——まあぢつと耳をすまして奴等が庵で歌つてる飛んでもない聖歌をお聞き！」

實際その時隱者と客は、その肺量一杯の非常に強い聲で、或る昔の酒の歌を唄つてゐる處であつた、これがその疊句である——

さあさ、その茶色の盃こつちやへお廻し、
面白い子ぢや、面白い子ぢや、
さあさ、その茶色の盃こつちやへお廻し、
ほう！　面白いジエンキン、お前は
惡者のやうによく飲むな、
さあさ、その茶色の盃こつちやへお廻し。

「ふゝん、滿更捨てた歌ひ振りぢやないぞ、」とワンバは、この合唱に附け足して一寸自分の文句を差挿んでから言つた。「だが一體誰が、而も眞夜中に隱者の庵からこんな陽氣な囃を聞くと思ほう！」

「いや、俺はさうでもないよ、」とガースが言つた、「何しろこのコプマンハーストの浮かれ坊主は名うての男だ、この道で影を亡くする御料林の鹿の半分はこの坊主が殺すのだからな。なんでも人の話ぢやあ、山番がお上に訴へ出たので、もつとよく規則を守らなけりや、袈裟衣を悉皆剝ぎ取られるだらうと云ふ事だ。」

二人がかう話してゐる間に、ロックスリイのけたゝましく、續けざまに扉を敲く音が、到頭中に聞えて隱者と客とを驚かした。「おや、おや」と隱者は、今迄唄つてゐた暖やかな歌を突然止めて言つた、「今度の夜更の客はもつと澤山

らしいぞ、わしはこんな頭巾の手前、この心地よいお勤めをしてゐる所を見られたくない。どんな人にも敵はあるものだ、のろまの騎士殿。世間には隨分性惡の手合がゐて、愚僧が貴方といふ疲れた旅の方に、それももの〳〵三時間足らずしかお勸めせぬお歡待の小酌を、やれ亂舞の、放蕩のと、どれもこれもわしの商賣や、わしの氣性には反對の惡德にばかりこじつけて了ふのだ。」

「何といふ卑劣な讒誣者だ！」と騎士は言つた、「私は彼奴等を懲らしてやりたい。だが、和尚殿、萬人皆その敵を持つと云ふ事は眞實だ、この國にさへ、素面よりも寧ろ兜の格子越しに話したいやうな者共がゐます。」

「ではその貴方の鐵の兜を、のろま殿、御性分はのろまながら、出來るだけ迅くお被りなさい、」と隱者は言つた、「その間に愚僧は此處いらの白鐵の瓶を片付けて了ひませう、が、どうも今の先迄この瓶の中へ入つてゐた奴が妙にわしの禿頭の中を駈け廻つてゐるわい、——それから片付ける音を紛らす爲めに——何しろ、實際、わしは少々ふら〳〵するやうな氣がするでな——わしが今唱へる通りの調子でわしに合せて下さい、なに文句などはどうでも宜しい——わしもあまりよく知らんのだ。」

かう言ふと、彼は雷のやうな聲を張り上げて、「深き淵より呼べり」（舊約聖書詩篇第百三十篇「救はうでの歌」の初めの文句「あエホバよわれ深き淵より汝を呼べり」とあるを引いた）と歌ひ出し、それに紛らして酒宴の器類を取片づけた、その間騎士は、心から笑ひながら、武裝しつゝ、興の乘るたびに、時折主の僧に聲援するのであつた。

「こんな時刻に又何といふ飛んでもないお祈りを擧げるのだ？」と、外からの聲が言つた。

「おやまあ、旅の方！」と隱者は、自分自身の聲と、それから多分夜よなか酒を饗腹飲んだ故であらう、隨分耳慣れた聲音にも拘らず、それに氣付かず言つた、「お行きなさい、神樣やダンスタン聖人の御旨だ。そしてわし達の信神をお妨げ下さるな。」

「狂氣坊主め」と外からの聲が答へた、「ロックスリイだ、戸を開けてくれ。」

「萬事安心だ、——無事だ——」と隱者は黑裝束の騎士に言つた。

「だが何人です？　私にはそれが仲々重要な關係があるのです。」

「誰？　いやなに、わしの友達なのだ。」

「だが、どう云ふ御友人です？」と騎士は押して訊ねた、「貴僧の御友人でも、私にはさうでないかも知れませんからな。」

「どう云ふ友達？」と隱者は繰返した、「さあ、さういふ間ひはとかく間はれ易くて答へにくいものぢやて。どういふ友？——さやうさ、一寸思ひ出した所では、先づ愚僧がつい先刻お話し申したあの正直な番人でございませうかな。」

「はゝあ、貴僧が敬虔な隱者であるやうに、その番人も同じ程度に正直だといふのですな、まあそれは疑ひ申しますまい。それはさうと、蝶番を叩き壞されぬ中に、戸を開けて上げたがいゝでせう。」

一方、犬共は、この騷ぎの始め頃に恐ろしい吠え聲を立てゝゐたのが、今は外に立つてゐる人の聲を聞き分けたかのやうであつた、と云ふのは、今迄とは打つて變つて、宛で彼を內へ引入れるやうに取りなすかのやうに、戸を掻いたり、わん〳〵鳴いたりしたからである。隱者は素早く玄關の門を外して、ロックスリイと連の二人を一緒に內に入れた。

「これは、隱者殿、」と郷士は一目騎士の姿を見るなり、先づかう訊ねた、「こゝに居られるお飲み相手は、どう云ふお方かな？」

「同宗の仲間で、」と隱者は、首を振りながら答へた。「實は、徹宵二人で祈禱を上げてゐたのだ。」

「ではその方は僧兵なんでせう、」とロックスリイは言つた、「彼等はもつと澤山海外にゐます。それはさうと御坊、貴僧に念珠を置いて六尺棒を取つて戴かねばなりません、僧であらうと俗人であらうと、仲間の者は一人殘らず用があるのだ。——だが、」彼は一歩脇へ逸れて行つて、言ひ足した。「御僧は氣でも狂はれたか？　御存じない騎士なぞを內へ引入れて？　我々の規約をお忘れなされたか？」

「御存じない、と！」僧は大膽に言つてのけた、「乞食が自分の椀を知つてゐると同樣、わしはようく存じてゐるわい。」

「では名は何と云ふ？」

「名は、」と隱者は答へた、「えゝと、名はスクラッペルストーンのアントニイ卿だ——貴方の口振りぢや、まるでわしが、何時も人と飲んで、その人の名を知らずにゐるやうだな！」

「貴僧はちと飲み過ごされたな、」と彼の森男は言つた、「して又餘計な事を喋り過ごされはしなかつたかな。」

「いや郷士殿、」と黒裝束の騎士は、前に進み出て言つた、「この愉快な主をさうお怒りなさんな。このお歡待も若しも斷られたら、私は無理にも、強請らうと思つてゐたのです。そして隱者殿はその歡待を私に與へて下さつたまでのことです。」

「貴方が強ひる！」と僧は言つた、「まあ今わしがこの灰色の衣を綠の法衣に着更へる迄お待ちなさい。そしてわしは

屹度貴方の腦天に六尺棒を十二ほど喰はせますぞ。さもないと、わしは眞の坊主でも、立派な森男でもない。」

彼はかう言つてゐる間に、法衣を脫ぎ捨てゝびつたり身に附いた黒い硬布の胴衣と股引だけになり、その上へ素早く綠の法衣を引掛け、同じ綠の長襪を穿いた。「濟まないが紐を結んで下さい、」と彼はワンバに言つた、「お駄賃にスペイン製の白葡萄酒を一杯差上げませう。」

「それは有難うございます、」とワンバは答へた、「だが、まあお考へなすつて——一體手前はあなたが聖い隱者から罪深い森男に變化られるお手傳ひをしてもいゝものでございませうか。」

「いや案ずるには及ばぬ、」と隱者は言つた、「わしはたゞフランチェスコ派の灰色の僧衣に對し、この綠衣の罪を懺悔するだけで、すべてはまた元通りになるのだ。」

「アーメン！」と幇間は答へた。「成程、上等服を着た懺悔者は粗末の衣を着た司僧に懺悔を聽いて貰ふものでございます。ではあなたの法衣は手前の染分けの胴着もお負けにお赦し願へませうね。」

かう言ひながら、彼は僧に手傳つて、言はれるまゝに、今度は長襪を胴衣に附ける恐ろしく澤山の紐を結んでやつた。

二人がかうしてゐる間に、ロックスリイは騎士をちよつと傍へ呼んで、かう話し掛けた——

「お隱しなさいますな、騎士殿——貴方は確かアシュビイの馬上試合の二日目にイングランド人側の味方となつて勝利を得させられたお方でございませう。」

「そして若しそれが甘く當つたと致したら、郷士殿、それから何となさる御所存です？」と騎士は答へた。

「若しさうであつたら、私は貴方を弱い者に味方する人と當然思ひます。」

「さういふのが少くとも眞の騎士道と申すものであらう。私をさうでなく思はれるのは、どうも餘りぞつと致しません。」

「だが私の爲めに、立派な騎士であると同樣、立派なイングランド人であつて欲しうございます。と申す譯は外でもございません。貴方に今お話し申さねばならぬ事は實際、總ての正直な人の義務、いや、わけてもイングランド生えぬきの者の義務でございます。」

「貴方は何處を探しても、私程イングランド及び凡ゆるイングランド人の生命を大事に思ふ者にお話しなさる事は出來ません。」

「私は喜んでさう信じませう、」と郷士は答へた、「何しろ

我がイングランドは開闢以來斯様に愛國者の支持を必要とした事はございませんからな。ではお聞き下さい、こゝに一つの企圖事があるのです、果して貴方がお見受け申した通りのお仁なら、定めし天晴れ御加擔下されようかと存じます。實は一隊の惡者共が、自分等よりも善良な人々に身を扮して、サクソン人セドリックと申す高貴のイングランド人や、その方が後見する姫、及び友のコニングスボローのアセルスティンなど引つ捉へて、トオキルストーンと云ふ、この森の中の城へ連れ込みました。それで貴方を立派な騎士とも立派なイングランド人とも見込んでお願ひ申上げますが、どうかその人達を救ひ出す御援助をしては下さるまいか。」

「それは武士の誓言、たしかに引受けました。が、それにしても、彼等の爲めに私の援助を乞はるゝ貴方は一體どなただか承つて置きたいものです。」

「いや私は名もない男です。けれども我が國の味方であり、又我が國の味方である人々の味方でございます——今のところは之だけで滿足してゐて下さらなければなりません。まして貴方にしてからが何時迄も御名を包むようお望みなさる以上、尚更の事でございませう。しかし、私の言葉は、一旦この口から出た以上、勳爵士の誓言同樣、破り得ぬものだとお信じ下さい。」

「喜んで信じませう。私は人の面相を觀つけてゐるので、失禮ながら貴方のお顔に正直と決斷力との相の現れてゐる事が解ります。でこれ以上はお訊ね申上げずに、その虐げられた捕虜を救ひ出す御援助を致しませう。この仕事が終れば、我々は必ずもつとよく知り合つて、お互ひに十分滿足してお別れすることゝなりませう。」

「ぢやあ、」とワンバはガースに向つて言つた、——僧もう十分身支度が出來たので、騎士と郷士との話の結末を聞いたのである。——「ぢやあ、俺達は新しい味方を得た譯だな？——屹度あの騎士の剛勇は、隱者の神信心よりも、郷士の正直よりももつと本物だらうぜ。だつてこのロックスリイは生れながらの鹿盜人のやうだし、坊さんは仲々達者な猫被りのやうに見えるものな。」

「お默りよ、ワンバ、」とガースが言つた。「そりや皆なおぬしの推量通りかも知れんが、併し今、角の生えた鬼が出て來て、セドリック樣やローエナ姫を自由の體にする援助を申込んで來ても、俺にはその惡魔の申出を斷つて、俺の後ろに退かせる（「約聖」馬可傳第八章三十三節に「イエス回顧りその弟子を戒めて曰ひけるは、サタンよ我後に退け、爾は神の事を思はずして人の情を思ふ」とあるに因む）だけの神信心はまあ大抵あるまいと思ふ。」

僧は今は悉皆郷士の服裝を調へて、劍を吊り、圓楯を抱へ、弓を手挾み、箙を負ひ、肩に丈夫な長柄の矛を擔いでゐた。そして一行の先頭に立つて庵を立ち出で、扉の鍵を念入りに掛けると、その鍵を敷居の下に藏つた。

「貴僧はもう十分働けるやうになられたかな、」とロックスリイは言つた、「それともまだ褐色の瓶の酒が頭の中をぐる〳〵駈け廻つてゐるかな？」

「いや聖ダンスタンの泉をほんの一口飮めば鎭まるぢやらう、」と僧は答へた、「まだ何となく腦の中がひゅーひゅー鳴るやうだし、脚もふら〳〵するやうだが、まあ見てゐておくれ、もうぢき兩方共失くなるだらうから。」

さう言ふと、彼は泉の水が滾々と流れ落ちて、白い月光に水泡を作つて踊つてゐる石の水盤へつか〳〵と歩み寄つて、泉を飮み乾して了ふ積りかと思はれる程長い間息も吐かずにがぶ〳〵飮んだ。

「いつかこれ迄にそんなに澤山水を飮まれた事がお有りだつたかな、コプマンハーストの聖僧殿、」と黑裝束の騎士が言つた。

「いやわしの酒樽が漏つて、中味が飛んでもない口から流れ出てな、それで此處にあるわしの守護神の賜物（前に記してある泉の水のこと）の外は飮むものが何にも殘らなかつた事があるが、その時以來の事だ、」と僧が答へた。

それから手や頭を泉の中に突込んで、酒盛りの跡をすつかり洗ひ落とした。

かうして氣が清々しく醉が覺めると、この快僧は、携へた重い矛を、宛ら一本の蘆を秤つてゞもゐるかのやうに、輕々と三本の指で頭上に振廻しながら、かう叫んだ、「娘共を勾引したといふ、その不實の人攫ひ奴らは何處にゐる？彼奴等の十人や十五人束になつて掛つて來たつて、びくともせんぞ！」

「和尚殿、御坊は誓ひなさるか、」と黑裝束の騎士が言つた。「さう和尚々々と言つて下さんな、」と變裝の僧は答へた、「神かけて、わしは法衣を着てゐる間だけは僧侶の身である——が綠の衣に納まつた時は、西區にゐるどの愉快な森男とも、飮みもし、惡口もたゝき、又少女を口說きも致すのだ。」

「さあお歩きなされ、御坊、」とロックスリイは口を出した、「默つてお歩きなされ。御坊はまるでお祭りの前夜、僧院長が寢床へ行つた後で、僧院中の尼さんが騷ぐやうに姦ましい。——あなた方もお歩き下さい、そんな事をぐづ〳〵立ち止まつて話してゐなさるな——さあ、お歩きなさい、

我々は同勢をありつたけ駆り集めなけりやならないのですぞ、萬一レジナール・フロン・ド・ブーフの城を襲ふとなれば、我々の軍勢は餘り十分とは申されまい。」

「何に！」と黒裝束の騎士は吃驚したやうに言つた、「では王の公道で、王の自由な民を抑へたのはフロン・ド・ブーフなのか、——彼は盜賊となり、暴虐者とまでなつたのですか。」

「彼は、いつも暴虐者なのでした、」とロックスリイが答へた。

「して盜賊としても、」と僧は口を挟んだ、「わしの知合ひの多くの盜賊が持つ半分程の正直さへ持つてゐるかどうかも疑はしいものぢやて。」

「さあ御坊、默つてお歩きなさい、」と鄕士は促した、「禮儀の上から云つても、慣みから云つても、言はずに置くべき事を言ふより、寧ろ集合の場所へ道案内でもなされた方がずつとましだ。」

（二十一）

あゝ、何んと多くの年月の

經つたことぞ！
人々がこの卓子の周りに坐つて、
洋燈や蠟燭の光が、
その表を照らしてからこのかた。
疾くに去つた時の音が、我等が頭上、
この小暗い高い空虚の圓天井に、
長く奥津城に眠つてゐる人の音聲の
さすらふやうに、
今も尚ほ響くのを聞くやうだ。
（オッラー悲劇）

セドリックやその仲間の人々の爲めにかう云ふ手段が講ぜられてゐる間に、彼等を捕へた武裝の一隊は、彼等を押籠める積りの安全な場所を　して、捕虜を急がせてゐた。然し宵闇は刻一刻と追ひ迫つて來るし、森の小徑はこの掠奪者共にはほんの朧ろげにしか知られてゐないやうであつた。彼等は度々長い間立往生しなければならなかつた、それ許りか、二三度は道を間違へて、又元の方向を取る爲め、途中で引返さなければならなかつた。夏の短夜は、十分安心して本當の道と信ぜられる徑を進む事が出來ない中に、はや明け渡つて了つた。然し曙の光と共に自信も元の如く

ついて來て、この騎馬の一隊は今や馬の足を早めて前進した。その間に次のやうな對話が、この山賊共の二頭目の間に交されたのである。

「もうそろ〳〵貴方は私共と別れらるべき時刻でありますぞ、モーリス殿、」と寺侍はド・ブラシイに言つた、「この神祕劇の二番目の役割を演ずる支度をなさるがいゝ。今度は救助の騎士を演らなくてはならないのだからな。」

「いや、それに就いては私に好い考へがある、」とド・ブラシイは答へた、「私はこの獲物がフロン・ド・ブーフの城に本當に預けられる迄は、貴方とお別れしますまい。城中で私は本當の姿でローエナ姫の前に出よう、さうすれば必定、姫は私の犯したこの亂暴も、所詮自分を戀慕するの餘りに出た事と思はれるだらう。」

「してド・ブラシイ殿、貴方は又何で以前の計畫をお變へなすつた？」

「それは貴方に何の關係もありません。」

「けれど騎士殿、願はくはこの策の變更が、私の公明正大な趣意に對する疑惑などから起つたもので無くて欲しい、あれはフィッツァーズもくれ〳〵も說いて、お聞かせ申した筈だ。」

「私の考へは私の考へだ、」とド・ブラシイは答へた、「泥棒が泥棒のものを盜むと鬼が笑ふとよく下世話で申します、がその鬼が笑はないで、地獄の火や硫黄を吐き掛けても、それが寺侍が自分の好むところに從ふのを妨げは決して致しますまい。」

「して又その鬼が地獄の火や硫黄を吐きかけても、自由兵團の首領が、自分が凡ゆる人間に對して行ふ不義非道の所爲を、仲間であり、友人である者からも受けようかと恐れるのを止めもすまい、」と寺侍が答へた。

「こりや無益な險呑な擧り合ひだ、」とド・ブラシイは答へた。「ではかう申せば澤山であらう、私は寺侍團の風儀（寺侍團のだらしのない風儀、品行は論ずるに及ばない樣である）を存じてゐる、で、貴方に私が折角斯樣な危險を冒して迄得た美しい獲物をさうむざ〳〵騙り取られたくはないのだ。」

「何だ詰らん！　何をくだらん心配をなさるのだ？——貴方は我々寺侍團の誓約を御承知の筈だ。」

「よつく心得てゐます、して又その誓約がどんなに遵守られてゐるかも心得てゐますわい。さあ、寺侍殿、立派な紳士の道はバレスタインでは自由な解釋をされてゐる、又今の問題も私が貴方の良心に少しも信賴を置けぬ一問題なんです。」

「然らば眞實の所をお聞き下さい。私は貴方の碧眼の美人

には少しも眼をくれない。この一行には私にずつといゝ相手の女がゐます。」

「何に！　貴方はあの侍女に身を屈しようとなさるのか。」と寺侍は傲然として言つた、「侍女などに身を屈しはしない。捕虜中に貴方のにも劣らない可愛らしい獲物があるのにお氣がつかれないのか。」

「すると貴方の言はれるのはきつとあの猶太の美人のことだな！」

「だが私があの猶太の美人をどうしようつて、誰が苦情を申さう？」

「苦情を申すものはあるまい、若しあれば貴方の獨身生活の誓ひの手前か、若しくは猶太女との情事に對する良心の咎めかだらう。」

「誓ひの方は、我々の大長老が私に免除を與へて呉れた。又良心の方は、三百のサラセン人を殺した男が、今更田舍娘が基督磔刑祭の逮夜に初めて懺悔をする時のやうに、僅かな過を一々數へ立てるにも及ぶまい。」

「貴方は御自分の特權を一番よく御存じやわい。」とド・ブラシイが言つた。「けれど、どうやら貴方の思惑はあの娘の黒い瞳よりも、たしか、あの金貸爺いの財布にあつたやうだ。」

「私は兩方共に賞美する、」と寺侍は答へた、「それにしても、あの猶太の老耄は半分の獲物に過ぎぬ。フロン・ド・ブーフにしても自分の城を只で貸しはしますまいから、あの財布は何うで彼と分けねばなるまい、私は今度の掠奪で全然私一人のものと言ひ得る物を何か一つ手に入れなくちやならない。それであの可愛らしい猶太娘を私獨りの獲物に極めたのだ。それはさうと、私の意のある所がお分りの上からは、御自分の最初の計畫通りになされるでせうね？——私の干渉を御心配なさる事は少しもないと申す事はお分りの筈だ。」

「いや、何處迄も獲物の傍は離れますまい。貴方の仰せられる事は一通り眞實だ、が併し私はどうも、大長老の免除に依つて得た特權や、三百のサラセン人殺戮によつて得た功績なぞは好まない。貴方は餘りに結構な自分免許の權利を持つて居られるので、微罪などにはあまり懸念されないのだ。」

かういふ對話が交されてゐる間に、セドリックは、自分を警護してゐる者共から、何とかして彼等の身分や目的の表明を聞き出さうと努めてゐた。「貴樣達はイングランド人に相違なからう、」と彼は言つた、「であるのに、おゝ何たる事だ！　本當のノルマン人でゞもあるかのやうに同胞を掠める。貴樣達は慥かにわしの近くに住んでゐる者だ、若しさうなら、わしの友人の筈だ、イングランド人でわしの近所の者なら、誰が一體友達でない譯があらう？　これ貴樣達鄉士共に言つて聞かせるぞ、貴樣達の中で浪士の燒印を捺された者共さへ、わしから保護されてゐたものだ、といふのも、わしは彼等の不幸を憐み、暴虐な貴族共の壓制を呪ふからだつた。だのに、貴樣達は何をわしから取らうとするのだ、或は又こんな亂暴狼藉を働いて何の役に立つのだ？——貴樣達の爲業は野獸よりも惡いぞ、而も貴樣達はその野獸の啞の所まで眞似ようとするのか。」

併し、セドリックが警護の者共に幾ら諫告しても何の甲斐もなかつた、彼等はその沈默に對して餘りに多くの立派な理由を持つてゐて、セドリックの怒りによつても、諫言によつても、その沈默を破られる筈は無かつたのである。彼等は相變らず彼を急き立てゝ馬の足を早めに早めながら、遂に大木の並樹道の盡きる處、當時レヂナール・ド・フロン・ド・ブーフの住む、トオキルストーンの白茶けた古城が立つてゐる嶮迄來た。城砦はさして廣大なものでもないが、中央には天主閣の、高い大きな四方形の塔が聳え、その周圍には內庭に包まれた、その天主閣よりも低い建物が立つてゐた。外塀の周圍は深い濠で、近處の小川から水が引いてあつた。フロン・ド・ブーフはその性格上自分の敵と屢々相鬪つたので、城を側面から護る爲めに外壁上の角々に塔を建てゝ、城に大きな强味を加へたのである。入口は弓形の外堡をくぐりぬけるやうになつてゐた。その外堡と云ふのはその頃の城に普通あるやうに、その外堡の隅々に小さい櫓があつて、同時にその櫓が外堡を護るやうにしてあつた。

セドリックはフロン・ド・ブーフの城の櫓が、灰色の苔蒸した鋸壁の上に聳えて、今しもその周りを圍む森を離れた朝日にきら〳〵輝いてゐるのを見るや否や、咄嗟に、自分の災難の原因がはたと胸に浮んだ。

「わしはこの森の盜賊や、浪士共に飛んだ濡衣を着せたわい」と彼は言つた、「こんな惡者共も彼等の組に屬するものだと想つたとは。いやこの邊の叢の狐共とフランスの荒れ廻る狼共とを混同したのと丁度同然だつたわい。さあ言へ、犬共め——貴樣達の主人が狙つてゐるのは、わしの生命か、乃至は財產か。わしと貴族アセルスティンと、この兩人のサクソン人が、嘗ては我が種族の領土であつたこの國に土地を持つてゐるのが多過ぎるとでも云ふのか——そんならわし達を殺せ、わし達の命を取つて貴樣達の暴虐のありつたけを盡せ、かつて我々の自由に對してしたやうにな。このサクソン人セドリックは、イングランドを救へない位ゐなら

ら、寧そイングランドの爲めに死にたいのだ。お前の暴虐な主人に言へ、わしの願ひはたゞローエナ姫を立派に無事に還して呉れる事だけだと。姫は女だ、姫を怖るゝには當らぬ、それに姫の爲めに進んで戰はうと云ふ者は、悉くわし達と一緒に死ぬるだらう。」

警護の者は、矢張り前と同じくこの言葉に一言も口を利かなかつた、そしてその時にはもう城の門前に立つてゐた。ド・ブラシイは角笛を三度吹いた、彼等の近づいて來るのを見ると、壁の上に備へられた弩の射手共が急いで吊橋を下ろして、彼等を通した。捕虜達は警護の者に依つて否應なしに馬から引下され、一室に連れて行かれて、遽しい食事を供されたが、アセルスティンの他には、一人として口をつける氣になれなかつた。而もこの「懺悔王」（西サクソンの王一〇〇四―一〇六六の異名）の末孫も自分等の前に並べられた立派な御馳走を腹一杯食べてゐる時間がなかつた、と云ふのは、警護の者が彼やセドリックに、ローエナ姫を隔てた部屋に押籠めなければならないといふ事を告げたからである。抵抗しても無駄であつた、彼等はとある大きな部屋に隨いて行かねばならなかつた、その部屋には不細工なサクソン風の柱が立つてゐて、今も尙ほ我が最も古い僧院の、最も古い部分に見受けられる、あの食堂や會堂に似てゐた。

ローエナ姫は續いて供の者から引離されて、鄭重にではあるが、矢張り姫の意向などはとんと酌まれないで、隔たつた一室へ連れて行かれた。レベッカも同じく父から引離されて心を痛めた。彼女の父は娘と引き離されたのを悲しむ餘り、金迄差出して、娘を自分の傍に置かして貰ひたいと懇願したが無駄であつた。「卑しい不信者め、」と一人の番人は答へた、「お前の休所を見たら、娘と一緒になどゝ言はなくなるだらう。」そして、それ以上彼是言はずに、年老つた猶太人を無理やりに他の捕虜とは違つた方へ引摺り去つた。召使達は、念入りに體を探られ、武裝を解かれた末、城中の別な處へ幽閉された。そしてローエナ姫はせめて侍女エルギサに逢かれたなら、幾分の慰めを得られたかも知れなかつたが、それさへ拒絶されたのである。

そこで先づ第一にわれ〳〵の關心に上るのはあのサクソンの首領等がどうなつたかであるが、彼等の幽閉された部屋は、今こそ衞兵所のやうなものに使用されてはゐるが、その昔はこの城の大廣間であつたのである。それが今は遙かにつまらない事に用ゐられた、といふのは、當主が、自己の住居の便利や、安全や、美觀などの爲めに建增した數ある建物の中に、新しい立派な廣間を造つたからである。この新しい廣間の圓天井は以前よりも輕い優雅な柱で支へられ、ノルマン人がその頃既に建築に取り入れた、あのずつと上品で贅澤な裝飾が完全に用ゐられてゐた。

セドリックは過去を顧み、現在を思つて憤りの情に胸をふさぎながら、部屋中を歩き廻つてゐた、が友のアセルスティンは相變らずの鈍感で、たゞいつもの忍耐と冷靜を缺き、眼前の不便の外には、何事も意に介さぬ態であつた。而もその眼前の不便さへ今はさして感じぬらしく、たゞ折々セドリックが彼に興奮した激した口調で訴へると、それに勵まされて答へる位ゐなものであつた。

「さうだ、」とセドリックは、半ば獨言の如く、半ばアセルスティンに話し掛けるもの〻如く言つた、「父がトーキル・ウルフガンガーと宴を張つたのはこの廣間だつた、あの時はたしか、當時叛逆者トスティ（ハロルドの弟）に味方した諸威人を征伐に行く、勇敢な、不幸なハロルド（キリアム一世の征服前イングランドの王であつた）を饗應したのだつたつけ。ハロルドが謀反した弟の使節に寛大な返答を與へたのもその廣間だつた。わしは度々父がその話をする毎に激したのを見たものだつた。トスティの使節を通した時、さしも廣いこの部屋が、王を圍んで血紅色の葡萄酒を痛飲する、高位のサクソンの諸將で狹い位ゐだつた。」

「どうか、」とアセルスティンはやゝ心を動かされて言つた、「晝には酒や馳走を少し持つて來る事を忘れないでくれゝばいゝが――今朝朝餉の時には息づく暇も殆どなかつた。それに私は馬から降りて直ぐ食事をとるのはどうも有難くない、尤も醫者はさういふ習慣を勸めるのだが。」

セドリックは友のこの話の間に投げ込んだ言葉には無關心で、自分の話を續けて行つた。

「トスティの使者は、周りの總ての人々の苦り切つた顏付にも怯めず、臆せず、廣間の中をつか〳〵と進んで行つて、遂にハロルド王の玉座の前に平伏した。

「『陛下』と彼は申上げた、『御弟君トスティ樣が武裝を解いて、陛下に平和をお望みになれば、どんな條件をトスティ樣はお出しになるべきでせう？』

「『兄弟の愛と、それから立派なノーザムバーランド伯となる事と、この二つだ、』と寬大なハロルド王は聲高く仰せられた。『けれど、若しトスティ樣がその條件をお容れ遊ばしませば、その虫實なお味方ノルエー王ハードラダ樣には、如何程の土地を御讓與下されませうか。」

「『イングランドに七呎の土地（墓地を）を取らすぞ、』とハロルド王は言葉烈しくお答へ遊ばされた、『尤もハードラダは大男だと聞き及んでゐるから、今十二呎だけ許し遣はすも苦しうない。』

「廣間に歡呼の聲が響き渡つた、そして、間もなくイングランドに版圖を持つべきノルエー王の爲めに祝盃を擧げた。」

「私も彼の爲めに全心を籠めて乾盃する事が出來たらうに、」とアセルスティンは言つた、「何しろ舌が上顎にひつついてゐる始末だ。」

「裏をかゝれた使者は」と、セドリックは開手に何の興味もないに拘らず、益々活氣付いて語り續けた、「トスティ及びその味方に、不興な兄王の不吉な答へを傳へようと退き下つた。遠いヨークの塔や、ダーエントの血腥い流れが、あの恐しい修羅場（スタンフアードの戰）を見たのはそれからだつた、この一戰で實に剛勇無双な膽力を示したにもかゝはらずノルエー王とトスティとが兩人共、その最も勇敢な家臣一萬と枕を並べて討死して了つた。が、この戰爭に勝つた光榮の日に、サクソンの旗を揚々と飜してくれたその强風が、ノルマンの帆を脹ませて、その死活を決するサセックスの濱邊に吹き寄せようとは、一體誰が思つたであらう？——ハロルド王がほんの僅かの日の間に、怒つてノルエーの侵略者に當てた七呎の地以上に、自分の王國を持たなくならうとは、誰が思つたであらう？——アセルステイン殿——ハロルド王の血統を引かれた貴方と、サクソン王家の非常に强い擁護者を父に持つたわしとが、先祖があんな盛宴を張つたその廣間で、惡者のノルマンの捕虜にならうとは、誰が思つたであらう？」

「いや全く悲しい事である、」とアセルスティンは答へた、「が、然し彼等とて相當の身代金を拂へば必ず我々を免すことであらう——兎に角我々を直きに餓死させて了ふのが彼等の目的であるわけはなからう、だが、もう正午であるのに晝食の支度をする樣子の見えないのは一體どうしたのであらう。セドリック、窓を覗いて、午が廻りかけてゐぬかどうか一寸陽脚を見て下さい。」

「もうさうなつたかも知れない、がわしはあの汚れた格子を見ると、時刻が過ぎたとか、過ぎぬとかいふやうな事柄以外の事を思ひ出さずには居られんのだ。あの窓が作られた頃は、我々の頑固な先祖はまだ硝子を作る術も、硝子を燒き付ける術も知らなかつた——ウルフガンガーの父は驕つた男で、ノルマンデイから一人の技術者を連れて參つて、神の授け給うた陽の金色の光を種々な異樣な色合に分解して了ふこの新しい種類の紋飾で、自分の廣間を飾らせたのだ。この外國人が此處へ參つた時には貧乏で、乞食のやうで、へい〳〵と追從言つて、家内中の一番賤しい内地人にも、直ぐと帽子を脫いだものだ。それが、歸る時には、贅澤で、高慢で、自分の貪慾な國民にサクソン貴族の膏素で

はあるが富んでゐる事を言ひ觸らした——あゝ、アセルステイン、これは祖先の質朴な風俗を失はなかつたヘンジストやその不撓不屈な同族の子孫によつて、昔疾つくに知られたり、見ぬかれたりした馬鹿げた事なのだ。（大昔ヘンジストとホーサとがブリトン人を助けてピクト人を防ぐ爲めに大陸からイングランドに航し、歸國するとイングランドの富めることを噂んに吹聽した、サクソン一族の侵略もこの富の噂を聞いた爲めだと云ふ）我々はこれ等の異國人を我々の心服の友、我々の信賴する僕と致した、我々は彼等の工匠とその技術とを借りて、勇敢な祖先が身を護るに用ゐた眞の質樸や剛毅を賤しんだ、そして我々はノルマンの双の下に斃れるずつと前に、既にノルマンの技術に依つて氣力を殺がれてゐたのだ。譽澤な美味を愛する爲めに外國の征服者の奴隷となる位ゐなら、我々の質素な食物を平和と自由とのうちに食べた方がどんなによかつたか知れぬ！」

「今はどんなに粗末な食物でも奢りと思はねばならない、」とアセルステインは答へた、「そして、セドリック、午飯の時間さへお忘れになつて居られるらしい貴方が、そんな過ぎ去つた昔の事をさう間違ひなく心に留めて置くことが出來られるとは不思議千萬である。」

「この男には食慾に關する事以外何を話したつて駄目なんだ！」とセドリックは獨り離れて苛々しながら呟いた。「ハーデイカニュート（ラムベスのオズゴッド・クラパの家で酒を飲みながら死んだ）の亡靈が、彼に取憑いたのだ、彼は盃に酒が滿たす事と、鯨飲する事と、お代りを言ひつける事との外は何の樂しみも持つてゐない。——あゝ！」と彼はアセルステインの方を憐れむやうに見やりながら言つた、「あんな立派な體にあんな愚鈍な魂が宿らうとは！　あゝ！　イングランドの回復と云ふやうな目論見があんな不完全な要の上で廻されねばならぬとは！　ローエナ姫と結婚したなら、實際、姫のもつと氣高いもつと寬大な魂が、彼の内に潛んでゐるもつと立派な性質を未だ喚び覺し得るかも知れぬ。だが、ローエナ姫も、アセルステインも、わし自身も、この殘酷な掠奪者の捕虜となつて、而もこれは多分我々を放つて置けば、彼の民族が横取りした權力を危くしはしないかと感ずる爲めに、かういふ目に會はせたらしいが、こんな境遇にゐる間はどうして姫と彼とを一緒にさせられようぞ？」

セドリックがかうした痛ましい回想に思ひ耽つてゐる間に、この座敷牢の扉が開いて、一人の配膳方が白い職掌を示す棒を持つて現はれた。この尊大振つた男が重々しい足取りで部屋へ入つて來ると、その後ろから四人の僕が馳走をのせた食膳を運び込んだ、アセルステインは、それを見、その匂ひを嗅いだゞけで、もう今迄の一切の不自由は報償はれたらしかつた。給仕をする者は皆な假面を被り、假裝

をしてゐた。

「これは何の假面狂言だ？」とセドリックは言つた、「お前達の主人の城に幽閉されてゐて、それでもまだ誰に幽閉されたか知らずにゐるわし達と思ふか。彼奴にかう言へ、」とこの機會を捉へて身を放免して貰ふ交渉を開かうと思ひながら、言葉を續けた、「貴樣達の主人、レヂナール・フロン・ド・ブーフにかう言へ、一體何ういふ理由があつて我々の自由を束縛するのか、とんと見當がつかないが、たゞ我々に金を出させて、己れの腹を肥やさうといふ不法な望みからとしか思はれぬとな。よいか、しかと傳言しろ、わし達は本當の泥棒の强奪に屈從すると同じ事情で彼奴の强奪に屈從するのだとな。そしてわし達がこれだけ出せば放免してよいと思ふだけの身代金を指定しろと言つてくれ、その身請金が我々の身上に叶ふものなら立派に拂つてやらう。」

配膳方は何の答へもせず、たゞ一寸頭を下げただけであつた。

「してレヂナール・フロン・ド・ブーフに言へ、」とアセルステインも續いて言つた、「わしは彼に命がけの決闘を申込むと。わしらの解放後八日以內に、徒歩でもよし、馬上でもよし、何處か安全な場所で、決闘をする事を申入れるのだ。彼も本當の武士なら、よもや事態がかうなつては、辭退や

逡巡はすまい。」

「御挑戰のことは、主人に申傳へるでございませう、」と配膳方は答へた、「まあ、御勝手に召上つて下さい。」

アセルステインの挑戰は餘り立派に發言はされなかつた、といふのは、口一杯頬張つて兩顎を一度に働かさなければならなかつたのと、生來口籠る方なのとで、口から出る大膽な挑戰の言葉を著しく弱めたからである。それでも、彼のこの一言はセドリックに、友に氣概の甦つた確かな印として歡迎せられた。と云ふのは、セドリックはアセルステインの血統には尊敬を拂ひながらも、彼の今し方の無頓着さには、段々辛抱し切れなくなりかけてゐたからである。今やセドリックは挑戰の言葉を聞いたので、稱讃の印にと彼に眞心籠めて握手をしたのである。けれども、アセルスティンが、「若し戰つて、こんな蒜澤山の吸物を出すやうな牢から出る時期を早める事が出來るものなら、フロン・ド・ブーフの如き男十二人とでも戰はう、」と言つた時には、セドリックは又も微かな哀愁の胸に湧くのを覺えた。併し肉慾の鈍感に後戻りしたのを知らすこの言葉を聞き流して、セドリックはアセルステインと差向ひに座を占めた、それから、アセルスティンは食卓に何も並ばない中は白國の慘狀を思ふ爲めに食物の事を念頭から拂ひ退ける事が出來たのであるが、食

膳が目前に並べられると、忽ち彼のサクソンの祖先の食慾が、その他の特性と共に、彼に傳へられてゐることを證明した。

けれどもこの二人の捕虜は食膳を餘り味はない中に、城門の前で鳴らされた角笛の音の爲めに、この食事といふ最も重大な仕事からさへ彼等の注意を攪き亂されたのである。その笛の音は非常に烈しく三度繰返された。それはまるで魔城の前で退治の任に當つた騎士が——自分の呼ぶ聲に連れて廣間も塔も、射眼も鋸壁も、朝の霞のやうに吹き飛ばすといふその騎士が、吹いたのかと思はれる程激しかつた。二人のサクソン人は食卓から飛び上つて、窓際へと馳せ寄つた。が二人の好奇心はたゞ失望に終つた。といふのは、生憎どの窓口もたゞこの城の中庭を見下ろすだけで、音はその城の彼方から聞えて來たからである。然し、この呼び出しの音は重大なものであつたらしく、城內には忽ち恐ろしい騷ぎ聲が起つた。

（二十二）

わしの娘よ——わしの金貨よ——

おゝわしの娘よ！——
裁判にかけてくれ！　國法に照して！
わしの金貨を、わしの娘を！

（「ヴェニスの商人」）

サクソンの二頭目は、好奇心が滿たされないので、未だ十分飽き足らない食慾の要求が再び心に起るや否や、元の馳走の席へ歸つたのである。が、この方は暫く措くことにして、次に我々はヨークのアイザックの尙一層嚴しい幽閉の方を一寸覗かねばならない。この哀れな猶太人は、城中の地下牢に、無造作に投げ込まれた。其處の床は地面よりも低く而も壕より低いので、非常に濕つぽかつた。日光は僅かに、捕虜の手の屆かぬ遙か上にある一二の射眼から洩れて來るのみであつた。これ等の口は眞晝でさへ、ただ朦朧とした覺束ない光を通すのみであつたので、同じ城中でも他の場所が未だ晝の日の惠みを失はぬずつと前に、全く暗くなつたのであつた。周圍の壁には、躍起に脫走を試みる處れのあつた前の囚人が斃がれた鐵の鎖や足枷などが、錆びたまゝ空しく懸つてゐた。その足枷の一組の環には、もとは人間の足であつたらしい朽ち崩れた二つの骨が、

まるで誰か囚人になつたものが其處で死ぬるがまゝに放つて置かれたり、腐敗して骸骨に成り果てる迄手もかけないで置かれたりし　かのやうに、殘つてゐた。

この恐ろしい地下室の一隅には、一つの大きな鐵爐が設けてあつて、その頂邊には、半ば腐蝕つた鐵の棒が渡してあつた。

この光景を一目見た者は、アイザックよりも剛氣な者でさへ必ず怖ぢ氣だゝずには居られなかつたらうが、當のアイザックは、恐ろしさの原因が差迫つてをらず、而も有りさうに思はれる時に恐怖を感じたよりも危險が頭上にのし掛つてゐる時の方が却つて一層泰然としてゐたのである愛獵家の言に兎は獵犬の牙に掛つて蹶いてゐる時よりも追はれてゐるうちの方が遙かに苦しいものだといはれる。恐らくかうしたわけからであらう。猶太人等は、何かにつけ恐怖を覺える事が頻りなので、身に振り懸る凡ゆる暴虐の手に對し或程度迄の覺悟が出來てゐてその爲め如何なる攻撃を受けようと、最も手酷い性質の恐怖から生ずる驚愕の念も起る事がないのである。それに又アイザックが、このやうな危險な場合に遭遇したのは決してこれが始めてゞはなかつたのである。從つて彼は經驗上から、今度も亦以前のやうに獵人から獲物として救はれる（舊約全書詩篇九十一篇三節に「雖かに紳は汝を獵人のわなより救ひたまふべし」とあるによる）やうに立ち廻る事も知つてゐたし、又さうありたいとも望んでゐたのである。とりわけ彼には猶太人特有の、人に屈せぬ剛愎さがあつて、それにイスラエル人（猶太人のこと）はその迫害者の要求を容れて、徒らに彼等を滿足させる位ゐなら、寧そ權力や暴力で加へ得る最大の害惡をも不撓の決心を以て忍ぶと、屢々世に知られてゐるが、彼もその決心をもつてゐたのである。

この消極的な反抗の氣分を懷きながら、濕つた鋪石の床に脚が着かないやうに上衣を折り敷いて、アイザックは地下牢の片隅に坐つてゐた。針金のやうに細い漏れ陽に仄かに見える、その腕組みをした手、縺れ亂れた髮や髯、裏毛の外套や高い帽子などは、若しレンブラント（オランダの畫家老人の肖像をよく描いた）をこの時代に在らしめたなら、恐らくこの有名な畫家に貴重な研究の一資料を供したことであらう。猶太人は殆ど三時間程、姿勢も崩さずに、凝と坐つてゐた、するとやがて、地下牢の階段の方に當つて、人の足音が聞えた。鐵棧を引く音がぎーと鳴つた——耳門を開ける時、蝶番の軋む音がした、そして、レヂナール・フロン・ド・ブーフが、寺侍のサラセン奴隷二名を從へて、牢屋の入口に姿を現はしたのである。

一生を公けの戰爭に又私の不和や喧嘩に費して來た背丈の高い、筋骨の逞しいこのフロン・ド・ブーフは又自分の封建的權力を擴張する事には少しも躊躇しない男であつた。その面構へはいかにも彼の性格にふさはしく、そしてそこには人一倍狂暴な、人一倍兇惡な心情が强く表はれてゐた。その顏に殘つた創痕は、これが普通の喧嘩の者なら、名譽ある剛勇の印として、それにふさはしい同情と尊敬とを招いたであらうが、この特別なフロン・ド・ブーフの場合には、却つて彼の面貌の獰猛さを增し、彼の態度の與へる畏怖の念を彌增すに過ぎなかつた。この恐るべき領主は身にぴつたり合つた革の胴着を着てゐた、がその胴着は解れてゐた上に甲冑の染で汚れてゐた。武器と云つては、帶に吊つた短劍以外に何もつけてゐない、その短劍は右腰に下げた、がちや〳〵鳴る鍵の束の重さに、よく釣合つてゐた。

フロン・ド・ブーフに從ふ黑奴は、以前の派手な衣服を脫いで、粗末な亞麻布の胴着とずぼんに着換へてゐた。その袖は、屠殺者が屠牛場で仕事にかゝる時のやうに、肘の上迄捲り上げてあつた。どれも手に小さい籠を提げてゐた、そして地下牢に入ると、フロン・ド・ブーフが手づから扉の鍵を念入りに二重に下ろす迄、入口の處に立つてゐた。この用心を爲終へると、フロン・ド・ブーフは靜かに歩いて猶太人の處に近づいた。そして眼を据ゑて凝と、アイザックを見詰めた、そのさまは丁度詰に開く猛獸が獲物を睨み竦ませるやうで、彼も亦眼光鋭く相手の體を射竦めようとするかのやうに思はれた。事實、フロン・ド・ブーフの險ある、惡意に滿ちた眼は、この不幸な囚人に、幾らか今想像したやうな力を及ぼしたやうに思はれた。猶太人は口をぽんやり開けて、非常に恐れながら、この殘忍な領主を見詰めた儘坐つてゐると、この獰猛なノルマン人の凝視する毒々しい眼光の注ぐ限り、體が文字通りに震へ縮まつて行くやうに見えた、哀れにもアイザックは、怖ろしさの餘り、立つて挨拶しようと思つたのだが、立つ氣力も失せたばかりか、帽子を脫ぐ事も、哀願の言葉を口にする事さへも出來なかつた。それ程に强く彼は拷問と死とが身に振りかゝつてゐるといふ信念に、心を惱まされたのであつた。

反對にノルマンの堂々たる體軀は一層擴大するやうに思はれた、それは丁度鷲が防ぐ力のない獲物に摑み掛からうとする時羽を立てゝ身振ひする姿にも彷彿してゐた。彼は不幸な猶太人が今、言はゞ出來るだけ狹い範圍に縮まつてゐるその片隅から三歩内の處に立ち止つて、奴隷の一人に此方へ來るように合圖した。黑奴は命令通り進んで來て籠の中から大きな一對の秤皿と幾つかの分銅とを取出して、それをフロン・ド・ブーフの足許に置くと、又引き下つて、

仲間の者の恭々しく離れて立つてゐる處に歸つた。

これ等の者の立居は靜かで嚴かで、宛で彼等の魂に恐怖や殘忍の豫想か何かゞ振り懸つてゐたかのやうであつた。フロン・ド・ブーフは彼の不運な捕虜にかう言葉を掛ける事によつて、自らこの場面を展開させた。

「呪はれた種族の中の最も呪はれた犬め、」その太い重々しい聲は地下牢の天井に物凄く響き渡つた。「お前にこの天秤が見えるか？」

不幸な猶太人は弱々しく「はい」と答へた。

「お前はこの天秤で銀貨一千ポンドを、ロンドン塔の標準度量衡（當時ロンドン塔はイングランド王の宮殿の一で、標準の度量衡を備へて居た）通りに量つて、差出さねばならんぞ、」と無慈悲な領主は言つた。

「おゝアブラハム樣！」と、猶太人は身の危難に我知らず聲を擧げた、「そんな要求をこれ迄聞いた人が世にございませうか——誰が一體銀貨一千ポンドなどゝいふ大金の事を、吟遊樂人の物語の中でもいゝ、聞いた事がございませうか——どんな人間の目がそんな寶の山を見る幸福を授かつたでございませうか——ヨークの城壁内は無論のこと、手前の家も手前の同族全部の家も殘らずお探し遊ばしたとて、貴方樣の仰しやるやうな多額の銀貨は、その十分の一も見付かりは致しますまい。」

「わしは無理は言はぬ。銀貨が不足ならば、金貨でも苦しくない。銀貨六ポンドについて金貨一マークの割で差出せば、お前のその不信心な圖體が、これ迄お前の考へた事さへないやうな刑罰を受けずに濟むのだぞ。」

「どうぞお慈悲を！　騎士樣！」とアイザックは叫んだ。「手前は老耄で、貧乏で、弱い者でございます。私のやうな者を負かしたつて、それが何の益になりませう——蟲けらを捻り潰すのは詰らぬことでございます。」

「いかさま、お前は老耄でも居らう、がそれはお前の恥よりも、お前に白髪頭になる迄暴利や不正を働かせて置いた者の愚さの恥だ——いかさまお前は弱いかも知れない、猶太人だとて、心臟も手もあれば、何時かは弱くならう——だが、お前の裕福な事は隱れもない事實だぞ。」

「騎士樣、手前の信仰致します天地の神々樣に、又世間一般に信じます天地の神々樣に誓つてそんな事は——」

「僞りの誓ひを立てるな、」とノルマン領主は遮つた、「强情を張つて我と我が身の破滅を招くな、そんな事になる前に貴樣を待つてゐる運命を悟つて、とくと考へて見い。わしがたゞ嚇す爲めにこんな事を申してお前の種族に生れついた卑劣な臆病を乞幸ひに弄ぶなどゝ思ふと大違ひだ。お前が信仰しないものに誓ひ、我が教會が敎へる福音書に誓ひ或は又教會に與へられた天國を開けたり閉めたりする鑰（新約聖書馬太傳十六章十九節に「又われ天國の論を爾に予へん、爾が地に於いて繋ぐことは天に於ても繋ぎ、爾が地にて釋くことは天に於ても釋くべしと」とある）に誓つて、わしの意圖は深く、嚴としてゐる事を斷言して置くぞ。この牢獄はふざける爲めの處ではないのだ。お前より何千倍も有名な囚人が幾人もこの壁の内で斃り居つた、が、彼等の運命は少しも世間に知れたことはなかつたのだ！　だがお前には長い時間の掛る死刑が用意してある、それに較べると彼等のはまだしも贅澤なものだつたと言へる。」

彼は又奴隷に近く寄れと云ふ合圖をして、奴隷の言葉で別々に何か彼等に言つた。彼も亦もとパレスタインにゐたからで、かうした殘酷も恐らく其處で覺えて來たのであらう。サラセン人共は籠の中から木炭と一對の鞴と、それから一個の油壺とを取出した。一人が火打石と火打鋼で火を燧つと、他の者は既に述べた大きな錆びた鐵爐の中へ木炭を投げ込んで、それが眞赤に燃え上る迄鞴を吹いてゐた。

「こりやアイザック、」とフロン・ド・ブーフは言つた、「お前にあの燃え熾る炭の上に列んでゐる鐵棒が見えるか——あの暖かい床の上にお前を寢させるのだ、柔毛の蒲團の中にでも休むやうに着物を脫がせてな。あの奴隷の内一人にはお前の下に火の絶えないやうにさせ、今一人にはお前のやくざな手足に油を塗らさう、その手足の燻肉が黒焦げにならぬやうにな。——さあ、あんな焦げてゐる寢床に寢るか、それとも銀貨一千ポンドを拂ふか、二つに一つだ、お前にはもうそれより外に方法は無いのだ。」

「そんな事は有りえませんことです。」と、哀れな猶太人は叫んだ。——「そんな御心持が本當だなどゝいふ事は有りえません！　天地のお慈悲深い神樣は決してそんな殘酷な事の出來る人間をお造りなさらないんです！」

「アイザック、そんな事を賴みにするな、それは飛んでもない間違ひだ。貴樣はわしが——街が掠め荒されて、何千といふ基督敎徒が劍で、洪水で、又火で殺されるのを見て來たこのわしが、たつた一人の詰らない猶太人の悲鳴や、わめき聲に辟易して心を變へるとでも思ふのか。——それとも、法律も、國も、良心も何もなく、たゞ主人の意志あるのみの——主人が一寸目配せさへすりや、毒藥でも、火炎の柱でも、懷劍でも、繩でもなんでも使つて見せる、其處の黑奴の奴隷共が、——情を乞ふ言葉さへ解しないその奴隷共が、情を知つてゐるとでも思ふのか。——ちつとは物を考へて見ろ、老耄奴！　お前のあり餘る財産を少し吐き出せ、基督敎徒に高利を貸して取つたものを少し基督敎徒に拂ひ戻せ、お前は奸智に長けた奴だから、直ぐに又萎

びた財布を脹らます事が出來よう、だが如何な名醫でも、神藥でも、お前が一度この棒の上に手足を擴げたら、もう再び黒焦げになつた皮や肉を元へ戻す事は出來ないのだ。さあ、お前の身代金を勘定して渡せ、そしてこんなに安い金で、一度入れば、二度と生きて還つて、その祕密を語る者の先づないこの地下牢から出る事が出來るのを悦べ。わしはもう餘計な事は言はない——お前の臍繰金を出すか、肉と血を出すか、二つに一つだ、どつちともお前の選ぶ通りにしてやらう。」

「アブラハム樣、ヤコブ樣、我等が有らゆる御先祖樣、手前を救つて下さいまし！」とアイザックは言つた、「私はどちらをも選ぶ事が出來ません、私にはあなたの法外な要求に應ずるだけの財産がないのでございますから！」

「奴隷共、此奴を引攫んで裸かにしろ、」と騎士は言つた、「そして猶太の祖先共に、此奴を救へるものなら救はせて見るがいゝ。」

奴隷共は領主の舌よりも尙多くを語るその眼や手の指圖を受けて、再びつか〳〵と進み出ると、不幸なアイザックに兩手をかけ、床から引張り上げて、二人の間に抑へつけた儘、殘忍な領主の次の合圖を待つた。哀れな猶太人は少しでも憐憫の色が動くかと、奴隷やフロン・ド・ブーフの顏を凝と窺つてゐた、併し領主の顏には、彼の殘虐行爲の前觸れであるその冷たい、半ば不機嫌のやうな、半ば嘲るやうな笑ひが現はれてゐた、又黒い眉の下に險惡にぎよろ〳〵してゐるサラセン人の獰猛な眼は白眼のところがいやに白い爲め、尙一層意地悪い目付となり、今にも展開しようとする場面の演出者或は俳優となることを厭がるどころか、寧ろその光景から心祕かに樂しみを豫想するやうな色さへ見せてゐた。猶太人は更に目を移して、自分が間もなく横たへらるべき、眞赤に燃えた爐の方を眺めやつた、それでも尙迫害者に憐憫の情の起りさうな機會が見えないので、流石に彼の決心も破れた。

一千ポンドの銀貨を拂ひませう——それはつまり、」と彼は一寸言葉を切つてから附け加へた、「手前の同胞に助けて貰つて拂ひませう、何分そんな聞いた事もないやうな金高は、猶太人の食堂の戸口で物貰ひのやうに乞はなければ、とても才覺出來ないのでございますから。——それで一體何時何處でお渡しすれば宜しいのでございませう？」

「此處でだ、」とフロン・ド・ブーフは答へた、「此處で手渡ししなければならない——此處で秤らなくてはならない——この地下牢の床の上で秤つて勘定しなければならない、——お前の身代金を確乎と手に入れないうちにわしがお前

を手放すと思ふか。」

「それで、その身代金をお拂ひ申したら手前が放免されるといふその保證は何でございます？」

「ノルマン貴族の一言だ、この貪慾な高利貸奴！　貴樣や貴樣の種族全體の金銀よりも、混ぜ物の少ないノルマン貴族の誓言がその保證なんだ。」

「甚だ失禮ではございますが、領主樣、」とアイザックは怯々しながら言つた、「手前はどうして手前の言葉に少しも信賴して下さらない方のお言葉をすつかり信じなければならないのでございませう？」

「お前はさうしない譯には行かないからだ、」と騎士は嚴然と言ひ放つた。「お前が今若しヨークにあるお前の寶藏にゐて、わしがお前の金錢の貸附を求めてゐるのなら、支拂ひの期日や、保證の抵當を指命するのはお前だらう。だがこゝはわしの寶藏だ。此處ではわしの方が有利の地位に立つのだ。そしてわしは二度とお前に自由を許す條件を繰返して言つて聞かせはしないぞ。」

猶太人は切なげに唸つた。——「では、どうぞ手前を放免して下さると共に、手前と一緒に道中した連れの人々も放免して下さいまし。あの人々は手前を猶太人だと嘲りました、けれども手前の賴りないのを憐れんで途中手前を助けるに暇取つた爲めに、飛んだ手前の御相伴をおさせしたのでございます、それに、あの方々は何かで手前の身代金を助けて下さるかも知れません。」

「彼方にゐるサクソンの野人共の事を言ふのなら、」とフロン・ド・ブーフは言つた、「彼奴等の身代金は彼奴等の身代金で、又お前とは異つた條件に依るのだ。斷つて置くが、お前はお前自身に關する事だけ心配すりやいゝんだ、他人の事に要らぬ世話を燒くな。」

「では、手前の負傷してゐる友達と一緒に放免されますだけでございますね？」

「猶太人如きにわしは二度も斷らなくちやならないのか、うぬだけの事に關つて、他人の事は捨てゝ置けといふに。——お前はお前の都合の宜い方を選んだ以上、今はたゞお前の身代金を、而も早速支拂ふと云ふ事しか殘つてゐないのだ。」

「でもその金銀の爲めに手前の申します事をお聞き下さいまし、貴方樣の……その……何も……構はずに得ようとなさるその金銀の爲めに——」此處で彼は殘忍なノルマンの怒りを買ひはしないかと思つて、一寸言葉を切つた。が、フロン・ド・ブーフはたゞ笑つて、猶太人が口籠つた空を自ら滿たした。

「わしの良心の咎めも構はずに、とお前は言ひたいのだらう、アイザック、さう言つ了ふがいゝ——これ、よく聞け、わしは無理は言はない。わしは取られる者の恨みなど少しも意にかけはしない。而もその取られる者が猶太人である場合にはな。アイザック、お前は無理やりに取立て、ジャックス・フィッツドッタレルの世襲財産を滅ぼした折、高利貸の吸血鬼と言はれたと申して、ジャックスを相手取つて裁判を起した時など、お前はわし程辛抱強くなかつたな。」

「私は猶太の法典にかけてお誓ひ申します、貴方様は剛勇でいらつしやいますが、あの事では瞞されなさいました。フィッツドッタレルは、手前が手前自身のお金を請求したからと言つて、それも手前の部屋で短刀を抜いて切つて掛つて来たのでございます。支拂期日は踰越節（エホバが埃及人の長子を悉く撃殺して、而もイスラエル人の家々は踰越して其兒を救つた夜を、記念する爲に祝ふ猶太人の祭で、三月の滿月の折に行ふ。舊約聖書出埃及記十一章）でございました。」

「彼がした事などはどうでもいゝ、」とフロン・ド・ブーフは言つた、「問題は、何時わしの方のは、わしの手に入るかといふ事なのだ——アイザック、何時金はわしの手に入るかな？」

「手前の娘レベッカに貴方樣のこれなら大丈夫といふ護衞をつけて、ヨークまでお遣り下さいまし、騎士樣、さうしますれば乘馬の者の歸り次第早速にその金を——」かう言ひさして彼は深い溜息を漏らした、がそれもほんの數秒だけで、又言葉を附け足した、——「金をこの床の上で數へませう。」

「其方の娘だと！」とフロン・ド・ブーフは吃驚したやうに叫んだ、——「アイザック、全くわしはもつと前にさうと知つたらよかつたなあ。わしは彼方にゐる眉の黒い娘は其方の妾だと思つた、それで、わしは昔の長老や、英雄の流儀に倣つて、彼女をブリアン・ド・ボア・ギルベール卿に侍女として進ぜたのだ。昔の長老や英雄などはかういふ事では我我に有益な手本を示したものだ。」

アイザックがこの無情な消息に驚いて揚げた喚き聲は圓天井をさへ打鳴らして、彼を捉へてゐた二人のサラセン人も思はず手を放した程吃驚させた。彼は體の自由になつたのを幸ひに、鋪石の床の上に身を投げて、フロン・ド・ブーフの膝にしがみ附いた。

「あなたの御要求なさつたものは何でもお取り下さいまし、騎士樣——その十倍でもお取り下さいまし——手前を破滅させて乞食になさりたいのならなさいまし。——いや、あなたの短劍でこの手前を刺して、その爐でお燒き下さいまし、けれども、どうぞ娘ばかりはお助け下さいまし、無事に女の操を完うさせて放免してやつて下さいまし！　あなたも、女の腹から生れたのでございますもの、賴りない處女の操は保たせて下さいまし——あの娘は亡くなつたラシェルに生き寫しでございます、あの娘は死んだ家内の持つた六人の樣の內で生き殘つた一人つ兒でございます——あなたはたつた一つ殘つてゐる慰めをも男やもめから奪ひ取らうとなさいますか——あなたは父親にその生き殘つた一人つ兒も、こんな事なら亡くなつた母親と一緒に先祖の墓所に埋められてゐて呉れた方がよかつたにと、あらぬ望みをおさせなさいますか。」

「前以て、それと知つて居ればよかつた、」とやゝ面を和げてノルマン領主は言つた。「わしは、其方の種族は自分の錢袋以外に何ものも愛しないと思つて居つた。」

「成程、手前共は猶太人ではございますれど、そんなにお考へなさるのは酷うございます、」とアイザックは、明かに同情を寄せたと見えたこの機を逃さじと努めながら言つた、「狩り立てられた狐でも、苛まれた山猫でも、皆その子を愛します——如何に卑められ、迫害されたアブラハムの種族だとて、子の可愛さに二つはございません！」

「さうでもあらう、アイザック、今後は其方に免じて、わしもさう信じよう——だが、今はそんな事は何の足にもならない、わしには出來て了つた事も、又次に來るべき事も、如何ともしがたいのだ、わしの一言は武士と武士と取交したもの、況してそれは十人の猶太の男女の爲めでも破る事はならぬわい。それに又、そちの娘がギルベールの物になつたとしても、娘の身に災害が及ぶと考へる必要はないではないか。」

「ありませうとも、あるに違ひありませんとも！」と、アイザックは苦悶に手を揉み絞りながら叫んだ、「一體何時寺侍どもは、男に殘酷、女に恥辱以外の事を何か致した事がございませうぞ！」

「邪教徒の犬め！」フロン・ド・ブーフは眼を輝かして、そして恐らくは、幸ひ癇癪を起すにいゝ口實を摑んで喜んだのであらう、かう言つた、「ザイオンの殿堂を守護する聖い身分の人に向つて不敬の言を吐くな、それよりは、お前が約束した身代金を拂ふ算段でもせい、さもないとお前のその猶太人獨特の喉にこそ飛んだ災難が降つてくるぞ！」

「强盜め、惡黨め！」と、アイザックは暴虐者の侮辱に憤怒を以て應へて言つた、「貴樣なんかに何を拂ふものか——俺の娘を無事に立派に引渡して呉れないうちは、一文だつて拂ふものか。」

「これイスラエル人、お前は正氣でそんな事を吐くのか」と、ノルマン人は嚴然として言つた——「お前の肉と血には熱した鐵や、熱した油に堪へ得る魔力があるのか。」

「そんな事が何だ！」と猶太人は子を思ふ親の情で自棄になつて吐き出した、「有りつたけのひどい事をしろ、俺の娘は俺の血と肉だ、俺にとつては貴樣の殘忍に嚇かされてるこんな手足などより千萬倍も愛しいものだ。金なんぞ何んで遣るものか、遣るんなら、貴樣のその强慾な喉に熔かし込んでやるわ——いや〳〵、一文だつて。ナザレ人め、貴樣にやるものか、そんな事をして、貴樣の一生に相當する重い天罰から救つてやつて堪るものか！　俺の命が欲しけりや取るがいゝ、そして猶太人は、責苦に惱む眞最中でも、基督敎徒をどうすれば失望させられるか知つてゐたと言へ。」

「それは今に分らう、」とフロン・ド・ブーフは言つた、「お前の呪はれた種族の忌み嫌ふ、尊い十字架に掛けて、お前を火と鐵とのこの上もない苦しみに會はせてやるから！」

奴隷共、彼奴を裸かにして、鐵棒の上に縛り付けろ。」

年老いた猶太人の弱々しい抵抗などはものともせず、サラセン人等は早や彼の上衣を引剝いで、續いて彼を赤裸にして了はうとした、と丁度その時、城外で二度吹き鳴らされた喇叭の音が、この地下牢のやうな奥迄も響いて來たのである。そして直ぐその後からレヂナール・フロン・ド・ブーフを呼び立てる高い聲が聞えた。流石兇暴な城主も、かかる惡魔の如き所業を人に見られる事を憚つてか、奴隷共に合圖をして、アイザックに着物を打ちかけ、二人の奴隷共を連れてこの地下牢を立ち去つた。猶太人は後にたゞ一人殘されて、一命の助かつた事を神に謝し、又娘の幽閉、さては續いて起つて來る運命の事を思つて悲歎に暮れた、彼の心は今や我身を思ひ、又子を思ふ情が最も强くなつて來たのである。

（二十三）

いや、こんなにやさしく精魂をこめて
　情深い言葉で言ひ寄つても
御身をなびかすことが出來ぬとあれば、
　わしは武士らしく劍の切つ先で
　　口説き申さう、
戀の常規に反き、お慕ひ申すぞ、
　暴力に訴へても。

（「ヴロナの二紳士」）

ローエナ姫の案内された部屋には、何處か原始的な風致と壯麗さとがあつた。而も彼女が此處に入れられた事は、他の囚人には與へられなかつた特別な尊敬を現はす印と見做してもよかつたのである。併しこの室は元來フロン・ド・ブーフの妻の爲めに造られたものであるが、その妻が死んで既に久しく、月日と共に朽ちては行くし、又手入を怠つたので、彼女の趣味から飾つた僅かの裝飾も次第に損ねられて了つた。綴錦は彼方此方に壁からだらりと下つて居り、その外の所では或ひは太陽に褪せ、或ひは星霜の經るまゝにぼろ〳〵に裂け朽ちてゐた。けれども、荒れ果てゝゐるとは言へ、此處は城中で、サクソンの嗣姫を收容するに最もふさはしいと考へられた部屋であつた。そしてこの不埒な芝居を打つ役者共が各自の演ずべき役割の打合せを濟ます迄、彼女は此處に唯一人殘されて自分の運命を樣々に想ひ囘らしてゐた。この役割はフロン・ド・ブーフ、ド・ブラシイ、及び寺侍の三人で開いた相談會で極められた。彼等は、それ〴〵この惡太い企てに、自分が特別に與つたところから割り出して主張した、めい〳〵に都合のよい事を長い間激論した後、やつと彼等の不幸な囚人等の運命を決したのである。

それで、先づ自分の爲めに、今度の冒險を企てたド・ブラシイが、最初の目論見通りに、ローエナ姫を自分の手中に收めようとして、この部屋へ現はれたのは、丁度正午頃であつた。

尤もこの間の時間が悉く彼の仲間との相談に費されたわけではなかつた。ド・ブラシイは閙を見て、その頃の凡ゆるおめかしを盡して己が身邊を飾つたのである。彼の綠の長衣と假面とは今や投げ棄てられて了つた。長い房々した髮は高價な毛皮の外套の上に奇妙な恰好で垂れ下つてゐた。鬚は綺麗に剃られ、胴衣は脚の中程に迄達し、そしてそれを緊めると同時に重い劍を吊してゐた腰帶には、刺繡や黃金細工の浮彫を施してあつた。この時代の靴の贅澤な流行については既に前にも書いたが、モーリス・ド・ブラシイの靴の尖は牡羊の角のやうに反り返つて捩け、その贅澤さといつたら、最も派手なものとも功名を競はれる程であつた。當時のしやれ者の服裝は先づこんなものであつた。そして、今の場合では、着てゐる者の美しい容姿と立派な立居とによつてその效果は大いに助けられてゐた、實に彼の風采は宮人の優雅と、武士の淡泊とを等分に兼ね備へてゐたのである。

彼は、黃金の飾針をあしらつた、聖マイケル（首天使）が魔

王を踏まへてゐる圖を畫いた天鵞絨の帽子を脫いで、ローエナ姫に一禮した。と共に、彼は物靜かに姫に椅子を指し示した、が、姫は尙も立つたまゝでゐるので、騎士は右手の手袋を脫いで、姫を其處へ案内する意を示した。併し、姫は頭を振つて、その申出でた好意を斷り、さて答へた、

「若し私が獄卒の看視を受けてゐるとしますれば、騎士樣——今の場合私はさうとしか思へませんが——自分の受ける宣告を知るまで立つた儘でゐますのが、囚人の身に一番似つかはしい事かと存じられます。」

「おゝ！　美しいローエナ姫、」とド・ブラシイは答へた、「御身は御身の捕虜の前にこそ居れ、獄卒の前などには居られません。して、御身がやさしくもこのド・ブラシイから期待なされますその宣告は、却つて、このド・ブラシイが御身のその美しいお眼から受けなければならないのでございます。」

「私はあなたを存じません、」と姫は憤れる高貴な美女の誇りを以て、威丈高になつて言つた。「私はあなたを存じません——又、左樣に不躾に馴々しく、戀愛詩人の讒言のやうな事を私に仰せられても、そんな事が盜賊の亂暴狼藉の言譯にはなりません。」

「美しい姫君、それもこれも御身の爲めでございます、」とド・ブラシイは同じ語調で答へた——「私の致しました事は孰れも皆御身のお美しい御縹緻の爲めでございます。私の致しました事は皆、私が心の女王に選み、眼の北極星に選みましたその人に應はしい尊敬からでございます。」

「繰返して申上げます、騎士樣、私は貴方を存じません、それから、騎士の印の鎖や、拍車を身に着けたお方は、かやうに身の護りもない淑女の前へ、づか〳〵出られるものではございません。」

「私が御身に知られてゐない事は、實際私の不運と存じます。でもまあ、このド・ブラシイの名は、試合場であれ、戰場であれ、吟遊樂人や傳令官が武士の功を讃美致しました時には、大抵その選に漏れたことがなかつたやうに存じます。」

「そんなら傳令官や吟遊樂人に貴方の讃美を任せて置かれた方が宜しうございませう。あなたの讃美はあなた御自身の口から聞きますよりも、あんな人々の口から聞く方が似つかはしいのでございます。それで一寸お伺ひ致しますが、あんな人々の內一體誰が、今夜の忘れ難い勝利、僅かの臆病な男樂を供に連れた老人に對して贏ち得た勝利と、又無理やりに盜賊の城へ移された不幸な處女といふその戰利品とを、歌に唄ひましたり、試合の記錄に留めたり致しますのでせう？」

「御身の仰しやる事は當つてゐません、ローエナ姫、」と騎士はやゝ困惑した態で脣を噛みしめて、言葉遣ひも初めに使つたやうな、作へた慇懃さでなく、餘程自然な調子に歸つて言つた。「御身は御自分に熱情がおありにならないので、御自分の美で他人に狂熱を起させて置きながら、その狂熱を道理と思召すことが出來ないのでございます。」

「どうぞお賴みでございますから、騎士樣、左樣な吟遊樂人が常に用ゐますやうな言葉はお止し下さいまし。それは騎士や貴族の口には似合ひません。慥かに貴方は、そんなありふれた言葉をお始めなさるからは、私に椅子に坐れとお强ひになるのでございませう、がそんな言葉はどの卑しい胡弓彈きでも、これからクリスマス迄品切れにならない程澤山仕込んでゐます。」

「高慢な娘御、」とド・ブラシイは、自分の慇懃な話し振りもたゞ輕蔑を買つたゞけなので激昂して言つた——「高慢な娘御、其方がさうなら此方も高慢に出なければならない。ではお聞きなさい、私は其方の御人品に最もふさはしい仕方で御求婚申したのです、所が定まり文句や丁寧な言葉よりも、弓や斧で言ひ寄る方が其方の御氣質に適つて居ますのだ。」

「言葉の上の禮儀も、粗野の行ひを隱す爲めに使はれます時は、騎士の帶を卑しい下郎の腰に著けたのと變る所はございません。確かに、その隱さうとなさるのでお惱み遊ばしてゐられるらしく存じます。——矢張り惡黨の衣裳や言葉を用ゐられた方が、惡黨の行爲を柔しい言葉や振舞の假面で隱すよりも、貴方にお似合ひでございませう。」

「姫、よく御忠告して下さつた、」とノルマン領主は答へた、「それでは大膽な行動の辯明に最もよい大膽な言葉で申して置きますが、そなたは二度と再びこの城を出ることは出來ない、若し出れば、モーリス・ド・ブラシイの妻として出るのだ。私は謀の破れることには慣れてゐない、いや又ノルマンの貴族ともあらう者が、結婚を申込んで、立身させて遣らうといふサクソン處女に、一々綿密に自分の行爲を辯明する必要もあるまい。そなたは傲慢だ、ローエナ、それなればこそそなたは愈々わしが奧方に適してゐるのだ。そなたはわしと緣を結ばないで外にどんな手段で高い名譽と立派な地位に昇る事が出來よう？　わしと結婚しないでどうしてそなたは、サクソン共が自分の財產である豚と共に住んでゐる卑しい田舍屋敷の境界を逃れ、イングランドに於て、美を以て秀で力を以て威ある總ての者の間に位置を占めることが出來よう、どれ程そなたが崇められるのが當然であ

り、どれ程わしがそなたを他人に崇めしめようとしても。」

「騎士様、そなたがさう輕蔑なさるその田舍屋敷は、私の幼い時分からの隱家でございました、そして實は私がそこを立ち退く時は、——萬一いつか左樣な日が到來致しましたなら——私が育て上げられました住居や習はしを輕蔑しない方と御一緒に立ち退きたいものでございます。」

「姫、御身は事が餘りぼんやりしてこのわしには解るまいと思つてゐられようが、御身の底意はちやんと察してゐるのだ。だが獅子心王リチャードが何時か再び玉座に戻られるだらうなど、夢想なされるな、まして王の嬖臣アイヴンホーのキルフレッドが、そなたを王の御前に連れて出て、寵臣の花嫁として歡迎されようなどゝは、ゆめ〳〵お思ひなさるな。これが他の男ならこんな事を思ふと嫉妬の炎も燃えようが、わしの固い意志は仲々そんな子供らしい、そんな望みのない感情で變へられはしない。姫、このわしの緋敵はわしの掌中に在るのだ。わしよりも恐ろしい、嫉妬心を懷いてゐるフロン・ド・ブーフに、その男がこの城中にゐるといふ祕密を明すも明さないのも、このわしが心一つにあると知られよ。」

「なにキルフレッド樣が此處に?」とローエナは、蹇むやうに言つた。「それが本當だなぞと、丁度フロン・ド・ブーフが身の程も知らずに、キルフレッド樣と競ふのと同じでございます。」

ド・ブラシイは一瞬間ぢつとローエナを見詰めてゐた。

「そなたは本當に何も知らないのだな? そなたはアイヴンホーのキルフレッドがあの猶太人の吊臺で運ばれてゐた事を知らなかつたのか。——聖墓を奪ひ還すべき偉い腕を持つた十字軍士には相應な乘物なんだ!」かう言つて彼は嘲るやうに呵々と笑つた。

「たとへあの方が此處に居られませうと、」とローエナは、抑へる事の出來ない不安の悶えに震へながらも、強ひてさもないやうな口調で言つた、「何であの方がフロン・ド・ブーフの競爭者でございませう? 騎士道の習ひに依りますれば、暫くの間の幽閉と、相當な身代金との外何の恐るべき事がございませう?」

「ローエナ姫、そなたも亦、女性に普通な思ひ違ひに欺かれて居られるな。自分達の美に關はる競爭以外には世に競爭があり得ないと思ふやうな。世には纖の嫉妬同樣、野心の嫉妬、富の嫉妬と申すものゝ有ることを御存知ないのか、此處の主、フロン・ド・ブーフはアイヴンホーの可なりの領地に對して主張する要求にキルフレッドが反對するので、彼をまるで自分よりも深く靑い眼の女に好かれでもしたやう

に、直ぐに、熱心に、そして無遠慮に、排斥するだらうといふ事を、そなたは御存知ないのか。だが、姫、私の賴みに笑顏をお見せ下さい。さすれば、私はかの怪我をした勇士が少しもフロン・ド・ブーフを恐れる事のないやうにする。さもなければ、そなたは、彼が決して同情を示す事のない者の手に渡つた時の如く、その死を哀悼することになるかも知れぬ。」

「どうぞあの方をお救ひ下さいまし!」と、ローエナは、纖人の身に差迫つてゐる運命の恐ろしさに、今迄の剛毅な心もくづをれて言つた。

「救ふ事が出來る——救はう——これが私の心である、」とド・ブラシイは言つた。「そのわけは外でもない、ローエナ姫がド・ブラシイの花嫁となる事を承知してくれたなら、その姫の親族に——姫の後見人の息子に——姫の幼友達に、誰が手荒い事をしえませう? が、彼の保護を得るには、そなたの愛といふ代價を拂はねばならぬ。私は自分の望みの有力な障碍となるらしい者の、幸運を助けてやつたり、黑運を防いでやつたりする程馬鹿ではない。そなたが、彼の爲めを思つて私にお盡しなされば、彼は安全なのです、——それをお厭やと仰せになれば、キルフレッドはこの世のものではございません。そしてそなた自身もさう近々には自由の身とはなれますまい。」

「貴方のお言葉は、その無頓着な率直の中に、その言葉が表はす恐怖とそれから現はれるらしい恐怖と調和する事の出來ないものを何か持つてゐます。私は貴方の目的がさう惡いとも、又貴方のお力がさう大きいとも信じません。」

「それなら勝手にさう信じてゐるがいゝ、今に時が經てば自然とそれが誤りだとお分りにならうから。そなたの纖人はこの城中に傷ついて寢てゐる——御身の選ばれた纖人は彼はフロン・ド・ブーフが野心よりも、美人よりも、もつと愛するものを手に入れようとするのを邪魔する者です。アイヴンホーの反對を永久に沈默させるには、短刀の一突きでも、手槍の一刺しでも、事は足りる。いや、フロン・ド・ブーフがそんな大びらな所業をして名分が立たぬと恐れるなら、醫者に一服盛らせたゞけでいゝ——部屋係りか、附添ひの者に彼の頭から枕を一寸外させたゞけでも宜い、さうすると今の體のキルフレッドは、現在の體のまゝ血を流さないで死に急がれるのだ。それからセドリックも亦——」

「それにセドリック樣も亦、」とローエナは彼の言葉を繰返して言つた、「私の氣高い——私の寬大な後見者! あの方の御子息の爲めとは申しながら、大事なあの方の事を忘れるやうでは、今からいふ憂目を見るのも當前でございま

す！」

「セドリックの運命も亦、そなたの決心一つにある、」とド・ブラシイは言つた、「その決心のつかれるまで、私は暫く向うへ參つてお待ち申さう。」

ローエナはこれまで、この辛い立場にありながら、勇氣を奮つて、氣丈に我が身を守つて來たが、併しそれはこの危險を重大な差迫つたものと考へなかつたからである。彼女の氣質は天性、骨相學者が美貌に相應しい、溫和な小心な、そしておとなしい性向と考へる所のものであつたが、その後それは彼女の教育によつて加減され、言はゞ鍛へられたのであつた。凡ゆる人々の意志が、いやセドリック自身の意志さへ（他の者には全く專横で氣儘でありながら）彼女の望み通りになるのに慣れて來たので、彼女は、周圍の人々の習慣的な不斷の尊敬と服從から生ずる、あの一種の勇氣と自信を持つやうになつた。それで、彼女には自分の意志が人の反對を受けるなどゝ云ふ事は殆ど考へられなかつた、またそれが全く輕蔑的に取扱はれるといふ事などは、到底有り得べからざる事と思はれた。

であるから、彼女の尊大と、他を支配する習慣とは、彼女の生來の性格上に加へられた假りの性格であつた、そしてその假りの性格は、今彼女の危險、並びに彼女の戀人と保護者の危險に向つて彼女の眼が開くに至つて、彼女から全く消えてなくなつたのである。そして彼女は自分の意志が、元はほんの一寸現はしても他から尊敬せられ、注意せられる習はしであつたのに、今は自分より有利の地位を占めてゐる、そしてその地位を利用する決心を固めた、強く、猛く、堅い心の人の意志と置き替へられたことを知つた時、彼女は彼の前に畏縮して了つた。

姫はまるで何處にも見出されない助けを求めるやうに、邊りを見廻し、そして何やら二言三言途切れ〳〵に口走つてから、天に向つて手を擧げ、抑へ切れない口惜しさ悲しさが一度にどつと胸に込み上げたのである。こんな美しい人間がこんな窮境に陷つてゐるのを平氣で見てゐる事は到底出來なかつた。ド・ブラシイも、感動するよりは寧ろ當惑したが、矢張り動かされない事はなかつた。彼は事實、餘り深入りし過ぎて、今更引込みがつかなくなつてゐた。而も、ローエナの現在の狀態では、どんなに口說いても、威嚇しても彼女を從はしめることは出來なかつた。彼は部屋の中を彼方此方と歩き廻り、或は空しく恐れ戰く處女に落ち着くようにと勸めたり、或は自分の行動をどうしたものかと躊躇したりした。

彼は思つた——若し俺がこの力を落してゐる娘の涙と悲嘆とに動かされたなら、俺はあんなに多くの危險に會ひ、ジョン親王やその陽氣な一味の者達の嘲りを買ふ源となつたあの美しい希望を失ふといふ事以外にどんな結果を收められよう？「而も」と彼は我と我が身に言つた、「どうやら俺は今演つてゐる役には向かないやうな性格を持つてゐる氣がする。俺はあんな美しい顏が、苦悶に歪んでゐるところも、又あの涼しい眼が泪に潤うてゐる所も見てゐる事が出來ない。いつそ姫が始めの傲慢さをずつと通してゐて呉れゝばよかつた。それともこの俺がフロン・ド・ブーフの鍛へに鍛へた無情な心をもう少し持つてゐたらなあ！」

これ等の思ひに振り動かされて彼はやつと不幸なローエナを慰め、未だそれ程絶望の果てに沈む必要がないのだと安心させる事が出來た。が然しこの慰藉に務めてゐる最中にド・ブラシイは例の「遠方で鋭く吹き鳴らす途切れ勝ちの角笛」の音に遮られた。その音は又同時に城中の他の者共をも驚かし、それ〴〵の強慾な計畫や放縱な企てを遮つたのである。皆なの內で、恐らくド・ブラシイ程この邪魔を殘念に思はない者はなかつたらう、何故なら、彼のローエナ姫との交涉が、自分の企圖を遣り通す事も、諦める事も、どちらも容易でないと云ふ程度にあつたからである。

こゝに於て（本章のこれより以下の文は、この本の最初の草稿になかつたのだが、後書き加へたものである）われわれは無駄話の出來事よりも何かもつといゝ證據を提供してたつた今、讀者の前に展開された憂鬱な描寫を辯明する事を必要と思はざるを得ない。かの勇猛な領主等（ジョン王の專制に反對し、王をして大憲章に調印せしめた貴族達）が踏み留まつて王冠に反對してこそ、イングランドの自由はその存在を保たれたのである。それに、彼等自身がかういふ恐るべき暴虐者となつて、イングランドの法律のみか、又自然及び人間の掟に迄叛く亂暴狼藉を働く事が出來ようとは、考へるのも歎かはしい事である。併し、あゝ！　我々は小說其物が當時の恐怖の實際の暗黑面に殆ど達し得ないといふ事を證する爲めには、たゞ勤勉なるヘンリイ（ロバート・ヘンリイ。スコットランドの歷史家で「英國史」の著者）の著書から、彼が同時代の歷史家達より蒐集したあの數多の文章の一節を引用しなければならぬ。

「サクソン年代記」（ノルマン征服前の英國史として權威あり）の著者の筆に成る、スティーヴン王の御代、ノルマン血統の諸侯、諸城主の手に行はれた殘忍酷薄な所行に關する記述は、彼等が自分の情慾の燃え次第にしかねなかつた亂暴狼藉の有力な證據を供するものである。「彼等は哀れにも築城工事で貧しき民を苦しめ、又その工事が成ると、彼等は惡者共を、否寧ろ惡魔どもを城中に滿たさしめた。而してその惡魔共は富裕と見ると男女を問はず引捉へて牢獄に投じ、殉教者でも未だ

曾て受けた事がない程の殘酷な苛責を加へた。中には泥中に窒息せしめられる者もあり、中には足、頭又は拇指を括つて吊され、その下に火を燃やされる者もあり、中には頭を節のある綱で締めて、遂に腦迄も切れ込ませられる者もあり、又中には有毒、無毒の蛇、蟾蜍等の群がる獄中に押籠められる者もあつた。」併し、讀者にこの記述の殘りを續けて讀む苦しみを與へるのは殘酷であらう。

斯る勝利の苦い果實の今一つの例として恐らくは引用出來る最も有力な一例として我々は、マティルダ皇后の身の上を擧げる事が出來る。皇后がスコットランドの姫君であり、後にエドガア・アッセリング（エドワード懺悔王の世子であつたが、キリアム勝利王に妨げられて王になることが出來なかつた）の姪にしてイングランドの女王と獨逸の皇后とを兼ね、實に帝王の娘であり、妻であり、母である身分でありながら、若い頃教育の爲めにイングランドに在住中、ノルマン貴族の淫逸な追求を逃れる唯一の手段として、尼僧の假面を被らざるを得なかつたのである。この口實を彼女は、自分が墨染の衣を着けた唯一の理由として、イングランドの大僧侶會議の席上で述べた。集つた僧侶はこの口實の有効な事と、この口實の根據となつた事情の顯著な事とを認め、斯くしてその時代を汚してゐたあの恥づべき淫逸の存在に動かすべからざる、而して非常に注目すべき證據を與へたのである。彼等は言つた、キリアム王の征服後、そのノルマンの家來共は、あの偉大な勝利に心驕つて、彼等自身の邪惡な快樂の外は何の掟も認めず、たゞに被征服者サクソンの土地財産を掠奪した許りでなく、又最もみだりがましく彼等の妻や、娘の節操を侵した。それで、當時貴族の夫人や令孃にとつては、神信心によつて尼寺に入るのでなく、たゞ人間の放縱極まる亂倫の行から自分の節操を救ふ爲めに、墨染の衣に身を裹んで、尼寺に隱れるのが普通であつた。以上は實に當時の眞實な世相であつた。

イードマー（僧侶にして修史家）によつて記された、會議席上の僧侶の公言によつて公表せられた如く、當時はこれ程に放縱淫逸を極めたのである。で、我々は餘り信を置き難いワーダー稿本（本書一版の文の中に「この材料に就いては殆ど云ふべき事はなし。其材料は主としてウヰリアム・オヴ・マームスベリーのグレスタ代のワーダーが餘程注意して自分の懈の篋笥の三番目の引出しにしまひ込んで置いて、何人もさはることを許さなかつた云々」とあるを參照）の典據に基いて既に縷述し來つた、そしてこれからも縷述せんとする光景の可能性を辯明する爲めには、これ以上附け加へて云ふ必要がない。

（二十四）

獅子その花嫁に言ひ寄る如く
我れ彼女に言ひ寄らん。
（ドーグラス）

今まで記し來つたやうな場面が城中の他の所で演ぜられてゐる間、猶太の娘レベッカは遠く離れた樓の一室で自分の運命を待つてゐた。彼女は二名の變裝した曲者に此處へ連れて來られた、そしてこの小さな部屋に押籠められて見ると、彼女は一人の年取つた巫女の前にゐるのであつた。巫女は丁度、床の上で、自分のまはす絲車に拍子を合せるかのやうに、始終サクソンの歌を獨り口吟んでゐた。巫女はレベッカが入つて行くと、頭を擧げて、意地惡い嫉妬の眼付でこの美しい猶太の娘を睨んだ、年老い、不器量で、おまけに、逆境に陷ると、人は兎角、若い美しい顏の持主をかうした目で見たがるものである。

「あつちへ行くんだ、蟋蟀婆、」と一人が言つた、「御主人の命令だ——お前はもつと綺麗なお客にこの部屋を明け渡さにやならぬのだ。」

「ふゝん、恩返しにそんな御用か」と、醜い老婆は呟いた。「お前達の中で一と言はれる侍も、私の一言が馬から下りさせたり、務めの手を止めさせたりした昔もあつたんだ。それが今ではお前達のやうな別當風情の命令にも、出て行かなきやならないのか。」

「アーフリード婆さん、」と今一人が言つた、「ぐづ〳〵理窟を言はずに、さつさと立つて行くがいゝ。我が君の嚴命は二つ返事で聽かねばならぬのだ。婆さん、お前も元は花盛りがあつたらうが、もうお前の御日樣はとつくに沈んじまつた。今ぢや荒野に追出された老耄馬のボンチ畫そつくりさ——若い時にや跳ねもしたらうが、今ぢやよぼ〳〵歩きが精々といふ所だ——さあ、よぼ〳〵歩いて出て行け。」

「どいつも不吉な犬共だ！」と老婆は言つた、「犬小屋の中に斃つちまへ！　鬼神ザーンボックがわしの脚と脚とを引裂かうと、この絲取棒の上にある麻を紡いで了はぬうちはこゝを出るもんかい！」

「その口返答は御主人に言ふがいゝ、鬼婆め、」とその男は言つて部屋から出て行つた。後にはレベッカが一人老婆と一緒に殘されて、かうして厭や〳〵ながら、この老婆の前に居なければならなかつたのである。

「彼奴等はどんな惡魔の所業を企んでゐるんだらう？」と老婆は折々橫目遣ひに意地惡さうな目付でレベッカを盜み見ながら獨語つた、「だが當てるのは譯はない——ぱつちりした目、黑い髮、それに坊主が未だ黑い油で汚さないうちの

紙のやうな白い肌（當時僧侶を除いては字を書くだけの學問のある者はなかつた。又僧侶は黑い油で羊皮紙に字を書いたものである）――ふゝん、彼奴等がこの娘をどうしてこんな淋しい檜に連れて來たのか、當てるのは何でもない、此處からはどんなに泣いても喚いても、聞える氣遣ひはない。丁度五百尋の地の底で喚くのと同じだらう。――これさ、綺麗な娘御、お前はもう此處では梟の外に相手がないのだよ、梟の鳴く聲なら、お前の泣く聲と同じ位ゐに、遠くには聞えまい、そしてお前のと同じ位ゐに顧られないのだ。それに見ればお前は異國の人らしいが、」とレベッカの着物や帽子に氣づいて言つた、「お前さんは一體何處の國だえ？――サラセン人かえ――それともエヂプト人かえ――何故返事をしない？――泣く事は出來ても、喋る事は出來ないのかえ？」

「怒らないで下さい、おばあさん」と、レベッカは言つた。

「もう言はぬでもいゝ、」とアーフリードは答へた、「人は足跡で狐を知る、私は言葉で猶太の娘を知るのさ。」

「どうぞ教へて下さい、むりやり私を此處へ引張つて來て、末には私をどうしようと言ふのでせう！　あの人達は私の異教徒である償ひに私の命が欲しいのでせうか。命なら喜んで捨てませう。」

「お前の命？　お前の命を取つたつて彼奴等に何が面白からう？――わたしの言ふ事をお信じ、お前の命はちつともあぶなかないよ。昔、サクソン貴族の一人の處女が、いやといふほどひどい待遇を受けたが、今にお前も、それと同じ待遇を受けるのさ。そして、お前のやうな猶太の娘が、もつといゝ待遇を受けぬからと言つて、不滿を懷くだらうかね？　わたしを御覽――今のレヂナールの父のフロン・ド・ブーフや、その家來のノルマン人共が、この城を襲つた頃には、このわたしはお前のやうに若くて、お前の二倍も綺麗だつたのさ。わたしの父と七人の息子は一階を奪はれゝば二階、この部屋が奪はれゝばあの部屋と、一生懸命に先祖讓りのこの城をよく護つたもんだつた――一室だつて、一階段だつて、その人達の血で辷らなかつた所はなかつたよ。その人達も死んだ――どれもこれも死んだ。そしてその體が冷たくならない中に、その血が乾かない中に、このわたしは勝つた奴等の餌食になり、慰みものになつたのだ！」

「助かる道はございますまいか――逃げ出す手段はないでせうか、」とレベッカは言つた――「助けて下されば、澤山、澤山、お禮は致しますが。」

「そんな事をお考へでないよ、此處からは死の門を潜るより外は逃げみちはない。それも遲い、遲い。」鬼婆は白髮頭を振りながら附け足した、「その門がわたし達に開く前でも、もう遲いのだ――でも、わたし等と同じ因果なものも世に多からう、さういふ者をこの世に殘して去るかと思へば、せめてもの慰めになる。御機嫌よう、猶太の娘！　猶太人でも、猶太人でなくつても、お前さんの運命はどつち道、同じこつたらう、何しろ良心の咎めも感じなければ、同情の涙も流さない奴等が相手なんだからな。では、さやうなら。私の絲は紡いで了つた――お前の仕事はこれから始まるんだ。」

「ゐて下さい！　ゐて下さい！　どうぞ！」とレベッカは言つた、「ゐて下さい、私をお呪ひなされても、お罵りなされても構ひません、ゐて下さい――あなたがゐて下さるだけで何かの保護になります。」

「マリア樣がおゐで遊ばしたとて保護にやならない――あれあそこに立つておゐでだ、」と老婆は粗末な處女マリアの像を指しながら言つた、「マリア樣にお前を待つてゐる運命が防げられるかどうか考へて御覽。」

彼女はかう言ひながら部屋を出て行つた、彼女の面相は一種の冷笑に歪み、その爲めいつもの澁面よりも一層憎々しくさへ見えた。彼女は部屋を出ると扉に錠を下ろした、そしてレベッカは、老婆がとぼ〳〵、さも辛さうに櫓の階段を下りて行く時、一足毎に段の急なのを呪ひ罵る聲をたしかに聞いた。

レベッカは今や、ローエナ姫の運命にも增して恐ろしい運命を豫期しなければならなかつた。何故といふに、サクソンの世嗣姫に對してなら未だ多少の溫情も禮儀も保たれるといふ事があつたらうが、日頃虐げられてゐる猶太民族の一人に對してはさういふ態度に出る筈が何うしてあり得よう？　併しこの猶太の娘にはかういふ強みがあつた――彼女はあゝも考へ、かうも考へる癖を持ち、生來智力も優れてゐたので、身に振りかゝつた危險に向ふだけの覺悟が人並以上に出來てゐたのである。レベッカは既に幼時から氣丈な、觀察力に富んだ性格を持つてゐたので、父親がその邸内で見せびらかしたり、又は彼女が他の富裕な猶太人の家々で目擊したりした榮華や富貴も、彼女の目を眩まして、彼等が樂しんでゐる覺束ない境遇に甘んじさせる事は出來なかつた。あの有名な饗宴に於けるダモクレスのやうに、レベッカは絕えず、そのきらびやかな華美のたゞ中で、たつた一本の髮の毛で、この民族の頭上に吊されてゐる劍を見戍つてゐた。かうした反省は、若し他の境遇の下にあつたなら、傲慢に、横柄に、更に頑固にもなつたかも知れないレベッカの氣質を和げて、更に健全な分別力を有つやうにしたのである。

父親の手本や指圖から、レベッカは、自分に近づく總ての

人々に對して、鄭重に振舞ふ事を敎はつた。彼女には心の卑しさとか、それを現はす爲めに始終びく〳〵してゐるやうなことがなかつたので、父の過度の追從に倣ふことは出來なかつたが、しかし彼女は立派な謙讓さで振舞つた。それは丁度一面には卑められる種族の娘として生れた惡運の境遇に從ひながらも、他面には心中、自分は宗敎的僻見の爲めに謂れなく壓迫せられてゐるが、自分の眞價から言へば、今より高い位置を占める資格があるといふ自信を持つてゐたかのやうであつた。

このやうに、いつでも逆境を迎へる覺悟をしてゐた彼女は、既にその場合に處するに必要な剛毅の心を修得してゐた。彼女の今の立場は何よりもその畢生の沈着を必要とした。で、彼女は出來るだけ勇氣を奮ひ起した。

彼女の先づ第一に爲すべき事は、部屋を檢査する事であつた、が併しそれは逃亡の望みも、防衞の望みも殆ど與へなかつた。この部屋は拔け道もなければ、落し戸もなく、そして此處へ入る時潜つた扉で主屋と通じてゐる外は、全部この櫓の圓い外壁で圍まれてゐるやうに見えた。その扉には內側に閂も橫木もなかつた。たつた一つの窓がこの櫓の頂きを圍繞してゐる胸壁を設けた場所に向いて開いてゐたレベッカは一目それを見た時、逃亡の望みを幾分かそれに

繋いだ、が間もなくそれがこの胸壁の他の何處とも聯絡のない事を知つた、此處は例の通り矢孔のある胸壁で固められた孤立した隅つこの張出櫓であつて、その胸壁には數名の射手が屯して櫓を護り、その側の城壁を矢玉で以て側面から防ぐ事も出來るやうになつてゐたのである。

それで今の場合、消極的な堅忍と、偉大で寬容な人物に自然生するあの神に對する強い信賴との外には、何にも希望を繋ぐものはなかつた。レベッカは、神の選んだ民（「選はれた民への約束」とは元來猶太人へのそれを云ふのであるが、基督敎徒はそれが自分達に當てはまるべき物のやうに解してゐる）に對する聖書の約束を如何に誤つて解するやうに敎へられてゐようとも、現在を彼等の試練の時であると考へたり、又はザイオンの子が何時かは異邦人と同じ幸福な境遇に入らされるであらうといふことを信じたりする點では誤らなかつた。一方、彼女の周りの總ての者は、彼等の現狀が罰と試みとの狀態であるといふ事や、罪を犯さないで苦しむのは彼等の特別の義務であるといふやうな事を敎へた。このやうに自分を不幸の犧牲と考へる覺悟が出來てゐたので、レベッカは早くから自分の身分を想ひめぐらして、多分遭はねばならない危險に出會つても怖れぬやうに心を馴らしてゐたのである。

けれども、一つの足音が階段に聞えて、やがて櫓の部屋の扉が靜かに開かれ、皆なの不幸を起した、かの山賊の一人　裝ひをした、丈高い男が靜かに入つて來て、扉をばたんと閉めた時には、この囚人はさすがに身を震はし、色を變へたのである。その入つて來た男は帽子を眼深に被つて、顏の半分を隱し、その餘りを覆ひ包むやうな具合に外套を着てゐた。彼はこの假裝で、驚き恐れてゐる囚人の前に突つ立つた、その樣子が丁度自分で考へても恥づるやうな所業を何か決行しようと覺悟でもしてゐるやうであつた。而も、その服裝は彼が曲者である事を現はしてゐたけれども、彼が何の目的で此處へ來たかを示すのに困つてゐるやうであつた。で、レベッカは、やつとの事で、彼の言ひたい事を推測る餘裕を持つた。彼女は既に二個の高價な腕環と一本の襟飾とを外して置いた、彼の强慾心を滿たせば、彼の好意を得る傳手になると定めて、急いで浪士らしいこの男の前に腕環と襟飾とを差出した。

「これをお取り下さいまし、」と彼女は言つた、「そして、神樣の爲めに、私と私の年取つた父とを憐れと思召して下さい！　この飾りは貴い品でございます、でも、私達を快く無事にこの城から出して下さる方の御恩に比べますと、ほんの詰らぬものに過ぎません。」

「美しいバレスタインの花よ、」と浪士は答へた、「この眞珠は東方獨特の光澤のある品ではある、が皓さではそなたの齒に漬く及ばない。その金剛石もひか〳〵輝いてゐる、が、そなたの眼には敵はない。それにわしはこの稼業を始めてから、金よりも美人を選ぶといふ聲ひを立てたのだ。」

「そんな惡い事をなさいますな、」とレベッカは言つた、「どうぞ、身代金をお取り下さいまし、哀れと思召して下さいまし！　黃金はあなたに樂しみを買つて與れませう。——私達を虐げる事は、あなたに悔いを齎らす事が出來るだけでございませうに。父はあなたの一番の高いお望みをも喜んでお飽かせ申上げますでせう、そしてあなたは、御賢明なお振舞ひをなさいますなら、私共の分捕品で、浪士をよして、公民社會への復活も購ふことが出來ませう——過去の過ちに對する宥恕も得られませうし、又これ以上犯す必要のないお身にもなれませう。」

「その言葉は尤もだ、」と浪士はフランス語で答へた——恐らくレベッカがサクソン語で始めた會話をその言葉で續けて行くのがむづかしいと思つた故であらう、「だがお聞きなさい、ベーカの谷（エルサレムの附近の谷、舊約全書　篇八十四篇六節に「彼等はベーカの谷をよぎりて、それを泉となす云々」とある）に輝く百合のやうな少女よ！　そなたの父はもう有力な煉金術者の手に渡つてゐる、その男はどうすれば地下牢の爐の錆びた鐵格子さへ金銀に變へられるかを知つ

てゐるのだ。アイザック老人は、わしが頼むか、そなたが歎願するかして助けなければ、老人が大事にしてゐられるものを、みんな蒸溜し盡して了ふ蒸溜器にかけられるのは必定だ。身代金は愛と美とで拂はれなければならない、その他の貨幣では受取らない。」

「そなたは浪士ぢやない、」とレベッカも彼が話し掛けたと同じ言葉で言つた、「浪士だつたら腕環と襟飾とを差出すと言つたやうな申出を斷りますまい。この國にゐる浪士は誰も、あなたが今お話しになつたやうな國訛りを使ひません。あなたは浪士ではなくて、ノルマン人——ノルマン人も、多分生れの貴い方でございませう——おゝ！　あなたの御行爲もさうであつて下さいまし、してその恐ろしい浪士の假面を脫ぎ捨てゝ下さいまし！」

「そして、さう旨く言ひ當てる事の出來るそなたは、」とブリアン・ド・ボア・ギルベールは、顏から外套を引下げながら言つた、「本當のイスラエルの娘ではない、若さと美しさとを除き、何處から云つても、本當のエンドルの巫女（エンドルはパレスタインの村落。昔サウル、ペリシテ人と最後の決戰の前夜此村にゐる巫女を訪ねて種々教を乞うた。——舊約全書撒母耳前書二十八章全部）だ。わしは浪人ぢやない、美しいシャロン（パレスタイン西部の沃野）の薔薇だ。してわしは、眞珠や金剛石をそなたから剝ぎとる所か、そんな飾りがよく似合ふそなたの頸や腕にかけて上げたい者なのだ。」

「私の財産でなければ、何をあなたは私から得ようとなさるのでございます？」とレベッカは言つた——「あなたと私との間には何にも共通した所がございません——あなたは基督教徒——私は猶太の娘でございます。——私達の結婚は、基督教會の掟にも、猶太教會の掟にも反いて居ります。」

「成程、さうであらう、」と寺侍は笑ひながら言つた、「猶太の娘と結婚する？　飛んでもない！　それがシバの女王（ソロモンを訪ねた南アラビヤの富んだ女王）であつても駄目だ！　まあお聞き、それに、可愛らしいザイオンの娘よ、假令この上ない基督教徒の王樣が、そのこの上もない基督教徒の姬御前に持參金としてラングドック（南フランスの昔の一國）を附けて下さると云つても、わしはその姬と結婚出來ぬ身なのだ。わしは、今そなたを愛するやうに、戀人として愛するより外には、如何なる少女も愛する事はわしの誓ひに背くのだ。わしは寺侍だ。わしの僧團の十字架を御覽。」

「今のやうな場合でも、あなたはその十字架に賴るお氣なのでございますか。」

「假令わしがさうしようと、それはそなたに關係はない、そなたは神聖な我々の救ひの道の印を信ずる者ぢやない。」

「私は祖先が教へた通りに信じてゐます、」とレベッカは言つた、「神樣、たとへ間違つてゐても私の信仰をお許し下さいますようお祈りいたします！　併し騎士樣、あなたが騎士としての、又宗教家としての、あなたの誓ひの中で一番嚴かなものを今にも破らうとしてゐらつしやる時でさへ、あなたが最も神聖だと信ずるものに、躊躇なくお賴り遊ばす時、一體何があなたの物ですか。」

「そりや眞面目な尤もな說法だな、おゝシラクの娘！」（聖書外典——典據の確はしい十四篇の名、元は舊約聖書中に入れてあつたが、今はない——の一篇僞經はシラクの子ジーザスに依つて書かれた。で、寺侍がバレベッカをシラクの娘と呼んだのは彼のお說は僞經のやうにろくなものでないと嘲つたのである）と寺侍は答へた、「だが柔しい牧師さん、そなたはそなたの狹量な猶太人の偏見に目が眩まされて、我々の高い特權が分らないのだ。結婚は寺侍の方では永久の罪なのだ、が併しそれより小さい失錯（女の操を冒す意を含む）ならどんなことをわしが爲出來さうと、今度の寺侍團長會議で直ぐに恕されるたらう。帝王中の最も賢い王（「最も賢い王ソロモン」も、其父ダビデも共に數人の妻をめとつた）でも、有名な手本を示した、その父でも、我々ザイオンの御堂の貧弱な兵共がその御堂を護るに熟心な所から得た特權以上に、廣大な特權を求めはなさらなかつた。ソロモンの殿堂の守護者はソロモンの範に倣つて免許を要求してもよからう。」

「あなたが若し、たゞ御自分の放縱と不身持との言譯をする爲めに、聖書を讀み、聖徒の傳を讀まれるのなら、あなたの罪は、最も有益な、無くてならぬ藥草から毒を絞り取る者の罪と同じでございます。」

寺侍の眼はこの非難の言葉に嚇と燃えた——「よつく聽け、レベッカ。わしはこれ迄柔しく物を言つてゐたが、今こそわしは征服者の言葉を遣ふぞ。そちはわしが弓矢に掛けて手に入れた獲物だ。——何處の國の掟によつてもわしの意志に從はねばならぬ獲物だ。わしはわしの權利を一步も讓らない、わしが賴んで見ても、ねだつて見ても、そちが厭だと云ふものを暴力で取るのもいとはぬ。」

「お退りなさい、」とレベッカは言つた——「お退りなさい、そしてそんな恐ろしい罪を犯さうとなさる前に私の言ふ事を一言お聞き下さい！　如何にもあなたは私の力に打勝つ事が出來ませう、神樣は女を弱く造られて、その保護を男の義俠に委ね給うたのですもの。併し寺侍樣、私はヨーロッパの果てから果て迄あなたの極惡無道な事を觸れ廻ります。基督教徒の同情に訴へるのが無駄なら、私は彼等の迷信に訴へませう。どの寺侍團長會議にも——あなたの僧團のどの僧會にも、あなたが異端者のやうに猶太女に邪淫の罪を犯したといふ事を知らせてやります。あなたの罪を聞いて身震ひしない人でも、猶太の娘を附け廻す程、あなた

が胸の十字架を瀆した事は呪はしく思ふでせう。」

「猶太の女よ、そちは頭の鋭い奴だ、」と寺侍は答へた、彼女の言葉が眞實であるといふ事や、自分の僧團の掟は、自分が今追求してゐるやうな情事を斷然、嚴罰に處するといふ事や、又或場合には免職にさへするといふ事をよつく承知してゐたのである——「そちは頭の敏い奴だ、」と彼は言つた、「だが、この城の鐵壁外に聞かさうとなら、そちの嘆聲は餘程高くなければならない、がこの中に聞かさうとなら、それも無駄だ、此處では不平の聲も、歎きも、正義に對する訴へも、助けを呼ぶ聲も皆な一樣に靜かに消えて了ふのだ。そちを救ふ途は唯一つだ、なあ、レベッカ。そちの運命に從へ——わし等の宗教に歸依するがいゝ、さうすれば多くのノルマンの貴婦人が榮華の點でも、美しさの點でも、御堂の守護者中第一番の槍の名手の思ひ者には劣る、といふやうな身分にそちはなれよう。」

「私の運命に！」とレベッカは繰返した——「おゝ神樣！どんな運命に？——あなたの宗教に歸依する！　してそんな惡者を隱まふのはどんな宗教かしら？——お前が寺侍中第一の槍の名手！——腰拔武士！——破戒僧！　私はお前に唾を引掛けてやる、お前なんか何んだ！　アブラハムの神樣は、お約束（神がアブラハムに彼の子孫が選ばれた民となり、榮え行くやうにと誓ひたまうた約束）通りその娘に逃道を開けて下すつた——この邪惡の淵からでも！」

かう言ひながら、彼女はいきなり張出櫓に續く格子窓を開き、あつといふ間もなく、胸壁のとつばしに突立つた、下は恐ろしく深くて何一つ目を遮るものもない。彼女はこれ迄全く身じろぎもせずに立つてゐたので、よもやさうした絶望的な事をしようとは夢にも豫期しなかつたボア・ギルベールは、彼女を遮る暇も、引止める暇もなかつた。彼が進み寄らうとすると、レベッカは叫んだ、「高慢な寺侍、近寄つて來るな、それとも勝手に進むか！　一步でも近寄ると、私はこの絶壁から飛び下りる。お前の獸慾の犧牲などにならないうちに、體をあの中庭の石に打つけて、粉微塵に碎いて了ふんだ！」

レベッカはかう言ひながら、手を合せて天の方に延ばした、それは恰もこれを最後に身を跳らす今はの際に死後の冥福を祈るが如くであつた。寺侍はたじろいた、これまで決して同情の爲めにも、悲嘆の爲めにも動かされなかつた決心が、レベッカの勇氣を讃美する心には動かされたのである。

「降りて來い！」と彼は言つた、「無鐵砲な娘！　大地、大海、大空に誓つて、そちの氣に障るやうな事は決してしない。」

「お前の言葉は信じられない、」とレベッカは言つた、「お前は私にお前達、寺侍團の諸德を評價する方法をよく〳〵教へて呉れた。ふん、よく誓ひを守つたね、でもたかゞ哀れな猶太娘の操を破るか破らないかのことぢやないか、多分今度の寺侍團長會議でお前さんに罪障消滅の宣告を與へるだらうよ。」

「そちはわしを誤解してゐる、」と寺侍は熱意を籠めて叫んだ、「わしはわしの名にかけて——この胸の十字架に掛けて——腰の劍に掛けて誓ふ——先祖からの舊い紋章に掛けて誓ふ、わしはそなたに如何な危險も斷じて加へない！　そなたの爲めではなくとも、そなたの父の爲めに我慢しろ！　わしはそなたの父の味方とならう、そなたの父はこの城中に有力な味方が要るだらう。」

「おゝ！」レベッカは言つた、「私もその事は知り過ぎる程知つてゐる。その言葉を信じてもよいものだらうか。」

「若し今後、わしに就いて苦情を言ふべき筋があつたなら、わしの武器を逆まにしてもいゝ、わしの名が汚れてもいゝ、」とブリアン・ド・ボア・ギルベールは言つた、「多くの掟、多くの誡めをわしは破つた、が約束だけは一度も破つた事はない。」

「ではそこ迄のところはあなたを信じませう、」とレベッカは言つて、胸壁の緣から下りた、が併し未だ出狹間（當時はこれをマチコールと呼んでゐた）の一つにぴつたり寄り添つて立つてゐた。——「私は此處に立つてゐます、」と彼女は言つた。「あなたはそのまゝそこにゐて下さい、今私の方へ一步でも近づかうとなさるなら、この猶太の娘は、自分の操を寺侍にずよりは、寧そ魂を神樣にお任せするといふ事をお見せするばかりですから！」

かう言つてゐる間、彼女の面の表情に富んだ美しさと、非常によく釣合つた彼女の高く固い決心は、彼女の樣子、振舞に、人間のものとも思へぬ威嚴を添へるのであつた。彼女はかくも急劇な、かくも恐ろしい運命に逢つても、眼光も衰へねば、頰の色も失せなかつた、いやそれところか、自分は自分の運命を左右することが出來る、思ひの儘に汚辱から死へと逃れる事が出來るといふ考へは、頰に尙ほ一層濃い紅色を、眼に尙ほ一層の輝きをさへ與へたのである。流石自負心の強い元氣なボア・ギルベールも、これまでかくも雄々しい、犯し難い美女を見たことがないと、心窃かに感嘆したのであつた。

「仲直りをしようぢやないか、レベッカ、」と彼は言つた。「仲直りがなさりたいのなら仲直りも致しませう、」とレベッカは答へた——「仲直りも——ですが、二人の間にこれ

だけの間を置いて。」

「もうわしを恐がるには及ばないよ。」

「私はあなたを恐れは致しません。落ちれば誰だつて生きては居れない程高い、この目も眩むやうな塔を造つて下すつた方に感謝致します——その方に、それから猶太の神様に感謝致します！　あなたを恐がりは致しません。」

「そなたはわしを誤解してゐる、本當に、そなたはわしを誤解してゐる！　わしは生れつきから、そなたが見るやうに、冷やかな、我儘な、情けを知らぬ者ではない。わしに酷薄といふものを教へたのは女だつた、だからわしは女にそれを加へて來たのだ、だがそなたのやうな女にではなかつた。レベッカ、聞いて呉れ——このブリアン・ド・ボア・ギルベール位ゐ自分の戀ひする婦人に心を捧げて、その女の爲めに槍を手にした騎士は一人もなかつたのだ。その女の父は小さい領主で、毀れた塔と、實らぬ葡萄畑と、二三哩四方位ゐのボルドーの瘠せ地ランデ（フランスの西部、ボルドー附近の低い砂地の沼地）との外は、なんでも自分の領地の事を自慢にする男だつた。そんな父の娘と生れた彼女の名は武術の行はれる處では何處でも知られてゐた、持參金として州一つを持つ程の多くの貴婦人の名よりも廣く知られてゐたものだ。——さうさ、」と彼は、遽かに活氣づいて、レベッカの前にゐる事も全く忘れ果てたやうに狹い露臺をあちこち歩きながら語り續けた。——「さうさ、わしの武勇、わしの冒險、わしの熱血、それ等はアデレイド・ド・モントマールの名をカスティル（當時一千百九十四年—一王國をなした西班牙の一地方）の宮廷からビザンチウム（當時の東ローマ帝國の首都）の宮廷迄轟かせたものだ。そしてその揚句どういふ報酬をわしは得たと思ふ？——わしが勞苦と血潮で購つた高價な名譽を得て歸つて行つて見ると、その女は、其奴の詰らぬ領地外には少しの名前も聞えてゐないやうな、ガスコン（フランス南部の一地方）の鄕士と結婚してしまつてゐたのだ！　わしは本當にその女を愛してゐた、わしは女が誓ひを破つたことに對して手酷い復讐をしてやつた！　が、併し、わしのした復讐は、わしの身に返つて來た。その日からわしは塵世とその數々の羈絆とから離れて了つたのだ。言ひ換へてみるとわしの男盛りも家庭の樂しみを知つてはならない——情愛深い妻に慰められてはならない——老年になつても家庭の樂しみを知つてはならない——わしの墓は孤獨でなければならず、子孫は一人としてわしの後に殘つて、ボア・ギルベールと云ふ古い名前を傳へてはならないといふことになつたのだ。わしは自己活動の權利、獨立の特權を捨てゝ、一切を僧院長にお委せ申してゐる身だ。寺侍は奴隷といふ名こそなけれ、總てに於て奴隷だ、土地も財產も

持つ事がならない。たゞ他人の意の儘に、生き、動き、呼吸をするのだ。」

「あゝ！」とレベッカは言つた、「どんな利得がそんな絶對の犧牲を償ふ事が出來ませう？」

「復讐の力だよ、レベッカ、」寺侍は答へた、「それから功名心の滿足への希望だ。」

「人間にとつて一番貴い權利をお拋げ棄てになるにしては惡い償ひでございます。」

「さうは言ふな、娘」と寺侍は答へた、「復讐は鬼神への御馳走だ！　して僧侶共が我々に言ふ通り、若し、鬼神が復讐を獨占したなら、それは鬼神が復讐をたゞの人間共に占有させて置くには餘りに貴い樂みだと思つたからだ。——それから功名心？　それは天の幸禍（惡天使が天國より墮落した事實を暗示する。舊約聖書以賽亞書十四章、十二節に「あしたの子明星よ、いかにして天より隕ちしや、もろ〳〵の國をたふし者よ、いかにして斫られて地にたふれしや」とありて、次の節に其罪因を功名心に歸してゐる）をさへ擾す事が出來た誘惑なのだ。」——彼は此處で一寸言葉を休めた、それから又附加へて言つた、「レベッカ！　不名譽よりも死を選ぶ事の出來る女は、誇りの高い、そして強い魂を持つてゐるに相違ない。そなたはわしの物でなくてはならない！——いや、驚くな、」彼は更に言ひ足した、「それはそなた自身の得心の上で、而もそなた自身の條件通りでしなければならない。そなたは帝王の玉座から見渡されるよりももつと廣い希望の原野をわしと共に歩む事を承知しなくてはならない！——答へる前にわしの言ふ事を聞いてお呉れ、斷る前によく判斷してお呉れ。——寺侍は、そなたが先刻言つたやうに、自分の社會的權利、自由行動の力を失ふのだ。併し玉座も既に震ひをのゝかされる程の强大な團體の一員となり、手足となる、——丁度海に落ちるあのたつた一滴の雨が、岩を掴りくづし、王の艦隊を卷込む、あの抗し難い大洋の個々の部分となるやうに、畢竟この强大な團結こそかうした大海なのだ。わしはこの强大な團體の詰らない一員ではなくて、既に首領の一人である、だからわしが何時かは大長老の采配を握れるといふ功名心を抱くのも無理はない。王の頸根に足をかけるのはひとり御堂の取るにも足らぬ兵だけではあるまい——麻の草鞋を穿いた僧でさへ亦さうする事が出來る。具足に身を固めたわし等の歩みはきつと玉の玉座にまで登らずにはゐなからう——彼等が握る笏はきつと彼等の籠手にもぎ取らして見せるぞ、そち達の空しく待ち望んだメシア（猶太人は救世主出でゝダヴイデの王座を復興し他國に離散してゐる猶太人を再び强大な國民とすると信じたのである）の治世も、わしの功名心が目ざすやうなあんな力をそなたの離散した種族に與へはしない。わしはその功名心を共にすべき同種の魂ばかりを求めて來た、そしてわしはそなたの中にさういふ

魂を見付けたのだ。」

「あなたはそんな事を猶太人の一人に向つて仰しやるのですか、」とレベッカは言つた、「まあ考へて御覽なさい――」

「二人の信條の相違を言ひ張つて、それをわしへの答へとするのか、それはおよし、我々の祕密結社内では左樣なお伽噺めいた事は嘲笑つて問題にしないのだ。吾々の開祖達のたはけた行に、何時までも目を眩まされてゐると思つてはならない。彼等は人生の凡ゆる喜びを斷絶して、餓ゑや、渴きや、疫病や、或は蠻人の劍なとで、死に瀕しつゝも有つ殉教者の樂しみを獲ながら、他面、迷信の眼にのみ價値のある脩士の曠野を守らうと空しく努めたのだ。だが我々寺侍團は直ぐにもつと大膽な、もつと廣大な見解を採つて、我々の犧牲に對して、もつといゝ辨償を見出した。歐羅巴の凡ゆる國々にある我々の廣大な領分、凡ゆる基督教國から武人の精英を我々の仲間に誘ひ入れる因となる我々の高い武名――これ等は種々の目的に捧げられて居るのだ、その目的と云ふのは敬虔な開祖が夢にも想像しなかつたもので、そして我が寺侍團に、腐臭い主義から歸依して、その迷信の爲めに、唯々諾々我々の道具に使はれるやうな弱い人間共の等しく知らないものである。だが、わしはこれ以上我々の機密を明かしたうはない。丁度喇叭が鳴つてゐる、あれは何かわしに用事があるといふ合圖かも知れない。わしの言つた事をよく考へて置いてお呉れ。――左樣なら！――わしは威嚇した亂暴を許せよとは言はない、あれもそなたの性格を發揮させる爲めには必要だつたのだ、黃金は試金石に當てゝ見て、やつと分るものだ。わしは直きに歸つて來て、又とつくりそなたと相談しよう。」

彼は再び櫓部屋に入つて、階段を下りて行つた、後に殘つたレベッカは、不幸にも極惡人の掌中に陷つて、その狂ほしい野心を聞き、たつた今その身を曝した死の光景の恐しさにも劣らず、恐怖の念に打たれたのであつた。レベッカは櫓部屋に入ると、先づヤコブの神の自分に與へた御加護を深く謝し、又この先きも、自分の爲め父の爲めに加護あらん事を天に祈るのであつた。その祈りを捧げた時、今一つの名前が何時の間にかその中に交つてゐた――それは武運盡きて、血に渴いた敵の手中に陷つたあの負傷した基督教徒の名であつた。が彼女ははつと胸に感じてその思を止めた。それはまるで、天の神に祈りを捧げてゐる時でさへ、その人の運命と自分の運命とが何の結合も持ち得ない人――ナザレ人であり、自分の信仰に敵同志である人――の思ひ出を自分の祈りの中に交へたかのやうであつた、併しその祈りは最早口から出てゐた。それに又、彼女は自分の宗

派の凡ゆる狹量な偏見を斥けて、それを取消さうとも望まなかつたのである。

（二十五）

生れてこのかた見た中の、
一番分りにくい筆蹟！
（「屈辱を忍んで勝利を得る」）

寺侍が城中の廣間に着いて見ると、其處には既にド・ブラシイが來て待つてゐた。「貴方の口說き落しも」とド・ブラシイは言葉をかけた。「今のけたゝましい呼笛で、私同樣、矢張り妨害された事でせうね。だが、貴方はこんなに遲く殘り惜しげに參られた所を見ると、どうやら私などよりは上首尾に參つたらしいですね。」

「では、貴方のサクソンの世嗣姬の口說き落しは不首尾だつたのかね、」と寺侍は言つた。

「本當に、」とド・ブラシイは答へた、「ローエナ姬は私が婦人の淚を見るに耐へないと云ふのを聞いた事があるに相違あるまいて。」

「そんな事はお言ひなさるものぢやない！」と寺侍は言つた。「傭兵團の隊長ともあらう者が、一婦人の淚を氣に掛けられるとは！　纖の松明に注ぎかけられた二三滴の淚は、その纖の焰を益々盛んに燃え立たすものなんです。」

「貴方のほんのばら〳〵降りかゝる二三滴位ゐなら大變有難いが、」とド・ブラシイは答へた。「しかしあの姬は燈臺の灯も打消す位ゐ、泣いて〳〵泣き拔きました。エイマ僧正から聞き及んだ聖ニオベ（希臘の神話出づ。ニオベはテーベの王アムフイオンの妻、その子の美と數の多いのを誇つたりでその子は悉くアポロとアルテミスに彼女の面前で殺された。彼女は悔恨の悲哀を表はす典型とせられた）の時代以來、あんなに手を揉み絞り、あんなに眼に淚を溢らしたものは決してあるまい。水の精があのサクソン美人に憑いたのだ。」

「さう云へば、あの猶太娘の胸には無數の惡魔が巢喰つたのです、」と寺侍は答へた、「たつた一匹では、アポリオン（希臘語で破壞者の意、舊約の名、「底なき坑の使者」。新譯聖書默示錄第九章）自身だつて、あんなきかぬ氣の誇りと決心とを吹き込む事は出來まいて。――それはさうと、フロン・ド・ブーフは何處でせう？　あの角笛は益々やかましく鳴つてゐる。」

「彼はあの猶太人に掛合ひ最中なのだらうよ、」とド・ブラシイは冷かに答へた、「多分アイザックの哭く聲で喇叭の音が吹き消されたのであらう。貴方も經驗で御承知かも知れ

ないが、ブリアン殿、どの猶太人でも我々の友フロン・ド・ブーフの提出しさうな條件では自分の寶を手放すには、二十の角笛と、おまけに、二十の喇叭を吹き鳴らす以上に響く程高い騒ぎをすることでせう。兎に角、家來共に呼ばせませう。」

が、間もなく、そのフロン・ド・ブーフも二人の許へやつて來た、彼は讀者が既に知られるやうに、暴虐無情な所業へ邪魔を入れられ、彼處を出て來たのであるが、何か必要の指圖を言ひつけてゐた爲め、此處へ來るのに、暇取つたのである。

「この忌々しい騒ぎの因を見ようではないか、」とフロン・ド・ブーフが言つた、「さあ此處に一通の書面がある。思ふにこれはサクソン語で書かれたものであらう。」

彼はその書面をながめて、幾度も〳〵引つくり返した、引つくり返して居さへすれば意味が分つて來る見込が、實際あるかのやうで。そしてそれをド・ブラシイに渡した。

「これは恐らく私の知る限りでは咒文だらう、」と當時の騎士の特色として、これも全くの文盲であつたド・ブラシイが言つた。「うちの牧師は私に書くことを教へようとしたのだが、私の字はみんな槍の鉾先か劍の身みたやうになるので、流石の老僧も諦めて了つたのです。」

「私にお見せ下さい、」と寺侍は言つた、「我々は僧侶に分相應なだけ我々の武勇を躍かす爲めに、多少の知識は持ち合はせてゐます。」

「では、貴方の最も尊むべき知識のお世話にならうではないか、」とド・ブラシイは言つた、「この手紙には何と言つてありますかな。」

「これは正式の挑戰狀です、」と寺侍は答へた、「だが、本當にこれは若し馬鹿げた冗談でなけりや、これ迄諸侯の城のはね橋を通つて來た内で一番突飛な果し狀なんです。」

「冗談！」とフロン・ド・ブーフは言つた。「どんな奴がよくも左樣な事で我々を茶化すか知りたいものだ！——お讀み下さい、ブリアン殿。」

言葉に應じて寺侍は次の如くに讀み出した——

『かく申すは帮間ウィッツトレスの子ワンバ、並びに豚飼ビオウルフの子ガースとて、家門高く自由の身に生れ通稱サクソンと呼ばるゝ、ロザーウットのセドリック樣に仕ふる者共なり——』

「貴方は氣が狂はれたな、」とフロン・ド・ブーフは、讀み手を遮りながら言つた。

「いや確かにさう書いてある、」と寺侍は答へた。それから又自分の引き受けた事に取り掛つて、から讀み續けた——

『前記セドリックの豚飼男、ビオウルフの子、我れガースは、この我等の爭ひに於て我等に與する者、卽ち當分「黑きのろま」と呼ばるゝ騎士及び「的破り」と呼ばるゝ剛勇の鄕士、ロバート・ロックスリイの援助を得て、汝レヂナール・フロン・ド・ブーフ及び何人にもあれ、汝の同盟者なる者等に告ぐ。汝等は理由も示さず、將た宣戰もなさずして、不法にも優勢を頼み、我等の主君上記セドリック及び家門高く自由の身に生れし處女、ハーゴットスタンドスティードのローエナ姬、及び家門高く自由の身に生れし人、コニングスボローのアセルステイン、及び彼等の從者なる數人の自由の身に生れし者及び彼等の奴隷に生れし數人の農奴及びヨークのアイザックと名付けらるゝ、一猶太人、並びにその娘及び數匹の馬及び騾馬をば捕虜とせり。右の高貴の方々は、その從者及び奴隷、並びに馬及び騾馬、上記の猶太人父娘と共に、總て陛下に反かず王の公道を臣下として旅行中なりき。されば我等は上述の高貴なる人々、卽ちロザーウッドのセドリック、ハーゴットスタンドスティードのローエナ、コニングスボローのアセルステインをば、その僕、從者、及び家來、並びに馬及び騾馬、前記の猶太人父子と共に、彼等に屬する一切の諸道具諸共、この書面の到着後一時間以内に我等、又は我等が指名の人々に引渡すべき事を要求す。而して右の人々及び物品には手を觸れ損傷する事あるべからず。以上從はざる時は我等汝等に宣告せん、我等は汝等を夜盜、逆賊の類と見做し、身命を賭して、戰鬪、攻圍、又は其他の手段にて汝等と爭ひ、極力汝等を苦しめ亡ぼすべし。されば神汝等を監視給はんことを。——聖ウィソルド日の前夜、ハート・ヒル街道の集合所と定めし大樫の下にて署名す。以上、コプマンハーストの禮拜堂にて、神、聖母マリア、及び聖ダンスタンに仕ふる一聖僧これを記す。』

この書面の最後には、先づ第一番に、雄鷄の頭と雞冠との粗雜な畫が描きなぐつてあつて、それにこの畫はウイットレスの子ワンバの自署であるといふ意味を示す文字——と辛うじて稱し得るものが添へてあつた。この立派な記號の次には、ビオウルフの子ガースの印であると斷書して、十字架が描いてあつた。その次には、亂暴な放膽な筆蹟で、「黑いのろま」といふ言葉が認めてあつた。そして、全體の締め括りとして、可なりきちんと描かれた一本の矢が、鄕士ロックスリイの印と記してあつた。

騎士達はこの風變りな書面を始めから終りまで聞いてゐ

た、そしてそれから、驚き黙したまゝ、互ひに目と目を見合せて、これが何の前兆か全く知るに苦しんでゐる體であつた。が、先づド・ブラシイが抑へ切れなくなつて、ぷつと噴き出し、沈黙を破ると、もつと控へ目ではあるが、寺侍もそれに釣り込まれて笑ひ出した。所がこれに反して、フロン・ド・ブーフだけは、二人が場合をも顧みず、不謹慎であるのにむつとした様子であつた。

「率直に御警告申すが、」と彼は言つた、「今は左様に笑つてゐる時ではない、それよりは斯様な場合にどう處するか談合なさるべきだ。」

「フロン・ド・ブーフ殿は、この間、倒されてから、未だ機嫌が直らない、」とド・ブラシイは寺侍に言つた、「あの手紙は、幇間と豚飼男とから參つたに過ぎないのに、果し狀と云ふだけに怖氣付いてゐる。」

「本當に、」とフロン・ド・ブーフは答へた、「貴方一人でこの冒險を悉くお引受けなさる事が出來ればよいがと望むのだ、ド・ブラシイ殿。彼奴等は、誰か強い者共に尻押しをされなけりや、斯樣な考へも及ばぬ厚かましい事をする勇氣はない。この森にはわしが鹿を保護致すのを兎や角言ふ浪士が可なりゐる。わしは、手に血を染めながら御獵林の鹿を盜み殺す現行犯人を捕へ、一匹の野鹿の角に縛り付けてやりましたら、彼奴はその鹿に突かれて五分間で死に申した、すると、わしはその仲間の者から、先日アシュビイであの的に放たれたと變らぬ程澤山の矢を射られたのでした。——これ、奴」と、彼は自分の從者の一人に向つて言ひ繼いだ、「お前だな、この法外な挑戰に加勢致し居る人數が何人位ゐか偵察にやられたのは？」

「はい、少くも二百人位ゐは森の中に集つて居ります、」と近侍の一人の從者が答へた。

「大變な事だ！」と、フロン・ド・ブーフは言つた、「これも各々方に私の城をお貸し申したから起つた事なのだ、御自分の企てを靜かに處理出來ないで、こんなに私の耳の傍へ熊蜂の巢を持つて來るやうな大騷ぎをお惹き起しなさるとは！」

「熊蜂の？」とド・ブラシイは言つた、「いやどちらかと言へば蠶針のない雄蜂でせう、森に逃げ込んで身を養ふ爲めに働くより寧ろ鹿を屠らうといふ懶惰な惡者共の一團だ。」

「針のない？」とフロン・ド・ブーフは聞き咎めた、「二三尺餘もある叉形鏃の箭、而もそれがほんの小さい金貨の幅位ゐの的に射られたら、結構な針なんだ。」

「馬鹿な事を言はるゝな、騎士殿！」と寺侍は言つた。「兎に角家來共を召集して、威勢よく突擊致さう。騎士一人は——いや、兵卒一人は、あんな百姓共二十人に當りますわい。」

「そりや當る、當り過ぎる位ゐだ、」とド・ブラシイは之に同じた、「私なぞは、あんな奴等と槍を合はすさへ恥ぢる位ゐだ。」

「寺侍殿、」とフロン・ド・ブーフは言つた。「彼等が黑奴の土耳古人かムーア人か、乃至は、剛勇無雙のド・ブラシイ殿、フランスの弱蟲百姓でぐもあつたなら、仰せ御尤もであらう、が此奴等はイングランドの鄕士共なのだ、こつちに武器と馬とがあるといふ外、我々に優つた所が何があらう、而も肝心のその武器や馬さへこの林の間の徑路では何の役にも立つまい。突擊すると貴方は申されましたな？　所が此處には城を守るだけの人數もやつと位ゐしかゐない。わしの部下の精銳は皆ヨークに參つてゐる。ド・ブラシイ殿、貴方の軍勢もみんなさうだ。だから今は、今度の氣違ひじみた仕事に働いた少人數の外には、二十人そこ〳〵しかゐないのだ。」

「眞逆相手方にこの城を攻擊するだけの軍勢が集められると氣づかはるゝのではあるまいな？」と寺侍は言つた。

「いやブリアン殿、さうぢやない、」とフロン・ド・ブーフは答へた。「あの浪士共は實に豪膽不敵の首魁を戴いてゐるのだ。が、向うに色々な戰具、雲梯、經驗を積んだ指揮者などがなければ、この城はびくとも致さぬ。」

「近所の人々へ使者を走らせて、」と寺侍は言つた、「三人の騎士がレヂナール・ド・ブーフの居城で幇間と豚飼男に包圍されて困却してゐるから、家來を集めて、早速救助に來て戴きたいと言はせなさい！」

「冗談を言はれる、騎士殿、」と領主は答へた、「それにしても誰を使者に立てよう？——マルヴォアザンはもはや家來共とヨークにゐるし、その他の味方の者もさうである。いや、こんな忌々しい企てがなかつたなら、私も其處へ行つてゐたのに。」

「ではヨークに使者をやつて、家來共を呼び戻さう、」とド・ブラシイが口を出した、「若し彼等賊共が、私の軍旗の棚曳くのも恐れず、或は又我傭兵團の勢ひに辟易もしなかつたなら、これ迄綠の森で弓を引いた者の中で、最も勇敢な賊だと申しても恥かしくないと褒めて遣はさう。」

「それにしても、一體誰がそんな使者に立たう？」とフロン・ド・ブーフは言つた、「彼等は行く道々を塞いでゐて、使者の胸を引裂いてしまふだらう。——うむ、いゝ考へがある、」と彼は一寸休んでから言ひ足した——「寺侍殿、貴方は讀む事も書く事もお出來なさる。それで若し、十二ヶ月前にクリスマスの酒宴最中歿くなつた、うちの牧師の筆や

紙が見付かりさへしましたなら――」

「恐れながら、」と未だ傍に隨いてゐたかの從者が口を出した、「アーフリード婆奴が、あの懺悔僧を慕ふところから、何處かにその墨や筆や紙を藏つてゐるかと存じます。何時ぞやあの婆さんがかう言ふのを耳にした事がございます、あの僧こそ、男といふ男が婦女に會ひさへすれば、屹度口に出すやうなことを少しも言はなかつた人だと、はい。」

「行つて、探して來い、アンゼルレ、」とフロン・ド・ブーフは言つた、「それから、寺侍殿、この大膽な挑戰狀に返事をお書き下さい。」

「私は筆の先で返事をするよりは寧ろ劍の尖で返事をしたいのだ、」とボア・ギルベールは言つた、「だが、お望み通りにするとしよう。」

そこで、彼は腰を下して、フランス語で次のやうな趣意の書面を認めた――

『レヂナール・フロン・ド・ブーフ卿は、その騎士の高き位にある味方と共に、奴隷、奴僕又は脫走者の手にて書ける果し狀を受理せず。自ら黑裝束の騎士と名乘る者、よし眞に武士道の禮遇を受くる資格あらんも、その身現在の加盟によりて騎士の品位を落され、生れ高き人々より尊重を求むる權利を失ひしものと知るべきなり。我等の捉へし捕虜に就いては、基督敎的博愛主義の見地より、彼等の懺悔を聽き、彼等の罪障消滅を神に祈るべき僧侶一名を派すべき事を汝等に要求す。その意や他なし、今朝正午前に彼等を死刑に處し、首を胸壁に揭げて、我等が如何に彼等を救助せんと奮起せる者を顧みざるかを示さんとする事、既に我等の確乎たる決心なればなり。されば、上に述べし如く、汝等は彼等の罪障消滅を神に祈るべき僧侶一名を派すべし、斯くなさば汝等又彼等にこの世の最後の友誼を盡す事とならん。』

この書面は、疊んでから、從者に渡され、從者から、外に待つてゐた使者に、彼が持つて來た手紙の返事として、渡された。

使者に立つた鄕士はかくして自分の使命を果して、味方の屯所へと引上げた。屯所は差當り、この城から箭の屆く距離の三倍程隔たつた古さびた樫の木の蔭に設けられてあつた。其處では、ワンバとガースとが、同盟者黑裝束の騎士とロックスリイとあの快僧と一緒に、彼等の挑戰狀に對する返事を頻りに待ち兼ねてゐる所であつた。彼等の周圍や、少し離れた所には、多くの豪膽な鄕士の姿が見受けられた、その田舍風の服裝、風雨に曝された顏などは、彼等

の平常の職業をよく示してゐる。既に二百人以上集つてゐる上に、尙ほ頻りに馳せ加はつた。彼等が首領として仰いだ人々は、たゞ帽子に着けた鳥の羽で他の者と區別されてゐるのみで、服裝や武器は總て同じであつた。

これ等の隊の外に、近隣の村に住むサクソン人から成る、今少し秩序がなく、今少し武裝の整はない軍勢、並びにセドリックの廣大な領地から來た多くの奴隷や僕達が、セドリックを救ひ出す手傳ひをする積りで、既に到着してゐた。これ等の人々は殆ど誰一人として、必要があれば武器とも成り得るほどの農具以外何にも帶びてゐなかつた。豚槍、大鎌、連枷、といつたやうなものが、彼等の重なる武器であつた、と云ふのも、ノルマン人が征服者によくある政策で、戰敗者サクソン人に劍や槍の所持又は使用を許さなかつたからである。かう云ふ事情さへ無ければ、このサクソンの援助は、人々自身の力と云ひ、人數の勝る事と云ひ、又正義の爲めとあるので意氣大いに昂つてゐる事と云ひ、包圍された者にとつて嘸かし恐るべきものであつたらうが、前に擧げたやうな譯で、さして恐れさすといふ迄には行かなかつた。この烏合の衆の指揮者にこそ寺侍の手紙が今渡されたのである。

先づ第一番に例の隱者がその內容の說明を頼まれた。

「天國に在すどの上人の杖よりも、多くの羊を羊の檻に導き給うたダンスタン上人の杖に誓つて、」とその尊き僧は言つた、「愚僧は、フランス語であれ、アラビア語であれ、兎に角愚僧の臆測を許さぬこの讒語は何うも說明して進ぜる譯には參らぬて。」

彼はそれからその手紙をガースに渡したが、そのガースも頭を荒々しく振つて、それをワンバに廻した。幇間は、猿がかうした場合によくやるやうに、如何にも悧巧ぶつて、にや〳〵笑ひながら、その手紙の四隅を、一々、見てゐたが、やがて小踊り一つして、その手紙をロックスリイに渡した。

「長い手紙が弓で、短い手紙が矢であるなら、私もちつとは分らうが、」とこの勇ましい鄕士は言つた、「どうもこの通りでは、その意味が、私には十一哩さきの牡鹿同然手に負へませぬ。」

「では、私が讀役に成らねばなるまい、」と黑裝束の騎士は言つて、手紙をロックスリイから受取ると、先づ自分で一通り默讀し、それからその意味をサクソン語で一味の人々に說いて聞かせた。

「セドリック樣を死刑に！」とワンバは叫んだ、「騎士樣、それはきつと貴方の讀み違ひでございます。」

「わしは讀み違ひはしない。此處に書いてある通り説明したのだ。」

「そんなら、弓矢にかけて、」とガースが言つた、「あの城を乘取らう、我々の手で落さにやならないのなら！」

「あの城を破るには、手より外に使ふ物がない、」とワンバは答へた、「ぢや、俺の手は城壁を崩して砂礫と漆喰の破片とするには適してゐないんだ。」

「これは指定の時間を長引かす爲めの企みに過ぎない、」とロックスリイは言つた、「如何に彼等でも私にわざと恐しい仕返へしをさせるやうな行爲をする勇氣はあるまい。」

「我々の内に誰か城中に入り込んで敵の樣子を探つて來る事の出來る者が居ればいゝが、」黒裝束の騎士は言つた、「幸ひ彼等は懺悔僧を寄越せと言ふのだから、どうだらう、この隱者に早速敬虔な天職をやつて戴いて、我々の望む報告を持つて來て貰つては。」

「飛んでもない、そんなお勤めなんぞ！」と信心深い隱者は言つた、「お聞き下さい、のろまの騎士殿、わしは僧服を脱ぎ去ると、わしの僧務、わしの聖德、いやわしの經文さへ一緒に脱ぎ捨てるのだ。この綠衣を着ると、一人の基督敎徒の懺悔を聞くよりは、二十四の鹿を殺す方がうまいのです。」

「こりや困つた、」と黒裝束の騎士は言つた、「どうも困つた、此處には差當りこの懺悔僧といふ役を引受ける資格のある者は一人もゐまい？」

一同は互ひに顔を見合せて、默つてゐた。

「手前はかう思ひます、」とワンバは少し默つてゐた後で言つた、「馬鹿はやつぱり何處迄も馬鹿で、賢い方が尻込みなさる冒險に首を突込まにや嘘です。まあ皆さんどうぞお聞き下さい、手前はこの段々染の道化服を着る前にや、茶鼠色の僧服を着て、坊さんとして育ちましたが、その内に腦の熱病を患つて、丁度幇間になれるだけの頓智しか殘らなかつたのです。ですから、隱者樣の衣を拜借し、序でに僧職と、聖德と、それからその頭巾の中に縫ひ込んである學問もおまけに拜借すれば、手前は不幸な御境涯に居られる御主人セドリック樣初め、お仲間の方々に世間的の慰めも、靈的の慰めも、どちらもお施しする資格が備はらうかと信じます。」

「あの者にそれだけの分別があらうかな？」と、黒裝束の騎士はガースの方を向いて言つた。

「それは存じません、」とガースは答へた、「ですが、若し無いと致しますと、それは彼が初めて自分の馬鹿を利用する頓智を缺いたのでございませう。」

「それでは、その衣を着るがいゝ、」と騎士は言つた、「そしてお前の御主人に城内の皆なの樣子を知らせて貰つてくれ。彼等の人數は僅かに相違ない。不意に大膽に打入れば五分通りは入り込む事は出來よう。かういふ間も時が經つ——急いで行くがいゝ。」

「してその間に、」とロックスリイが言つた。「我々は蠅一匹も城からの消息を洩させぬ程に嚴重にこの城を取りかこまう。だから、お前さん、」とワンバに話しかけて、言葉を續けた、「あの亂暴者共にかう告げて安心させるがいゝ、どんな亂暴を捕虜の身に加へようとも、最も手嚴しい返報を己等自身の身の上に加へてやるからとな。」

「平安爾曹と共にあれ、」と、今や坊主の假裝に包まつたワンバは言つた。

そしてさう言ふと、彼は僧侶の嚴かな堂々たる身振りをして見せて、自分の使命を果すべくこの場を立ち去つた。

（二十六）

如何な悍馬も時には靜か、
いかな駄馬でも時には狂ふ。

坊さんも時には道化に變り、
道化も時には坊さんに變る。

（古　謠）

隱者の頭巾を被り、法衣を着け、同じく隱者の節目太な綱帶を腰に結んだ彼の幇間ワンバが、フロン・ド・ブーフの城門前に立つた時、番兵は彼の名と用向きとを訊き質した。

「パックス・ヲービスクム、」とワンバは答へた、「わしは聖フランシス派の貧僧ですが、唯今この城内に監禁されてゐる不幸な囚人共の爲め、愚僧の職務を果しに參つた者なのです。」

「これは大膽な坊さんだ、」と番兵は驚いて言つた、「うちの醉つぱらひの懺悔聽聞僧の外、この二十年と云ふもの、お前さんのやうな羽並の鷄（僧侶を）が時をつくつた事のない、この城へ遣つて來ようとは。」

「でもございませうが、どうぞ愚僧の事を御城主樣まで御取次をお賴み申します、」と贋法師は言つた。「必ず、歡迎なされるに違ひありません、そしてこの雄鷄は、城中に聞える程の時をつくるでございませう。」

「そいつは有難い、」と番兵は答へて、「だが、若し俺が大事の持役をほつといてお前さんの使ひをして遣つた爲め、

顔を潰すやうな事があつたら、坊主の灰色の衣が、灰色の鷲鳥の羽のついた箭を防ぐことができるかどうか、試してやるぞ。」

かう嚇して置いて、彼はこの櫓を去り、一人の聖僧が門前に立つて卽刻入城を求めてゐるといふ異常な報告を城中の廣間へ持つて行つた。所が彼が非常に驚いたことには、その僧を直ちに通せといふ主人の命令が下りたのである。そして、前々から不意打ちに備へるよう、この部屋の入口に兵卒を置いてあつたので、彼はもう躊躇する所なく、今受けた命令に從つた。ワンバは無鐵砲な自惚を持つてゐたので、それに勵まされ、この危險な役目も引受けたのであるが、レヂナール・フロン・ド・ブーフのやうな恐ろしい又實際恐れられもしてゐた人物の面前に出た時には、その無鐵砲な自惚も殆ど彼を助け支へるのに役立たなかつた、で、彼は例の「平安爾曹と共にあれ」——自分の役目を助けるものとして可なり頼みにしてゐた、この「平安爾曹と共にあれ」を持ち出したのであるが、それと同時に、以前よりもずつと多くの不安と躊躇とを感じたのである。併し、フロン・ド・ブーフは、如何なる階級の人でも、自分の面前では震へるのを見慣れてゐたので、この懺悔聽聞僧と思つた者の臆病な樣を見ても、別段怪しいとも思はなかつた。「御坊、

そなたはどなたで何處から來なすつた？」と彼は訊ねた。

「平安爾曹と共にあれ」と、幫間はもう一度繰返して言つた、「愚僧は聖フランシスの貧しい僕でございます、この曠野を旅行中、盜賊共の手に捕へられました——（聖書にも書いてある通り、）クイダム・ギアトル・インシディット・インラトロネス（ラテン語、「ある人旅行中盜人に會へりと」いふ意、新約聖書路加傳十章三十節にある）——その盜賊共が愚僧をこの城に遣はしまして、あなた樣のお裁きに依つて、死刑の宣告を受けた兩名の爲めに、愚僧の役目を勤めさせようとするのでございます。」

「あゝ左樣か、宜しい、」とフロン・ド・ブーフは答へた、「では御坊、そなたに訊くが、その盜賊共は一體何人程あるのだ？」

「殿樣、ノーメン・イリス・レギオ（ラテン語、「彼等の名は『無數』なり」——新約聖書馬可傳五章九節にあり）、彼等の名は『無數』にございます。」

「何人あるかはつきり申せ、申さぬと、これ坊主、そちの衣や綱帶に對しても容赦はせぬぞ。」

「おゝ！」と贋法師は言つた、「コル・メウム・エリユクタギット、つまり、愚僧は恐しさで心が破れさうでございました！　彼等は恐らく——半ば鄕士、半ば平民——少くも五百人はゐるかも知れぬと存じます。」

「何に！」と、折からこの部屋へ入つて來た寺侍が言つた、

「そんなに多勢の地蜂が押寄せてゐるのか？　今こそ左樣な惡戲好きの群の息の根を止めてやる時だ。」それからフロン・ド・ブーフを傍に呼んで、「貴方はあれなる僧をお見知りで居られますか。」

「彼は遠方の寺よりまゐつた旅僧、私はとんと見知り申さぬ。」

「では、あの者に口で傳言を賴む譯にも行かない、」と寺侍は答へた。「ド・ブラシイの傭兵隊へ、直ちに隊長の救助に來いと云ふ命令書を持たせてやらうではありませんか。命令書の出來る間、坊主が何にも氣取らぬよう、あのサクソンの豚共に屠殺所行きの引導を渡すといふ彼の仕事を勝手に始めさせるがよろしいでせう。」

「では、さういふ事にしよう、」とフロン・ド・ブーフは言つた。そして彼は直ちに一人の僕に命じて、ワンバをセドリックやアセルステインの監禁されてゐる部屋へ案內させた。

セドリックの短氣は今度の監禁によつて減ぜられる所か、却つて增されて來た。彼は敵を突擊するか、又は攻め圍まれた場所の崩壞口を强襲しでもする人のやうな身構へで、廣間の端から端へと歩き廻りながら、或時は獨りで絕叫したり、又或時はアセルステインに話し掛けたりした、が當のアセルステインは、その間、晝に食べた腹一杯の食物を、

如何にも落着き拂つて消化しながら、又何時まで捕虜となつてゐるのかといふやうな事に左程心を勞さず、凡そ如何なる災害もいつかは天意に依つて終る日の來るもの、今度の事件もその例に洩れなからう、と斷定して、心を大きくし、落着いて事件の成行を待つてゐた。

「平安爾曹と共にあれ、」と幫間はこの部屋へ入つて來ながら言つた、「聖ダンスタン、聖ダンニイ（フランスの聖者、三世紀にパリーで殉死す）聖デュソック（スコットランドの聖者）その他あらゆる聖の祝福、御身等の上に又御身等の周圍にあれ。」

「勝手にお入り下さい、」とセドリックはこの贋法師に答へた、「貴僧は何の積りで此處へ參られた？」

「貴方方に死の覺悟をおさせ申す積りで、」と、幫間が答へた。

「そんな事は有る筈がない！」と、セドリックは吃驚して言つた、「彼等は如何に大膽不敵の惡黨にもせよ、そんな公然な謂れない殘酷な眞似はよもや企てまい。」

「おゝ！」と幫間は言つた、「彼等の人情で彼等の行動を制止するのは、絹絲の手綱で奔馬を留めるも同然だ。さればセドリック殿、尙は又アセルスティン殿にも、如何なる罪惡をこの世で犯したか御勘考なさい、今日こそ貴方方は天國の審判所に召されて、その事を答へる事となりませうか

らな。」

「アセルステイン殿、今の言葉をお聞きなされたか、」とセドリックは言つた、「わし達は最期を見苦しくしてはならない、奴隷のやうにして生きるよりは、人間らしくして死ぬ方がましだ。」

「私は彼等の惡意中の惡意に、我慢をする覺悟が出來てゐます。食卓に就くごとく、平氣で死に就きませう。」

「では御僧、我等の懺悔を聞いて戴かう、」とセドリックは言つた。

「でも一寸お待ちなさい、セドリックをぢさん、」と幇間は持前の口調に戻つて言つた、「黄泉にお飛び込みなさる前に、暫くもつとよくお考へなさい。」

「おや、その聲には聞き覺えがある！」

「旦那樣の信賴すべき奴隷で幇間の聲ですもの、」とワンバは頭巾を後ろに脫ぎ捨てながら答へた。「旦那樣が前にこの馬鹿の忠言をお容れ遊ばしたら、こんな處にてんでお出でなさらないで濟みましたでせうに。今度はこの馬鹿の忠言をお容れ遊ばしません。さう致しますと、こんな處に長居をなさらなくとも宜しうございませう。」

「それは又どういふ譯かな？」とセドリックは訊ねた。

「ただこれだけのことでございます、」とワンバは答へた、

「この衣と綱帶とをお着けなさい、手前はこれだけしか持たないで坊さんに成りすましたのでございますから。そして旦那樣は、こつそりこの城をお拔けなさいまし、後に旦那樣の上衣と帶とを殘して置いて下されば、手前がお身代りになつてあの世に參ります。」

「身代りにお前を置いて行く！」とセドリックはワンバの申出に驚いて言つた、「さうすれば、彼奴等はお前を絞殺りぢやないか。可哀さうに。」

「そんな事をしても世間が許すならさうさせませう、」とワンバは言つた。「キットレスの子は、祖先が長老としてかけた鎖に劣らぬ重々しい鎖を首に掛けられて、縊り殺されても——旦那樣のお家柄に泥を塗るやうな事は決してないーと信じます。」

「さうか、ワンバ。ぢやあ、唯一つの事だけはお前の望みを容れることゝしよう。それは外でもない、若しわしの代りにアセルステイン卿と衣類の交換をするなら、さうしてもよいといふのだ。」

「いや、神かけて、そんな事を致す筈がございません。キットレスの子がヘリワード樣の御子息樣を救ふ爲めに苦しまなければならぬといふ事には、立派な理由がございますが、御先祖が赤の他人であつた方の爲めに死ぬなどゝ申すのは

餘り智慧のない事でございます。」

「飛んでもない奴だ、アセルステイン殿の御先祖はイングランドの王樣であつたのだぞ！」

「その方々は勝手に好きな者になつたがいゝ、」とワンバは答へた、「兎に角、手前の頸は手前の肩の上に餘り眞直ぐに立ち過ぎてゐて、あの方々の爲めに振らせるわけには行かないのでございます。で旦那樣、手前のお願ひを御自分でお容れ下さるか、それとも、この牢獄を入つて來た時と同樣、自由に立ち退かせて下さるか、どちらかにして下さいまし。」

「老木は枯して了へ。さうすれば、森全體の偉大な希望が保存されるだらう。賴み甲斐あるワンバ、アセルステイン殿をお助け申して吳れ！　それは苟もサクソンの血が流れてゐる者の義務なのだ。お前とわしは一緒に此處に殘つて、あの暴虐な敵のこの上もない怒りを最後まで忍ばう。さうしてアセルステイン殿は、自由な安全の身となられて、我等の仇を打つて度我が國民の目覺めた魂を奮ひ起たせ、我等の仇を打つて下さい。」

「さうぢやない、セドリック殿、」とアセルステインは彼の手を握り締めて言つた——一度覺醒めて考へたり、行つたりすれば、彼の所業や感情は仲々立派なもので、もはや彼の高貴な家門に適はしからぬものではなかつたのである——「さうぢやない、」彼は更に言葉を繼いだ、「私はこの奴隷が心からの親切で、その主の爲めに折角造へた脫走の機會に乘ずる位ゐなら、寧そ囚人の僅かな當がひ麵麭の外食べるものもなく、囚人に飮ますだけの水しか飮む物がなくとも、この部屋に一週間殘つてゐたいのです。」

「あなた方は賢者と申されて居りますし、手前は氣違ひじみた道化だの、馬鹿だのと言はれて居ります、」と幇間が言つた、「ですが、セドリックをぢさん、アセルステインさん、この道化の馬鹿がお兩人の爲めにこの爭論を決めて差上げませう、してもうこれ以上禮儀に拘泥する勞を省いて差上げます、ジョン・ア・ダックの外には誰も乘せようと致しません。手前はジョン・ア・ダックの牝馬みたいな者でございません。手前は手前の主人を救ひに參りました、で、若しその方が手前の申す事を聞いて下さらなければ——もう分りましたー手前は又家に歸るより外致し方がございません。心盡しの御奉公と申すものは、羽根か毬見たいに手から手へと拋る事が出來るものでございません。手前は自分の生れながらの御主人の他は何人の爲めにも死なうとは思ひません。」

「ではセドリック殿お行きなさい、」とアセルステインは言つた、「この好機をお逃しなさるな。あなたが城外に居ら

れゝば、又味方を勵まして我等を助ける事も出來よう——あなたが此處にゐたのでは我々はみんな亡びて了ひます。」

「では城外から救助する見込みでもあるのか？」とセドリックは幇間の方を見ながら言つた。

「見込み！　如何にも、」とワンバは鸚鵡返しに言つた、「まあお聞き下さいまし、旦那樣は手前の外套を羽織んなさいますと、指揮官の服で包まれる事となります。城外には唯今五百人の軍勢が居りまして、この手前も今朝はその主なる首領の一人でございました。手前の道化帽は兜であり、手前の杖（驢馬の耳をもつた面を彫り込んだ杖で、幇間のしるし）は軍配がはりでした。左樣、道化の馬鹿を悧巧の旦那樣に取換へた爲めに、どんなにみんなの爲めになるか直き分るでせう。實際、手前はあの人々が、思慮深く事を謀つたなら得られさうなものを、血氣に逸つて失ひはしないかと心配してゐるのでございます。では、旦那樣、御機嫌よう、そして可哀さうなガースやガースの犬ファングスにお慈悲を加へてやつて下さいまし。それから手前の道化帽をロザーウッドの廣間に掛けて頂きたいもので、手前が忠實な、その……道化らしく、御主人の爲めに命を投げ出したといふ記念に……。」

この最後の言葉は、冗談でもあり、眞面目でもある、二重の響きを帶びてゐた。セドリックの眼には涙が溜つた。

「お前の記念は、この地上で忠節と愛情とが榮譽とされる限り、長く保存して置くぞ！」と彼は言つた。「だが、わしも必ずローエナ姫や、アセルステイン殿や、ワンバ達を救ふ手段があると確信しなければ、お前の言ふなりに、こんな事をしやしないのだ。」

衣服の交換も今は終つた、とその時、突然セドリックの胸に或る疑ひがはたと浮んだ。

「わしは自國の言葉と、それに氣障なノルマン語を少々許りとの外、何にも知らないのだ。だのに何うして僧侶を裝ふ事が出來よう。」

「その咒ひは二言葉にございます、」とワンバが答へた、「どんなことを聞かれても、たゞ『パックス・ヴービスクム』とだけお答へなさるのです。行くにも來るにも、食べるにも飲むにも、祝福するにも呪ふにも、パックス・ヴービスクムとさへ仰しやれば萬事うまく進んで行きます。これは魔法使ひに箒の柄、手品師に咒ひ棒と云つた風に、僧侶には附きものでございます。たゞ底力のある重々しい調子で、かういふ風に——パックス・ヴービスクム！　と仰しやいまし、——さう言へば大丈夫間違ひはないのでございます——夜番にも見張にも、騎士にも、楯持ちにも、徒歩の者にも、騎馬の者にも、誰にでも、この咒文は利きます。明日、彼奴等が、本當に手前を引張り出して絞首にするか何うかは大變疑はしいのでございますが、萬一手前をさうするといふなら、その死刑執行人にこの咒文の效力を試して見ようと存じてゐます。」

「それが本當なら、直ぐ僧侶に成れる——パックス・ヴービスクム。わしは必ずこの合言葉を忘れまい。——さらばだアセルステイン殿、さやうなら、眞心に分別も湧き出るワンバよ、——わしは屹度二人を救ふ、救はれなければ戻つて來て、二人と一緒に死ぬる。わしの血管にわしの血が脈打つてゐる中は、我がサクソン王の貴い血を一滴もこぼさせはしない、いや又このセドリックは、どんな危險を冒しても、屹度主人の爲めに身命を賭した、親切な奴の頭から髮の毛一筋落させはせぬ。——さらばだ！」

「御機嫌よう、セドリック殿、」とアセルステインは言つた、「茶菓を出されたら、何にでも受けるのが僧の眞の役目だと思召されよ。」

「さやうなら、をぢさん、」とワンバもその後について言つた、「してパックス・ヴービスクムをお忘れなさいますな。」

かう勵まされて、セドリックは勇ましく冒險の首途に立つた、そして幇間が萬能だと推薦したあの咒文の力を試す機會に會つたのは、それから間もない事であつた。低い圓天井の薄暗い廊下傳ひに、城の廣間へ出ようとしてゐる所を、一人の女の姿に引留められた。

「パックス・ヴービスクム！」と魔法師は言つて、急いで通り過ぎようとすると、柔しい聲がかう答へた、「エト・ヴービス——クエゾ、ドミネ・レゼレンディッシメ、プロ・ミゼリコルディア・ヴェストラ。」（ラテン語で「そして御身も（安かれ）——いと尊き聖父よ、願はくは慈悲を垂れ給へ」といふ意味）

「わたしは少し耳が悪い、」とセドリックは立派なサクソン語で答へた、そして同時に我れとから呟いた、「あの道化の馬鹿ものめ、パックス・ヴービスクムなんて、教へやがつて！　わしは最初の一突きで投槍を失くして了つた。」

けれども、當時の僧としては肝腎のラテン語を餘り知らないのは珍らしい事ではなかつた、そしてこの事を、今セドリックに言葉を掛けた者も十分よく知つてゐたのであつた。

「和尚樣、どうぞお願ひでございますから、」とその女は僧と同じ言葉で答へた、「城内にゐる一人の負傷した捕虜に法の慰めのお詞を掛けてやつて下さいまし、そして貴僧方の聖いお役目が教へますやうな、お憐みをその方や私達にお寄せ下さいませ——どんな善根でも、さうして頂くこと程貴僧のお寺の爲めになる事は決してございますまい。」

「お娘御、」とセドリックはひどくどぎまぎして答へた、「こ

の城では暇がなくて愚僧が役目の義務を果しては居られぬのだ——愚僧は直ぐに參らねばならぬ——死ぬるか生きるか愚僧の急ぎ工合一つで決るのだから。」

「でもございませうが、和尚樣、お願ひでございます、あのひどい目に會うて命も危い方を御救助も御訓戒もなさらずにお置き去りに遊ばさぬよう。」

「惡魔よ、わしを連れて飛び去つて呉れ、そして鬼神の王や雷神の靈と一緒に地獄に置いてくれ！」と、セドリックは苛々しながら答へた、そして、恐らく彼の靈的な役目からは全然離れた同じ調子で續けて饒舌つて行く所であつたのだらうが、折も折この二人の對話は、櫓のしなび婆、アーフリードの嗄れた聲で妨げられたのである。

「小娘、折角向うのお前の牢部屋を出させて貰つた親切をいゝ事に、これはまあどうしたことだ？——こんな聖いお方に向つて猶太娘の癖に執拗い事をおねだりするから、それを逃れたさに、つい粗暴な不信心な言葉をお使ひなされたのぢやないかい？」

「猶太の娘！」とセドリックは、彼等の邪魔を脫れる爲め今の話を利用しようとして繰返した、——「これ女、愚僧を通させて呉れ！　引留めるな、引留めて、そなたの身がどうなつても知らぬぞ。愚僧は僧侶に成り立てぢや、不淨を除けたい。」

「御坊、この道を御座れ、」と醜い婆は言つた、「お前さんはこの城の樣子を御存知ないやうだから、案內者がなくては出るわけに參りません、こちらへお出で、わしはお前さんに話したい事がある、——それから、罰當りの種族の娘、お前は病人の部屋に行つて、わしの歸る迄看護しろ。わしの許しもないのに、また其處を離れでもすると、ひどい目に會はせるぞ！」

レベッカは立ち去つた。これより先、彼女は懇願に懇願を重ねた末、辛つとアーフリードを說き付けて櫓を出して貰つたのである、そしてアーフリードは負傷したアイヴンホーの枕邊で、彼女を働かせる事にしたのである。これは又レベッカ自身の本望とする所であつた。心が聰くて早くも自分達の危險な地位を察し、偶發したあらゆる安全の方法を利用するに機敏だつたレベッカは、この不信心な城中に一人の僧侶の現れた事をアーフリードから聞き知つて、そしてそれに或る望みを掛けたのである。彼女はその僧侶と思はれた者に言葉を掛けて、捕虜の爲め盡力して貰ふ積りで、その歸りを見張つてゐたのである、それがどんな不首尾に終つたかは、讀者のたつた今知られた通りである。

（二十七）

おぞましき者よ！　汝は
　悲歎と、恥と罪の行ひの外何をか語り得る？
汝の所業は證されたり——汝は汝の運命を知れり、
　されどいざ、汝の物語を、始めよ、始めよ。
　……
さあれ我は異なれる歎きを持てり、
　更に烈しき煩ひと憂ひとを。
我が惱める心を慰め給へ、
　我が苦患を忍びて聞きたまへ、
かくて、助くる友のあらずとも——
　いとせめて耳傾むくる人だにあらしめ給へ。
（クラップの「裁きの間」）

アーフリードは、嚇したり喚き立てたりして、レベッカを脫出して來た部屋へ追ひ返すと、今度は嫌がるセドリックを、とある狹い部屋に連れ込んで、その扉に用心深く錠を下ろした。それから戸棚から葡萄酒の入つた罎と二個の酒盃とを出して來て、卓子の上に置き、物を訊ねるといふよりは寧ろ極め付けると云つた調子でかう言つた、「坊さん、あんたはサクソン人だな、——さうでないなどゝは言はさないよ、」と、セドリックが容易に答へさうにないのを見て取ると、更に言葉を繼ぎ足した、「わしの鄕言葉はわしの耳に氣持よく響く、尤も高慢なノルマン人がこの棲處の一番賤しい仕事をさせてゐる、可哀さうな賤しい奴隸共の口からでゞもなきや滅多に聞かぬがな、坊さん、あんたはサクソン人だ——サクソン人で、神樣の僕だと云ふ外には自由の體の人だな——あんたの訛りはわしの耳に氣持よく聞える。」

「ぢやあ、サクソンの坊主はこの城には來ないのかな？」とセドリックは訊いた、「捨てられ、苦しめられた人達を慰めるのが、彼等の義務であつたと思ふが。」

「サクソンの坊さんは來ない——いや假令來られても、同國人の呻きを聞くよりは、自分達の征服者の食卓で酒盛騷ぎをする方を好く——と、兎に角、あの人達の事を噂には聞いてゐる——が、わしの事は何にも言へませぬ。この城では、十年間、フロン・ド・ブーフの夜毎の酒盛に加つたノルマンの生臭坊主以外、坊さんは誰一人入られなんだ、而もその生臭坊主も閻魔の廳に行つてから大分になる。——だがあんたはサクソンだ——サクソンの坊さんだな、わしは

あんたに訊きたい事がある。」

「わしはサクソン人だ。」とセドリックは答へた、「が、僧侶の名に恥ぢる者なのだ。どうか引留めずに行かせてお呉れ——誓つて又戻つて來るから、でなけりや、もつとお前さんの懺悔を聞く値打のある同宗の教父を一人寄越すから。」

「でもまあ一寸待たつしやれ、坊さんが今聞いてござるこの聲も、やがて間もなく冷たい土で覆はれるだらう、してわしはこの世にゐる間中獸のやうにして生きてゐたが、せめて土に入る時はそんなにして入りたくない。だがわしの懺悔は恐ろしい物語だ、酒でも飲まなくちや話す力も出ない。」彼女はかう言つて盃に酒を注いだ、そして恐ろしい勢ひで、がぶ〳〵飲んだ、一滴をも餘さずに飲み乾さうとするかのやうに。「これを飲むとぼうつとする、」と、飲み終つて上の方を見ながら言つた、「でも、ちつとも慰められない——坊さん、わしの懺悔を聞いて、敷石に尻餅をつきたくなかつたら、一杯御相伴さつしやれ。」セドリックはこの不吉な酒宴で彼女の爲めに乾盃するのは避けたかつたのであるが、彼女が彼に示した身振りは如何にも焦慮と絶望とを表はしてゐたので、彼は老婆の請ひを容れて、大きな酒盃でその挑みに應へた、彼女は彼の鄭重なのに心和げられたやうに、膝を進めて話し續けた。

「わしはな、坊さん、あんたの今見なさるやうな淺ましい女に生れ付いたのぢやないのだ。わしは自由で、幸福で、尊敬されて、可愛がられて、好かれもしたもんだ。そのわしも今は慘めな落ちぶれた奴隷さ——未だ美しかつた時分は此處の城主の情慾の慰み者——花の盛りが過ぎてからといふものは、彼奴等の輕蔑、嘲笑、憎惡の的なのだ。坊さん、あんたは眞逆、わしが人間を憎む、中でも、わしをこんな變り果てた身にした種族を憎むと言つても、不審がりはなさるまいね。あんたの前にゐるこの皺くちやの老耄婆が——力ない呪ひを口にして心の中の怒りを洩らしてゐなければならないこの婆が、昔はトーキルストーンの貴族セーンの娘で、わしの一顰で一千の家來が震へたもんだといふ事を忘れられようか！」

「お前さんがトーキル・ウルフガンガーの娘！」と、セドリックは思はず後へ退りながら言つた、「お前さんが——あのお前さんが——わしの父の仲好しで戰友だつた、あのサクソン貴族の娘！」

「あんたのお父さんの仲好し！」とアーフリードは鸚鵡返しに叫んだ、「では、『サクソン人』と言はれるセドリックさんがわしの前に立つてゐらつしやるのだ、ロザーウッドのヘリワード様には、たつた一人の息子しかなかつたし、その

獨り息子の名は同國人の間によく知られてゐるからな。だが若しあんたがロザーウッドのセドリックさんだとすると、この坊さんのやうな風體は一體どうしたものだな——あんたは祖國を救ふ事を絶望した餘り、寺の蔭に壓迫を逃れる隱家を求めなすつたのかい。」

「わしが誰であらうと構はぬ、不幸な御老女、さあお前さんの怖ろしい罪深い身の上話を續けなさい！——罪深いに相違ない——生き存らへてそんな事を話すといふ事にすら罪がある。」

「ある——ある、深い、暗い、呪はれてる罪がある——わしの胸に重荷のやうに掛つてる罪——この後地獄の劫火を幾ら浴びても淨める事の出來ない罪がある。——さうさな、わしの父や兄弟達の貴い純潔い血で汚された、此處の部屋の部屋で——此處のその部屋々々で、その人々を殺したものの情婦として、奴隷とも、慰み者ともなつて、生きたと云ふことは、つまり、わしが命の空氣を吸ふ度毎に、その一呼吸一呼吸を罪惡と呪ひとにする事だつた。」

「淺ましい！」とセドリックは叫んだ。「而もお前さんの父さんの友人達が——眞のサクソン魂を持つた人々が、孰れもお前さんの父さんの靈や、その勇敢な息子達の靈の爲めに弔ひの歌を唱へる時、ウルリカも殺されたものと思つて、

その祈りの中に入れることを忘れなかつたのに——又みんなが死者を悼み敬つたのに、お前さんは今迄生き存らへて我々の憎惡と呪咀とを受けるのだ——お前さんは生き存らへて一番近い、一番大事な人々を殺した惡黨の暴虐者と一緒になつたのだ——あの、貴いトーキル・ウルフガンガー家の男が生き殘つては危險だと云ふので、幼兒の血までも流した程の奴——其奴とお前さんはおめ〳〵生きて一緒になつてゐたのだ、不義の戀の絆につながれてゐたのだ！」

「本當に不義の絆で、戀の絆ではないぞよ！」と老婆は答へた。「戀はこの穢れた圓天井の部屋を訪れる位ゐなら、寧ろ地獄を訪ねるだらうよ。——いや、それだけで少くともわしは我れと我身を責める譯には行かない——フロン・ド・ブーフや彼奴の種族に對する憎しみは、彼奴と罪の交りを交してゐた時でさへ、深く〳〵わしの魂に喰入つてゐた。」

「お前さんは彼奴を憎んで、而もおめ〳〵と生きてゐた。淺ましい！　短刀はなかつたか——ナイフもなかつたか！——針もなかつたか！——そんな生活を喜んでゐたやうでは、所詮ノルマン城の祕密が墓場の祕密のやうであるといふ事が、お前さんにはよかつたのだ。わしが夢にでもトーキルの娘が生きてゐて自分の父を殺した者と馴れた交りをしてゐると知つたなら、眞のサクソン人のわしの劍が、密

夫の腕に抱かれてゐる時でさへ、お前を探し出して殺したらうものを！」

「あんたは本當にトーキルの名の爲めに、その正義の刃を揮ひなすつたぢらうか？」とウルリカは言つた（もう今はアーフリードといふ彼女の假りの名を捨てゝも宜いから、實名を擧げたのであるが）、「若しさうだつたらあんたは噂に違はぬ眞のサクソン人だ！　この呪はれた城壁内でさへ、——全くあんたのお言葉通り、こゝでは罪惡も計り知る事の出來ない祕密の中に包まれて了ふが、その此處でさへ、セドリックの名は疾うから響いてゐる、そして淺ましい落ち下つたこのわしも、未だ我々の不幸な民族の仇を討つ人が生きてゐるといふ事を考へては喜んだものだ。——わしにも亦、時節が來て讐を打つた事があつた——わしは我々の敵共の内輪爭ひを煽動して、熱狂した宴樂を刃傷騷ぎにさせてやつた——わしは彼奴等が死に瀕して呻くのを聞いた！　——セドリックさん、わしを御覽——この穢い色香失せた顏にも、未だ何處かトーキルの面影が殘つてゐないかなあ。」

「ウルリカ、そんな事を訊いて吳れるな、」とセドリックは憎惡の交つた悲しげな口調で答へた、「その面影は、惡魔が命の絕えた死體を活かした時、死人の墓から現れて來るものそつくりだ。」

「それはそれでいゝ。だが、今こそかういふ惡魔のやうな顏でも、老フロン・ド・ブーフとその子レヂナールとを不和にさせる事が出來た頃は、光の精の假面を被つてゐたものだ！　それから後の事は恐らく地獄の闇が包み隱すだらうさ、だが怨念といふものはどうしてもその闇の帳を引拂つて、死者を喚び起して聲高く喋らせたいと思ふことを、朧げにでも通じないでは措かないものだ。あの暴虐な父とその野蠻な子との間には、長いことといぶり勝ちな不和の焰が燃えてゐた——長い間わしはこつそりその有るまじい憎惡の火を焚きつけてゐた——それは或る亂れた酒宴の席で燃え上つて、わしを窘しめてゐた奴は己の食卓で己の子の手に倒れたのだ——この圓天井が隱してゐる祕密つて、先づざつとこんなものさ！——いまゝしい圓天井め、粉々に碎けつちまへ！」と言つて、彼女は天井を見上げながら、更に言ひ足した、「やい、圓天井め！　どつと落ちて、恐ろしい祕密を承知してゐる奴等を、みんな一緒に埋めて吳れろ！」

「さても罪深い哀れな女だ！」とセドリックは言つた。「で、お前さんを手籠めにした者が死んでから、お前さんの運命はどうなつたのだ。」

「それは察しておくれ、聞いておくれでない。——こゝに——こゝにわしは、年の割合よりは老けて、顏が氣味惡い程醜くなる迄住んでゐた——わしがその昔自分の命ずるが儘になつた其處で嘲られ、辱しめられて、そして昔は餘程廣く活動の出來たわしの復讐も、今は僅かに不平だら〳〵な奴婢のとるに足らぬ意地惡仕事か、それとも力のない醜婆の無駄な、氣にも留められぬ詛ひか、そんな程度に止めなくてはならないやうに成つて了つた——昔は自分も加つたその酒宴の響きやら、新しい暴虐の犧牲の叫び聲やら、呻き聲やらを、今は寂しい櫓から聞いてゐるやうな運命となつた。」

「ウルリカ、お前が實際報酬を得たその所業と同じ位ゐにお前の罪惡からもよい報を得ぬのを今も尙胸にくよ〳〵悔んでゐるらしいが、それなのに、どうしてこの法衣を纏つてゐる者に言葉を掛けようといふ氣になつたのだ？　考へても御覽、あの聖いエドワード樣（エドワード懺悔王の事、傳說によると、王は「王の病」（癩瘡の事、王の手で撫でると治るとの迷信からこの名が起つた）と云ふ病氣に手をふれて治した最初の王だと云ふことである）御自身が例へ人間の姿を假りて此處へ現はれられても、お前さんの爲めに何をなさる事が出來よう？　この懺悔王は天の神から肉體の腫物を淨める力は授かつて居られたが、靈魂の天刑病はたゞ神樣御自身のみが治療出來るのだ。」

「でも、まあ怒りつぽい嚴格な豫言者さん、わしの傍を離れずにゐておくれ、」と彼女は叫んだ、「さあ、わしの孤獨の寂しさに、どつと押寄せるかうした新しい恐ろしい思ひの末はどうなるか、話せるものなら、話しておくれ——ずつと前にした行ひが、何故新しい抗し難い恐怖となつて目の前にちらつくのだらうね？　神樣がこの世でこんな口に言へない情けない運命を授けて下すつた者には、あの世ではどんな運命を作つてゐて下さるのだ？　この頃寢ても醒めても、心に浮ぶ恐ろしい豫想を忍ぶ位ゐなら、未だ洗禮を受けなかつたわし達の先祖が信じた神々樣、ヲーデン樣（前にもあつたオーディンの神、この外後にあげた神々は皆基督以前の異敎徒の神である）や、ハーサ樣や、ザーンボック樣や——ミスタ樣や、それからスコギュラ樣に賴つた方がましだわい！」

「わしは僧侶でない、」と、セドリックは、この罪と淺ましさと絕望との悲慘な光景から、忌々しさうに目を逸らしながら、言つた、「わしは、僧侶の衣服こそ纏へ、僧侶ではないぞ。」

「坊さんでも、俗人でも、兎に角わしはあんたに會つて、この二十年間、神樣を畏れ、人間を重んずる人を始めて見た、それにあんたはわしを絕望させるのかな？」

「わしはお前さんに悔いることを命ずる、」とセドリックは

言つた。「たゞ祈禱と悔悛とに頼れ、そして神樣のお怨しに會へと祈る！　だがわしはもうこれ以上お前さんと一緒にゐるわけに行かない、又ゐたくもない。」

「でも、今暫くゐておくれ！　今わしを置いてお行きなさるな、わしの父の友達の息子さん、わしの一生を操つて來た惡魔に誘惑されて、ついお前の無情な嘲りの仇を討ちたくなつてはいけないから。サクソンのセドリックが、こんなに假裝して城内に入つた所を、フロン・ド・ブーフに見付けられても、お前の命にさし障りがないと思つてゐるのかえ？——もう彼奴の眼は鷹が餌食をねらつてゐるやうにお前の上に輝いてゐるんだよ。」

「それはさうでもいゝさ、わしの舌が心にもない事を一言も言はない中に、わしを嘴や爪で裂き殺してくれ。わしはサクソンとして死なう——言葉は眞實で、行ひは公明でなー　お前のやうなものは行つて了へッ！　わしに觸るな、わしを引留めるなッ！　——フロン・ド・ブーフ自身を見たつて、こんなにまで墮落した賤しいお前を見るよりは厭やでもない。」

「そんならさうでいゝさ、」とウルリカはもう彼を引留めようとはせずに言つた、「何處へでも勝手に行くがいゝ、自分の德の優れたのを鼻に掛けて、自分の前にゐる哀れな女が、自分の父さんの友達の娘だといふ事を、忘れるがいゝ。——行きたい處へ行きなさい——わしはな、自分の苦しみの爲めに、人間界に見捨てられるならば——わしが助けを當てにしたつてちつとも差支へない筈の人々に見捨てられるならば——わしの復讐にでも矢張りその人は助けを貸してくれまい！——誰にも助けて貰ひたくないが、誰も彼もわしがこれから思ひ切つてやつゝける行ひを聞いて耳が熱るだらうよ！——さやうなら！——お前の輕蔑は未だわしをわしの同種族に結び付けてゐるやうに見えた最後の索をも切つて了つた——わしの悲みが同種族の同情を引くかも知れないといふ考へを奪つて了つた。」

「ウルリカ、」とセドリックはこの哀訴に心和げられて、言つた、「お前さんは、そんなに多くの罪惡や、そんなに多くの艱難の中をくゞつて生きるやうに毅然として、忍び耐へて來たのか、そして、お前さんが自分の罪に目覺めるやうになつた今、後悔がお前さんに、ずつと相應しい業となつた今、始めて絶望しようと言ふのか。」

「セドリックさん、」とウルリカは答へた、「あんたは未だ人の情といふものをあまり知らないな。わしが行つたやうに行ふにも、わしが考へたやうに考へるにも、烈しい復讐の欲念、自分に力があるといふ誘らしい感じを交へた、狂はん許りの享樂慾が要るのだ、忍ぶことも出來ず又更に防ぐ力を支へることも出來ない程に、人の心情を陶醉させる幾盃かの酒が要るのだ、そんな力はもう疾つくになくなつてしまつた——年を取つては何の快樂もない、皺が寄つては人を動かす力もない、復讐さへが無力な呪ひに消えて行く。その時悔恨が、過去に對する空な後悔と、未來に對する絶望と交つて、その蝮蛇の鎌首を擡げて來るのさ！——それから、一切のその他の強い衝動が止んで了つた時、わし達は、地獄の鬼のやうになつて、悔恨は感じるかも知れないが、悔い改めることなどは決してない——だが、お前の言葉でわしの身内に新しい魂が目を覺ましたわい——お前の言はしやつた事は尤もだ、死なうと覺悟した者には出來ぬ事はない！——お前はわしに復讐の手段を教へてくれた、屹度わしはその通りにやつて見せるから。復讐の念はこれ迄外のものと一緒に、又それと競爭する情慾と一緒に、この痩せ枯れた胸に巢を喰つてゐた——今後はわしは全く復讐の塊となる、お前にさへ、ウルリカの生涯はどうであつても、その死は貴族トーキルの娘に恥ぢなかつたと言はしてみせる。この呪はれた城を包圍する一軍勢が城外にゐる、——急いで行つてあの人々の攻撃の指揮をさつしやれ、そして天守閣の東角にある櫓から赤い旗を振るのを見たら、ノルマン共の處へ烈しく押寄せさつしやれ——彼奴等はその時城内でする事が澤山あつて、外へは手が廻りかねる、お前さん方は弓で射られようと射石機で打たれようと、平氣で城壁を乘つ取られませう。——行つて下さい、お賴みぢや——お前さんはお前さんの運に任せ、わしはわしの運に任せてなあ。」

セドリックはこのやうに彼女が朧ろに告げた所のその決心を、尙ほも進んで吟味したかつたのであるが、折惡しく丁度その時フロン・ド・ブーフの嚴めしい聲でかう叫んでゐるのが聞えたのであつた、「あののらくら坊主は何處に引掛つてゐるのだ？　こんな處をうろついて、わしの家來共の間に謀叛を企んだりしようものなら、屹度、奴を殉教者にしてやるから！」

「惡黨つていふ奴はなんてまあよく物を當てることか！」とウルリカは言つた、「だがあんな者に構つてゐなさるな、——お前さんの味方の處へ出てお行きなさい——サクソンの吶喊の聲をお擧げなさい、そして彼奴等には、歌ひたけりや、勝手に己等がロ、（ロ、は初めてノルマンデイ侯に擧げられたノルマン兵がセンラックの戰に吶喊にハ、ロウ！と叫んだ）の軍歌を歌はせるがいゝ、わしは復讐にそれの後句をつけさせてみせる！」

老女はかう言ふと、潛り戸を脫けて姿を消した、そして

それと入れ代りにレヂナール・フロン・ド・ブーフがこの部屋に入つて來た。セドリックは、厭々ながら兎に角この傲慢な領主にお辭儀をした、先方はこれに返して一寸頭を下げたのみであつた。

「御坊、そなたの悔罪者は大分長い懺悔をしをつたな——まあそれもよからう、懺悔の爲納めだからな。そなたは彼等に引導を渡してくれたかな?」

「あの方々は自分達が誰の掌中に陷つたかを知つた瞬間から、萬一の事を豫期してゐた事が分りました、」とセドリックは操られるだけのフランス語で言つた。

「これはどうした事だ、御坊、そなたの言葉にはサクソン語の氣があるやうだが。」

「愚僧はバートンの聖ウィットホルドの寺で育ち申した。」

「さやうか、」と城主は言つた、「ノルマン人であつた方がそなたにもよかつたし、又わしの目的にもずつと適つたのだ、が、今は必要に迫られて使者を選んでは居られない。あのバートンの聖キットホールド寺は掠奪するだけの骨折り甲斐のある仔梟の巢だ。法衣がこのサクソン坊主に鎖帷子と同じ位ゐに、餘り保護を與へない時節がやがて來るだらう。」

「神樣が御守護下されるでございませう、」とセドリックは恐怖の爲めだらうと思つて、

「はゝあ、そなたはもう我々の兵共がそなた等の寺の厨や酒倉に入つてゐると夢想してゐるのだな。だがわしに一肌脱いでくれ、さうすると、他の者にはどんな事が起らうと、そなただけは安全な自分の殻の中にゐる蝸牛のやうに、そなたの部屋で安全に寢させておいてやる。」

「御命令を仰しやつて下さい、」とセドリックは湧き立つ胸の思ひを抑へて言つた。

「では、この廊下を通つてわしに隨いて來い、裏門から出してやるからな。」

そしてフロン・ド・ブーフはこの僧侶と許り思ひ込んだ男の前を大跨に歩みながら、果たして貰ひたいと思つた役目を次のやうによく教へ込んだ。

「御坊、そなたにも見えよう、向うに大膽にもこのトーキルストーンの城を包圍した、サクソンの豚の群がゐる——彼等に御坊がこの城砦の弱みに就いて何でもお氣に付かれた事とか、何かその外にこの城には二十四時間だけ彼等を喰ひとめて置く事が出來る備へがあるといふやうな事を聞かせてやつて貰ひたい。それからこの手紙を持つて行つて貰はう——だが一寸待つた——御坊、讀めるかな?」

「愚僧は日課經の外は皆目駄目でございます、」とセドリックは答へた、「それからその文字も存じてゐます、何しろその聖典をちやんと暗記して居りますからな、有難やマリヤ樣にキットホールド上人樣!」

「わしの目的には慥々持つて來いの使者だ。——この手紙をフィリップ・ド・マルヴォアザンの城に持參して貰ひたい。わしの處から持つて來たもので、寺侍ブリアン・ド・ボア・ギルベールが書いたものだとお言ひなさい、そしてわしからマルヴォアザンに、人馬の及ぶ限りの大急行でヨークにそれを屆けて貰ひたいと賴んでゐるといふ事もな。それから彼に、我々は一人も缺けず、胸壁の背後に、確かに、達者でゐると傳へて下さい——いや、我々の槍旗の閃きや、我々の馬の足音にさへ、何時も逃げ出す浪士共の一團を今は却つて、我々が恐れて胸壁の背後に隱れなくてはならないとは、恥づかしいわい! なんと御坊、そなたの業で何とかして、我々の友人達が部下の槍騎兵を繰り出すまで、かの惡者共が今ゐる處を動けないやうにしてくれまいか。わしの復讐は目覺めてゐる、それは滿腹する迄は眠らない隼なのだ。」

「愚僧の守護神に誓つて、」とセドリックは彼の役目に適はしい程度以上に力を籠めて言つた、「又イングランドに生れてイングランドに死んだあらゆる聖に誓つて、あなたの命令に從ひませう! 一人のサクソンだとて、若し愚僧が彼等を其處に喰ひ留める業と力とを持つてゐますれば、この城壁の前から動かせは致しません。」

「えツ! 貴僧はがらりと調子を變へられたな、まるで、サクソンの豚共を殺す魂膽でゞもあるかのやうに、簡單に大膽に言ひなされる、それとも貴僧はあの豚共に緣のある身ではないか。」

セドリックは卽座に空とぼける術を心得てゐなかつた、で、この際ワンバのもつと頓智の利く頭からの暗示があれば大變好かつたのである。が、古い諺にもある通り、必要は發明の才を磨くとやらで、彼は頭巾の蔭から、件の人々が國からも寺からも破門された浮浪人だといふ事などを何かぶつ〳〵と呟いた。

「本當に、御坊は全くの事を言はれたわい——わしはあの惡者共が、向うの鹽辛い海峽(英國海峽のこと。その海峽の南と云ふのはノルマンディを指す)の南に生れたも同然、裕福な僧から剝ぎ取る事もあるといふ事を失念してゐた。彼等に槲の樹に縛り付けられ、無理やりに供養の歌を唱へさせられながら、その間に旅囊や頭陀袋など奪ひ取られたといふのは聖アイヴスの和尚ではなかつたかな?——いや、たしか——その惡戲はわし達の騎士仲間の、ミッドルトンのガルティエが致したのだつたつけ。

だが、聖ビーズ寺の御堂から小さい盃や燭臺や大きな聖餐の盃などを奪つたのは、サクソンだつたぢやないかな？」

「彼等は不信心な人々でした、」とセドリックが答へた。

「さうぢや、して彼等は、そなた等が通夜や朝の祈りに忙しいと振れこんでゐる時に、度々の祕密な酒盛の爲めに貯へてあるおいしい葡萄酒やビールを、悉皆飲み乾して了つた！——御坊、そなたは是非とも左樣な神聖を瀆す罪の怨を報いねばならない。」

「わしは本當に是非ともその怨を報いねばならない、」と、セドリックは呟いた、「キットホールド上人こそ、わしの胸を御存じです。」

フロン・ド・ブーフは、斯くして、裏門迄案内して行つた、そして、たつた一枚の板を渡つて濠を超えて、二人は小さい外堡に着いた、其處は十分に固めた非常口から廣野と往來が出來るのである。

「ではお行きなさい、そして若し御坊がわしの使をして下さるなら、そして若し果して此處へ戻つて參られたなら、サクソンの肉がシエッフィールドの屠殺場にゐる豚の肉も同樣安つぽいものだといふ事を見せて上げよう、そして、よく聽かれよ、そなたはなか〳〵愉快な僧のやうだ——で、この攻撃の後にこゝへ參られよ、さすればそなたの寺全體をびしよ濡れにする程のマルヴォアジー酒（普通マームジイと云つて、強い甘い葡萄酒）を飲ませて進ぜよう。」

「必ず又お會ひ致しませう、」とセドリックは答へた。

「當座に何か持ち合せのものを、」と、ノルマンは言葉を續けた、そして二人が裏門で別れる時、セドリックの厭がる手に無理やりに金貨を一枚摑ませて、言ひ足した、「お忘れなさるな、萬一そなたがこの用を足せなかつた時は、頭巾も皮も引剝いでやるから。」

「そんな目に會ひましても苦しくございません、」とセドリックは裏門を出ながら、そして自由の野原へと足も輕げにつか〳〵歩みながら、答へた、「若し、今度お會ひする節、愚僧が貴方からもつといゝ物を頂戴いたすだけの御用に立ちませんでしたら。」——それから城の方を振り返りながら、金貨をくれた者の方へそれを投げ付けて、同時にかう叫んだ、「人非人奴、貴樣の金なんざあ貴樣と一緒になくなつちまへ！」

フロン・ド・ブーフはこの言葉を瞭然は聞かなかつた、が、振舞は怪しいと思つた——「射手共、」と外側の胸壁にゐる見張りの者達を呼んで、「向うに行く坊主に一矢射通してやれ！——だが待て、」と家來共が今矢を引かうとした時彼は言つた、「それは無益だ——我々には差當りもつといゝ算

段はないのだから、今のところ彼奴を信用せにやならぬ。眞逆彼奴にわしを裏切る勇氣はあるまい——極く惡く行つたところで高が犬小屋にちやんと入れてあるあのサクソンの犬共をやつゝけるだけの事だ。——うんさうだ！　おい牢番、ヂャイルズ、ロザーウッドのセドリックをわしが面前に引出せい、それから彼の仲間の、今一人の下郎もな——確かコニングスボローとか言つたな——それアセルスティンと申す奴、それとも何とか言つたつけな？　名前さへノルマン騎士の口には手數の掛る奴等だ、それにまるで、鹽豚の味が致すやうだわい。——ジョン親王も仰せられたやうに、あの味を洗ひ流す爲めに、わしにも酒樽をくれ——うん、武具部屋に置いておけ、そして彼處へ囚人を引いて行け。」

彼の命令は行はれた、そして、彼自身や彼の父の剛勇によつて得られた數多の分捕品を掛けてある、そのゴシック風の部屋に入ると、彼の眼に映つたのは大きな樫の卓子の上の一樽の酒と、四人の家來に護られたかの二人のサクソンの捕虜とであつた。フロン・ド・ブーフは先づ酒をぐつと一杯煽つて、それから捕虜に言葉を掛けた、——ワンバが帽子を眉深に被つた樣子、衣服の變化、暗い斷々の光、それから城主がセドリックの顏貌をよく知らない事、（セドリックは近邊にゐるノルマン人等を避けて、滅多に自分自身の領地外に出なかつた、）それ等の爲めに、彼は己の捕虜中最も重要な者の逃亡して了つた事を發見するに到らなかつたのである。

「イングランドの勇者達、」と、フロン・ド・ブーフは口を開いた、「トーキルストーンの御馳走はどんなかな？——でもそち等は、アンジウ家の一親王の饗宴を愚弄致したに對して、その無禮や生意氣は何に相當するか氣付いてゐるかな？　ジョン親王の過分の御饗應にそち等はいかやうに御報いしたか忘れたか。——神佛に誓つて、若しそち等がずつと多額の身代金を支拂はなければ、この窓の鐵棒からそち達の足を逆まに吊し、鳶や鴉が其方等を骸骨にする迄曝らしてやるわい！——これ申せ、サクソンの犬共——其方等の役にも立たぬ命をいくらに買はうといふのか、ロザーウッドの奴輩、さあ幾らだ？」

「一文も出さぬわい、」と憐れなワンバは答へた——「足で吊すなど、吐すが、俺の腦は、子供の帽が初めて俺の頭に載つかつてから、逆さだといふ話だ、だから俺を逆さにすりや恐らく腦が亦舊に戻るかも知れぬわい。」

「これはどうぢやー」と、フロン・ド・ブーフは言つた、「何者を此處へ連れて參つたのだ？」

そして彼は手の甲でセドリックの帽子を幇間の頭から叩

き落した、そして彼の襟を掻捜くと、隠し切れぬ奴隷の印、頸に巻いた銀の喉當が現れた。

「ヂャイルズ――クレメント――えい、下郎共奴！」と、烈火のやうに怒つたノルマンは喚き立てた、「貴様達は何者を此處へ連れて參つたのだ？」

「それは私が存じてゐる、」と、丁度その時この部屋へ入つて來たド・ブラシイが言つた。「此奴はセドリックの下郎で、先日上席爭ひで、ヨークのアイザックとあの勇ましい小競合をした奴だ。」

「わしがこれ等兩人の爲めに極りをつけよう、」とフロン・ド・ブーフは言つた、「若し此奴の主人及びこのコニングスボローの豚が、自分等の命乞ひにたんと金を出すのをいやがれば、わしは二人共同じ絞首臺に上せて絞めつけてやる。セドリック等の財産は彼等が引渡し得るもの〻中で最も些細のものだ、彼等は亦、この城を取圍んでゐる烏合の衆を一緒に連れ去り、彼等の我が物顔の特權の引渡しに、調印し、そして農奴及び家來として我々の配下にならなくてはならない、まさに始まらうとする新時代に於て、若し我々が彼等の鼻の息をその儘にして置けば、彼奴等は餘りに幸福過ぎるといふものだ。――行け、」と彼は二人の家來に向つて言つた、「本物のセドリックをこゝへ連れて來い、今度だけは貴様達の過ちを許してやる、馬鹿者の幇間をサクソンの郷士と取違へたゞけの事だからな。」

「ふゝん、だが、」とワンバは言つた、「殿様は我々の間には郷士よりも馬鹿の幇間の方が多くゐる事がお分りになられませう。」

「この惡者は何を吐してゐるのだ？」とフロン・ド・ブーフは自分の從者の方を見て言つた、その從者は躊躇ひながら忌々しげに、若し目の當りにゐるこの男がセドリックでなければ、彼はとうなつたものか知らないといふ彼等の考へを吃り〳〵言つた。

「畜生！」とド・ブラシイは叫んだ、「彼奴は坊主の法衣を着て逃亡したに違ひないぞ！」

「畜生！」とフロン・ド・ブーフもこの聲に應じて言つた。「では、わしが裏門に案内して、わしのこの手で放して遣つたのがロザーウッドの豚奴であつたか！ ――して貴様は、」とワンバの方を向いて言つた、「貴様の愚かさは貴様よりももつとひどい馬鹿者の智慧を出し抜くことが出來た――わしは貴様に僧侶の位を授けてやる――うぬが爲めにうぬが腦天を剃つてやらう！ ――さあ、者共に此奴の頭から腦天を裂き出させてやらう、それから胸壁から此奴を眞逆様に投げ落させてやらう――貴様の商賣はおどける事だ、どうぢや今はおどけられないかな？」

「騎士様、貴方は手前をお言葉よりもよく處分して下さいます、」と哀れなワンバは泣き聲で言つた、彼の道化の癖は、死が目前に迫つてゐる時にさへ、決して失せはしなかつた。「若し唯今仰せになられた赤帽子を手前に下さいますれば、手前をたゞの坊さんから大僧正に昇進させて下さるわけでございます。」

「可哀さうに此奴は、」とド・ブラシイは言つた、「自分の天職で死ぬ決心をしてゐる。――フロン・ド・ブーフ殿、此奴を殺してはなりません。此奴を私にお讓り下さい、私の傭兵團の玩具に致すから。――曲者、どうぢや？ 勇氣を出して、わしと一緒に戰ひに行くか？」

「さやう、御主人の許しがございますればお供致します、」とワンバは言つた、「何故つて、御覽下さいませ、御主人の許しが出なくちや（と、頸の喉當に觸りながら）此奴を外すわけに參りません。」

「おゝ、ノルマンの鋸は直ぐにサクソンの喉當を斷ち切つてしまはうぞ、」とド・ブラシイが言つた。

「はい、騎士様。」とワンバは言つた。「して其處からかういふ諺が出て來ます――

ノルマンの鋸はイングランドの榊にあてられ、
イングランドの頸にはノルマンの轡
ノルマンの匙はイングランドの皿に、
そしてイングランドはノルマンの思ひの儘に
治められる、
イングランドの幸福な世はイングランドがこの四つを
免れる迄
二度とは決して戻つて來まい。」

「ド・ブラシイ殿、」とフロン・ド・ブーフが言つた、「貴方は破滅が大口を開けて我々を待つてゐる最中に、そんな處に立つて馬鹿者のたはごとを傾聽してゐられるとは結構な事だ！ 貴方は我々が出し抜かれてゐる事がお分りにならないのか、我々の目論んだ城外の味方と通ずるといふ手段は、貴方が愚かにも、兄弟附合ひをしようとするその染め分け着の紳士（ワンバに）に裏をかゝれたのだといふ事がお分りにならないのか。我々は即刻烈しく襲はれると云ふ事以外にどんな事が期待せられるのか。」

「では胸壁に參らう、」とド・ブラシイは答へた、「一體貴方は何時私が戰爭の思想を形に現はす彫刻師である事を御覽なすつた、向うにゐる寺侍を呼び寄せて、寺侍團の爲めに戰つた半分許りでも宜しい、一生懸命に戰つて貰はう――

貴方は貴方の巨きな軀を防壁となさい――私には私流に貧弱な努力をおさせ下さい、すればな、かのサクソンの浪士共がトーキルストーン城に登るのは、雲に登らうとするのと同然だ、それとも、貴方がかの山賊共と談判なさるお氣なら、何故、酒罎の事許り氣に掛けてゐるらしい、この郷士に調停をお賴みなさらぬ？――これ、サクソン、」とアセルステインに呼び掛けて、盃を渡しながら、語を續けた、「この貴い酒で喉を濕げ、そして元氣を奮ひ起して、そなたの身の自由の爲めにどうするつもりか言ふがいゝ。」

「どんな貧弱な男でも、」とアセルステインは答へた、「これを與へられるとどんな剛毅な男にでもならう。――私を仲間の者達と一緒に放免してくれ、一千マークの身代金を拂はう。」

「でその上に、神の平和、王の平和に叛いて、この城の周りを取り圍んでゐる、あの人間の屑共の退却を我々に保證するか、」とフロン・ド・ブーフが言つた。

「私の及ぶ限り、彼等を引上げさせよう、それにセドリック殿も力を盡して私に助力して下さる事は確かである。」

「そんなら我々も同意だ、」と、フロン・ド・ブーフは言つた――「一千マークの支拂で、そなたや彼等は自由放免となり、又兩方共兵を退いて平和となる。これサクソン、これは些細な身代金だ、そなたはそなた達の身代りにこれ位の金しか受取らない我々の穩當さを感謝するがいゝ。だがいいか、この放免は猶太人アイザックの身に迄は及ばないぞ。」

「して又猶太人アイザックの娘迄にも及ばぬのだ、」と今彼等と一緒になつた寺侍が言つた。

「この二人は、孰れもこのサクソンの仲間には入つてゐないのだ、」とフロン・ド・ブーフは駄目を押した。

「若し私の仲間が、そなた等の勝手に言ふ通り彼の不信者共と交際をしてゐたなら、私は基督教徒とは名乘られぬわい、」とアセルステインは答へた。

「して又今の身代金はローエナ姫のを含んではゐない、」とド・ブラシイが言つた。「私は美しい獲物を、威かされた爲めに又にも血塗らず、むざ〳〵手放したとは決して言はれたくないのだ。」

「して又、」とフロン・ド・ブーフは言つた、「我々の談判はこの憐れな幇間には關係してゐない、此奴は、冗談を眞面目に變へる凡ゆる惡者共への見せしめに、私の手許に留めて置く。」

「ローエナ姫は、」とアセルステインは、ひどく眞面目な顏をして言つた、「私の許嫁なのだ。私は姫を手放す事を承知する位ゐなら寧そ野馬に曳きずられよう、奴隷のウンバは

今日セドリック殿の命を助けてくれた――彼の髮の毛一本でも損はれる位ゐなら寧そ私の髮を失くする。」

「お前の許嫁だと？――ローエナ姫がお前如き下郎の許嫁だと？」とド・ブラシイは呶鳴つた、「こりやサクソン、お前はお前等の七王國時代がまた戻つて來ると夢みてゐるのだな。よく聞け、アンジウ家の親王方は貴樣のやうな血統の者等にあのお家の被後見者（ローエナの事）を授けはしないのだ。」

「高慢なノルマン私の血統は乞食同然のフランス人（ド・ブラシイ及其部下の傭兵團を指す）よりも生粹で古い源から出てゐるのだ、彼奴等の生計はその詰らない旗の下に集つた泥棒共の血を賣つて漸く立てゝゐるのぢやないか。王者、しかも、戰爭には强く會議には賢明に在したその王者こそ私の祖先だつた。貴樣等の郎黨の數より遙に多くの者共を、每日々々、その廣間で饗應したものだ。その臣下の名は吟遊樂人に歌はれ、そして彼等の守る掟は賢者の集りで記錄され、彼等の骨は聖の祈禱のうちに埋葬され、その塚の上にはお寺が建立されたものだ。」

「ド・ブラシイ殿、やられましたな、」とフロン・ド・ブーフは、仲間の者が受けた手痛い竹篦返しにひどく興がつて、言つた、「このサクソンは、見事に貴方に、一本くらはした。」

「捕虜としては全く見事にな、」とド・ブラシイはさりげなく言つた、「まあ考へて見ろ、手を縛られてゐる者は、せめて舌だけでも自由に使はねばなるまい。――だがそなたはさうべら〳〵答へても、」とアセルステインに向つて、「ローエナ姫の自由を贏ち得る譯には行かぬぞ。」

これに對して、どんなに面白からうと、どんな題目だらうと、何時も喋るよりも長い間既に喋つたアセルステインは、更に答へなかつた。この會話は一人の僕がやつて來たので妨げられた。而してその僕は一人の僧が裏門の所で入城を乞うてゐると告げた。

「一體全體今度は本物の坊主か、それとも又別の贋物か、」と、フロン・ド・ブーフは言つた、「奴隷共、その者を吟味しろ――もしそち達が二度目の騙りにうまくしてやられたら、そち達の眼玉をくり拔いて、燃える石炭を眼窩へ突込んでやるからさう思へ。」

「殿樣、若しこれが本當の坊さんでなければや、手前はどんなお怒りを受けようと構ひません、」とヂャイルズは言つた、「楯持のジョセリンがその者をようく存じてゐまして、ジョルヴォール僧正に仕へる僧、アンブローズであると保證致すでございませう。」

「お入れ致せ、」とフロン・ド・ブーフは言つた、「十中の八

九、彼の快活な主人より音信を齎らして參つたものに相違なからう。僧侶共が、斯く恣にこの國中を横行してゐるのは、確かに惡魔が安息日を守つて、彼等が勤めを解かれたのだと見える。この捕虜共を連れて行け、そしてサクソン、今そなたの聞いた事を篤と考へて見るがいゝ。」

「私は同じ幽閉でも、」とアセルスタインは言つた、「私の身分相應に、又身代金談判中の者に相當するやうに、食事と寢床とに適當の注意を拂つて、それに應はしい禮を盡して戴きたい。その上、そなた等の中で我こそと思ふ者は私の自由をこんなに侵害した事に對し身を以て私に應答すべきだと思ふ。この挑戰は既に給仕頭からそなた等に傳達された筈だ、そなた等はそれを受けてゐる以上、義理にも應じなくてはなるまい——さあ私の手袋（決闘を挑む印、相手が手袋を取り上げると挑戰に應ずるのである）は此處に置くぞ。」

「わしは自分の捕虜の挑戰は應じない、」と、フロン・ド・ブーフは言つた、「そして又、モーリス・ド・ブラシイ殿、貴方もなさるまい。——ヂャイルズ、」と更に語を繼いだ、「その鄉士の手袋を向うの枝の出た叉角の尖に掛けて置け、彼が放免せられる迄さうして置くがいゝ。その時になつてもまだ小癪にも決闘を申込む勇氣があるか、乃至は私に不法の捕虜となつたなどゝ、斷言する氣があれば、一騎打ちにでも家來共を引連れてゞも、又は徒歩でも馬上でもこれ迄一度も敵に試合を拒んだ事のないこの私に彼は話すだらう！」

そこで、サクソンの捕虜は連れ去られた、とそれと引かへに家來達は恐ろしく狼狽してゐるらしい僧アンブローズを案内して來た。

「これこそ本物のデウス・ヴービスクム」（ラテン語で「神汝を護りたまへかし」の意であるが此處では單に「僧侶」の意）とワンバはその僧と通りすがりに言つた、「外の者はみんな贋物に過ぎなかつた。」

「おゝ聖母様！」と、その僧は其處に集つてゐる騎士達に聲を掛けた、「愚僧はとう〳〵安全の身となり、基督教徒に保護されるやうになりました。」

「そなたの身は安全だ、」とド・ブラシイは答へた、「して基督教と云へば、此處には猶太人を非常に憎む強い領主レヂナール・フロン・ド・ブーフ殿も居られるし、サラセン人を殺すのが商賣の、立派な寺侍、ブリアン・ド・ボア・ギルベール殿も居られるし、若しかういふのが基督教の立派な印でなけりや、その外にはこれほどこのお二人が立派な基督教徒であるといふ印になるものを存じません。」

「あなた方は我々の教父、ジョルヴォールの僧正エイマ様の友達であり、同盟者でございます、」と、僧はド・ブラシイの答への調子を少しも氣に掛けずに言つた、「あなた方は騎士

の誓約から申しても、聖い仁愛から申しても、僧正をお助けしないでは居られますまい、何故と仰しやればあの貴い聖オーガスチンが、その著『神都論』中で申した事に——。」

「惡魔が言つた事に、だらう！」とフロン・ド・ブーフは遮つた、「といふよりも寧ろ、御身が言つた事にか？　御坊。わし達は教父樣達から聖書の句など聞くひまはないのだ。」

「マリア樣！」とアンブローズは突然叫んだ、「この罰當りの俗人達はなんといふ怒りつぽい事だらう！——だが勇敢な騎士樣方、まあお聞き下さいまし、或る殺人鬼共が、神樣を畏れることも、教會を尊ぶことも投げ捨てゝ、聖い法王の敎書も顧みず、又シペキス・スワーデンテ・ディアボロー（ラテン語、——「若し」何人でも惡魔に說伏せられて」の意、尚、此後に「僧侶に暴行を加へるならば」と云ふ意味の事があるのである）、——」

「御坊、」と寺侍は言つた、「もうみんな分つた、いや大抵推量致した——さあ明らさまに言ふがいゝ、御坊の主の僧正は捕虜になつたのか、して誰にだ？」

「確かに僧正樣は惡魔共の手に捕はれてゐます、この森を荒し廻つてゐる者共の手に、『わが受膏者（頭に油を注いで、聖列に入れられた者キリストも其の一例）たちにふるゝなかれ、わが豫言者たちをそこなふなかれ、』（舊約聖書、「詩篇」百五篇十五節）といふ御聖文を汚す者共の手に。」

「方々、こゝに又我々の劍を用ゐる新しい理由が出來ましたぞ、」とフロン・ド・ブーフは仲間の者を振り返りながら言つた、「さうして、我々の處に何の援助の軍勢も着かないのに、却つて、ジョルヴォールの僧正から我々の助けを求めてゐるではありませんか。まさかの時にはこれ等のやくら坊主共から隨分助けられるのですからな！　だが仰しやい御坊、きつぱり仰しやい、そなたの御主人は我々に何を望まれるのだな？」

「恐れながら、」とアンブローズは言つた、「無法の者共が愚僧の既に引用致しました御聖文に叛いて、私の事へまつる僧正樣に手を下しまして、惡魔共が僧正樣の旅嚢や頭陀袋を剝ぎ、精錬した純金の二百マークを奪ひ取つた上、而もその外に多額の金子を要求して、それを出さぬ中は僧正樣を彼等異敎の手から離さうと致しません。でございますから、僧正樣には、自分の親友としまして貴方樣方に、彼等の要求する身代金をお拂ひ下さるなり、武力に訴へるなりして、そこは御適宜に、自分をお救ひ下さいますようにと御願ひになるのでございます。」

「あの僧正奴、鬼に攫はれて了へ！」とフロン・ド・ブーフが言つた、「彼奴は朝酒をしたゝか飲つゝけたと見える。いつお前の主人は、ノルマンの領主が、自分の十倍も重い金袋を持つてゐる坊主を救ふ爲めに、自分の財布の口を開けたといふ話を聞いたのだ——そして我々は此處で、今我々

の人數の十倍もの敵に取卷かれて、襲撃を今か〳〵とはらはらして待つてゐる場合だのに、彼奴を自由の身にする爲めに、わし等はいかに勇者だとて、それで何をする事が出來るのだ？」

「して、さうお急ぎ遊ばさずに、愚僧に一寸喋る暇をお與へ下さい、それは愚僧が今お話し申上げようと思つてゐた事なのでございますが、情けない事に、愚僧は年を取つてゐますので、かう云ふ忌はしい攻合ひを見ると、老人の頭は直き狂つて了ふのでございます。けれども、彼等が野營して、土堤を築いてこの城に對抗するのは確實でございます。」

「胸壁へ參らう！」とド・ブラシイが叫んだ、「そしてあの惡者共が、城外で何をしてゐるか見屆けようぢやないか。」かう言ひながら、彼は張出櫓に通ずる格子窓を開けるや否や、そこから部屋の人々にかう叫んだ——「全く！　この老僧こそ本當の消息を齎らしたのだ！——彼奴等は小楯や大楯を持出してゐる、そして射手共は森のはづれに霰の降る前の黒雲のやうに群つてゐる。」

レヂナール・フロン・ド・ブーフも赤野原を覗いて見た、そして直ちに腰の喇叭を引摑んで、一吹き長く高く吹いてから、家來共に城壁の上の持場々々につくやうに命令した。

「ド・ブラシイ殿、壁の一番低い東側にお氣を付けなさい——ボア・ギルベール殿、貴方は御職掌柄どう攻撃し、どう防禦すべきか、よく御存じの筈だ、西側に御目を配られよ——私は外堡を受持つことにしよう。だが各々方、一方だけに主力を傾けるのは考へものですぞ、我々は今日は凡ゆる方面に活躍しなくてはならない、攻撃の最も烈しい場所は何處にでも居合はす者達が早速加勢したり、救助したりするやうに、出來るだけ兵力を集中しなければならない、こつちの人數は少ない、だが敏活と勇氣とはこの不足を補ふ事が出來よう、高が土百姓相手の戰だもの。」

「ではございますが、騎士樣方、」と敎父アンブローズは、防禦の用意のどさくさ騒ぎの最中に叫んだ、「どなた樣もジョルヴォールのエイマ僧正の御傳言をお聽き下さらないのでございませうか。——どうぞお願ひだ、愚僧の申す事をお聞き下さいまし、レヂナール樣！」

「お前の願ひは天に行つて喋るがいゝ、」と猛きノルマンは言つた、「地上では、我々はそんな事に耳を傾ける暇がないのだ。——おい！　それ、アンセルム！　ぐら〳〵煮え返る瀝青や油をあの不敵な逆賊共の頭に注ぐ用意が出來たかどうか見て來い——弩組に矢が不足してゐないか氣を付けろ。——老牛の頭のついたわしの旗を押立てい——照者共は今日誰を相手にしなくてはならないか、直ぐ分らう！」

「ではございませうが、殿樣、」と例の老僧は、尙ほも注意を牽かんものと、撓まず言ひ續けた、「愚僧の服從の誓約をお考へ下さいまし、そして愚僧に僧正樣の使ひの役目を果させて下さいまし。」

「このよく喋る老耄奴を連れて行け、」とフロン・ド・ブーフが言つた、「禮拜堂に押籠めて、この騒動の濟むまで、珠數をつまぐらせて置け。聖母讃美の祈禱や、主の祈りを聞くのは、トーキルストーンの御堂に鎭座遊ばす尊者共には珍らしい事だらう、どうせ石でこさへたものぢやもの、今迄こんなに尊ばれた事はなからう。」

「御尊像に不敬の言をお吐き召さるな、レヂナール殿、」とド・ブラシイはたしなめた、「我々も今日は、向うの烏合の衆が解散しない中は、この尊者方のお助けも要らう。」

「わしは彼等から少しも援助を期待しない、」とフロン・ド・ブーフは答へた、「胸壁から彼等（尊者共の像を意味す）を惡者共の頭上に拋り付けると云ふのならば別だが。一隊のさうだ全部を倒すに足る程のクリストファー尊者が、あちらに軍々しさうに歩いてゐた。」

そのクリストファー尊者と綽名された寺侍は、かれこれする間、殘虐なフロン・ド・ブーフや彼の部下の激し易い仲間の者よりも寧ろ氣を配つて、攻め手の行動を觀察してゐた。

「本當に、」と彼は言つた、「彼の者達は、どんなに訓練を受けても、かうまであらうとは思はなかつた程に規律正しく進む。各々方は如何に巧みに彼等が樹とか叢とかをみんな利用して身をかばひ、我々の弩矢を、まともに受けるのを避けてゐるか御覽になつたか。彼等の間には軍旗も槍旗も見付からない、私は胸の金鎖を賭けて言ふが、確かに彼等は、誰か戰爭の實際に通じた騎士か貴族かに指揮されてゐる。」

「うむ、見える〳〵、」とド・ブラシイは言つた、「騎士の飾毛が搖れてゐる、甲冑がぴか〳〵輝いてゐる。あの向うの黒の甲冑を着た丈の高い男を御覽なさい、續く烏合の衆を指揮するに忙はしい、——確かに、彼こそアシュビイの試合で、フロン・ド・ブーフ殿、貴方を倒した、我々が『黒いのろま』と呼びました當人だと思ふが。」

「彼奴がわしの怨みを晴らさせに此處へ參るとは、愈々以て好都合だ、」とフロン・ド・ブーフは言つた。「彼奴は折角自分の物と極まつた試合の褒美を、留まつて爭はうともしないなど、少しく卑怯な奴に相違ない。わしはもう少しで、世の騎士や貴族がその敵を探すやうな場所で彼を探さうとして無駄をする所だつた、その彼が向うの惡徒の鄕士

共の間に姿を見せるとは實に嬉しい事だ。」

敵は今にも攻撃を始める形勢にあつたので、皆押し默つて、誰もこれ以上口を利く者がなかつた。騎士は夫々自分の持場に歸つた、そして彼等の集め得た少人數の家來、而も數の上では城壁の全區域を護るに不適當であるほどの少人數の家來を率ゐて、今にも來さうな攻撃を落着き拂つて待つてゐた。

（二十八）

この彷徨へる種族は、他の人の世と斷たれて、
　而も世の祕術に精通するを誇る。
彼等が往來する海、森、荒野は
　己れの祕めたる寶を彼等が知れるを見、
顧みられぬ草、又花は、
　彼等に摘まるゝ時夢にだに見ぬ力を顯す。
（「猶太人」）

讀者諸君がこの重大な物語の殘りを了解せられる上にどうしても必要な或る事件をお知らせする爲めに、話は是非數頁の間逆戻りしなくてはならない。諸君の御聰明さはかういふ事を實際たやすく豫想されたかも知れない、卽ちアイヴンホーが卒倒して、全世界に見棄てられたやうに見えた時、レベッカは父に懇願して、やつとその同意を得るや、この雄々しい若武者を試合場から、當時この猶太人がアシュビーの郊外で當分假りの宿としてゐた家迄運んで行つたのである。

アイザックは根が親切な、恩に感する男であつたから、一體なら外のどんな場合にも、この程度に彼を說き伏せる事はさう難かしい事ではなかつたのだ。が、彼も亦日頃迫害されてゐる同族人の偏見と、疑ひ易い小心とを持つてゐたので、彼を說服するには、先づ此の偏見と小心とから取り掛らねばならなかつた。

「おゝ神樣！」と彼は叫んだ、「あれは立派な靑年だ、あの靑年の金目な刺繡をした皮ジャケツやら、高價な甲冑やらからだら〳〵血が垂れるのを見ると、まるでわしの心臟から血の出るやうな思ひがする——だがあの靑年をわしの家に運ぶ事は！　娘、お前はよつく考へて見たのかい？　あの方は基督敎徒だ、我々の掟によると、我々は商賣上の利益關係以外に異邦人と交涉してはなるまいて。」

「さう云ふ風に仰しやるものぢやございません、お父樣、」とレベッカは言つた、「私達は成程宴會や遊山などに、基督敎徒と交つてはなりますまい、けれど怪我や災難の時には、異邦人も猶太人の兄弟になりますわ。」

「わしはヤコブ・ベン・チュデラ先生（十二世紀の有名な猶太の旅行家チュデラのベンヂャミンの事であらう）がそれに就いてどういふ意見を持つてゐられるか知りたい、」とアイザックは答へた——「が兎に角、あの立派な靑年はこの儘血を流させて死なしてはならない。セスとルーベンに言ひつけて、アシュビーまで運ばせるがいゝ。」

「いえ、あれ達の手であの方を私の吊臺にお乘せ申しませう、」とレベッカは言つた、「そして私は馬で歸る事に致します。」

「そんな事をすりやイシュマエルやエドム（パレスタインの南、猶太人の敵の住んでゐる地方）の犬共の目にお前を曝さにやならぬから、」とアイザックは騎士や從者の群の方に疑ひ深い眼を投げながら囁いた。が、レベッカは、最早目分の慈悲深い目的を實行するのに忙しくて、彼の言つた言葉などは耳に入らなかつた、でアイザックは遂に彼女の外套の袖を摑み、せか〳〵した聲で、また叫んだ——「飛んでもない事！——若しあの靑年が死んだらどうする！——若しわし達が預つてゐるうちに死にでもしたら、わし達は彼を殺したと思はれはしないか、そして群集にずた〳〵に引裂かれやしないか。」

「お父樣、あの方は死には致しません、」とレベッカは、アイザックの摑んでゐた袖をそつと振切るやうにして、言つた——「私達が見棄てさへしなければ、あの方は死にはいたしますまい。そして若しあの方に若しものことでもあつたなら、神樣や人間に私達が本當に責任を負ふべきでございますわ。」

「いや、」と、アイザックは摑んでゐる手を緩めながら言つた、「あの靑年の滴る血を見るのは、わしの財布からそれだけの金貨がこぼれでもするやうに、悲しいのだ。そして今は天國にござるビザンチウムのマナッセス先生のお娘ミリアム樣のお敎へで、お前を醫術に巧みにして戴いた事もよく知つてゐる、又お前が藥草の妙法や、仙丹の効力を辨へてゐる事もよく知つてゐる。では、お前の心の行くやうになさい——お前はいゝ娘だ、天禀だ、王冠だ、そしてわしに、わしの家に、又わしの先祖の人々にとつて喜びの歌だ。」

けれども、アイザックの杞憂は杞憂に終らなかつた、彼の娘は寬大な、恩を知る慈悲心の爲めに、却つてアシュビイに歸る途中、ブリアン・ド・ボア・ギルベールに穢らはしい凝視を受けることになつた。卽ち、寺侍は途中二回迄彼等の傍を往つたり來たりして、その都度この美しい猶太の娘に大膽な熱い秋波を送るのであつた、そして我々は既に前章

に於て見たやうに、彼女の美が起した嘆賞の結果は、偶々彼女があの放肆な淫樂の徒の手に陷つた時に現はれたのである。

レベッカは時を移さず患者を彼等の假りの宿に移させて、早速手づから彼の傷を驗べて繃帶してやつた。傳奇小說や浪漫的な小唄などを讀まれた最も若い方々でも、この所謂暗黑時代の頃には、女性が外科醫の祕術を敎はる事の如何に數多かつたか、又雄々しい騎士がその身の傷を彼女の治療に委せ、そして彼女の明眸が、その手篤い看護にもまして尙一層深く彼の胸に沁み入るといふ事の如何に數多かつたか、必ずや思ひ出されるに相違ない。

所が猶太人には、男でも女でも、醫術を各部に亙つて心得、且つ行ふ者が多く、當時の帝王や有力な城主さへ負傷したとか、病氣に罹つたとかした時には、よくこの卑しんだ種族の誰か經驗を積んだ賢者の醫療に身を任せるのであつた。猶太の普通の醫者の助けもそれに劣らず熱心に求められた。尤も、猶太の夫子は祕學、とりわけイスラエルの賢人達の研究にその名と起原とを持つてゐた神祕の術（猶太人の神祕魔法の祕術、カバラとは猶太語で「傳統的學問」と云ふ意である）に、深く通じてゐるといふ一般的の考が、基督敎徒の間に行き亙つてゐたからでもあるが。そして又夫子達は超自然的技術にもさうした熟達を持つてゐた。がそれは彼等の民族が受けた憎惡を少しも增さないばかりか、（實際何の爲めに憎惡を增す必要があつたらう、そんな筈はないのである）、却つてその惡意害心を含む輕蔑の念を減じたのである。猶太人の魔法使は猶太人の高利貸と等しい憎惡の對象であつたかも知れぬが、然し決して同等に賤しみ輕んぜられる筈はなかつた。それに又彼等が行つたと言はれる驚くべき治療を考へて見ると、猶太人が彼等獨特の或る醫術の祕法を持つてゐたといふ事もまた頷かれるのである。そして彼等はそれを彼等の境遇から生ずる排他的な精神から、自分達の周圍にゐる基督敎徒には知らさないやうに、多大の注意を拂つてゐた。

美しいレベッカは幼い時から注意して育てられ、當時猶太人の子女の受くべき凡ゆる知識を授けられたが、彼女の敏い偉きい智力は、よくそれを學び修めて、それを整頓し、それを擴大して、彼女の年齡としても、女性としても、更に彼女の生活する時代としても、不相應な程の進步を見せたのである。彼女の醫藥及び醫術の知識は、彼等仲間の最も有名な或る醫師の娘で年寄つた猶太女の許で修得されたのである、その女はレベッカを我子のやうに愛して、自分も同じ娘の時代に、同じ可愛い娘として、その賢明な父から遺された祕法を、彼女に傳へたと信じられてゐた。彼女、ミリアムの運命は、實に當時の狂信の犧牲と成らねばならなかつたが、（彼女は魔法を使ふ者として暗殺された）併し彼女の祕法は彼女の敏い弟子であるレベッカの手に長く生き殘つた。

斯く美にも智にも惠まれたレベッカは、同族の人々に廣く尊敬され、嘆美された。彼等は殆ど彼女を聖書中に出て來るあの天賦の才ある女達の一人と見做さん許りであつた。彼女の父は、彼女の才能に對する尊敬心から、又それにいつかしら彼の限りない愛情も交つて、同族の習慣では普通婦女子に許されない程の自由を彼女に許し、又たつた今述べたやうに、屢々自分の意見はさて措いても、彼女の意見を採つて行動するのであつた。

アイヴンホーはアイザックの家に着いた時、試合場で奮戰中の多量の出血の爲め、今尙ほ人事不省の狀態にあつた。レベッカは傷を調べた、そしてそこに彼女の醫術に照らして二三の療法を施してから、父に向ひ、非常な出血の爲め少々熱の心配はあるが、若し幸ひにその熱を避けることが出來たなら、そして若しミリアムの塗藥がその効目を失はなかつたなら、この客は生命に關はるやうな心配はなく、明日皆と一緒に無事にヨーク迄行く事も出來ようと告げた。アイザックはこの言葉を聞いて、少し呆然としたやうであつた。彼の慈悲心もアシュビイで扈をつけたかつたのである。

でなければ、まあ精々この傷ついた基督敎徒を自分が今滯在してゐる家に、家主の猶太人には一切の費用を自分がちやんと支拂ふからと請合つて置いて、後に殘して養生させたかつたのである。けれどもこれに對して、レベッカは色々な理由を擧げて反對した、此處にはその中アイザックが取分け重要視した二つだけを述べる事にしよう。その一つは、あの大事な祕法が、人に發見される虞れがあるから、どんな事があつても、この貴重な塗藥の瓶を假令同族でも他の醫師の手には渡したくないといふ事と、今一つは、この傷ついた騎士、アイヴンホーのキルフレッドはリチャード獅子心王の無比の寵臣であるから、他日この王が歸國された場合、王の弟ジョン親王にその叛逆の志を遂げるに必要な金銀を融通したアイザックは、リチャードの寵愛を受けてゐる有力な保護者を大に必要とするといふ事とであつた。

「お前の言ふのは至極尤もな事だ、」とアイザックはこの手強い論に打負かされて言つた——「尊いミリアムの祕法を洩らしたら、それこそ天の神樣の御機嫌を損ふだらう、何故と云ふに、天のお授け下さる賜物は、それが金貨何百タレント（一タレントは昔、希臘や猶太の目方及貨幣の名で、時と處とに依つて異つてゐたが、シチッカ・タレントは約二千四百五十圓許りである）銀貨何千シェケル（希臘、猶太の貨幣の名で約日本の壹圓位）であらうと、又それが名醫の祕傳であらうと、むやみに他人に濫費すべきものぢ

やないからな——いや確かにそれ等は天の神樣から特にそれを賜はつた者だけが傳へ保存すべきものだからな。それからイングランドのナザレ人が獅子心王と呼んでゐる人に萬一わしが、その人の弟と取引してゐたといふ事が知れたなら、確かにわしに取つては王の手に入るよりは、エドム（パレスタインの南東、山獄の多い地方）の強い獅子の手に陷る方が增しだらう。そんならお前の意見に耳をかす事として、この若者をヨーク迄一緒に連れて行かう、そして病氣の治る迄わしの家をこの若者の家としよう。で若し獅子心王が、この頃噂の立つてゐるやうに、この國に歸つて來られたなら、その時にはこのアイヴンホーのキルフレッド樣こそ、お前の父が王の御不興をひどく蒙つた節、屹度防壁となつて護つて下さるだらう、して若し王の御歸國がないにせよ、このキルフレッド樣は、それでも、昨日や今日のやうに、槍や劍の力で金銀を得なすつた時、わし達の費用を拂つて下さらう。何しろこの若者は立派な方だからな、それに自分で指定した日は守りなさるし、借りたものは返しなさるし、イスラエル人で、わしの父の家の子でさへ（アイザック自身のこと）強い惡者やベリアルの子達（惡魔の意）に取卷かれてゐる時には、救つて下さるからな。」

アイヴンホーが漸く自分の今ゐる處に氣が付いたのは、夕暮の幕のもう閉ぢようとする頃であつた。彼は人事不省の狀態から恢復する時、自然に伴ふ混亂した印象を浮べながら、斷々の假睡から目覺めた。彼は暫しの間試合場で倒れる前の事情をはつきり記憶に呼び起す事も、又は自分が前の日に關係した出來事の連絡を認める事も少しも出來なかつた。傷口の痛みは非常な身體の衰弱と疲勞に伴つて、互に與へたり與へられたりした打擊や、雙方から突進し合つて、倒したり倒されたりした乘馬や、喊聲や劍戟の響やそれから入り亂れた鬪ひの凡ゆる無暗な喧しさなどの記憶と入り交つて感ぜられた。彼は手を伸ばして、病床に懸つてゐる帳を取りのけようとした、それは傷の痛みで容易ではなかつたが、それでも、少しは側の方へ動かす事が出來た。

ところが、彼は自分が見事に裝飾された一室に寢てゐるのを見て非常に驚いた。休むには椅子の代りにクッションがあり、その他の點でも多分に東洋風を帶びてゐたので、彼は自分が昏睡中に、再びパレスタインの地へ送り返されたのではないかと、疑ひ始めたのである。この印象は、帳が側へ引かれて、ヨーロッパ趣味よりも東洋趣味を多分に加へた立派な衣裳を着た一人の女性が、黑奴の僕を從れて、帳の蔭の扉から靜かに入つて來た時に、一層强められたのである。

病める騎士がこの美しい幻影に言葉を掛けようとするや

彼女は華奢な指を紅玉の唇に當てゝ、默つてゐらつしやいといふ合圖をした、その間に僕は、彼の方に近寄つて、着物を解いて彼の橫腹を出した、そしてこの愛らしい猶太の娘は繃帶が工合よくなつてゐて、傷口がだん〳〵快方に向つてゐるのを見て、さも滿足した樣子であつた、彼女はやさしくも又嚴かな率直さと慇懃さとを現はして、傷の手當を施した、その態度は實に立派であつて、もつと文明な時代に於てさへ、傷口の手當など、女性の優美を傷つけるらしい所があるのに、それを立派に防いでゐた。斯くも若く美しい人が病床の看護に、いや異性の傷の手當に從事してゐるといふ考へは、誰か情け深い者が、苦痛を和らげ、死の手を除けてやる爲めに、効果ある救ひを捧げてゐるのだといふ考への內に、溶けて姿を消してしまつたのである。レベッカはヘブライ語で老僕に二言三言簡單な指圖を與へた、そして同じやうな場合に屢々彼女の助手となつたこの老僕は、無言のまゝ命ぜられた通りにした。

聞き知らぬ言葉の抑揚も、他の者の口から出たらどんなに耳障りに響くかも知れなかつたのであるが、一度この美しいレベッカの唇から出ると、何か惠み深い仙女の發した呪文を想はせるあのロマンチックな心地よい感銘を與へた。それは實際耳には解し難いが、併しそれに伴ふ音聲の快さと樣子の溫和さとから、人の胸を動かすのであつた。尙、進んで訊ねようともせず、アイヴンホーは默つて二人のするが儘に任せて、彼等が彼の恢復に最も適當だと思つた手段を取らせた、が、手當がすんで、この親切な醫者が其處を退らうとした時、アイヴンホーは事の由來を詮索したくて耐らなくなつた。——「淑女、」と彼は、東方の諸國を旅する中に知るやうになつた、そして今自分の前に立つてゐるこの頭巾を被り、カフタン（土耳古人などの着る長い袖の下着で、帶で締めるやうになつてゐる）を着た少女に一番解りさうだと思つたアラビア語で口を開いた——「淑女、どうぞ、お情けに」

然し此處で彼はこの美しい女醫者に遮られた、彼女が微笑むと、どことなく瞑想的な憂鬱の漂つてゐる顏に一寸靨が浮ぶのであつた、——「騎士樣、私はイングランドの者でございます、私の衣裳や血統は異國のものでございます、けれども、どうぞイングランドの言葉で仰しやつて下さいませ。」

「貴い少女よ、」——再びアイヴンホーの騎士は言ひ出した、そして再びレベッカは急いで彼を押しとゞめた。

「騎士樣、私に貴いなどゝ云ふ言葉をお使ひ下さいますな。で、早速御打明け申しますが、このあなたの腰元は哀れな猶太の娘でございます、あなた樣がつい先達てお救ひ下さ

いました、あのヨークのアイザックの娘でございます。父や父一家の者達が、あなた様の今の御容態には、是非なくてならないやうな、注意深い御看護を致しますのが、當然の事でございます。」

美しいローエナ姫に心を捧げた騎士が、今の今迄愛らしいレベッカの美貌や、艶姿や、明眸などに見とれてゐた時に懐いたやうな情を姫は全然平氣でゐたかどうかそれは分らない、——レベッカの眸は、長い絹糸のやうな睫毛に包まれてその輝きが遮られ、いはゞ柔みを添へられ、そして吟遊樂人が素馨の樹蔭越しに光を放つてゐる、夕の星にも喩へるかと思はれるのであつた。然しアイヴンホーは餘りに立派なカトリック教徒であつたので、猶太人の娘に對してローエナ姫に對すると同じやうな感情を懐くことはなかつた。之をレベッカは豫め知つてゐた、そしてたゞこの爲めに彼女は急いで自分の父の名前や血統を告げたのである、けれども——この美しい賢いアイザックの娘とて女の弱さをいさゝかも持たないといふ譯はなかつたので——アイヴンホーがこれ迄その見知らぬ恩人に向けてゐた慇懃な嘆稱の眼付而も優しみを全然交へないのではなかつたその眼付が今遽かに變つて冷たい、落着いた、平氣な態度、而も思ひ設けぬ方面、劣等種族の者から受けた慇懃に對する感謝の念を示す位ゐの感情しか現はさない態度になつたのを見ては、流石のレベッカも内心深い溜息をつかない譯にはいかなかつたのである。それはアイヴンホーの以前の振舞が青年の常に美に對して拂ふ普通の獻心的な敬意以上のものを示し、今急にさうでなくなつたからではなくて、それは、レベッカが、さうした青年の敬意を受ける權利が自分にも有るといふことを多少認めてゐたのに、今自分の身の上を打明けた唯一言が、憐れな自分をさうした敬意など、とても受ける事の出來ない、卑しい階級に黜ける爲めの咒文として働くといふ事を、無念とも口惜しいとも思つたからである。

併しレベッカの穩やかで淡白した心根は、アイヴンホーがその時代と宗教の持つ世間一般の偏見に陷つた事を咎めはしなかつた。それ所か、この美しい猶太娘は、自分の患者が今や自分を、止むを得ない附合以外にはどんな交際を結ぶ事も不面目とされてゐた定罪の民（神に見はなされた即ち猶太人）の一人と看做したとは感じたけれども、而も彼の安全と快復とに前と變らぬ辛抱強い獻身的な注意を拂ふ事を止めなかつた。彼女は自分達一家が必要に迫られてヨークに立退くといふ事や、父が彼を其處へ移して、健康の恢復する迄自分の家で看護する決心だといふ事などを語つた。アイヴンホーはこの計畫を非常に嫌ふ樣子だつた、自分の恩人にこの上心配

を掛けるのは不本意だといふのである。

「アシュビイか、アシュビイの附近かに、誰ぞサクソンの郷士か、それとも金持の百姓でもいゝが、負傷した同國人を再び甲冑が着けられるやうになる迄、同居させて下さる方はあるまいか、」と彼は言つた——「サクソン人が建てゝゐる寺で收容してくれる處はあるまいか——それともバートン迄連れて行つて下さる譯には行くまいか、彼處へ參れば緣續きの、聖キットホールド寺の長老、ヲールセオフが厚遇してくれる事萬々間違ひないが。」

レベッカは顔に淋しい微笑を浮べて言つた、「幾らでもございませう、この邊の一番悪い宿舍でも確かに卑しい猶太人の住居よりはあなた樣のお住居に適しくございませう。でも騎士樣、あなた樣の醫者にお暇を出されたいのでございませねば、お宿をお變へ遊ばしてはなりません。私達の國の者は、よく御存知の通り、傷を加へる事は出來ませんけれど、癒す事なら出來ます、とりわけ、私達一家には、ソロモンの時代から傳はつてゐる祕傳がございまして、その效目は騎士樣も既にお驗し遊ばした所でございます。大不列顚の四海内でナザレ人の——騎士樣、御免遊ばせ——基督教徒のお醫者に誰一人一ケ月以内で甲冑を着けられるやうにおさせ申す方はございません。」

「してそなたなら、どれ位ゐ早く甲冑に耐へられるやうな體になるのだ、」とアイヴンホーはもどかしげに言つた。

「若し私のお指圖申すことを、辛抱して守つてさへ下されば、八日以内には。」

「聖母マリア樣に掛けて（若し此處で聖母樣の御名を口に出しても罪でなければな）、今はわしにしても、如何なる眞の騎士にしても、床に就いてゐるべき場合でない、で若し、少女よ、そなたが今の言葉を果してくれるなら、わしは手に入り次第、お禮として銀貨をわしの甲に一杯進ぜよう。」

「屹度お約束を果して御覽に入れます、そして今日から八日目には必ず甲冑を着けられるやうにおさせ申します、若し今仰しやいました銀貨の代りに、たゞ一つ私のお願ひを叶へて下さいますならば。」

「わしの身に叶ふ事ならば、して眞の基督教の騎士がそなたの種族の者に叶へてやつてもよい事ならば、喜んでまた感謝してその願ひをお容れしよう。」

「いゝえ、私はたゞ猶太人でも、天父樣——猶太人と異邦人と兩方共お造り遊ばした天父樣——の祝福以外の報酬を望まないで、基督教の方のお世話が出來るといふ事を、これから後もどうぞ信じて戴きたいと思ふだけでございます。」

「少女よ、それを疑ふのは罪悪だ、わしは、そなたが八日

目には甲冑に耐へられるやうにしてくれると、心から信じて、もう躊躇もせねば、疑ひもせず、そなたの腕にお委せしよう。所で、そなたに世間の消息を少々お訊ねしたいのだが、サクソン貴族のセドリックやその一家の者は何としたらう？——あの愛らしい姫は、」——彼はローエナの名を猶太人の家で言ふ事を厭ふかのやうに言ひ澁つた——「姫とは、試合の女王に指名されたあの姫の事だが、何としたらう？」

「そして騎士様、あなた様に選ばれて、あなた様の御膽刀にも劣らぬ賞讃を受けられた御判斷で、あの名譽ある地位を獲られたお方でございませう、」とレベッカは答へた。

アイヴンホーの蒼白めた顔にも流石にさつと紅の色が差した、うつかりしてローエナ姫に寄せてゐる深い思ひを、それを隱さうとしてした拙ない試みの爲め、却つて漏らして了つた事を感じたからである。

「いや實は姫よりもジョン親王の事を聞き度かつたのだ、それから忠實な從者の事も少々。あれは今何故わしに侍いてゐないのだらう？」

「どうぞ私に醫者としての權威を振はせて下さいませ、」とレベッカは答へた、「そしてその知りたいと仰しやる事について私が御報告申上げる間、何にも仰しやらず、興奮遊ばすやうな考へ事も、お避けなさいますよう命じさせて下さいませ。ジョン親王樣は試合を解散されますと、この國の分限者と思はれてゐる人々から、手段が正しからうと正しくあるまいと、絞れるだけのお金を集めて、それからお味方の貴族、騎士、僧侶などを引連れて、ヨークへと大急ぎで御出發なさいました。世間では專ら御兄君の王位を奪ふ御計畫だと取沙汰致して居ります。」

「イングランドにたつた一人でも眞の家來が居つたなら、王位を衞る爲めに、一擊喰はせずに置かないのだが、」とアイヴンホーは床の上に起き上つて言つた。「わしはリチャード王の御爲めに彼等の中の精銳と戰つてやる——さうだ、大義の爲めに、一人なり二人なりを相手に取つて！」

「けれどさう遊ばす事が出來る爲めには、」とレベッカは彼の肩にそつと手を置いて言つた、「今は私の指圖を守つて、靜かにして居らつしやらねばなりません。」

「本統だ、少女、この騷がしい時勢が許すだけの安靜はな。——してセドリックとその一家は？」

「セドリック樣の御家令がほんの一寸前いらしつて、」と猶太娘は言つた、「急いで息を切りながらいらしつて、父から御飼ひになつてゐる羊の毛の代金をお貰ひになりました、その節その方から、セドリック樣とコニングスボローのアセルステイン樣とが非常に御不興でジョン親王樣の御宿所を出られて、御歸りになる所だと承はりました。」

「御宴には誰か婦人も一緒に參られたか。」

「ローエナ姫は、」と、レベッカは訊ねられたよりももつと精しくそれに答へて言つた、「ローエナ姫は親王樣の御宴にはいらつしやいませんでした、そして、御家令の話によりますと、只今後見者セドリック樣と御一緒にロザーウッドへお戻りの旅ださうでございます。それから貴方の忠實な從者ガースさんは——」

「おゝ！」と騎士は思はず聲を擧げた、「そなたはあの者の名を御存知か？——いや知つて居られる筈だ、」と言つて、直ぐに語を繼ぎ足した、「ようく知つても居られよう、わしはそなたの寬大な氣象から、今漸く悟つたのだが、彼が直き昨日百ゼチン受取つたのは、そなたのお手からであつたのだもの。」

「それを仰しやつては下さいますな、」とレベッカは眞赤になりながら言つた、「本當に口といふものは、心が好んで隱さうとする事を、直きに漏らして了ふものでございます。」

「併し、あの金を、」とアイヴンホーは嚴然と言ひ放つた、「そなたの父に返却すると否とはわしの名譽に關はる事だ」

「それなら八日經つて後に、どうなりと御隨意に遊ばしませ、けれど今は御恢復を長引かすやうな事は何にもお考へ遊ばしてはなりません、又仰しやつてもいけません。」

「ではさうしよう、そなたの言ひつけを守らぬのは恩知らずの所以であらうから。が、たつた一言可哀さうなガースの事を訊かせておくれ、さうしたらお訊ねする事はやめる。」

「お氣の毒に、騎士樣、あの人はセドリック樣のお言ひつけで監禁の身となりました、」と猶太少女は答へた——そしてそれから、彼女の言葉がキルフレッドに與へた悲しみを見て取ると、直ぐに言葉を繼いで言つた、「けれども家令オスワルド樣の仰しやるには、若し御主人の御不興を又重ねるやうな事が起らぬ以上、必ずセドリック樣はガースをお赦しなさらう、元々忠實な奴隸で、氣に入りの奴ではあるし、それにセドリック樣の御子息樣が、お愛しい許りに今度の不始末を仕出かしたに過ぎないのだから、との事でございました。そしてその上に、自分と自分の仲間達、わけても幇間のワンバなぞは、セドリック樣のお怒りがどうしてもお解けにならぬその節は、ガースに途中で逃亡させる決心だとのことでございました。」

「神よ、願はくは彼等の目的を果させ給へ！」とアイヴンホーは念じた、「だが、わしはわしに親切を示してくれた人を誰でも破滅させるやうな運命に生れて來たやうに思はれてならない。わしを引立てゝ名を揚げさせて下すつた我

君王陛下に對して、そなたも知る通り、最も御恩惠を蒙られた御弟君は王位を覗つて、干戈を動かさうとして居られる、——わしの敬慕は却つて女性中最も美しい方に遠慮と勞苦をおさせ申す——又わしの父は今この哀れな奴隷を、たゞわしを愛しわしに忠實に仕へた許りに、不機嫌で殺し兼ねぬ樣子だ！　少女よ、そなたはどういふ不運な奴に親切を盡してゐるかお分りだ、スロットハウンド犬のやうにわしの足跡を追うて來る不幸が、そなたをも亦捲き添へにせぬ內に、早くわしを放すがいゝ、それが賢いといふものだ。」

「いえ〳〵騎士樣、貴方樣は今の御衰弱今の御悲しみの爲めに天意の在る所を御勘違ひ遊ばすのでございます。貴方樣は御國が强い腕と眞の心との助けを、最も必要とした時、御歸國なされました、そして貴方樣の敵、王樣の敵の誇りを、その者等が最も鼻を高くしてゐた時に、お蹂躙りになりました、そしてこれ迄お受け遊ばした災難の事なら、天の神樣が貴方樣に、この國の最も賤まれる者の間にさへ、救助者と醫者とを下し給うたといふ事がお分りになりませんか？——ですから、勇氣をお奮ひ遊ばせ、そして、今は、いざといふ場合に腕を奮つて何か驚くべき事を國民の前で行ふ爲めに保護せられてゐるのだとお信じ遊ばしませ。御機嫌よろしう——それから後ほどリウベンにお藥を屆けさせますから、それを召上りましたら、又氣を落着けてお眠み遊ばしませ、明日の旅にもつと耐へられますように。」

アイヴンホーはレベッカのこの言ひ分を成程と思つた、で、その指圖に從つた。リウベンが服せた藥は鎭靜催眠の效を持つてゐて、病人を深い安らかな眠りに誘うた。翌朝この親切な醫師は、彼に發熱の徵候が全然無くなつて、旅の疲れを受けたにしても大丈夫な事を知つた。

彼は試合場から乘せられて來た馬吊臺に再び乘せられ、安樂に道中の出來るやうに凡ゆる注意を拂はれた。が、たつた一つの或る事情の爲めに、レベッカがいくら懇願してもこの負傷した騎士の取扱ひに十分の注意を拂ふことは出來なかつた。アイザックは、自分が掠奪好きのノルマン貴族にも又サクソンの浪士にも等しく好箇の獲物と思はれさうな事に氣付いて、ジューヴェナル（ローマの詩人で諷詩の作者）の「第十諷詩」の金持の旅人のやうに、絕えず盜賊の恐怖が目先にちらついてゐた。それで彼は旅路を非常に急いで殆ど足も休めねば、食事も碌に取らなかつた、で彼よりも數時間先きに出立したが、聖キットホルド寺で緩くり御馳走を食べたりして暇取つたセドリックやアセルスティンの一行を間もなく追ひ越した。而もミリアム膏が效いたのか、それともアイヴンホーの體質が强かつたのか、この急ぎの道中にも彼の親切な

醫者が氣遣つたやうには體に障りはなかつた。

けれども、今一つの見方から言ふと、この猶太人の急ぎ旅は少々上首尾過ぎたものとなつた。彼が今度の道中に主張した速さは彼と護衞に雇つた同行者等との間に一度ならず口諍ひを釀したのである。この連中はサクソン人で、ノルマン人が懶惰大食といふ汚名を被せた安樂美食の民族的愛好を缺く者では決して無かつた。今、シャイロックの地位（シェークスピヤの「ヴェニスの商人」第二幕五場十四行の文句、シャイロックが娘に向つて云ふ言葉の中に直接に現はれてゐる）を逆に行つて、彼等は金持の猶太人を喰物にする積りでこの仕事を請合つたが、さてその猶太人に是非云々の速さで進めと言ひ張られて、當てが外れて見ると甚だしく不愉快になつて來たのである。彼等は又この强行軍で自分等の馬を損ずる危險があると抗議を申込んだ。そして最後に、アイザックとその從者との間には、食事毎に飮むことを許される葡萄酒やビールの量の事で恐ろしい仲違ひが出來たのである。こんな譯で、愈々危險の心配が近づいて、アイザックの恐れてゐたものが彼の身の上に振りかゝつて來さうに見えた時、彼はこの不平滿々の傭兵共に捨てられて了つたのである。それと云ふのも、その傭兵共の歸服を得るに必要な手段を用ゐないで、しかもその保護を賴みにしてゐたからである。

この慘ましい狀態で猶太人が、その娘や負傷してゐる病人と共に、セドリックに出會ひ、そしてその後間もなくド・ブラシイ等の手中に陷つた事は既に述べた通りである。初めは、兇賊共も吊臺に殆ど注意を拂はなかつた、若し、ド・ブラシイが好奇心に驅られて、（ローエナ姬は面帕を掛けてゐて分らなかつたので、）ひよつとしたら自分の企圖の目的物がこの中に入つてゐるのではないかと感じて覗き込まなかつたなら、その儘後に取り殘された事であらう。然しド・ブラシイはその吊臺に一人の負傷した騎士が乘つてゐて、自らアイヴンホーのキルフレッドと名乘られた時、その驚きは一通りでなかつた。キルフレッドは又、的切りサクソンの盜賊の手中に陷つたのだらうと考へたので、自分の名を名乘つた方が、自分の爲めにも亦味方の人々の爲めにも、好都合かも知れないと思つて、明らさまに本名を名のつたのである。

幸ひにもド・ブラシイはその野蠻輕薄な中にも、未だ騎士の名譽といふ心持を全然失つてはゐなかつた。で、この防ぐ術さへもない騎士に危害を加へる事も控へたし、又領地爭ひの相手と知つたら、どんな事情があつても殺すに躊躇しないだらう、フロン・ド・ブーフに密告する事も等しく思ひ止まつた。が又一方、試合場の出來事や、この前キルフレッドが父の家を逐はれたといふ事があつて、世間に浮名を唄はれた通り、ローエナ姬に婿と選ばれた者を釋放する

事は、ド・ブラシイの雅量の程度では迚も出來なかつた。善と惡との中間の處置が、彼の採る事が出來る唯一のものであつた。そこで彼は自分の從者二名に命じて、この吊臺の傍に附き添はせ、何人をもこれに近づく事を禁じた。そして若し問ふ者があつたら、ローエナ姫の空吊臺を使つて、格鬪の際に負傷した仲間の一人を搬ぶのだと言へと命令した。愈々トーキルストーンに到着するや、寺侍や、この城の主が一人は猶太人の財寶の事に、他はその娘の事に、夫々自分の計畫に熱中してゐる間に、ド・ブラシイの從者等はアイヴンホーを、今も尙は負傷した仲間といふ名目で、遠く離れた一室へ運び去つたのである。で、後にこの者共はフロン・ド・ブーフに、何故警報を聞くと直ぐ胸壁にやつて來ないかと訊かれた時、右の說明を返答した。

「負傷した仲間だと！」のである。彼は怒りと驚きとの聲で荒々しく答へた。「下郎奴や小地主共が城を攻め圍む程迄に增長するのも、又道化や豚飼共が貴族に挑戰狀を送るのも、別に不思議はないのだ、城が今にも攻め寄せられようとしてゐる際に、兵卒共は病人の看護人に變つて了つたし、自由兵團は死にかけてゐる者の部屋の番人になつてゐるのだもの。——胸壁へ行け、こののらくら共奴！」と邊りの迫持に響き返る程の大聲を張り上げて、叫んだ、「胸壁へ行け、行かぬとこの采配で貴樣達の骨を打碎いてくれるぞ。」

兵卒は顏を顰めてかう答へた、「自分達は若しあなた樣が、死に掛けてゐる人を介抱せよと言ひつけた自分達の主人に斷つて下さるなら、胸壁へ行くことを決して厭ひはいたしません。」

「死に掛けてゐる奴だと、下郎共！」と領主は言葉を返した、「もつと頑强に固守しなけりや、我々が殘らず死に掛けてゐる人間になるのだぞ。兎に角この貴樣等の卑怯な仲間の守番を交代させよう。——こりや、アーフリード——鬼婆——サクソン巫子の惡魔、——わしの呼ぶのが聞えないか？——この奴共が武器を執つてゐる間、床に就いてゐる者の介抱をしろ、どうせ介抱してやらねばなるまいからな、——者共、當城に鋼弩が二張ある筈だ、弩曲げ機や、方鏃箭もちやんと附いてゐる——お前達と一緒に外堡へ行つて、お前達が各々サクソンの腦天に矢を射通す所を見よう。」

かうした類の者によくある通り、企圖を好み無爲閑散を憎んだこの兵卒達は、命ぜられた通り、喜んで危險な場所へ出掛けて行つた。かうしてアイヴンホーの看護はアーフリード、卽ちウルリカの手に引渡されたのである。所が、日頃身に受けた危害の記憶と復讐の希望とで胸を燃やしてゐたウルリカは、直ぐにこの病人の看護をレベッカに讓らうとしたのである。

（二十九）

向うの物見櫓に登れ、勇ましき兵共よ、
戰場を見よ、而して戰の模樣を語れ。
（シルレルの「オルレアンの少女」）

危急の瞬間は往々にして又胸襟を開いて親切と愛情とを表はす瞬間である。我々は感情が非常に激動すると心に油斷を生じ、爲めに、心の穩かな時に、思慮分別で、假令全然押へつける事は出來なくても、少くも隱してゐるその感情の熱烈さを露はすものである。再びアイヴンホーの枕邊に附き添ふ身となつた時、レベッカは、兩人の身邊の事情が全く絕望ではないにしても、非常に危險であるらしい今の場合でさへ、烈しい歡びを心に覺えた自分を見出して、思はず驚いたのである。彼女が病人の脈を取り、その容態を訊ねた時、彼女の手觸りにも、言葉付にも、自分が表したかつたそれよりも、ずつと優しい思ひの籠つた物柔かさがあつた。レベッカの口は吃り手は顫へてゐた、が、「おゝそなたであつたか、優しい處女」とこのアイヴンホーの冷たいたつた一言に、彼女ははつと我に返つて、自分の胸に感じた歡びが、相互のものでなく又さうである筈のない事に氣づいた。彼女は思はずほつと溜息を洩した、がそれは殆ど相手に聞えなかつた、そして彼女が騎士に容態の事を訊ねる言葉は落着いた友情の響きを帶びてゐた。アイヴンホーは日早に、體の具合はいゝ、思ひの外快方に向つて來たと答へた——

「愛しいレベッカ、」と彼は言つた、「そなたの看護に感謝する。」

「私の事を愛しいレベッカと呼んで下さる、」と少女は心の內で呟いた、「けれども、それにはその言葉にそぐはぬ冷淡な、無頓着な調子が籠つてゐる。この方には御自分の軍馬の方が——御自分の獵犬の方が、賤しめられた猶太の娘よりもよつぽど可愛いのだ！」

「優しい少女よ、」とアイヴンホーは續けて言つた、「わしの心は心配の爲め攪き亂されてゐる、それは到底體の苦しみ所ではないのだ。たつた今、わしの看守であつた者達の話で、この身の捕虜である事が分つた、そして、つい今何かの軍務につくように、此處からあちらに行けと彼に命じて

ゐた高い嗄聲から推察すると、この身はフロン・ド・ブーフの城中にゐるに相違ない――若しさうなら、この末はどうなるのだらう、いや又どうすればローエナや父を保護する事が出來るだらう？」

「猶太人や猶太娘の名は、一言も言つては下さらない、」とレベッカは又心の内で呟いた、「でも私達はこの方を相手に出來る筈がない、本當にこの方に思ひを寄せた天罰が當つたのだ！」彼女はかう言つて我れと我が身を責めると急いでアイヴンホーに知つてゐるだけの事を告げようとした、が併し自分の知つてゐる事はたゞこれだけに過ぎなかつた――寺侍ボア・ギルベール及び領主フロン・ド・ブーフがこの城内の司令官であると云ふ事、城は外から包圍されてゐるが、誰の爲めにかは知らないと云ふ事。彼女はそれに附加へて、城内に一人の基督教の僧侶がゐるが、その人ならもつと詳しい事を知つてゐるかも知れないと言つた。

「基督教の僧侶！」と騎士は嬉しげに言つた、「その人を此處へ連れて來ておくれ、レベッカ、そなたで出來るなら――病人がお教へを乞うてゐると言つておくれ――そなたの言ひたい事を言つていゝから、その坊さんを連れて來ておくれ――兎に角何かしなくちやならない、いや、何かやつて見なくちやならないのだが、城外の樣子が分る迄はどうして決心することが出來よう？」

レベッカはアイヴンホーの願ひを容れて、セドリックをこの病める騎士の部屋へ連れて來ようとした。が、この試みが、自分も亦この贋法師を途中で捕へようと見張りをしてゐたアーフリードの妨害で失敗に終つた事は、讀者の既に知る通りである。レベッカは使ひの結果をアイヴンホーに傳へる爲め引返へした。

が、彼等はこの消息の出所を失つたことを殘念がつてゐる暇もなく、又、どういふ手段でその補ひをつけようかなどゝ圖つてゐる暇も餘りなかつた、と云ふのは、大變な防禦準備の爲めに起つた城内の騷ぎ聲が、今や十倍の雜沓喧騷に增大したからである。重々しい、而も急しげな兵卒共の足音は、胸壁を横ぎつたり、樣々な張出櫓や、防禦地點へ行く狹いぐる〳〵廻はる廊下や、階段に響いたりした。騎士達の部下を勵ましたり、防備方法の指揮をしたりする聲が聞えた、而もその命令する聲は時々甲冑のかち合ふ音や相手の兵卒共の騷がしい叫び聲に打消された。これ等の響きは凄まじく、まして二人が恐ろしい出來事を豫覺したところから、尙一層物凄かつたけれども、而もレベッカの勝氣な心は、その怖ろしい時にあつてさへ、一種壯烈な氣がその響きと交つてゐる事を感じた。彼女の頰から血の氣

は失せたけれど、眼は輝いてゐた、そして恐怖とぞつとするやうな壯絶の念との濃く混つた色を眼に浮べながら、彼女は我れと我が身に呟くともなく、又病床の騎士に言ひかけるともなく、次の聖書一の句を繰返した、――「矢筒は鳴る――きら〳〵光る槍と楯、――將帥の大聲と吶喊の聲！」（約百記第三十九章廿三節及び廿五節後半參照）

併しアイヴンホーはあの莊嚴な章句（約百記第三十九章二十節より二十五節までの間――「その嘶く聲の響は畏るべし、谷をあがきて力に誇り、自ら進みて兵士に向ふ、懼るゝことに笑ひて驚くところなく、劍にむかふとも退かず云々」とあり）にある軍馬のやうであつた、自分の働けないのが齒がゆさに、又この響きを魁けに起つた鬪ひに加はりたいといふ熱烈な願望に、顏は熱し輝いてゐた。「この勇ましい戰況を見る爲めに身を曳きずつてなりと、向うの窓へ行くことが出來さへしたら――箭一本でも射れる弓なりと、我々を救ひ出す爲めにたつた一擊でよい、打てる戰斧なりとありさへしたら！　それも駄目だ――それも駄目だ――俺は力も無ければ武器もないのだ！」

「氣をお揉み遊ばすな、騎士樣、」とレベッカは答へた、「あの物音は俄かに止んで了ひました――あの人々は戰ひを交へないのかも知れません。」

「そなたは戰爭の事をなんにも知らない、」とヰルフレッドはもどかしげに言つた、「このばつたり止んだのは外ではない、人々が城壁の上の自分の部署について、急の襲擊を今か〳〵と待つてゐる證據なのだ、先き聞いた物音は嵐の近づく囁き聲に過ぎない――それは程なく烈しい勢ひで襲つて來よう。――向うの窓まで行けさへしたらな！」

「そんな事を遊ばしては、御自分で御自分の體を毀して了ふばかりでございます、」と附添ひは答へた。が、彼の喩へやうのない憂慮の樣を見ると、斷乎した口調でかう言ひ足した――「私が格子の所に立つてゐませう、そして外の樣子を出來るだけ、あなた樣にお話し致しませう。」

「それはいけない――そんな事をさせはしない！」とアイヴンホーは叫んだ、「どの格子も、どの隙間も、直ぐ射手の的となるだらう。それに又流れ矢が――」

「流れ矢も結構です！」とレベッカは呟きながら、緊かりした足取りで、今話題となつてゐるその窓の方へ行く階段を二つ三つ踏み登つた。

「レベッカ、可愛いレベッカ！」とアイヴンホーは叫んだ、「それは少女の遊戲と違ふぞ――我れと負傷や死を求めるやうな事をするな、そんな機會を與へた事を、いつまでもわしに悔い歎かしてくれるな。せめて、其處にある古い楯で身を守つて、出來るだけ格子の處に體を出すな。」

不思議な位ゐ敏速にアイヴンホーの指圖に從つて、大き

い古楯を、窓の下半部に立て掛けて、それで、身をかばひながら、レベッカは、可なり身を安全にして、城外の形勢を一部分瞰下することが出來ると共に、アイヴンホーに寄手が強襲の用意をしてゐる樣子を告げることが出來た、實際、彼女がかうして占めた位置は、この目的にとりわけ好都合であつた、といふのは、本丸の一角にゐるので、レベッカはたゞに城の廓内から外に起る事を見ることが出來た許りでなく、又企てられた攻撃の第一の目標であるらしい外壘をも一目に見渡す事が出來たからである。それは餘り高くも強くもない外側の堡で、つい先程セドリックがフロン・ド・ブーフに出して貰つた裏門を護るものであつた。城の濠はこの外堡を本丸から隔てゝゐたので、萬一この外堡が占領された場合には、假橋を撤して、本丸との往來を斷つ事は容易であつた。外堡には城の裏口と差向ひに非常口があり、全體に頑丈な柵が繞らしてあつた。レベッカはこの部署の防禦に配置されてゐる兵の數から、攻圍された側の者がこの外堡の安全を氣遣つてゐるのだと、觀察することが出來た、又これと殆ど眞向うの方面にゐる寄手の勢揃ひから、此處こそ攻撃すべき弱點として選ばれたのだといふ事が、これも亦同じく明白のやうに思はれた。

これ等の模樣をレベッカは日早やにアイヴンホーに傳へた、そして附足して言つた、「森の端れは射手で縁取られてゐるやうに見えます、ほんの僅かの者しか、その黒い影から出て居りませんが。」

「して、旗印は？」とアイヴンホーは訊ねた。

「旗印といつては何にも見えません。」

「こんな城を襲撃するのに、槍旗も軍旗もないとは餘り變だ！」と騎士は呟いた——「して指揮者として働いてゐるのは誰か見えないか。」

「黒い甲冑を着けた騎士が一番鮮かに目に付きます。その人だけが獨り頭の上から足の先まで武裝してゐて、邊りの人達全體の指圖に當つてゐるやうです。」

「その人はどんな紋章を楯に附けてゐる？」

「何やら鐵の棒のやうなものと、黒い楯に青く描いた南京錠とが。」

「何ッ、柳錠に碧い南京錠！」（當時リチャード王は本名を名乘つて公然ご行動することを憚つてゐた所から、かゝる自由を束縛する具を紋章にしたものであらう）と、アイヴンホーは言つた、「誰がその樣な紋章を附けてゐるか知らぬが、それは今わしの紋章であつて然るべきであらう。銘句は見えないか。」

「かう離れては紋章もやつとでございます。」とレベッカは答へた、「それも陽が楯によく當つた時しか、今申上げたやうには見えません。」

「他に大將はゐないらしいが、」と憂ひ顔の訊手は叫んだ。「此處から見る事が出來る人々の中には歷々の方の姿は一人もございません。けれども、屹度城の向う側も亦攻撃を受けて居ます。おゝあの人々は今進軍の用意をしてゐるらしい——ザイオンの神樣、私達を護つて下さい！——何といふ怖ろしい光景でせう！——眞先きに進む人々は皆大きな手楯や板で造つた矢楯を持つてゐます、後に續く同勢は進みゝゝ弓を引いてゐます。——おゝ弓を擧げます！——モーゼの神樣、神樣がお作り遊ばした人間をお許し下さいませ！」

レベッカの報告は此處で突然攻撃開始を告げる甲走つた角笛の合圖の音で遮られた。その合圖に應じて直ちに胸壁からノルマンの喇叭の亂奏が聞え、それには鑼鼓（鍋のやうな眞鍮製の胴の上に皮を張つた樂器）の太い低い響が交つて、敵の挑戰を侮るが如き調子であつた。兩軍の喚聲はこの恐ろしい騒ぎを增した、寄手は、「イングランドの聖ジョージ！」と叫び、ノルマンは夫々の大將の鯨波に應じて、「進めド・ブラシイ！——ボー・セアン！　ボー・セアン！——フロン・ド・ブーフ援けに！」と高い叫び聲で、これに應へた。

けれどもこの闘ひが決せられるのは叫喚によつてゞはなかつた、寄手は死にもの狂ひの努力で攻め立てたが、圍まれた方の軍勢も、負けず劣らず力强く防戰した。森林地方の慰事で强弓を最も有效に用ゐるやうに仕込まれた射手達は、當時の適切な言葉を用ゐて云ふと、「皆諸共に、」矢を切つて放したので、護り手がその體をほんの少しでも見せたら最後、何處でも彼等の二十七吋の長矢に射當てられた。この猛烈な矢攻め——それは、霰のやうに繁く烈しく降り注ぎ、而も、それにも拘らず、一本の箭毎に夫々の狙ひがあつて、狹間の矢眼と云はず、窓と云はず、苟も護り手が時折配置された所、また配置されさうな處へは何處へでも、幾本も束になつて飛んで來たが、——その間斷ない矢攻の爲め、二三の守備兵は斃たれ、數人は傷ついて倒れた。併し、矢も貫く事の出來ない程堅牢な甲冑を賴みに、城壁に身をかばひながら、フロン・ド・ブーフの家來を始め、味方の面々は、攻撃の烈しさに劣らず、頑强に防戰して、或は强弓を射放し、或は大弓、投石器、その他の飛道具をもつて、雨霰と降り注ぐ箭に應戰した、そして、寄手は仕方なしではあつたが、甚だ無頓着に防いだので、フロン・ド・ブーフの一黨は、自分達が受けたよりも遙かに多くの損害を寄手に與へたのである。兩軍の箭や飛道具の風切る音を遮るものとては、敵味方夫々に何か目立つた損害を負はすか、負ふかした時、どつと起る物凄い喚聲ばかりであつた。

「してわしは床に就いた僧のやうに此處に寢てゐなくてはならないのだ。」とアイヴンホーは叫んだ、「わしに自由を與へるか死を與へるかといふ分け目の戰が、他の者達の手に行はれてゐるのに。——今一度、親切な少女よ、窓から覗いて見てくれ、だが下の射手に狙はれぬやう氣を付けなくちやならないぞ——今一度覗いておくれ、そして彼等が未だ進擊してゐるかどうか教へておくれ。」

默禱をしてゐた間に不屈の勇氣がいよ〳〵強くなつたレベッカは、再び格子の處に、併し下からは見えないやうに體を隱しながら、坐つた。

「何が見える、レベッカ？」傷つける騎士は再び訊ねた。

「矢の雲の外何にも見えません、飛びますこと〳〵私の眼の眩む程、そして射るその人の姿を隱す程激しく。」

「それも永くは續く筈がない。こんな堅固な城を乘取るには、眞物の武器の力で眞直ぐに肉迫しないでは、弓矢ぢや石の塀や城壁には殆ど役に立つまい。柳老錠の騎士を探しておくれ、レベッカ、そしてその武者振りを見ておくれ。大將が大將なら、家來も家來だらうからな。」

「あの方の姿は見えません。」

「卑劣な腰拔奴！」とアイヴンホーは叫んだ、「風が一番強く吹く時、鮵から尻込みするのか。」

「尻込みはしません！　決してしません！　今見えます、一隊の人數を率ゐて、外堡の外側の柵門の直き下まで參りました。——あの人々は杭や矢來を引倒します、柵を斧で切り倒します。——あの方の高い黑い飾羽毛は群がる兵の上に彼方此方と浮いて、死人の横はる原つばをうろつく大鴉のやうです。——おゝ矢來の一方を破りました——躍り込みます——突出されます！——フロン・ド・ブーフが防ぎ手の頭です、彼の大きな體が人込みの中に高く見えます。皆なはまた破れ口に集ります、そして一人づゝ取つ組合つてその道を奪ひ取らうと爭つてゐます。本當に！　烈しい潮流と潮流とが出會つたやうです——逆風にさかまく大海と大海との衝突です！」

彼女は、これ以上こんな恐ろしい光景を見るに堪へないと云ふやうに、つと格子から顏をそむけた。

「もう一度外を見ておくれ、レベッカ、」とアイヴンホーは彼女が退いた原因を思ひ違ひして言つた、「弓矢は幾らか治まつたに違ひない、今接戰してゐるからには。——もう一度見ておくれ、今度は前程危險ではない。」

レベッカは再び覗いて見た、そして殆ど同時に叫んだ、「おお大變な事になりました！　フロン・ド・ブーフと黑裝束の騎士とが崩壞口で一騎打をしてゐます。邊りに二人の家來が取卷いて、その成行を觀てゐます——神樣、迫害に惱む者や捕虜の味方をしてお討ち下さい！」彼女はそれから高い悲鳴を擧げて、叫んだ、「あの方が倒される！　——あの方が倒される！」

「誰が倒されるのだ？」とアイヴンホーは大聲で叫んだ、「一體どつちが倒れたのだ？」

「黑裝束の騎士の方が、」とレベッカは弱々しく答へた、それから直ぐ又嬉しげな歡した聲で叫んだ——「違ひます——違ひます——有難や！——あの方は起き上りました、そして片腕だけで二十人力もあるかと思ふ程戰ひます——劍が折れて了ひました——一人の郷士から斧をひつたくります——フロン・ド・ブーフを切つて切つて切り捲ります——あの大男は、樵夫の斧に伐り倒される樫の樹のやうに屈んでひよろついてゐます——おゝ倒れる——倒れる！」

「フロン・ド・ブーフか、」とアイヴンホーは聲をはずませて訊ねた。

「え、フロン・ド・ブーフです！　傲慢な寺侍を先頭に家來達がどつと助けに跳出しました——皆な一つになつて掛つたので、あの勇士も詮方なく退きます——皆なはフロン・ド・ブーフを城内に擔ぎ込みます。」

「寄手は柵門を占領して了つたらうな？」

「占領しました——占領しました！　そして城兵を外壁の上へ追ひつめました、中には梯子を掛けるものもあります、蜂のやうに寄りたかつて、互ひの肩を臺に攀ぢ登らうとする者もあります、——皆なの頭の上に石や、梁や、樹の幹が落ちます、そして負傷者を後ろに搬ぶと見るまに、新手の軍勢が直ぐ入れ替つて攻擊します——おゝ、神樣！　あなたは人間に御自分の御像をお授け遊ばして、こんなに殘酷にその同胞の手で傷つけさせてお置きになるとは！」

「そんな事をお考へでない、今はそんな事を考へてゐる場合でないのだ——誰が降伏する？——誰が突進する？」

「梯子は切つて落されました、」とレベッカはがた〳〵震へながら答へた、「兵卒達は潰された蛇か蛙のやうにその下に匍匐つてゐます——城方の方が旗色がよくなりました。」

「神よ、敵を討たしめ給へ！」と騎士は叫んだ、「當てにならぬ郷士共は崩れたのか。」

「いえ〳〵！」とレベッカは叫んだ、「あの人達は立派に郷士らしく振舞つてゐます——黑裝束の騎士はあの大きな斧を提げて外堡の裏門に近づきました——そらあの方が打下ろす雷鳴のやうな斧の音が、この鬪ひの騷ぎや、叫び聲に一際高く、お耳に入りませう——石や梁材があの大膽な戰士の上に雨霰と降り掛つてゐます——あの方はそれを禦の

冠毛程にも鳥の羽毛程にも思ひません！」

「ほゝう、」とアイヴンホーは嬉しげに床の上に起き上つて言つた、「このイングランドに、そんな手柄の出來る者は一人だけと思つたに！」

「裏門が搖れます、」とレベッカは尙ほも言葉を續けて言つた、「碎けました——あの方の斧でさゝらの樣に打割られました——皆は、跳び込みます——外堡は占領されました——おゝ、まあ！——皆は護り手を胸壁から拋り出します——壕の中へ投げ込みます——おゝ人々よ、お身達も人間ならば、もう抵抗の出來ない者は許してお上げなさい！」

「橋は——城内へ通ずる橋は——橋は占領したのか？」アイヴンホーが叫んだ。

「いゝえ。寺侍は自分達が橋を渡ると橋板を打壞してしまひました——護り手の中寺侍と一緒に城内へ逃げた者は殆どありません——今聞える悲鳴や叫び聲はその他の者の運命を告げてゐるのです——嗚呼！——勝利を見るのは戰爭を見るのよりも尙一層見辛いものといふ事が分りました。」

「皆は今何をしてゐる、少女、まあ今一度覗いて見てくれ——今は流血を見て元氣を落してゐる時でない。」

「今の所は戰爭も止んでゐます。味方の人々は占領した外堡の内で氣勢を擧げてゐます、そしてあの外堡は敵の射撃からの大變いゝ隱れ場所となつてゐますので、守備兵はまだ時たまそれへ箭を四五本放つだけで、まるで本當に相手を傷つける爲めと言ふよりは、寧ろ氣を揉ませる爲めに射るのかと思はれる位ゐでございます。」

「味方の者達は必ずあんなに華々しく始めて、あんなに首尾好く遂げた企圖を斷念しはすまい。——おゝ、斷念はすまい！　わしはあの立派な騎士を——斧で以て樫の楯や鐵の横木を打碎いたあの騎士を信ずる。——あんな向う見ずの武者振りをする事の出來るものが二人とあつたら、」と彼はまた我れと呟いた、「不思議な事だ！——枷錠と、黒地に南京錠——それはどういふ意味か知らん？——レベッカ、何か外にあの黒裝束の騎士の特徴は見えないか。」

「何にも見えません、あの方の身に附いてゐるものは皆夜鴉の羽のやうに眞黒です。それ以上にあの方の目印になるものは何にも見付かりません——けれどあの方が戰爭で力をお奮ひになる所を一度見ましたからには、一千人の戰士の間に交つてゐらつしつても二度と決して見忘れるやうなことはないと思ひます。あの方は饗宴に招かれでもしたやうな樣子で戰鬪に突進されます。とても人力とは思はれぬ所がございます、敵に打下ろす一擊々々には、まるであの勇士の精魂を全部籠めてあるやうに思はれます。神樣、あ

の方の流血の罪を赦し給へ！——人一人の腕と膽力とが數百の人々をどんなに征服する事が出來るかを見るのは、怖うございますが、でもまた壯快なものでもございます。」

「レベッカ、そなたはよく英雄を言ひ現した。確かに皆なはたゞ元氣を附けるか、さもなくば、壕を越える支度の爲めに一息入れてゐるに過ぎないのだ——あの騎士がそなたの言ふやうな勇士ならば、そんな大將の下に、臆病風の吹く事はない、冷淡に長びく筈はない、雄々しい企てを放棄する筈はない、困難が增して、骨が折れゝば、また光榮も增す道理だもの、斷念する筈はない、——わしはわしの家名に誓ひ——輝かしい戀人の名に誓ひ、他日この度のやうな鬪ひには、あの勇士と轡を並べて出陣する爲め、十年の幽閉にも堪へ忍ぶだらう！」

「あゝ！」とレベッカは、窓際を去つて傷つける騎士の床に寄添ひつゝ言つた、「さう無性に戰鬪に憧憬れ遊ばしては——今の衰弱してゐるお體を、さうお悶えお卿ち遊ばしては、必ず御恢復の邪魔になりませう——御自分がお受け遊ばした傷も癒えない中に、どうして他の人に傷を負はす期待をお持ち遊ばすことが出來ませう？」

「レベッカ、戰爭をしなれた者が、自分の周圍で人々が華々しい手柄を立てゝゐる時に、僧侶か婦人かのやうに、おとなしくしてどうしてゐられるものか、そなたには分らない。戰爭の讃美はわし等の食べて生きて行く食物なのだ——大合戰に立つ砂塵はわし等が鼻の息なのだ！　わし等は戰勝や高名を得る間こそ命があるのだ、それを失つては生きてゐない——生きたいとも思はない——少女よ、わし等が誓約し、わし等が貴ぶものを悉く捧げる武士道とはこんなものなのだ。」

「あゝ！　そして騎士樣、それは、自惚の鬼神に犧牲を捧げ、モーロク（昔猶太人中、モアブ族の信じた神、彼等はその神の爲めに、自分の子を火中に投じて犧牲に捧げた）の神に捧げようとて火中を通るのとどんな違ひがございませう！　——死の神が勇者の槍を折り、その軍馬の逸い足に追ひついて、命を果たした時、お流し遊ばしたすべての血——お忍び遊ばしたあらゆる勞苦——御武功故にこぼされたすべての涙、それ等の報酬として騎士樣に何が殘りませう？」

「何が殘る？」とアイヴンホーは叫んだ、「譽れだ、少女、我が墳墓を飾り、我が家名を輝かす譽れだ。」

「譽れ？」とレベッカは尙ほも言葉を繼いだ、「おゝ、戰士の仄暗い段々朽ち崩れる塚の上に、位牌代りに揭げる錆びた鎖帷子ですか——無學な僧が物問ふ巡禮に讀んで聞かせる事の殆ど出來ない磨滅した碑銘の彫刻ですか——これ等があらゆる優しい愛情の犧牲に對する、或は又他の人々を

不幸にする爲めに不幸に逐る一生に對する十分な報酬でございますか、それとも、放浪の詩人の拙い歌には非常な價値があつて、所定めぬ吟遊樂人が、泥酔漢どもの晩酌を賑はす爲めに歌ふ、あの物語歌の主人公になる爲めに、家庭の愛も、優しい愛情も、平和も、幸福も、そのやうにわけもなく捨てられるものなのでせうか。」

「何を言ふ！」と騎士は耐りかねたやうに答へた、「少女、そなたはそなたの知らないものゝ事を言つてゐる。そなたは武士道の眞の光を消さうとする、この事あつてこそ始めて氣高い者と卑しい者と、貴い騎士と下司と野蠻人とが區別されるのだ。これが爲めにわし等は高い名譽よりも遙かに生命を輕んずる。これが爲めにわし等は苦痛、辛勞、惱みに打勝たうとするのだ。これが爲めに不面目の外如何なる災禍をも恐れないのだ。そなたは基督教徒でない、レベッカ。そなたには、氣高い處女の戀人が何かその情火を證すやうな壯圖をした時、その處女の胸に高鳴るあの高い感情は分らないのだ。武士道！——なんと、少女、武士道は清く高い愛情の乳母ではないか——迫害に惱む者の支柱、苦情不平の救濟者、暴君の權力の馬銜鏈——武士道がなかつたなら貴族は空名に過ぎなからう。自由は武士道の槍、武士道の劍を得て始めてこの上ない守護者を持つのだ。」

「本當に私の生れた種族は、自國の防禦には勇氣を顯はしましたが、しかし未だ一國民であつた間でさへ、神樣の御命令か、若しくは自國を護つて他の壓迫を防ぐ爲めかでなければ、戰ひませんでした。喇叭の音はもう猶太を目醒ましません、そしてその賤しめられる子等は今はたゞ敵愾心と武力の壓迫の從順な犧牲に過ぎません。お言葉御尤でございます、騎士樣、——ヤコブの神樣が、第二のギデオン（ヨシュアの死後イスラエル人の長であつた、ミデアン人の手からイスラエルを救ひ出すに力を盡した）なり、新しいマッカビーアス（その民を率ゐてローマ人に叛旗を飜した猶太人）なりを、選ばれた民の爲めに起たしめ給ふ迄は、戰爭や鬪ひの事を語るのは、猶太の娘に相應しうはございません。」

高潔な處女は悲しい語氣でかう結んだ、その語氣には、同民族の零落の念が色濃く現はれたが、而もそれが彼女には名譽の場合に口を挿む資格がなく、名譽や仁俠の情を懷く事も、現はす事も出來ないと、アイヴンホーが見做したのだと思ふ心に、益々深められたらしかつた。

「アイヴンホー樣はこの胸の中をお察し下さらないにも程がある、」とレベッカは言つた、「私がナザレ人の狂氣じみた武士道を批難したからとて、卑怯な、下賤な魂がその胸に宿つてゐるに違ひないと御推察なさるとは！　私自身の血を一滴づゝ流して、それで猶太の民を自由の身にする事が出來ますやうに天にお願ひいたします！　いや、それでお父樣と、このお父樣の恩人とを暴虐者の鎖から放してお上げする事が出來ますやうに、神樣にお祈り致します。その時こそこの誇り高い基督教徒は、神に選ばれた民の娘が、未開な寒い北國の何とかいふ詰らない酋長の血統を自慢する、自惚の强いあのナザレの處女（姫のこと）に劣らず、勇ましく死ぬることをお分りなさいませうから！」

彼女はそれから傷つける騎士の床の方を見遣つた。

「眠つてゐらつしやる。苦惱と元氣の消耗とで體力が盡きて、お疲れなすつたお體は、氣が緩むと直ぐ、つい寢込んで了はれたのだ。あゝ！　これがこの世の見納めかも知れないやうな時に、この方のお顏を眺めてそれが罪だらうか——而もそれもほんの束の間の事、それにこのお美しいお顏立が、睡つてゐらつしやる時でさへ、そこを去らない大膽さうな快活さうな御氣色に、再び活氣附けられる事はなからうと思はれる時のやうな！　お顏を眺めたとて罪だらうか、——間もなく鼻孔は腫れ、口は開き、眼は据わり血走る時に、そしてこの誇り高い氣高い騎士がこの呪はしい城の卑しい卑しい卑怯者に踏み躙られ、而も足蹴にされてさへ、身動きも出來ないかも知れぬ時に！——だが、私のお父樣は！——おゝ、私のお父樣は！　青年の金髪に見惚れてお父樣の白髪を忘れるとは、何といふ不孝な娘でせう！——今度のこの災難を、親よりも先きに異邦人の身の上を考へたこの不孝な子に下されたエホバのお怒りの先觸れだと思はないで何んとしよう？　ユダの滅亡を忘れて、異教徒異邦人の美しさに迷ふ、この不孝な子に！——いつそ、この愚かな戀を心から引き離して了はう、裂き捨てるのは血を吐くやうに辛いことなんだけれど！」

レベッカは面帕で悉皆面を包んで、騎士の病床から少し離れて、背を向けて坐つた。——今こそ外からは災難が彼女に差迫つてゐる。內からはあの裏切りしさうな感情が彼女を攻め立てゝゐる。これを防がうとして、彼女は自分の心を固め、固めようと努めてゐるのであつた。

（三十）

この室に近づいて、かの死の床を見よ、
彼の魂の緒の消え行くのは、雲雀が曉の
快い微風と柔らかい露の中を、
空に昇り行くやうに
懇ろな人々の嘆きと涙とに護られながら

天に翔り行く靜かな靈の臨終ではない！
アンセルムはそれとは違つた光景で、
黄泉に旅立つてゆく。

（古劇より）

攻圍軍の最初の成功に續く靜寂の間に、一方はその有利な地位を維持しようとし、他方は防禦の手段を堅固にしようと準備してゐるうちに、寺侍とド・ブラシイとは城の大廣間で慌たゞしい評議を開いた。

「フロン・ド・ブーフ殿は何處に居られます？」と、濠の彼方で城塞の防禦を指揮してゐたド・ブラシイは言つた、「人人は彼が殺害されたと申してゐますが。」

「生きてゐます、」と寺侍は冷やかに答へた、「まだ生きてゐますとも。が併し、彼が自分の名の牡牛の頭（彼の名、フロン・ド・ブーフは「牡牛の頭」と云ふ意）と、それを防ぐ十枚の鐵の胸板を着けてゐたとしても、あの恐ろしい斧の打撃に打倒されたに違ひありません。けれども今數時間も經つたなら、フロン・ド・ブーフは彼の祖先達の許へ參るでせう——さうすれば、ジョン親王の企てから大事な股肱を奪はれた事になります。」

「してサタンの王國（地獄の）には、また勇敢な味方が一人加はつた譯です、」とド・ブラシイは言つた。「これと云ふも、皆、聖徒や天使を嘲弄したり、聖物や聖者の像を、あの賤しい鄉士共の頭上に投げつけるやうに命じたりする事から起るのです。」

「途方もない——御身は愚か者だな、」と寺侍は言つた。「御身の迷信はフロン・ド・ブーフ殿の不信と孰れ劣らずだ。御二人とも、その信仰若しくは不信に對して理由を擧げる事が出來ますまい。」

「大きな御世話だ、寺侍殿、」とド・ブラシイは答へた、「私の事を言はれる時には、ちと御口を愼まれたいものだ。聖母マリアにかけて申すが、私は御身や御身の仲間よりも遙かに基督教徒らしい人間だ。何故と云ふに、ザイオンの最も神聖な寺侍團は、その懷に數多の異端者を養つて居り、ブリアン・ド・ボア・ギルベール殿もその一人だと云ふ專らの評判だからな。」

「そのやうな噂をお氣にかけなさるな、」と寺侍は言つた。「それよりも、この城を保持する事を考へようではありませんか。——御身の方では彼の賤しい鄉士共の働きぶりはいかゞでした？」

「まるで惡魔の權化のやうでした、」とド・ブラシイは言つた。「彼等は城壁に群つてどつと押し寄せて來ました、その先頭は確かあの弓術試合で賞を獲た曲者に違ひなかつたやうに思ひます。何故と云ふに、私は彼の角笛と飾帶とを見知つてゐますから。して、これがフィッツァーズ老爺奴の得意の計略なんです！　あの圖々しい惡者共を唆かして、わし等に刃向はせようとするのだ、若し私が矢の通らぬ甲冑を身に着けてゐなかつたら、彼の曲者はわしが獵時の牡鹿でもあるかのやうに、情容赦もなく七度も狙ひ撃つた事でせう。彼奴は大弓の矢で私の甲冑を處嫌はず狙ひ撃ち、丁度私の骨が鐵で出來てゐるやうに遠慮會釋もなく私の肋骨に打ち當てました——若しスペインの鎖帷子で出來た下着を鎧の下に着けてゐなかつたら、私は必ず殺されたことでせう。」

「併し御身は御身の持場を維持なされましたか？」と寺侍は言つた。「わし等の方では外堡を失ひました。」

「それは容易ならぬ損失ですな、」とド・ブラシイは言つた。「曲者共は一層猛烈に城を攻める爲めに、身をかばふ物を見出しませう、そして、十分監視致さぬと、何處か手薄な塔の隅か、乃至は締め忘れた窓を見付けて、其處から攻め入るかもしれません。味方の人數は、隅から隅まで防ぐには餘りに少ない、そして、どちらの方を向いても、丁度祭日の寺の矢場の的のやうに、數多の矢に狙はれる事を味方はみんな嘆いてゐます。フロン・ド・ブーフ殿は死にかゝつて居られますから、わし等は最早彼の牡牛の頭と無類の强力から援助を期待する事は出來ません。ブリアン殿、御身はどう思召されるか、わし等は、仕方がないから生捕つた捕虜を返して、あの曲者共と和解した方がよくはあるまいかと思ふ？」

「何と仰せらるゝ？」と寺侍は叫んだ。「捕虜を返し、物笑ひや呪ひの種とならうと仰しやるのか……抵抗力のない旅人の一隊を夜襲して、その身柄は奪ひ取つたが、豚飼ひや、道化や、人間の屑どもが率ゐる宿無し浪士の群れと戰つて金城を防衛する事も出來ない勇猛な戰士として？　御身の考へは恥辱の至りだ、モオリス・ド・ブラシイ殿！　そのやうな卑劣な不名譽な和解を承諾する位ゐなら、この城の滅亡と共にわしの肉體と屈辱とを埋めた方がましだ。」

「さらば、城壁に歸りませう、」と無造作にド・ブラシイは言つた。「トルコ人にしろ、寺侍にしろ、私程命を輕んじた者は一人もない、けれども今此處にわしの四十許りの勇敢な傭兵隊がゐたならばと思ふのは何も不名譽な事ではあるまい？——おゝ、我が勇敢な槍兵達！　若し御身達の隊長が今日如何に苦しい立場にゐるかを知つたならば、どんなに速かに私は御身達の槍の林の先頭に私の旗印を見た事だらう！　そして、又これ等の烏合の敵兵等は御身等の矛先

きにどんなに速かに屈してしまふ事だらう！」

「誰に御身が請ひ願ふにしろ、」と寺侍は言つた、「兎に角現在手許にあるだけの兵士を以て出來るだけの防戰をしようではないか――彼等は主としてフロン・ド・ブーフ殿の幕下であつて、數々の無禮と暴虐の行ひの爲めにイングランド人から憎まれてゐる者共だ。」

「一層妙だ、」とド・ブラシイは言つた。「これ等の荒くれた奴隷達は城外の百姓共の復讐を受けるよりは、むしろ彼等の血潮の最後の一滴迄も防戰するでせう。さらば、起つて防戰に取り掛りませう、ブリアン・ド・ボア・ギルベール殿、そして、生きようと死なうと、モオリス・ド・ブラシイが今日こそ氣高い紳士として振舞ふのを御目にかけよう。」

「城壁へ！」と寺侍は叫んだ。それから彼等二人は城を防ぐ爲めに老巧と勇氣の限りを盡さうと、狹間へ上つて行つた。彼等は直ちに最も危險な場所は已に寄せ手が占領した外堡の向ひ側である事を知つた。城はその外堡から濠に依つて全く隔離されてゐた。で寄せ手はその障碍物を乘り越さねば外堡の向ひ側に當る內側の城門を攻擊する事が不可能であつた。併し寄せ手が今までの策略をそのまゝ踏襲するものとすれば、多分そこに猛襲を試みることに依つて、防禦軍の配慮の中心をこの點に集め、そしてその他の場所に引き起されるあらゆる油斷を利用する手段を採るやうに努めるであらう、と云ふのは、寺侍とド・ブラシイとの二人の意見であつた。さうした災禍を防ぐ爲めに、彼等の人數では城壁に添うて所々に哨兵を置き、互ひに連絡を取り、危險の迫つた時には何時でも警告を與へ得るやうにする位ゐが關の山であつた。一方彼等はド・ブラシイが內側の門の防禦を指揮し、寺侍は凡そ二十人程の兵士を豫備隊として率ゐ、突然脅かされるかもしれない他の方向へ何時でも駈けつけられるやうにしようと相談が纏まつた。外堡を失つた事は尙ほ次のやうな不幸な影響を惹き起した、卽ち城壁が非常に高いにも拘はらず、城內の軍勢は前のやうに正確に敵の擧動を見る事が出來なくなつたのである。何故と云ふにまばらに生えた藪が外堡の非常門の直ぐ近くまで延びてゐて、寄せ手は藪に身をかばひながら、而も防禦軍に覺られる事さへもなく、適當と思ふだけの軍勢をその藪の中に忍ばせる事が出來たからである。で、どの方向に襲擊があるか全く不明なので、ド・ブラシイと彼の同僚とはあらゆる偶然に起る事件に對して備へをする必要があつた、そして彼等の部下は、如何に勇敢であるとは言へ、何時でも攻擊し、どんな攻擊方法でも用ゐる敵に圍まれた人々が起し勝である精神上の氣遣はしい意氣沮喪を經驗しないわけには

は行かなかつた。

さうしてゐる間に、包圍されて危險に瀕した城主は肉體の苦痛と精神の苦悶とに苛まれつゝ床の上に横たはつてゐた。彼はその迷信的な時代の頑迷者流にありふれた策を用ゐて苦悶を免れようとはしなかつた。その頑迷者の大部分はその犯した罪を教會に捧げる進物で贖ひ、やがてこの方法に依つて罪を贖へば、神の寬恕を得ると思つて自分の罪に對する恐怖の念を眠らすのが例であつた。かうして購つた安心が眞實の悔悟に伴ふ心の平和と異つてゐるのは、阿片に依つて得た濁つた昏迷が健康な自然な睡眠と異るのと同樣である。然し、それでも尙ほ目覺めた後悔の苦悶よりは同樣である。併しフロン・ド・ブーフは冷酷な吝嗇な人間であつて、而も彼のあらゆる惡德の中で貪慾が最も著しかつた。それで、彼は寶や領地を犧牲にして、赦免や罪障消滅を教會や僧侶から購ふよりは、寧ろ教會や僧侶達を無視して、そんなものゝ赦免や罪障消滅は一文の値打もないとするのをましだと思つた。彼とは異つた種類の不信者である寺侍がその友を評して、フロン・ド・ブーフは、これ迄ある宗教に對して彼の抱く不信や輕蔑に對して如何なる理由をも擧げる事が出來ない、と言つたのは當つてゐない、何故と云ふに城主フロン・ド・ブーフは教會が餘りに高價にその商品を賣り過ぎる事、卽ち教會が賣らうとする精神の自由はエルサレムの長（かの罪人なる聖ポーロが羅馬の市民である事に驚いた長）の自由のやうに「大金を以て」のみ買はれるもので、碌なものでないと云ふ事を主張したであらうし、又更に、フロン・ド・ブーフは醫者の費用を支拂ふよりは寧ろ醫藥の效能を否定するのをよいと思つたであらうからである。

併しながら大地と彼のあらゆる財寶とが彼の目の前から辷り落ち、彼の殘忍な胸も、地獄のすり石のやうに冷酷ではあるが、來世の物淋しい暗黑を眺めては、戰慄を覺えないわけにいかない時が今や迫つたのである。彼の身體の熱は彼の焦慮と苦惱とを增した、そして彼の死の床には新に目醒めた樣々の恐怖の情が彼の性質の牢乎として拔くことの出來ない頑强さと、こんがらがつて現はれてゐた――その恐ろしい心の狀態は、かの地獄に於てのみ見られるものであつて、そこでは希望のない不滿や、悔悟のない怨恨や、現在の苦惱の恐ろしさや、それが止む事も、滅ずる事もない不安などがあるのみである。

「あの賣僧どもは今何處にゐるのか？」と城主は唸るやうに言つた、「あの氣味の惡い茶番狂言にあんな値段をつけた者は誰だ、――あの跣足のカーメル僧共は何處にゐるのだ、彼奴等は父のフロン・ド・ブーフに聖アンの僧院を建てゝ貰

つたのに、その後繼者の自分から幾ルッドもの牧場と數多の肥沃な野原と圍ひ地とを奪つたのだ——あの貪慾な獵犬共は今何處にゐるのか？——きつとビールを貪り飲んだり、誰か吝嗇な奴の臨終の枕邊で彼奴等のまやかしの手品をやつてゐるのだ。——わしは彼奴等の僧院建設者の後繼者だ——親父に寺を建てゝ貰つた彼奴等は、わしの魂の爲めに成佛を祈らなければならない筈だ——わしは——彼奴等は實に恩知らずの曲者共だが！——彼奴等はわしが野原の宿なし犬のやうに懺悔も聞かれず聖餐の禮も受けずに死んで行くのを打ち捨てゝゐるのだ！——寺侍に此方へ來いと言へ——彼奴は僧侶だ、何かの役に立つかもしれん——いや、いや！ 天をも地獄をも輕んずるブリアン・ド・ボ・ア・ギルベールなどに懺悔する位ゐなら惡魔に懺悔した方がましだ。——わしは老人達が祈禱の話をするのを聞いた事がある——彼等自身の口でする祈禱の話を——贋坊主に媚びたり、賄賂を使つたりする必要はないと云ふが——併しわしには——わしにはよう出來ない！」

その時とぎれ〳〵に鋭い聲で彼の床の直ぐ側で叫ぶ者があつた——「ルヂナール・フロン・ド・ブーフが生きてゐて、自分に成し得ない事があると言ふのか？」

フロン・ド・ブーフは良心の惱みと神經の興奮の爲めに、彼の獨語の妙に中斷した中に、その當時の迷信の信ずる所に據れば、つまり死に瀕した人々の床を圍み、彼等の考へを迷はし、彼等の永遠の幸福に關する瞑想を妨げようとする惡魔の聲を聞いたのである。彼ははげしく身を震はして縮こまつた。併し直ぐにいつもの決斷力を奮ひ起して叫んだ、「其處にゐるのは誰だ？——俺の言葉を夜鴉のやうな調子で眞似ようとするのは一體何物だ？——寢床の前へ出て來て、よく姿を見せろ。」

「わしは御身の惡靈だ、ルヂナール・フロン・ド・ブーフよ、」とその聲は答へた。

「若しお前が本當に惡魔であるなら、お前の姿をはつきり見せてくれ、」と死に瀕した領主は答へた。「俺がお前を見てひるむなぞと思ふな！ 永遠の牢獄にかけて言ふが、わしがこの世の危險と戰つたやうに、今身の周りを飛び廻るこの恐怖と格鬪する事が出來さへしたら、俺がその爭ひから尻込みしたなぞとは、天國にも地獄にも言はせはしないものを！」

「貴樣の罪を考へよ、ルヂナール・フロン・ド・ブーフ——貴樣の反逆を、掠奪を、虐殺を！——あの放蕩無賴のジョン親王を唆かして白髮の父君に背かしめたのは誰だ——彼の寬大な兄上に背かしめたのは誰だ？」

「お前が惡魔であらうとも、僧侶であらうとも、若しくは何であらうとも、」とフロン・ド・ブーフは答へた、「お前は眞赤な嘘吐きだ！——俺は何もジョン親王を背かせはしない——俺だけではない——五十人の騎士や領主がしたのだい——あの人達程立派な槍中部地方の華ともいふべき人達だ——五十人でした罪を俺一人で負はねば兵は嘗てなかつた——偽りの惡魔め、俺はお前を物とも思はならぬのか？——偽りの惡魔め、俺はお前を物とも思はないぞ！ 出て失せろ、そして二度と再び俺の寢床に近寄るな——若しもお前が人間なら、俺を靜かに死なしておくれ——若し又惡魔なら、お前の來る時には未だ早い。」

「靜かには死なせはしない、」とその聲は應じた。「たとひお前が死んでもお前の犯した人殺しを想ひ起させてやらう——この城に嗄した呻吟の聲を——城の床板を彩つた血潮のことを！」

「お前はそんなけちな惡意で俺の心を動かすことは出來ないぞ、」フロン・ド・ブーフは物凄い作り笑ひを浮べて答へた。「あの不信者の猶太人——俺がしたやうに彼奴を片づける事は神樣も許される行ひだ。さもなくば何故にサラセン人の血潮にその手を浸す人々が神聖とせらるゝのか？——俺が斬り殺したサクソンの豚共、彼奴等は我が國の、いや我が血筋の、いや我が君樣の仇敵だ。——ハハハッ！

俺の鎧には斬り込む裂け目なんぞありやしないよ——おまへは逃げたのか？——默つたな？」

「いや、穢らはしい親殺しめ！」と例の聲は答へた。「お前の親父の事を思ひ出せ！——親父の死ざまを思ひ出せ！——あの饗宴の席の事を思ひ出せ、父親の鮮血の而も息子の手で、漲り溢らされたその席を！」

「あゝ！」長い沈默の後に領主は答へた。「お前がそれを知つてゐる以上は、お前は正しく惡の王樣だ、そして坊主共が言ふ通り全智全能だ！——俺獨りの胸と、もう一人の胸の中に祕めて置いたと思つたあの祕密——あの妖婦、俺の罪の分擔者。——行け、俺を獨りにしてくれ、惡魔め！ して、あのサクソンの鬼婆ウルリカを探せ、俺と彼奴とだけでみた事柄をお前に告げる事が出來るのは、彼奴だけだ。——死人の傷を洗ひ、曲つた死骸を延ばし、その死人に時が來て、自然に死んだ人のやうに見せかけた彼奴の處へ行け——彼奴の處へ行け——彼奴は俺を誘惑した女だ、この所行のけがれた瀆動者だ、それにも勝してけがれた報賞者だ——彼奴にも俺と同樣、この地獄に行く前の苛責を嘗めさせろ！」

「あの女は既にそれを味つてゐる、」フロン・ド・ブーフの寢床の前に進み出ながらウルリカが言つた。「あの女はこ

の悔悟の盃をずつと前から飲んで來たが、お前がそれを引き受けるのをみたら、その苦さが幾らか甘くなつたぞ。——そんなに齒を喰ひしばるな、フロン・ド・ブーフ——眼をぐる〳〵廻すな——手を振りしぼるな、威すやうな身振りでその手を俺の方へ振るな！——お前のそのフロン・ド・ブーフといふ姓を、初めて獲てやつたお前の名高い先祖の手のやうに、唯一擊で山の牡牛の頭蓋骨を打ち割ることの出來たその手も、今は俺の手と同樣、弱り果てゝ力なくなつたわい！」

「穢らはしい人殺し婆め！」と、フロン・ド・ブーフは答へた。「忌々しい梟め！ ではお前は自分でその手傳ひをして城の沒落するのをみて喜びたくてやつて來たのだな？」

「さうだ、レヂナール・フロン・ド・ブーフ、」と彼女は答へた。「それはウルリカだ！——殺されたトーキル・ウルフガンガの娘だ！——殺された息子達の姉だ！——お前とお前の父の家に、わしの父と、兄弟と、家名と、名聲と、總てフロン・ド・ブーフの名に依つて失つた一切を要求するのはウルリカだ！——わしの蒙つた害惡を考へてみるがいゝ、フロン・ド・ブーフ、そしてわしが本當を言つてゐないかどうか答へるがいゝ。今まではお前がわしの惡靈であつた、これからはわしがお前の惡靈にならう——わしは死の間際までお前につき纏ふぞ。」

「憎らしい悍婆め！」とフロン・ド・ブーフは答へた、「その瞬間をお前なぞに見せはしない——おーい！ ヂャイルズ、クレメント、それからユースタス！ セイントモーアとスチーヴン！ この忌々しい鬼婆を捕へろ、そして狹間から眞逆樣に拋り投げろ——彼奴は俺達をサクソン人に裏切つたのだ。——おーい！ セント・モーア！ クレメント！ 不實の畜生ども、何處でぐづ〳〵してゐるのだ？」

「彼奴等をもう一度呼んで御覽、勇敢な領主さん、」物凄い嘲弄の笑を浮べて妖婆は言つた。「お前の手下を身の周りに呼び集めるがいゝ、そしてぶら〳〵してる奴等を鞭打つなり、牢屋へぶち込むなりするがいゝ——だが、覺えてお置き、大將、」突然調子を變へて彼女は續けた。「お前は彼奴等の手から答へも、助けも、服從も獲られやしない。——あの恐ろしい物音を聞くがいゝ。」その時、再び始められた攻擊と防禦との雄叫びが城の狹間から物凄く響いて來たからである。「あの鯨波に、お前の家は沒落して行くのだ——フロン・ド・ブーフの威力の、血で塗り固められた建物はその礎からぐらついて來た、而も彼奴が一番賤しんでゐた仇敵の眼の前で！——サクソン人が、レヂナール！——賤しめられてゐたサクソン人が、お前の城壁を攻擊してゐるのだ

ぞ！——お前は何故疲れ果てた牝鹿のやうに、此處に橫はつてゐるのだ？ サクソン人がお前の城塞へ押寄せて來たのに。」

「神よ、惡魔よ！」と傷ついた騎士は叫んだ。「おゝ、亂鬪の眞只中に歩んで行き、俺の名に相應はしい死方をする唯一瞬時の力さへあつたらなあ！」

「そんな事を考へなさんな、勇敢な戰士さん！」と彼女は答へた。「お前には決して武士としての死方をさせてはやらない、お前は百姓達が周りの蔽ひ物に火をかけた時、洞穴の中にゐる狐のやうに死なしてやるんだ。」

「憎々しい妖婆め！ お前は嘘つきだ、」とフロン・ド・ブーフは叫んだ。「俺の家來達は勇敢に戰ひ、——俺の城壁は高くて頑丈だ、——俺の戰友達はサクソンの全軍をも恐れはしない、假令彼奴等が、ヘンヂスト（五世紀の頃英國のケントに王國を建つたサクソンの一首長、ホーサは其弟）やホーサに指揮されてゐたとて！ ——寺侍と傭兵との鬪の聲が戰場の上に空高く立昇るのが聞える！ して、俺の名譽にかけて、わし等が防戰の喜びの爲めに、輝く狼煙を揚げる時には、お前は體も骨も殘らず燒いてしまつてやるぞ。俺は生き殘つて、お前が地上の火から地獄の業火へ飛び込んでゆくのを見るだらう、その地獄は未だ嘗てお前のやうな極惡非道な惡魔を送つて寄越した事はないわい！」

ウルリカは答へた、「證據を見る迄さう思つてゐるがいい——だが、いや！」彼女はふと口を噤んでからまた言葉を續けた、「今にもお前の運命を知らせてやるぞ、それはお前の力も、權力も、勇氣も、避ける事の出來ない運命だ、それはこの纖弱い腕で、お前の爲めに用意したものではあるが。——そらもう眞黒に折重つてこの室に渦卷いてゐるこの燻つてゐる息詰るやうな煙に氣が付いたか？——お前は唯お前の張り裂けようとする眼が眩んだ爲めだと思つたのか——お前の息詰る呼吸のつらさの爲めだと思つたのか？——いや〳〵！ フロン・ド・ブーフ、外の原因があるのだぞ——お前はこの室の下にある薪の倉庫を覺えてゐるか？」

「あまめ！」と彼は憤怒の餘り叫んだ、「うぬがそれへ火をつけやがつたな？——たしかに！ うぬがつけた！ 城は今焰に包まれてゐる！」

「少くとも、焰は素早く立昇つて行く、」恐ろしい沈着きを以てウルリカは言つた。「そしてこれから直ぐ寄せ手に、火を消さうとする敵に向つて、今のうちに、うんと攻め立てろといふ警告の合圖をしてやる。——ではさやうなら、フロン・ド・ブーフ！——ミスター、スコギュラ、ザァネボック、昔のサクソンの鬼神達——僧侶達の言葉では惡魔達よ——

どう、ぞお前のいまはの床に慰め人の代役を勤め給はんことを！　その役目をウルリカは今、辭退するのだ！——だが、若しお前が、ウルリカも自分と同じ暗い岸邊に行くのだといふことを知つて、慰めになるのなら、さう思ふがいい。それは、お前の罪の同伴者であつたやうに、天罰の同伴者として行くのだ、——さやうなら、親殺しよ、永久におさらばだ！——この圓天井の一つ〳〵の石が舌を持つて、その親殺しの汚名を、お前の耳に響かせてくれるやうに！」

さう言ひながら、彼女は部屋を立ち去つた。そして、フロン・ド・ブーフは、彼女が扉に錠をかけた、而も二重錠をかけた時に、重々しい鍵の響を聞く事が出來た。かうして彼は逃亡の望の最も微かな機會さへ絶ち切られたのである。苦悶の極點に達した彼は自分の家來と同僚とを呼んだ——「スチーヴンとセイント・モール！——クレメントとヂャイルズ！——俺は此處で助ける者もなく燒け死んでしまふ！——助けに來てくれ！——助けに！　勇敢なボア・ギルベール、剛膽なド・ブラシイ——呼んでゐるのはフロン・ド・ブーフだ！——お前達の主人だぞ、この裏切者の從者ども！——お前達の友人だぞ——お前達の戰友だぞ、お前達、嘘つきの眞實のない騎士ども！——叛逆者に當然なあらゆる呪咀がお前達の卑怯な頭の上に下るぞ、お前達は俺がこんなにみじめに死んでゆくのを、捨てゝ置かうとするのか！——あいつ等は俺の言ふ事を聞いてはくれない——あいつらは俺の言ふ事が聞えないのだ——俺の聲は戰ひのざわめきのうちに紛れてしまふのだ。——煙は益々濃く渦卷いて來る——火はもう下の床に燃え移つた——おゝ、天の空氣を唯一息だけでも吸ひたいなあ、たとへその代りに卽座に死ぬるにしても！」そして、絶望の爲めに狂亂して、この哀れな者は時としては戰士達の叫びに聲を合せたり、時としては自分に、人類に、そして天國に迄も呪咀の言葉を浴せかけた。——「紅の焰が、濃い煙の中から仄めいて來るわい！」と彼は叫んだ、「惡魔が得意の旗印を揭げて、俺の方へ攻め寄せてくる、——忌はしい精靈よ、退け！——俺は友達と一緒でなくてはお前の御供はしないぞ——この城壁を護つてゐるものは、みんなお前のものだ——フロン・ド・ブーフだけが選び出されて、唯獨り行くと思ふのか？——馬鹿——あの不信な寺侍も——放蕩無賴なド・ブラシイも——あの穢らはしい人殺し賣女のウルリカも——俺の陰謀を手傳つた人々も——俺の捕虜になつたサクソンの犬どもも、呪はれた猶太人どもゝ——今迄に沒落の道を辿つた立派な仲間の者どもゝ——みんな俺の後について來るんだぞ——ハハハハッ！」そして彼は圓天井が響き返す迄、狂氣じみた大きな聲で笑つた。「そこで笑ふのは誰だ！」と、急に別な氣分に變つてフロン・ド・ブーフは叫んだ、何故と言ふに戰ひの騷ぎも、彼の狂氣じみた笑ひ聲の反響が、彼の耳に戻つて來るのを妨げはしなかつたから——「そこで笑ふのは誰だ？——ウルリカ、お前か？——言へ、鬼婆め、言つたら俺はお前を許してやるぞ——何故つて唯お前と地獄の惡魔だけがこんな時に笑ふ事が出來るからだ。退け！退け！」——

が併し、この瀆神者で親殺しである者の死の床の描寫をこれ以上進めることは、神慮に背く結果になるであらう。

（三十一）

も一度崩れ口へ、味方の者共、も一度、
さもなくばわがイングランド人の死骸で
城壁を埋めてくれい、
こら、立派な鄕士等よ、
汝等の手足はイングランドで造られたものだ、今こそ
牧場で養つた元氣を出して——

さすがは育ち甲斐があるなと
われらに證言させろ。

（ヘンリイ五世）

セドリックは、ウルリカの言葉をさほど信じてもゐなかつたが、その約束を黑裝束の騎士とロックスリイとに傳へることを忘れなかつた。いざと云ふ時には彼等の進入を容易にすることが出來るやうな味方が城中にゐるのを知つて、彼等は大に喜んだ。そして、彼等は殘酷なフロン・ド・ブーフの手にある捕虜たちを解放する唯一の手段として、如何なる不利な事情があらうとも、一たび强襲を試みなければならないといふセドリックの意見に直ちに同意した。

「アルフレッド大王の血筋（ローエナゴロ姬のこと）が危くされようとしてゐるのだ」とセドリックは言つた。

「高貴な姬君の名譽は風前の燈火だ」と黑裝束の騎士は言つた。

「そして又、私の飾り帶にある聖クリストファ樣の御像にかけて」と赤心を籠めて鄕士は言つた、「あの氣の毒な殊勝なワンバの安全の爲めにだけでも、私はどんな危險を冒さうと、彼の頭の毛一筋でも傷つけさせは致しません。」

「わしもその所存だ」と和尙は言つた。「はて皆樣！　わ

しは堅く信じてゐますが、幇間は――と言つても、その仲間の間でも相當幅をきかし、その技にも長じ、一杯の酒に一片の燻肉と同じ位ゐの風味を添へることの出來る幇間の事を言ふのだが――實際、そのやうな幇間には、彼の爲めに祈りを捧げ、危難の際には彼の爲めに戰ふやうな賢い僧侶に不自由さしてはなりません、わしは彼の爲めに彌撒を唱へたり、槍を振つたりするつもりだ。」

さう言ひながら彼は、恰も牧童がその輕い杖を振り廻すやうに、重い戟を頭の上に振りまはした。

「その通りだ、和尙樣、」と黑裝束の騎士は言つた。「眞實だ、聖ダンスタン樣が御自身で言はれたやうに眞實だ。――さて、ロックスリイ殿、セドリック殿がこんどの攻擊の指揮をなさるのが、よろしくはないかな？」

「なか〳〵もつて、」とセドリックは答へた。「この不幸な土地にノルマン人の建てましたこの暴虐の棲家を、どうして攻め取るか、又は防ぐか、私はまだ一度も研究したことがございません。私は先頭の一人となつて戰ふでございませう。でも、私が瞻略に於いて、又城砦の攻擊に於いて、あまり物慣れぬ兵士であることは、各々方がよく御存じの通りでございます。」

「セドリック殿がさう申さるゝ上は、」とロックスリイが言つた、「私は喜んで弓兵隊の指揮を身に引き受けるでございませう。若しも城内の兵士どもが城壁の上に現はれても、クリスマスの豚の燻製に丁香をふりかけるやうに、其奴等に味方の矢を射かけることが出來ませんでしたら、私は自分のあの寄合所の木に吊り下げられても苦しくはございません。」

「よくも言はれた、勇敢な鄕士殿、」と黑裝束の騎士は言つた。「若しも私がこの戰に指揮をする資格があると思召されるなら、そして又、これ等の勇敢な將卒の間に眞の騎士――と私自身を呼んでも差支へあるまいと考へるが――のあとに進んでついて來るだけの人があるなら、私は自分の經驗から學び得た限りの祕術を盡して、この城壁の攻擊の指圖を致さう。」

指揮者の役割がかう云ふ風に定まつたので、彼等は先づ第一回の攻擊を開始した。その結果は讀者が既に知つてゐる通りである。

外堡を奪ひ取つた時、黑裝束の騎士はその吉報をロックスリイに傳へ、同時に、敵がその兵力を集中して突然進出し、一度失つた外堡を再び奪ひ還すことのないやうに、城を嚴重に監視することを彼に要求した。これこそ騎士の專ら避けたいと望んでゐたことである。と云ふのは、彼の率ゐる

兵士達は訓練のない速成の志願兵達で、武裝も不完全なら訓練も行き屆いてゐないといふ風だつたので、防禦攻擊兩方の武器を十分に備へてゐる老練なノルマンの兵士達――寄せ手の熟誠と元氣とに對抗して、完全な訓練と武器の不斷の使用から起るあらゆる自信を抱いてゐたその兵士達――の突然の攻擊に會つては、非常な不利に陷らなければならないといふことを彼は知つてゐたからである。

騎士は戰ひの合間を利用して一種の浮橋即ち長い筏を造らせた。彼はそれに依つて敵の攻擊を冒して濠を渡らうとしたのである。これは相當の時間を要する仕事であつたけれども、また一方ではウルリカをして彼等の爲めに敵を牽制する計畫――それは何であるかは分らないが――を實行せしめる餘裕を與へたので、首領達はそれほど遺憾にも思はなかつた。

併し筏が出來上ると、「今はもう一刻も猶豫すべきではない、」と黑裝束の騎士は言つた。「日は段々西に沈んで行く――併し、わしには責任のある仕事があつて、この上一日も各々と留まることは出來かねるのだ。尙ほその上、急いで目的を果さなければ、騎兵の一隊がヨークから來て我々を襲擊する慮れがある。そこで、御身等のうちの誰かゞロックスリイのところに行つて、城の本門へ矢を一齊に浴せかけ、恰もそこを攻擊しようとするかのやうに進み出よと傳へて欲しいのだ。して御身達、眞のイングランド魂を持つ者達よ、わしに加勢して、彼方の城門が開かれるや否や濠の上に筏を眞直に渡す用意をせよ。わしのあとに勇ましく續いてくれ、そして城の表壁の非常口を打ち破る手助けをせよ。この働きを好まぬ者達、若しくは十分その武裝の出來て居らぬ者達は外堡の頂きに登り、弓弦を耳の高さまで引き絞り、城壁に登ると見える者は、如何なる者も御身等の矢で打ち滅すように努められよ――セドリック殿、貴方は殘りの者達の指圖をお引き受け下さるか？」

「とんだこと、ヘリワード（キリアム第一世の代のイングランドの愛國者）の靈にかけて！」とセドリックは言つた。「指圖はわしには出來ないが、行けと仰しやる處には、何處でもいゝ眞ツ先きに行きます。若しそれが嘘だつたら、子々孫々、死んだ後までもわしを呪はれるとも苦しくはござらぬ――戰ひこそわしの持ち前だ戰ひの先陣に立つ事こそ、わしに適はしいことなのです。」

「しかしながら、セドリック殿、よくお考へ下さい！」と騎士は言つた、「貴方は鎖帷子も胸甲も持たず、その輕い兜と、小さい丸楯と劍との他には、何ものも無いではございませんか。」

「却つて好都合です！」とセドリックは答へた。「その爲め

一層輕々と城壁に攀ぢ上ることが出來る。して、騎士殿、わしの自慢をお許し下さい、わしは今日サクソン人の裸の胸がノルマン人の胸甲と同樣、大膽に戰場に曝されるのを御覽に入れませう。」

「では、どうぞ、」と騎士は言つた、「扉を開け放つて、浮橋をお掛け下さい。」

外堡の內側の壁から濠に通じ、且つ城の表壁の非常口と相對する位置にある小門が今や突然開かれた。それから假橋がどつと投げ出されるや、やがて水上にその影が閃いたと、それが城と外堡との間に橫はり、二人の人が肩を並べて濠を渡ることが出來る不安定な通路となつた。不意を襲ふことの大切なことを十分知つてゐる黑裝束の騎士は、セドリックをすぐ後に從へ、身を躍らせて橋に乘り、對岸に達した。こゝで彼は斧を揮つて城門を打ち碎き始めた。彼は一部分敵の放つた矢や石を以前の跳橋のあとによつて防いだ、この橋は寺侍が外堡から退却する時、その跳橋を上げる分銅を小門の上部につけたまゝ、彼が破壞したのである。黑裝束の騎士の從者達は何もさうした身を護る物を持たなかつた。二人は弩の矢で直ちに射殺され、更に二人は濠の中へ打ち倒され、他の者達は外堡の中へ引き返した。

セドリックと黑裝束の騎士との位地は今や全く危險であつた。そして外堡內の弓兵達の不斷の援助がなかつたならば、尙ほ一層危險に陷つたであらう。弓兵達は狹間の上に絕えず、矢の雨を降らせ、其處にもつてゐる敵兵の注意を外らし、自分等の二人の首領に矢彈の嵐を免れしめたのである。さもなかつたなら二人はその嵐の下に打ち倒されて了つたに違ひない。然し彼等の狀態はとても危險で、刻一刻とその度は高まつて行つた。

「意氣地なしども！」とド・ブラシイは周圍の部下に叫んだ。「貴樣達はあの二匹の犬を城壁の下から追拂ふことも出來ないで、それで弩兵と云へるか？——どうにも出來ないのなら、狹間から笠石を拋り投げろ——鶴嘴と槓杆を握れ、そしてあの大きな笠石を崩し落せ、」と言ひながら、胸壁から突き出てゐる重い、彫刻のしてある石を指さした。

この瞬間に、寄せ手はウルリカからセドリックに合圖して置いた塔の方角に赤い旗の飜へるのを認めた。剛膽な鄕士ロックスリイが一番先きにそれに氣付いた、彼は攻擊の進行を見たくて堪らず、外堡へ急いで行くところであつたので。

「起てッ！」彼は叫んだ、「起て、イングランドの爲めに！——攻めかゝれ、勇敢な鄕士達！——何故お前達は騎士殿とセドリック殿とが、唯二人進むのをぼんやり眺めてゐるのだ？——突き進め——氣狂ひ和尙、お前が念珠繰の爲めに戰ふことが出來るのを示せ——進め、勇敢な鄕士達！——城は我等の物だ、城內に味方がゐるぞ——あの旗を見ろ、あれは約束の合圖だ——トーキルストーンは我々のものだぞ！——名譽を思へ、戰利品を思へ——もう一息だ、やがて城は我等のものだ。」

さう言ふや、彼はその强弓を引き絞つて、ド・ブラシイの命令で、狹間の一つから岩石を外して、セドリックと黑裝束の騎士の頭上に突き落さうとしてゐた一人の武士の胸には、つゝと一本の箭を射込んだ。第二の兵士がその瀕死の兵士の手から鐵梃をもぎとり、それで笠石をこね上げて外さうとした途端に、彼は頭に一本、矢を射貫かれて、どうと狹間から濠の中へ轉げ落ちた。兵卒達は、縮み上つてしまつた、何故と云ふにどんな甲冑もこの怖るべき射手にかゝつては何の效力もないやうに思はれたからである。

「貴樣達は尻込みするのか、卑怯者！」とド・ブラシイは叫んだ。「やい！——その槓杆を俺に渡せ。」

と言つて、それを引つたくるが早いか、彼はゆるめられた笠石を再び動かした。それは可なりの重さがあつて、若し投げ落されたら、先頭の二人の攻擊者を庇つてゐた跳橋の殘りを破壞するばかりか、二人が渡つた粗末な板橋をもう打沈めたであらう。すべての人は危險を覺つた、そして最も大膽な者も、あの豪膽な和尙自身さへも筏の上に足を踏み出すことを控へた。三度ロックスリイはその矢をド・ブラシイに放つた、そして三度共矢は騎士の堅固な甲冑の爲めに彈き返された。

「忌々しいスペイン銅の甲だ！」とロックスリイは言つた。「イングランドの鍛冶屋が鍛へたのだつたら、丁度絹でも貫くかのやうに、この矢が透つたであらうものを。」彼はそれから終鳴り出した、「同僚達！　友人達！　セドリック殿！お引き返しなさい、そして城の倒るゝにお任せなさい。」

彼の警告の聲は聞かれなかつた、何故なれば、黑裝束の騎士が城門に加へる攻擊が引き起す物音は、二十挺の喇叭の音も打ち消したであらうほど大きかつたからである。忠實なガースはセドリックにその危險な運命を告げ、彼と運命を共にする爲めに板橋の上に躍り出た。然し若し寺侍の聲がド・ブラシイの耳もと近くに聞えなかつたなら、ガースの警告は既に遲過ぎたであらう、巨大な笠石は既にゆら〳〵とよろめいたし、矢張り笠石をこね上げてゐたド・ブラシイはその目的を達したでもあらう。けれども、實際は寺侍が次のやうに言ふ言葉がド・ブラシイの耳もとに聞えた爲めにさうは運ばれなかつた——

「萬事休すだ、ド・ブラシイ殿、城は燃えてゐます。」
「何を言はれるのだ、氣でも狂はれたのか、」と騎士は答へた。
「西側はすつかり足早な焔に包まれてゐます。私は消防に努めましたが無駄でした。」
彼の性格の根柢となつてゐる嚴格な冷靜さをもつて、ブリアン・ド・ボア・ギルベールはこの恐ろしい報告を傳へた。然し聞いて驚いた同僚は、寺侍と同じやうに、冷靜にその報告を受取ることは出來なかつた。
「天に在す聖者達よ！」ド・ブラシイは言つた。「いかゞ致したらいゝでせう？ 私はリモージュの聖ニコラ樣に純金の燭臺を獻ずることを誓ひます。」——
「誓ひなぞはお止めなさい、」と寺侍は言つた、「まあ私の言ふことをお聞きなさい。突擊と見せかけて御身の部下を進めるのだ。そして城門を開けるのだ——かの浮橋には唯二人しかゐません、彼奴等を濠の中へ投げ込んで、外堡へ進擊するのだ。私は正門から擊つて出て、外側から攻擊する考だ。そして若し私達がその位置を取り返すことが出來たなら、援兵の來るまで、或ひはせめて彼等が相當の餘裕を私達に與へるまで、確かに防戰することが出來るでせう。」

「よくも思ひつかれた、」とド・ブラシイは言つた。「では、私は私の役目を勤めませう、——寺侍殿、貴方はよもや私をあやまりは致されまいな？」
「脣齒の間柄、決してあやまりは致さぬ！」と、ボア・ギルベールは言つた。「けれども、お急ぎなさい、必ず！」
ド・ブラシイは急いで部下を呼び集め、そして城門へ押し寄せ、時をおかず、門を開かせた。併し、その門が開くか開かないかに、黒裝束の騎士の怪力は、ド・ブラシイとその部下を物ともせずに城内へ押し切つて入つた。先頭に進んだ二人は立ちどころに倒れた、そして他の者達は退かすまいとする指揮者の努力にも拘らず逃げ足になつた。
「この犬共！」とド・ブラシイは叫んだ、「貴樣達はたつた二人の人間に我々の唯一の安全への道を奪はせるのか？」
「あれは惡魔だ！」眞黒な敵の打擊に尻込しながら、一人の古參の武士が言つた。
「たとひ彼が惡魔であらうとも、」とド・ブラシイは答へた、「貴樣達は彼奴から逃れて地獄の淵へ跳び込まうとするのか？——城は我等の背後に燃えてゐる、卑怯者共！——絶望も貴樣達に勇氣を與へないのか、でなきや俺を進ませろ！ 俺が自らこの勇士と雌雄を決しよう。」
ド・ブラシイはその日、あの恐ろしい內亂時代に贏ち得た

名聲を、立派に且つ雄々しく保持した。城門から入ると圓天井の通路がある、その中でこの二人の怖るべき勇士が今や一騎打をしてゐる、彼等が互ひに交はす猛烈な打擊はこの通路を鳴りどよめかした、ド・ブラシイは彼の劍を以て、黒裝束の騎士は重い斧をもつて戰つた。遂にノルマン人が一擊を受けた、それは彼の楯によつて、幾分力が弱められた、何故と云ふに若しさうでなかつたらド・ブラシイの手足は再び動かなくなつたであらう、といつてもその打擊は怖ろしい勢で彼の兜に降つたので、彼は敷石の床の上に大の字なりに打ち倒れたのである。
「降參せい、ド・ブラシイ、」黒裝束の勇士は、彼の上に身を屈めて、彼の兜の鍔に、騎士が敵に止めを刺す時に用ゐる怖ろしい短劍を擬しながら言つた、(そしてその劍は慈悲の短劍と呼ばれてゐた)、——「助かるにせよ助からぬにせよ、降參せい、モーリス・ド・ブラシイ、さもないと御身は忽ち死骸とならうぞ。」
ド・ブラシイは幽かな聲で答へた。「私は名の知れない相手に降服はしない。貴方の名を名乘られよ、さもなければ存分に私を處理なされよ——モオリス・ド・ブラシイは名もない雜兵の手に捕はれたと言はれたくはない。」
黒裝束の騎士は何事かを敗北者の耳に囁いた。

「助かるにせよ助からないにせよ、私は眞の捕虜として、御身に降服しよう、」と彼の嚴格な斷乎たる頑强さの調子を、澁々ながら深い服從のそれに代へて、このノルマン人は答へた。
「外堡の處へ行け、」命令するやうな調子で、勝利者は言つた、「そしてそこで私の次の命令を待て。」
「けれども先づ、私の言ふことをお聞き下さい、」とド・ブラシイは言つた、「それは御身にとつても知る必要のあることだ。アイヴンホーのキルフレッドは負傷して捕虜となつてゐる、今直ぐ助け出さないと、燃えさかる城の中で燒け死ぬだらう。」
「アイヴンホーのキルフレッドが！」と黒裝束の騎士は叫んだ——「捕虜、そして燒け死ぬ！——若し彼の頭の毛一筋でも焦げやうなことがあつたら城中の者總ての命をもつて、その償ひをしてくれるぞ——私を彼の部屋へ案內しろ。」
「あそこの廻り階段をお登りなさい、」とド・ブラシイは言つた。すると彼の部屋に參られます——私の案內を受け納れて下さいますか？」と素直な聲で、彼は附け加へた。
「いや、外堡へ行け、そこで私の命令を待て。私は御身を信用せぬ、ド・ブラシイ。」
この果し合ひとその後でこの短い會話が取り交はされて

ゐる間に、セドリックは、一隊の兵士の先頭に立つて、城門が開かれるのを見るや否や橋を押渡り、意氣沮喪して絶望してゐるド・ブラシイの家來どもを逐ひ退けて突き進んだ。その中で彼の和尚が特に際立つて見えた。そのうちには助命を乞ふ者もあれば、空しく抵抗を試みるものもあつた。が大部分の者は城の中庭の方へ逃げた。ド・ブラシイは地面から身を起して、物悲しさうな眼付で彼の征服者の方をちらと見た。「彼は私を信用しない、」と彼は繰返した。「然し私はこれ迄彼の信頼に値したぐらうか？」彼はそれから劍を床から拾ひ上げ、服從の印として兜を脫ぎ、そして、外堡の方へ行く途中で出會つたロックスリイに劍を渡した。

火の手が增し加はるにつれて、その兆候はやがて、アイヴンホーが猶太女レベッカの看護を受けてゐる部屋の中にも現はれるやうになつた。彼はその前から戰ひの物音によつて短かい睡眠を破られてゐた。そして、彼の熱心な願みによつて、攻撃の成り行きを見まもつて、彼に報告する爲めに再び窓際に立つた彼の附添人は、くすぶる、息詰るやうな煙の增して來るにつれて、しばらくの間は、看病も報告も、どちらの役目も果すことが出來なかつた。終に部屋の中に渦卷き込んだ煙の雲や——戰ひの響にも紛れなく聞える水を求める叫びは、彼等をして新しい危險の近づいたことを感ぜしめた。

「城が燃えてゐますわ、」とレベッカは言つた。「燃えてゐますわ！——どうしたら助かることが出來ませう？」

「お逃げ、レベッカ、わしには關はずお逃げ、」とアイヴンホーは言つた。「どんな人力もわしを救けることは出來ないのだから。」

「私は逃げはいたしません、」とレベッカは言つた、「生きるも死ぬるも、私達は共にいたしませう——でも、神樣！——私のお父樣、私のお父樣——お父樣の運命はどうなるのでせう！」

この瞬間に部屋の扉がさつと開いて、寺侍が現はれた。——見るも物凄い姿である、何故といふに彼の黃金色の甲冑は破れて、血に塗れ、そして兜の前立は一部分は捥ぎ取られ、一部分は燒かれてゐた。「とう〳〵お前を見付けたぞ、」と彼はレベッカに言つた。「お前と喜びも悲しみも共にせうとの約束を、わしが違へぬと云ふことをお前に證明してみせよう——身の安全を計るには唯一條の道しかない、わしはそれをお前に知らさうと思つて、數多の危險を冒してわざ〳〵こゝまで來たのだ——立て、そして直ぐわしのあとについて來い。」

レベッカは答へた——「一人ではついては參りません。若しあなたが女からお生れになつたのなら——若しあなたがお心に露程の慈悲の念がおありなら——若しあなたの心があなたの鎧の胸板のやうに堅くないのなら——私の年老つた父をお助け下さい、——この傷ついた騎士樣をお助け下さい。」

「騎士だつて、」と持ち前の冷靜さをもつて寺侍は答へた、「レベッカ、騎士はその運命を逃れることは出來ない、たとひそれが劍の形で來ようと、炎の形で來ようと——また猶太人なぞが何處でどんな風にその運命に遭はうと、さやうなことに頓着するものはあるまい。」

「狂氣武士、」とレベッカは言つた、「お前なんかに助けて貰ふよりは、火焰の中で死んだ方が餘程ましだ！」

「こんどはお前の自由にはさせないのだ、レベッカ——お前は一度は俺を欺いたが、決して二度とその手には乘らないぞ。」

さう言つて、彼は怯える少女に摑みかゝつた。彼女はけたゝましい叫び聲をあげた。彼はそんな叫び聲には頓着もせず、又アイヴンホーが彼に浴せる脅迫や挑戰の言葉などには耳も假さずに、レベッカを兩手に抱へて部屋の外に連れ出した。

「寺の犬——教團の恥さらしめ——その少女を離せ！　ボア・ギルベールの反逆者、このアイヴンホーが貴樣に命ずるのだ！——卑怯者め、俺はきつと貴樣の心臟の血を殘らず流してやるぞ。」

「御身が叫ばれなかつたなら、」とこの時、部屋に入つて來た黑裝束の騎士が言つた、「御身を見付けることも出來なかつたであらう、キルフレッド殿。」

「若し貴方が眞の騎士でおありなら、」とキルフレッドは言つた、「私の事などはどうでもよい——あの强奪者の後を追ひかけて下さい——それからローエナ姬をお助け下さい——セドリック殿の身を守つて下さい。」

「いづれ追々には、」柳錠紋の騎士は答へた、「が先づ御身を救ふのが第一だ。」

そしてアイヴンホーを引抱へて、寺侍がレベッカを運び去つたと同樣、樂々と彼を運び出して、城門まで行き、そこでその重荷を二人の鄕士の看護に委ねて、彼は再び他の捕虜の救助に手傳ふ爲めに城內へ驅け戻つた。

一つの櫓は今や眞赤な焰に包まれ、窓や矢間から物凄い焰を吐き出してゐた。併し他の場所では、城壁の非常な厚さと部屋々々の圓天井とが、火焰の暴威をせきとめて、人間の怒りが周圍の何處の猛火も及ばぬ程の勢で、なほも凱歌を奏してゐた。何故なら寄せ手は城の防禦軍を部屋から

部屋へと追ひまくり、そして暴虐なフロン・ド・ブーフの部下に對して、長い間抱いてゐた復讐の念を、敵の流血によつて存分に滿たしてゐたからである。守備軍の大部分は極力抵抗を試みた——極く少數の者は助命を請うた——が誰一人も助命せられなかつた。空氣は呻き聲と武器のかち合ふ音とで滿された——床の上は絶望に陷り、死に瀕した者共の血潮で辷るほどであつた。

この混亂の場所を通つて、セドリックはローエナの捜索に努め、忠實なガースは、このどさくさの間をセドリックのすぐ後に從いて、主人に向けられる矢彈を外らさうと努めながら、自分自身の安全は顧みなかつた。サクソンの鄕士セドリックは幸にも彼の背後見人の部屋に達することが出來た、丁度その時彼女は助かる望みを全く投げ捨て、苦悶しながら、十字架を胸に當てたまゝ、近づく死を待つてゐた。彼は姫をガースに渡して、無事に外堡に連れ行かせた。そこに行く道は今や敵の影もなく、しかも焔によつて遮られてもゐなかつた。かくして忠勇なセドリックは、彼の友であるアセルスティンの捜索に馳せ回つた、彼はどんな危險を冒しても、このサクソン王朝の最後の芽生えを救はうと決心したのである。然しセドリックが彼自身囚はれてゐたあの古い廣間まで進まないうちに、ワンバの工夫に富んだ天才は、彼自身と逆境に陷つた彼の友とを解放することが出來たのである。

戰ひの物音がその烈しさの絶頂に達した時、この幇間は肺のあらん限りの力を出して叫び始めた、「萬歳！　樂しいイングランド萬歳！——城は奪つたぞ！」そして廣間に散らばつてゐる錆びた鎧の二三の破片を互ひに打ち合はせて、この叫びを一層怖ろしいものにした。

外の、控への部屋に詰めて、既に驚いてゐた一人の番人が、ワンバの立てた物音にびつくりして、扉を開け放したまゝ、寺侍のところへ走つて行つて敵軍が古い廣間に闖入したことを告げた。そのうちに捕虜達は難なく次の間に逃れ、そしてそこから戰ひの最後の場所となつた城の中庭へ逃げた。こゝには兇猛な寺侍が馬に跨がつて、乘馬と徒歩の數人の守備兵に取り巻かれてゐた、彼等は自分達に殘された安全に退却する最後の機會を得るために、この有名な大將と力を合はせてゐたのである。跳橋は既に彼の命令で降ろされてゐたが、しかし通路は鎖されてゐた。何となれば、今まで矢で城のこの方面のみを惱ましてゐた弓兵隊は、火が起り、橋が降されるのを見ると、守備兵の遁走を防ぐと共に、城が燒け落ちる前に自分の分捕品の分け前を手に入れようとして入口に群がつて來たからである。一方、小門から入つた寄せ手は今や中庭へと押し出して、殘りの防禦軍を遮二無二攻撃するので、防禦軍はかうして腹背一時に敵を引き受ける事になつた。

併し、城の殘兵どもは、絶望の爲めに、却つて活氣付き、彼等の不敵な首領に鬪まされて、有らんかぎりの勇氣を奮つて戰つた。そして、十分に武裝してゐたので、數に於いては遙かに劣つてはゐたが、一度ならず、寄せ手の軍を逐ひ返すことが出來た。レベッカは、寺侍配下のサラセン奴隷の一人が乘つてゐる馬の背の前の方に跨つて、その小團隊の眞中にゐた。そして、ボア・ギルベールは、血腥い戰ひの混亂のうちにあつて、尚ほ彼女の安全の爲めに凡ゆる注意を怠らなかつた。幾度となく彼は彼女の傍に來た、そして彼自身の防禦を怠つても、彼女の前に自分の三角形の鋼鐵の楯を翳した。そして時々彼女の側から離れ、雄叫びの聲を揚げて突進し、寄せ手の一番の先手を打ち倒し、忽ち驅け戻つては、彼女の馬の手綱を取るのであつた。

讀者諸君の既に知られる通り、非常に懶惰ではあるが、卑怯者ではないアセルスティンは、寺侍がこんなに大切に保護する婦人の姿を見て、それがローエナ姫であつて、あらゆる抵抗をも冒して、騎士は姫を奪ひ去るのであると確信したのである。

「聖エドワードの靈にかけて、」と彼は言つた、「私は彼女をあの高慢な騎士の手から救ふ、そして彼奴をばこの手にかけて殺して見せる！」

「あなたのなさることをよく考へて御覽なさい、」とワンバが言つた。「あわてる手は蛙を魚と間違へて摑むと申します——幇間の印である杖にかけて申しますが、あれは決してローエナ姫ではございません——あの長い黒い頭髪を御覽なさい！——若しもあなたが白と黒との見分けがつかない位ゐなら、あなたが大將になつても、私は決して家來にはなりません——私は誰の爲めかをも分らずに骨を折るわけには參りません。——その上あなたは鎧兜もないではございませんか！——よくお考へなさい、絹のボンネットで鋼鐵の双を防いだ例はございません。——身勝手な人が水に入ると溺れるばかりです。——神御身を守れかし、最も勇敢なアセルスティン殿、」——今までサクソンの軍服を押へてゐた手をゆるめながら彼は言ひ終つた。

一人の兵士がいまはの際まで摑んでゐて、今放したばかりの鎗矛が、その死人の側に横はつてゐるのを鋪床から引摑んだり——寺侍の一團の中へ飛び込んだり、そして續けざまに右左に薙ぎ立てゝ一振りごとに兵士を打ち倒したりすることは、今や異常な憤怒に驅られたアセルスティンのすることは、今や異常な憤怒に驅られたアセルスティンの

強力にとつては、眞に一瞬間の仕事であつた。彼は忽ちボア・ギルベールの二ヤードの隔りにまで迫るや、大音を揚げて彼に挑戰した。

「退け、僞り根性の寺侍め！　その女を離せ、貴樣はその女に手を觸れてはならない——退け、人殺しの僞善な盜賊隊の頭め！」

「犬め！」と齒を噛み鳴らしながら寺侍は言つた、「ザイオンの神聖な寺侍團を罵る方法を、貴樣に敎へてやらう。」かう言つて彼は、馬首を半ばめぐらし、半圓を描いて、サクソン人の方に進み寄つた。そして鐙の上に突つ立つて、馬より高く身を起しながら、勢ひするどく、アセルスティンの頭上に恐ろしい一擊を加へた。

成程ワンバが言つた通り、絹の帽子では鋼の刃は防げなかつた。寺侍の武器はひどく銳利だつたので、強靱なひだのある鎖矛の柄をば柳の小枝でゞもあるやうに粉微塵に打ち碎いた。その鎖矛を不運なサクソン人は騎士の打擊を受け止める爲めに振り上げたのである。が寺侍の武器は彼の頭上を深く斬り下げて、彼を地上に横たへて了つた。

「はゝあ！　うまく寢たな！」ボア・ギルベールは叫んだ、「寺侍を誹謗する者は皆この通りだぞ！」アセルスティンの横死によつて、捲き起された敵の意氣沮喪に乘じ、「助かりたいと思ふ者は俺のあとについて來い！」と聲高く叫びながら、彼等を遮り止めようとする弓兵達を逐ひ散らしつつ、彼は跳橋を押し渡つたのである。彼は馬に跨つたサラセン人と五六人の兵士とを率ゐてゐた。矢が繁く寺侍とその部下とに向つて射られたので、彼等の退却は危險であつた。併し、彼は難なく外堡へ驅け廻つて出ることが出來た。彼の以前の計畫によつて、この外堡をド・ブラシイが占領してゐるかも知れないと彼は想像したのである。

「ド・ブラシイ殿！　ド・ブラシイ殿！」と彼は叫んだ、「貴方はそこに居られるのか？」

「私はこゝにゐます、」とド・ブラシイは答へた、「けれど私は捕虜なんです。」

「貴方をお救ひすることが出來ますか？」とボア・ギルベールは叫んだ。

「出來ません、」とド・ブラシイは答へた。「助かるにせよ助からぬにせよ、私は降服いたしました。私は立派に捕虜となりませう。貴方はお逃げなさい——危險な人物が放たれてゐます——海を越えてイングランドの彼方へお行きなさい——もうこれ以上を言ふことは出來ません。」

「よろしい、」と寺侍は答へた、「若し貴方がこゝに止まれるおつもりなら、私がすでに立派に約束を果したことを

覺えてゐて下さい。危險な人物など何處にでもゐるがよろしい、私が思ふには、テンプルストウの敎堂の城壁は、十分に私を庇つてくれるでせう、靑鷺がその巢に歸るやうに、私も亦そこへ行かうと思ひます。」

かう語り終ると、彼はその從者達と共に馳せ去つた。

馬に乘つてゐなかつた城中の人々は、寺侍が去つて後も矢張り寄せ手に對して必死に戰つたが、それは彼等がいくらか逃れる望を持つてゐた爲め、と言ふよりは、寧ろ助命を乞うても駄目だと思つたからである。焰は城のあらゆる部分に速かに擴がりつゝあつた、その時、その焰を最初に點じたウルリカが、櫓の上に現はれた、古の復讐の女神の一人のやうな姿をして、まだ異敎徒であつた頃の、サクソン人の吟遊詩人によつて戰場で歌はれたやうな軍歌を呶鳴りながら。彼女の長い亂れた白髮は、帽子も冠らない頭から後ろに垂れてゐた。復讐の念を、十分滿足させた醉ふやうな喜びが、狂氣じみた眼光の中にもちらついてゐた。そして彼女は手に持つた絲竿を縱橫に振り廻した。恰も彼女が人間の生命の絲を紡いだり縮めたりする、運命の女神（希臘の神話では、運命の女神クローソ、ラキシス、アツロポスの三柱であるが、一は生命の絲を紡ぎ、二はその長さをはかり、三はそれを切るのが役である）の一人でゞもあるやうに。彼女がこの戰火と殺戮の場所で夢中になつて歌つた野蠻な讃歌の中、いくつかの狂ほしい聯句は傳統の力で今日迄も保存されてゐる。——

一

輝ける鋼を磨け、
白龍の息子等よ！　（昔、白龍はサクソン人の戰の象徵である）
炬火を點せ、
ヘンジスト（サクソン）の娘よ！
鋼は饗宴の肉切りの爲めには輝かず、
そは堅く、廣く、銳く尖れり。
炬火は婚禮の部屋には行かず、
そは燐光もて靑く耀き閃めく。
鋼を磨け、烏は鳴き騷ぐ！
炬火を點せ、ツエルネボックはわめき叫ぶ！
鋼を磨け、龍の息子等よ！
炬火を點せ、ヘンジストの娘よ！

二

黑雲は鄕士の城の上に低くかゝれり。
鷲は叫ぶ——彼は雲の胸に乘れり。
叫ぶなかれ、灰色なる黑雲の騎者よ、
饗宴は用意されたり！
ヴルハラの少女等は前方を眺む、（ヴルハラはスカンデイナヴイア神話中の武人の樂園）
ヘンジストの族は彼等の許に賓客を送り出す。

汝等の黒き捲毛をうち振れ、ヴルハラの少女等よ！
音高く手皷打ちて喜べ！
數々の倨れる歩みは汝等の廣間へぞ向ふ、
數々の兜つけたる頭もまた。

三

夕暮はほの暗く郷士の城の上にかゝれり、
黒雲はその周りに群り來る。
やがてそは勇士の血の如く紅とならん！
森の破壊者(火事)は、その赤き鬣を雲に向けて打ち振らん。
宮殿を皎々と焼き盡す彼は、
赤き、廣き、且つ黒ずめる
彼の燃え輝く旗の手を廣々と
勇士等の闘ふ上に打ち振ふ。
彼の喜びは打ち合ふ劍と破れし圓楯とにあり。
彼は傷口より温く迸る血潮を啜ることを好む！

四

全てのものは滅ぶべし！
劍は兜をうち破る。
堅き鎧は槍もて貫かる。
火は王侯の住居をば焼き盡す、
軍器は戰場の墻壁をば打ち倒す。
すべてのものは滅ぶべし！
ヘンジストの族は逝けり——
ホーサの名は今は無し！
されば汝等の運命を恐るゝなかれ、劍の子等よ！
汝等の双をして醇酒の如く血潮を飲ましめよ。
殺戮の饗宴にたのしめよ、
輝く廣間の燈火の蔭に！
汝の血の温き間は汝の双も強からん
憐みをも恐れをも投げ捨てよ、
復讐は唯一瞬のことに過ぎざれば。
強き憎しみすら消ゆべし！
我もまた滅ぶべし！

激しい火の手は今やあらゆる障碍物に打ち勝ち、燃え盛る巨大な炬火となつて、夕暮の空へと立ち登り、遠く廣く隣りの國からさへ望まれた。數知れぬ塔が燃え盛る屋根と垂木と共に倒壊した。それで闘士等も中庭には居られなくなつた。最早殘り少なになつた防禦軍は、四方に散つて附近の森林に逃げ込んだ。勝利者達は、大きな隊をなして集まり來り、多少恐れながらも亦驚きの念をまじへて、火焔

を凝視した。その火焔の光で彼等自身の隊伍や武器が暗赤色にきらめいた。歡喜の餘り兩手を打ち振りながら、恰も自分で起した火災の女王として君臨するかのやうに、高い足場を選んで立ち上つたサクソン人ウルリカの狂亂した姿が暫くの間はつきりと見えてゐた。遂に、怖ろしい響と共に櫓全體が崩壊した、そして彼女は彼女の暴君を呑んだ焔の中に滅びて了つた。恐怖に滿ちた沈默が武裝した見物人等の囁きを封じて了つた。彼等は數分の間、十字を切るより他には指一本も動かさなかつた。その時ロックスリイの靄が開えた、「よろこび叫べ、郷士達よ！——暴虐者の巢窟は最早滅びた！　各々ハートヒル街道の樹の下の會合の場所へ戰利品を運んで行け。夜の明け方に我々はそこで我々の軍勢に公平に分配しよう、この偉大な復讐の仕事に加はつた我々の尊敬すべき同盟者達にも分けることにしよう。」

（三十二）

實に如何なる國家もその政綱がなくてはならぬ。
　王國には勅令、都市にはその掟が。
森を彷徨ふ猛き浪士すら、
　倘ほ且儀を守る所がある。
アダムが綠の裳着けて以來
　人と人との睦み合つて住むのは、
法がその睦まじさを益々堅めるために
　つくられたからだ。
（アダムは人間の祖、初めは全裸體であつたが、後恥を知り、無花果の葉を綴り合せて其腰部をかくした。それを無花果の葉のエプロンと云ひ傳へてゐる。創世紀三章七節參照）

（古劇より）

曙の光が檀の森の空地の上に射し初めて、綠の枝は眞珠のやうな露の玉で輝いてゐた。牝鹿はその仔を丈の高い羊齒の隱家から綠の森の一層廣々とした道の方へ連れて行つた。そこには自分の家族の先頭に立つて進んでゆく立派な牡鹿を見張つたり、遮つたりする獵師は一人もゐなかつた。
　浪士達は悉くハートヒル街道の寄合所の樹のまはりに集つてゐた。そこで彼等は城攻めの疲れを癒やす爲めに一夜を過したのである。中には酒で、中には眠りで癒やした者もあつたが、多くはその日の出來事を聞いたり、語つたり、或ひは彼等の勝利の結果、自分達の首領の處置に委せられた分捕品の山を數へたりして自ら慰めたのである。
　戰利品は實に莫大なものであつた。何故かと云ふに、失

ふところは非常に多かつたけれども、多量の胸甲や、立派な甲冑や、美晴らしい衣類などが、豪膽な浪士達の努力によつて確實に占領されたからであつた。彼等はさうした報酬が眼の前にある時には如何なる危險にも脅やかされなかつたのである。然し彼等の社會の法律はひどく嚴重であつたので、公共の所有として、彼等の首領の處置に委ねられた戰利品の一部分でも占有しようと、敢へてするものはなかつた。

會合の場所は年經た樫の木の下であつた。とは云へこの物語の初めの方でロックスリイがガースとワンバとを導いて行つたあの樹ではなく、亡ぼされたトーキルストオンの城から、半哩ばかりのところにある森の圓形になつた空地の中心にある樹であつた。こゝへロックスリイは彼の席を占めた——芝生の玉座が巨大な樫の木の扭ち曲つた枝の下に盛り上つてゐた、そして森の住者達は彼の周りに集つてゐた。彼は自分の右手にある座席を黑裝束の騎士に與へ、左手の場所をセドリックにあてた。

「各々方、私の身勝手をお許し下さい、」と彼は言つた。「然しこの林間の空地では私は君主であり——こゝは私の王國なのです。若し私が自分の領內で何人にか席をゆづつたなら、これらの荒々しい家來達は、私の權力を蔑ろにするでせう。——ところで、各々方、誰か我々の牧師を見かけはなさらなかつたか？　あの短衣（本當の僧侶でない者は短い僧服を着てゐた）の僧は何處にゐますか？　忙しい朝を迎へるには基督敎徒達にとつて、彌撒が一番よいのですが。」——誰もコプマンハーストの僧侶を見た者はなかつた。——「まさかゐないことはあるまいが、」と浪士の首領は言つた、「私はあの愉快な僧侶が少しおそくなつたのは酒瓶のせゐだと思ふ、城が落ちてから彼を見かけたのは誰だ？」

「私こそ、」とミラーは言つた、「あの人が、曆にあるあらゆる聖者の靈にかけて、フロン・ド・ブーフのガスコーニュの酒の樽を味はふのだと言ひながら、穴藏の戶口の前に忙がしさうに、うろ〳〵してゐるのを見かけました。」

「さらば、この世にある限りの聖者達に、」と首領は言つた、「彼があまり多く酒樽を空げて、城の滅亡と共に死んだといふやうなことのありませんようにお祈り致します！——行け、ミラー！——十分な人數をつれて行つて、お前が最後に彼を見かけた場所を搜して見ろ——濠から水を汲んで燻り居る燒け跡に注ぎかけろ——私は石を一つ〳〵掘り返してゞも、我が短衣の和尙を見付けないではおかない。」

興味ある戰利品の分配が始まらうとしてゐる時に、この命令を實行しようと急ぎ去つた人數の多いことは、いかにこの軍勢が、自分等の精神上の敎父の安全を翼つてゐるかをよく證明したものである。

「この間に、そろ〳〵始めるとしよう、」ロックスリイは言つた。「と云ふわけは、この大膽な振舞が諸方に弘まつたなら、ド・ブラシイや、マルボアザンの部下や、他のフロン・ド・ブーフの味方が、我々を攻めに押しかけて來るだらうから、適當な時にこの附近から退いて、安全を計るのがよからうと思ふ。——セドリック殿、」セドリックの方へ振り向きながら、彼は言つた、「その戰利品は二つの部分に分けませう。貴方が御自分に一番ふさはしいと思はれる方をお選びなさい、そしてこの冒險に於いて、我々に味方をしてくれた貴方の部下に酬いるやうにして下さい。」

「親切な鄕士殿、」とセドリックは言つた。「私の胸は悲しみの爲めにつぶれるばかりだ。あの氣高いコニングスボローのアセルステインは最早この世にはゐない——あの聖徒の列に加へられたエドワード懺悔王の最後の血筋がなあ！　望は彼と共に死して再び歸る時期はあるまい！——火花は彼の血潮によつて打ち消され、いかなる人の息吹も再びそれを點すことは出來ない！　私の手許にゐる僅かの人數を除いては、他の大部分の部下が、彼の名譽の亡骸をその最後の宿所へ運びゆかうとして、私の臨席を待ち焦がれてゐるのだ。ローエナ姬はロザーウッドへ歸ることを望まれる、それには十分な軍兵をもつて護衞して上げなければなるまい。私はもつと早くこの場所を立ち去らねばならなかつたのだ。併し私は待つてゐた——それは何も戰利品を受取りたい爲めではないのだ、と云ふわけは、神も聖キットホールドも見そなはせ！　私も部下の何人にも金錢などに指も觸れたくはない、——私はたゞ貴方等に救はれた生命と名譽とに對して、貴方と貴方の大膽な鄕士達に、お禮を述べたいばかりに待つてゐたのです。」

「けれども、」と浪士の首領は言つた、「わし達は高々半分ばかり仕事をしたゞけだ——戰利品の中から貴方の隣人と家來衆とに酬ゆるに足るだけお取り下さい。」

「私は私自身の財產の中から、彼等に酬ゆることが出來ます、」とセドリックは答へた。

「そして中には、」とワンバは答へた、「自分で自分に酬ゆるに足るほど賢しい者もございます。といつて、彼等はみんな全くの空手で歸るといふのではありません。わし等は皆までは馬鹿の眞似をいたしません。」

「それは御隨意だ、」とロックスリイは言つた。「我等の法律は唯我等のみを束縛するのだ。」

「だがお前、氣の毒な奴、」ふり向いて幫間を抱き寄せながら

らセドリックは言つた、「どうしてお前にお禮をしたらよからう、わしに代つて虜ともなり、死出の旅路に就くことをすら恐れなかつたお前に！　誰もかれもわしを見捨てゝ了つた時に、あはれな幇間だけが捨てなかつたとは！」

かう語つた時、荒々しい鄕士の眼には涙が宿つてゐた——それはアセルステインの死に對してさへ起らなかつた感情が今現はれたのである。然し彼のかゝへの幇間の、半ば本能的な愛着のうちには、悲しみそのものよりも、もつと烈しく彼の感情を喚び起す何ものかゞあつた。

「あゝ、」主人に抱かれてゐた身を振りほどきながら、幇間は言つた、「若しあんたが目の中の水で、わしの骨折りに酬いるのなら、幇間も貰ひ泣きをしなくてはなりません、したらわしの商賣はどうなるのでございませう？——だけど、をぢさん、若しあんたがほんとにわしを喜ばさうとお思ひなさるなら、どうぞわしの遊び仲間のガースを許してやつて下さい、彼奴は一週間ほどあんたの手から抜け出して御子息樣にお仕へ致しました。」

「彼を許せ！」とセドリックは叫んだ。「わしは彼を許しもする、又お禮もするつもりだ。——ガースよ、跪づけ。」

——豚飼ひは忽ち主人の足許に跪づいた。——「お前は最早奴隷でも農奴でもないぞ。」杖で彼に觸りながらセドリックは言つた。「お前はもう野原でのやうに自由な人間だぞ、都會でも、田舍でも、森でも、俺はヨールブラガムの領地の中から一ハイド（往時イングランドで一家族を養ふに足る地積で、六〇エーカーから一〇〇エーカー位、一エーカーは日本の四段二十四歩に相當す）の土地をお前にわけてやらう、俺や、俺の子々孫孫から、お前や、お前の子々孫々まで、今後永久に。してこの約束は神かけて間違ひないぞ！」

ガースは最早農奴でなく、自由民でその土地所持となつたので、急に立ち上つて、そして二度までも自分の身の丈程も高く地面から跳び上つた。

彼は叫んだ、「自由民の首から頸輪をとる鍛冶屋と鑢！——旦那樣！　わしの力はあなたの惠みで二倍になりました、だからこれから二倍にあなたの爲めに戰ふつもりでございます！——わしの胸には自由な魂が宿つてゐます——わしは自分にも、周りの者にも、前より變つた人間なのだ。——はゝあ、ファングスよ！」と彼は續けた、——何故と云ふに、その忠實な犬は、彼の主人がこのやうに有頂天になつてゐるのを見て、同感を表はす爲めに、主人に飛びかゝり始めたので、——「お前はまだ主人が分るのか？」

「分るとも、」とワンバは言つた、「ファングスも俺もまだお前が分るよ、ガース、俺達は是非首環をすてる譯にはゆかないが。俺達二人とお前自身とを忘れさうなのは却つて

お前の方だ。」

「俺はお前を忘れる位ゐなら、自分自身も忘れつちまふだらう、」とガースは言つた。「ワンバ、若し自由がお前に似合ふとしたら、御主人樣はきつとそれを與へて下さるに違ひない。」

「いや〳〵、」とワンバは言つた、「ガース兄い、わしがお前を羨むなぞとは思つてくれるな。自由民が戰場へ向はねばならねえ時に、農奴は火の傍に坐つてゐるのだ——マームズベリイのオールドヘルム上人が言はれたことだが——戰場にある賢い人よりも、宴會に出てゐる幇間の方が、ましだ。」

軍馬の足音が聞えて、ローエナ姫が現はれた、數人の騎兵と、彼女の解放を喜んで嬉しげにその槍を振つたり、斧戰をかち〳〵打ち合はせたりする特に强い歩兵の一隊とに護られて。華やかな衣裳をつけ、濃い栗毛の馬に跨つた姫は、立居振舞もすつかりもとのやうに嚴しかつたが、唯見馴れない一種の蒼白さが面に現はれて、彼女の受けた苦しみの名殘を留めてゐた。憂はしげではあるが愛ゝしい額は、自分の解放に對する感謝の印と共に、將來に關する再び甦つた希望の影を宿してゐた。——彼女はアイヴンホーの無事な事を知つた、そして又アセルステインが死んだことも知つた。前者の吉報を聞いて、彼女の胸は限りない喜びから喜びに滿ちた。そして、後者の悲報は、彼女を絶對には喜ばせなかつたとしても、彼女が自分の保護者のセドリックに反對せられてゐた唯一の問題に就いて、これ以上迫害せられることのなくなつたのを、大體好都合だと感じたことは察せられるであらう。

ローエナ姫が馬をロックスリイの席に向けた時、その大膽な鄕士と、彼の部下の者一同は、さつと立ち上つて彼女を迎へた、その樣子は、丁度思はず挨拶しなくてはゐられなかつたかのやうである。彼女は紅の血潮に兩頰を染めながら丁寧に手を振り、また美しいふさ〳〵した垂れ髮が自分の乘馬のうちなびく鬣としばしもつれ合ふまでに、低くかがみながら、僅かではあるが、ふさはしい言葉でロックスリイやその他の救助者達へ感謝のあいさつを述べた。——「勇敢な方々よ、あなた方の祝福を祈ります、」彼女はかう結んだ、「虐げられた人達の爲めに勇ましくも自分の身を顧みなかつた皆樣に對して神樣と聖母樣とが祝福を垂れ、報いをお與へ下さるようにお祈り致します！——若しも、あなた方のどなたかゞ餓ゑられるやうな事があつたなら、ローエナが食べ物を持つてゐることを思ひ出して下さい——若しあなた方が喉の渇きを覺えられる事があつたなら、彼

女が澤山の酒や黒ビールの樽を持つてゐる事を思ひ出して下さい――若し又ノルマン人があなた方をこの道から追ひ出したならローエナは自分自身の森を持つてゐる事を思ひ出して下さい。そこでは私を救つて下すつた勇ましい方々は、存分に狩をすることが出來ます。そして番人は誰が鹿をうつたかなどゝ決して尋ねは致しますまい。」

「有難うございます、姫君樣、」とロックスリイは言つた。「家來一同からも私自身からもお禮を申し上げます。けれども、あなた樣をお救ひすることが、それ自體すでに報酬でございます。綠の林の中を横行する我々は、數々の荒々しい行ひを致します、さればローエナ姫をお救ひしたことは一つの罪滅しとも考へられるのでございます。」

再び馬上から一禮して、ローエナは出發しようと身構へた。然しながら、彼女の供をする筈のセドリックが別れを述べる間、暫らく休んでゐるうちに、彼女は思ひがけなくも、捕虜になつたド・ブラシイの側近くゐることに氣が付いた。彼は兩腕を胸の上に拱いたまゝ、深い思ひに沈みながら、樹の下に立つてゐた、そして、ローエナは彼に見付けられないで、その側を通れるやうに希つた。が、彼は目を上げた、そして、彼女のゐることに氣付くと、恥かしいといふ深い心の閃きが、彼の美しい容貌の上にみなぎつた。彼は非常にきまりわるく、一瞬間立つてゐた。それから、つか〳〵と進み出て、姫の馬の手綱を控へ、そして彼女の前に跪いた。

「姫君ローエナさま、どうか、囚れの騎士を、ちらとでも御覽下さいませ――面目を穢された騎士を。」

「騎士殿、」とローエナは答へた、「あなたのお企てになつたやうな事は、本當は不面目や失敗ではなくて、成功の方でございます。」

「姫君よ、勝利は心を柔げる筈でございます、」とド・ブラシイは答へた。「ローエナ姫さま、あはれな情慾の爲めに行つた亂暴な振舞を許してやると、たつた一言仰しやつて戴きたうございます。さすればこのド・ブラシイも、もつと氣高く姫に仕へることも出來るといふことを、やがてお知らせ申上げます。」

「私は御身を許します、騎士殿、然しそれは唯基督教徒としてゞございます。」

「その意味は、」とワンバは言つた、「姫がお前を少しもお許し遊ばさぬといふことだ。」

「然し私はあなたの狂氣が惹き起した、みじめさと悲しさとを許すことは決して出來ません、」とローエナは續けて言つた。

「姫の手綱を捉へてゐる手を離せ、」と近づいて來たセドリックは言つた。「我等の頭上にかゝる赫々たる日輪にかけて、若しそれが手の汚れでなかつたなら、わしは貴樣を槍で地上に打ちつけて見せように――だが、モーリス・ド・ブラシイ、貴樣がこの卑怯な企てに加はつたからには、後でひどい目に會はすからさう念へ。」

「捕虜をおどかすのはいとたやすいことだ、」とド・ブラシイは言つた。「だが、サクソン人は露ほどでも好意を持つたことがあるか？」

それから二歩ばかり後へ退つて、彼は姫を前へ進ませた。セドリックは、出掛ける前に、黒裝束の騎士に對し、特別な謝意を述べ、そして自分に隨いて、ロザーウッドへ行つてくれるようにと熱心に頼んだ。

彼は言つた、「あなた方放浪の騎士殿は、運勢を槍の穗先に任せようとなされて、土地や品物などは何んともお思ひにならないことはわしもよく存じて居ります。然しながら戰爭といふものは氣紛れな情婦のやうなもので、放浪を商賣とする騎士にとつても、家庭といふものがやゝともすると欲しくなるのでございます。氣高い騎士殿、わしはロザーウッドの館の一部をあなたに進ぜませう。セドリックは運命があなたに加へた損害を償ふに足るだけの富は持つて居ります、そして自分の持つだけのものは、みんな命の恩人に差上げる筈でございます。――どうぞ、ロザーウッドへ、お越し下さい、他人行儀の客人としてゞはなく、伜か弟のやうに肉親のものとして。」

「セドリック殿はすでにわしを裕福にして下すつた、」と騎士は言つた、――「卽ちわしにサクソン人の德義の眞價を教へられたのだ。勇敢なセドリック殿、ロザーウッドへお供しませう、而も出來るだけ速かに。けれども、目下のところは、極めて重大な、差迫つた用件がわしの行くのを妨げてゐます。恐らくわしが參ります時には、貴方の竟大さを試すほどの賜を要求しますでせう。」

「それは今から承知して置きます、」と心安げに、その掌を黒裝束の騎士の手袋をはめた掌の中に置きながら、セドリックは言つた――「たとへ、わしの財產の半ばを投げ出すほどでございましても、今から承知して置きます。」

柳錠紋の騎士は言つた、「そのやうに輕々と約束をなさるものぢやございません、なれどわしがお願ひする賜は是非とも得たいものです――まづそれまでは、しばしのお別れです。」

セドリックは言つた、「わしは次の事を申上げれば事が足りるのでございます。あの身分の貴いアセルステインの葬

儀中は、わしはコニングスボロー城のお屋敷の住人となつて居ります——その城のお屋敷は、葬儀に加はりたいと望む者には誰にでも開放されます。そして亡くなられた皇子の母君、エディス樣に代つて申しますが——そのお屋敷に、たとへ不成功には終りましたものゝ、アセルスティン殿をノルマン人の鎖と劍から救はうとして、あんなに勇敢に働いたお方を入れない筈はありません。」

「さやう、さやう、」再び主人の傍に戻つたワンバは言つた、「珍らしい御馳走がある事だらう——あのアセルスティン殿が自分の葬儀に御馳走の食へないのは氣の毒なことだ。——然しあの方は、」重々しく眼を天に向けながら、幇間は言ひ續けた、「天國で食事をなさつてゐられる、そして屹度その御馳走を賞味してゐられることでございませう。」

「黙つて進め、」とセドリックは、この時ならぬ冗談にむつとしたものゝ、ワンバの今までの功勞を思ひ出し、我慢してかう言つた。ローエナは柳錠紋の騎士に向つて神の冥加を祈つた、そして彼等は森の廣い空地を通つて進んだ。

彼等が出發するかしないかに、突然一つの行列が綠の林の樹蔭から進み出て、緩やかにその圓形の空地をめぐつて、ローエナとその從者達のと同じ方向を取つて進んだ。附近の僧院の僧侶達は、セドリックが約束しておいた澤山な寄進又は回向料を當にして、アセルスティンの死骸を乘せた車に附き添うて進んだ、そして僧侶の唱ふる讃美歌につれて、亡き人の死骸は、遠い先祖にあたるヘンヂストの墓場に埋める爲めに、コニングスボローの居城へと、家臣達の肩の上に物悲しく緩やかに運ばれてゆくのであつた。多くの家臣が彼の訃報に接して集つてゐた、そして落膽と悲哀とを、少くとも、あらゆる外面的の喪章に現はして柩の後に從つた。またも浪士達は立ち上り、今しがた美人に捧げたと同じ無造作な、心からの敬意を死者に對して拂つた——僧侶達の、のろい聖歌の聲と悲しげな歩みとは、前日の戰ひに倒れた戰友達の追憶を彼等の心に浮ばしめた。然し、そのやうな追憶は、危險と冒險の生活を送つてゐる人達の心には、永く止まつてゐないのが常である、そこで死の讃美歌の響が、風に乘つて消え去らぬうちに、浪士達は再び戰利品の分配に沒頭し始めた。

「勇敢な騎士よ、」とロックスリイは黒裝束の騎士に言つた、「貴方の親切な心と力强い腕とがなかつたなら、我々の企ては全く失敗に歸したに違ひありません。どうぞこの堆かく積んだ戰利品中からあなたのお氣に召すものを、且つこの寄合所の樹をお取り下さいませんか？」

騎士は言つた、「では、わしも遠慮なく頂かう。わしはモーリス・ド・ブラシイ殿をわしの自由に處分する許しを得たいものです。」

「彼はすでに貴方のものでございます、」とロックスリイは言つた。「彼の爲めには幸せなことだ！　でなければ、わしはこの暴逆者をこの樫の樹の一番上の枝に晒し、彼の部下の傭兵達をも皆集めて、丁度樫の實のやうに其奴の周圍に澤山ぶらさげて、晒し物にしたでせうに。——けれども彼は貴方の捕虜であれば、まづ安全だ、たとへ彼がわしの父を殺したとしても。」

「ド・ブラシイ、」と騎士は言つた、「お前は自由の身になつたのだ——立ち去れ。お前を捕虜にしたお方はお前の過去の罪に卑劣な復讐をすることを潔しとされないのだ。だが今後は氣を附けるがいゝ、さもないと一層悪いことが降りかゝるかも知れないぞ、——モーリス・ド・ブラシイ、ほんとに氣を付けるがいゝ！」

ド・ブラシイは默つたまゝ低く首を下げ、將に立ち去らうとしてゐた、その時郷士達は一齊に呪咀と嘲笑の叫びを上げた。傲慢な騎士は忽ち踏み止まり、後を振り向き、腕を組み、思ふ存分身を伸ばして叫んだ、「默れ、泣きわめく犬共！　追ひつめられて逃げる鹿を追ひかけるやうな卑怯な者共よ——ド・ブラシイはお前等の賞讃を輕蔑すると共にお前等の非難をも嘲笑してやるぞ。自分の藪か洞穴へでも引込んでゐろ、追放された泥棒共め！　そして、お前達の洞穴の近所で騎士らしいことや氣高いことが話される時には口を噤んで居れ。」

浪士の首領が急いで押止めなかつたならド・ブラシイはこの皮肉な挑戰の爲めに矢の一齊射撃を浴びたかも知れなかつた。その間にド・ブラシイは一頭の馬の手綱を捉へた、何故と云ふにフロン・ド・ブーフの厩の中から捉へて來た數頭の馬がまだ裝具をつけたまゝその邊りに立つてゐたからである。しかもこれは戰利品の大切な部分をなしてゐたものである。彼は鞍の上に飛び乘つて森の中を馳せ去つた。

この不意の出來事で捲き起された騒ぎが、幾分鎭まつた時、浪士の首領は自分の首からアシュビイ近くの弓術試合で贏ち得たばかりの立派な角笛と飾り帶とを取つた。

「氣高い騎士よ、」と彼は柳錠紋の人に言つた、「若しもわしが一度身に着けた角笛をお受取り下さるのがお厭でなかつたなら、どうぞこれを勇ましい御振舞の記念としてお納め下さい、——また若し何かなさる事がございまして、勇ましい騎士の身に屢々降りかゝるやうに、御身がトレン

ト川とテイーズ川の間の森でひどい目にお遭ひになるやうなことが起りましたなら、かやうにワ・サ・ホー！　と云ふ三つの調べを角笛でお吹きなさいまし、さすれば屹度助け人を差向けてお救ひしますでせう。」

彼はそれから角笛に息を籠めて、幾度も自分の言つた通りの音を吹きならした、騎士もそこでやうやくその調べを覺えた。

「賜物有難く頂戴いたします、豪膽な郷士殿、」と騎士は言つた。「若しわしがいよ〳〵といふ場合には、貴方と貴方の部下の浪士達の助けほど望ましいものはございますまい。」そしてこんどは、彼が綠林の中に鳴り響くまで笛を吹き鳴らした。

「いかにも見事な朗かな音色だ、」と郷士は言つた。「屹度御身は戰爭のことに劣らず、狩獵のこともよく知つて居られるに違ひない！——御身の若い時分には、屹度鹿狩をされたことがおありなさつた筈だ。——各々方、この三つの調べを記憶するがいゝ、——それは栁錠紋の騎士の呼び聲なのだ。若しその音を聞いて、急いでその急をお救ひしようとしないものがあつたなら、わしはその者の弓弦をもつて彼を懲らしめ我等の仲間から追放するつもりだ。」

「我等の首領萬歳！」と郷士達は叫んだ、「そしてまた栁錠紋の黒裝束の騎士萬歳！——我々が如何に速かに御用を勤めるかを示す爲めに、一刻も早く我等の奉公を求められるゝように御祈りします。」

ロックスリイはまたも戰利品の分配を始めた、而も彼はそれを感ずるに餘る程公平に行つた。卽ち全體の十分の一は教會の爲めと、敬虔な用途の爲めにとり除けられた。次に一部が一種の公共の財産として定められた。そして又一部は死んだ人々の寡婦や子供達の爲めと、數多の無緣者の靈を弔ふ爲めに費すべく指定された、殘りは各自の階級と功績とに從つて、浪士達の間に分配された。えて疑惑を惹きやすいかうした事に關して首領は非常に巧妙な判斷を下し、而も、それが絶對の服從をもつて受け納れられた。黒裝束の騎士は、このやうな無法律の狀態にありながら、彼等自身の間には嚴格な公平な自治が行はれてゐるのを見て少なからず驚いた、そして彼は自分の見聞する所に依つて、浪士の首領が、正義と判斷とに富んでゐると云ふ見解を、益々強める許りであつた。

各々が自分の分け前を取つた時、そして四人の丈の高い郷士に伴はれた會計係が、この團體の共有財産に屬する部分をどこかの安全な隱し場所へ運んでゐる間に、教會に捧げられる部分は、誰にも持ち逃げされずにあつた。

首領は言つた、「あの愉快な和尚さんの消息が聞きたいものだ、——彼は食事に祝福を與へたり、分捕品を分けたりする時には缺席したことがないのだが。して我等の戰利品の中から十分の一稅を取り立てるのが彼の役目なのだ。多分この任務が彼の宗規違反行爲を幾らか庇ふ助となつた。わしはまた彼の同役を程遠からぬところに捕虜にしておいた、それ故わしは彼奴を適當に處理する爲めに和尚樣の助けを得たいのだ——わしはあの無遠慮な和尚さんの安否をひどく氣づかつてゐるのだ。」

「わしもまことに氣の毒に思ひます、」と栁錠紋の騎士は言つた、「といふわけはわしもあの方の草庵で樂しい一夜の歡待を受けた御恩があるので。城の燒け跡へ參りませう、多分あの方について何かの消息が得られるでせうから。」

彼等がかう語つてゐるうちに、郷士達の間に高い叫び聲が聞えて、氣遣つてゐた人の到着が報ぜられた。それはそのづんぐりした姿の見えない先きから、和尚自身の高聲でそれと分つたのである。

「席を空けて下さい、愉快な方々！」と彼は叫んだ。「皆樣方の神父樣とその捕虜との爲めに退いて下さい、——もう一度歡迎の叫びを揚げて下さい。——大將殿、わしは鷲のやうに、獲物をひつ摑んで參りました。」そしてみんなの笑ひ聲に包まれながら、座の中を押し分けて、彼は堂々たる凱旋といつた風で現はれた。片手には大きな矛を持ち、他の手には絞索を持つてゐた、その一方の端には、不幸なヨークのアイザックの首玉が縛りつけてあつた、そして悲哀と恐怖に首垂れた捕虜は勝ち誇つた僧侶に曳き摺られて來た。和尚は大聲に叫んだ——「わしを物語歌か短い叙事詩に歌ひ込めるアラン・ア・デエール（シャーウッドの森にロビン・フッドと共にゐる浪士間の吟遊樂人）は何處にゐる？——聖ハーマンギルド（六世紀の西ゴッ一の酋侯、カトリック教の信仰擁護者として聖列に列せられた）にかけて申すが、勇氣を讃へる手頃な題目がある場合には、この調子よく唄ふ樂手は何時もゐない！」

「御出家、」と首領は言つた、「貴僧は今朝はもう盤若湯の彌撒をお濟ませになりましたな〳〵一體貴僧は誰を連れて參られたのだ？」

「隊長殿、わしの劍と槍との捕虜なので、」とコプマンハーストの僧侶は答へた。「いや寧ろわしの弓と戟とで得た捕虜だと言つた方がよいかも知れません。そればかりでなく、わしは我が崇める神の威德を藉りて、彼を一層悪い囚はれから救ひました。これ、猶太人、わしはお前を惡魔から取り戻してはやらなんだか？——わしはお前にお前の信條と天父の祈りと、聖母マリアの祈禱とを教へはしなかつたか！わしは一夜をお前の改宗を祝して飲み、また奥義を說明す

る爲めに過しはしなかつたか？」

「神樣の愛の爲めに！」と哀れな猶太人は叫んだ。「どなたもわしをこの氣狂ひの――いやわしの意ではさういふ積りだが――この神聖な人の繩から解いて下さいませんか？」

「なんぢやと？　猶太人め、」脅すやうな樣子をして、和尙は言つた。「お前は約束を取消すつもりか？――よく考へて見ろ、若しお前がもとの不信に立ち戻るなら、たとひお前が乳を呑んでゐる豚のやうに柔かくなくとも、――わしは誰かにお前の肉で朝飯の支度を拵らへて貰ふぞ――貴樣は燒き肉に出來ない程堅くはない！　おとなしくせい、アイザック、そしてわしの後についてかう唱へろ。――アヴェ・マリア！――」

「いや俺等は神を瀆してはならない、氣狂ひ坊さん、」とロックスリイは言つた、「それよりもまづ貴僧は、この捕虜を何處で見付けられた、それを言はつしやい。」

「本當に、」と和尙は言つた、「わしはもつとよい品をと搜してる場合に此奴を見付けたんですよ！　わしは何か持ち出せるものがあらうかと思つて穴藏へ入りました。といふのは、香料を混ぜた一杯の燗酒は、王樣の晩酌にもならうけれども、こんなに澤山のよい酒を一度に燗する（城が燒けて、貯藏の葡萄酒が一時に燒き盡されることを云ふ）のは勿體ないことゝ思ひましたからだ。

そしてわしは一つの酒樽を見付けました、それから何かうまいことをする機會はないものかと絕えず搜してゐるなまけ者共のところへ、もつと手傳ひを求めに出掛けようとしてゐました、その時わしは一つの頑丈な扉に氣が付いた――はゝあ！　この祕密の土窖の中には一番上等なのがあるなと思ひました。そして、ならず者の番人が自分の役目を怠つた爲めに、鍵は扉にさした儘にしてありました――そこで、わしは中へ入つたが、何にも見出さなかつた、が、錆びた鎖とこの猶太人の犬めを手に入れました。彼奴は助けられるも助けられないもなく、もうその場ですぐ捕虜になつちまひました。わしは戰爭の疲れのあとで、この不信者と一緒に一杯の泡のたつ酒で元氣をつけた後、わしの捕虜を引つ立てゝ來ようとして居りますと、電光と雷鳴とが一度にするやうに外櫓の壁や土臺の石ががら〳〵と倒れ落ちて、（畜生め！　彼奴等の手めがこんなに脆く建てやがつたのだ！）わしの行手をふさいでしまひました。櫓の倒れる音があとから〳〵起りました――わしは、逃れる望みをすてゝ了つた。そして猶太人と一緒にあの世に行くのはわしの務の汚れと考へて、彼奴の頭腦を打ち割らうと矛を手に振り上げました。だが、わしは彼の白髮に哀れを感じ、矛を收める方がよろしいと思つて、改宗を勸める爲めにわ

しの靈の武器を取り上げました。實に、聖ダンスタンの祝福のお蔭だが、種子はよき地に蒔かれたのだ。わしは一夜中彼に宗教の奧義を語つて聞かせたといふだけで――それに（わしの氣を引き立てた數杯の酒も餘り効目がなかつたから）幾らか斷食と云つた譯であつたので、わしの頭は殆んどふら〳〵になつてゐるのだ。――だが、わしは全く疲れ果てゝゐたのだ――ギルバートとキッボールドはわしがどんな狀態であつたかを知つてゐる――實に全く疲れ果てたのだ。」

「我々が保證します、」とギルバートは言つた、「我々が燒け跡を出て、聖ダンスタンの助けで土窖の階段に降り立つた時、半ば空になつた酒樽と、半ば死んだ猶太人と、御自身仰せの通り、半ば以上疲れ果てた御僧とを見付けたのでござります。」

「この惡黨め！　お前達は嘘を吐いてる！」と立腹した和尙は言つた。「あの樽を飲み乾して、朝酒だなぞと言ひ居つたのはお前とお前の呑み助の相棒達だ――若しわしがあれを隊長殿の爲めにとつて置かなかつたら、わしは異教徒だ。然しそれはどうでもよいではないか？　猶太人が改宗したのだ、そしてわしの教へたことを、全部ではないまでも、殆んどわしと同じ位ゐに理解するやうになつたのだ。」

「猶太人よ、」と隊長は言つた、「それは本當か？　お前はお前の不信を捨てたと言ふのか？」

「誠に以て恐れながら、」と猶太人は言つた、「私は尊い上人樣が、あの恐ろしい夜の間中、私にお話しなされたことが一言も分らないのです。あゝ！　私は悶えと、怖れと、悲しみとの爲めに、すつかり心を奪られてゐましたので、我等の父なるアブラハム樣が說教をして下されたとしても、多分聾の聽聞者に話されるも同樣でございましたでせう。」

「お前は嘘吐きだ、猶太人、そして自分が嘘を吐いてゐることを自分で知つてゐるのだ、」と和尙は言つた。「わしは貴樣に我々の協議した事を唯一言だけを思ひ起させてやらう――貴樣は貴樣の財產を、殘らず我々の神聖な教團に寄進すると約束したのだ。」

「その約束だけはお許し下さい、皆樣方、」前よりも一層驚いてアイザックは言つた、「そのやうな言葉は、私の口から漏れたことはございませんから！　あゝ！　私は年とつた乞食のやうな人間でございます――多分子供もなくなりました――私を憐れんで、このまゝ免して下さい！」

「いや、」と和尙は言つた、「若しお前が神聖な教會の爲めにした誓ひを取消すなら、お前は罪障消滅の爲めに苦行をしなければならないぞ。」

そこで彼は矛を振り上げた、そして黒裝束の騎士がそれを制めて、和尚の怒りを自分で引き受けなかつたなら、矛の柄は勢鋭く猶太人の肩に打ち下ろされたことであらう。

「ケントの聖トマスにかけて、」と彼は言つた、「若しわしが本當に怒つたら、不精騎士殿、貴方の鐵の鎧などはないも同然、一つ貴方に目にものみせて、他人の事に餘計なお世話をしないようにと教へてあげ申すぞ。」

「いや、さうお怒りなさるな、」と騎士は言つた、「知つての通り、わしは御身の無二の親友なのだ。」

「わしはそのやうなことは知らぬ、」と和尚は答へた、「そしておせつかいな貴方に對して挑戰するのだ。」

「いや、然し、」前夜の宿主を怒らすことを面白く思ふらしい騎士は言つた、「貴方は最早お忘れになつたのか、わしの爲めに、——(わしの爲めとばかり申しますのは、あの酒德利と肉饅頭との誘惑の事などは抜きに致しますので)貴方は精進と通夜との誓ひを破られたではございませんか?」

「その通りだ、」と和尚は大きな拳を握りしめながら言つた「わしは貴方にこの拳を振舞ひ申さう。」

「わしはそのやうな贈物は決してお受け致しません、」と騎士は言つた。「わしは貴僧の拳を借金としてなら、甘んじてお受け致します。併しわしはそこにゐる貴僧の捕虜が自分の商賣で高利を取り立てますが、それを取り立てると同樣の高利をつけて、お返しいたすことにしよう。」

「わしはすぐさま、その證據を見るとしよう。」と和尚は言つた。

「おいこら!」と隊長は叫んだ、「お前はどうしたのか? 氣狂ひ坊主め、我等の寄合所の樹の下で爭ふとは?」

「喧嘩ではない、」と騎士は言つた、「たゞ友誼の交換に過ぎないのだ。御坊、勇氣があるなら、かゝつて參れ——若し貴僧がわしの打撃に堪へるなら、わしも貴僧のに堪へるつもりだ。」

「貴方は頭の上の鐵鍋で得をして居られる、」と僧侶は言つた。「だが、勝手にお着けなさい——たとひ貴方が眞鍮の兜を冠つたガスのゴライアス(イスラエルの敵ペリシテ軍の代表戰士である。舊約聖書、撒母耳前書、十七章)であらうとも、打ち倒さずにはおかないぞ。」

和尚は日に焦けた腕を肘のところまでまくり上げ、滿身の力を籠めて、牡牛さへも打ち倒すやうな打撃を騎士に與へた。然し相手は岩のやうにびくともしなかつた。周圍にゐた鄕士達は一齊に高い叫び聲を擧げた。何故と云ふにその僧侶の拳の力は彼等の間には名代のもので、いたづらにしろ、眞面目にしろ、彼の拳を喰つては、その力を知る機會を持たないものは殆んどなかつたからである。

「さて、和尚、」と手袋を脫ぎながら騎士は言つた、「たとひ頭上には有利なものを着けてゐたとしても、手には何にも持たぬことにしよう——眞の男らしくぢつと立つて居れ。」

「おのれを擊つ者に頰を向けよ。」(舊約聖書「馬太傳」第五章三十節の冒頭の言葉)と僧侶は言つた。「若し貴方が、愚僧をこの場所からちよつとでも動かせたら、愚僧は猶太人の身代金を進んで貴方に進上致さう。」

肥つた僧侶は劇しい挑戰の態度でかう言つた。併し誰が運命に勝つことが出來よう? 騎士の打擊は非常な力と熟意を籠めて打ち下ろされたので、和尚は眞逆樣に地面に轉んだ、居合せた見物人は、みなびつくりした。が、彼は怒りも狼狽もせずに立ち上つた。

「兄弟よ、」と彼は騎士に言つた、「貴方は貴方の力をもつと愼重に使用なさるべきであつた。もし貴方が愚僧の顎をぶち砕いたとしたら、愚僧は辻褄の合はぬ彌撒をぶつ〳〵唱へたゞらう、何故と申せば、笛吹きが下顎をなくしたならうまく吹けませんからな。とは云ふものゝ、もう敗けたからには決して貴方と撲り合ひをしないと云ふ仲直りの證據に、愚僧は手を差し出します。亂暴なことはもう止しませう。そこで猶太人の身代金を取ることゝしませう、豹はその斑點を變へぬと同樣に、猶太人はいつまで經つても猶太人なのです。」

「貴僧は、」とクレメントが言つた、「あの拳を耳の上に受けてから、猶太人の改宗を半分も信じなくなりましたなあ。」

「おいこら、ならず者め、お前なぞが改宗について何をぐづ〳〵言ふのだ?——はて、こゝには尊敬といふものはないのか?——みんな主人で家來はないのか?——奴、お前に言ふが、わしは騎士殿の打擊を受けた時には、幾分醉ひ加減であつた、さもなければ、わしはぢつと動かずにゐた筈だ。併し若し貴樣がそれに就いてもつと囁るなら、わしが受けると同じく、與へることも出來るといふことを思ひ知らせてやらう。」

「一同鎭まれ!」と隊長は言つた。——「ところで、猶太人、お前の身代金はどうするつもりだ。お前の種族がすべての基督教徒の國では、呪はれたものと考へられてゐることは言ふまでもないのだ、そして實際、我々は、お前のこゝにゐることには我慢が出來ないのだ、だから、わしが別の種族の捕虜を吟味する間に、お前の渡すべき贈物のことを考へて置け。」

「フロン・ド・ブーフの家來の多くは捕へられましたか?」

と黒装束の騎士は訊ねた。

「身代金を取るやうな目ぼしい奴は一人もゐません、」と隊長は答へた。「一組の雑兵共が居りましたが、その者共は放免してやつて、新たな主人を捜せと言つてやりました——復讐と利得の爲めには萬事抜かりなくやつて了ひました。彼等の群は三文の値打もございません。私の申す捕虜と云ふのは、これらよりも立派な分捕品だ——彼の馬具と衣裳とから判斷しますと、情婦のもとへ急ぐ美しい僧侶らしうございます。その立派な高僧が、やつて參りました、かささぎのやうに身も輕々と。」そして、二人の郷士に挟まれて、讀者諸君も、前よりよく知つてゐられる彼のジョルヴォールのエイマ僧正が、浪士の首領の森の玉座の前に曳き出された。

（三十三）

武士の精華ともいふべき君
タイタス・ラーシャスはいかゞ致されましたな？
マーシャス。兎角命令に忙しい人の習はし、
或は死刑を、或は流罪を宣告し、
或は憐み許し、或は嚇しなどして居りまする。
（「コリオレイナス」）

囚はれの僧院長の容貌や態度には、憤慨と氣狂ひじみた虚飾と肉體的苦痛とが妙にこんがらかつて現はれてゐた。

「これはまたどうしたことだ？」と彼は言つた。その聲の中にはいま書いた三つの感情が含まれてゐた、「これは何といふ振舞だ？　僧侶に手をかける其方等はトルコ人かそれともまた基督教徒か？『主の僕に手をかける』といふことがどういふことか其方等は知つてゐるか？——其方等はわしの鎧を奪ひ——珍らしい型のレイスで拵らへた長袍を引裂いた、それは大僧正が着てもよいものだ——若し他の人がわしのやうな目に會うたなら其方等に『破門を申渡すぞ』と言つたことであらう。けれどもわしは穏かな人間であるから、若し其方等がわしの乗馬を返し、わしの兄弟を解放し、わしの鎧を戻し、大急ぎで百クラウンをジョルヴォール僧院の祭壇で彌撒をとり行ふ料に寄進し、次の精靈降臨節まで、鹿の肉を食べない誓ひをするなら、この狂氣の振舞に就いては、これ以上何も言はぬことにしよう。」

「神父様、」と浪士の首領は言つた、「わしの家來どもが御身の父親らしいお叱りを頂戴するやうな御待遇を致しまし

たことは、まことに申譯もない次第でございます。」

「待遇とや！」森の首領の温和な調子に力を得た僧侶は叫んだ。「あれは立派な種類の犬にもふさはしくない取扱ひだらう——基督教信者に對してはなほ更——僧侶にとつては更になほ一層——殊にジョルヴォールの神聖な教區の僧院長にとつては全くふさはしからぬ取扱ひだ。こゝにアラン・ア・デールといふ不信心な酔ひどれの吟遊樂人がゐるーやくざ者めーそれのみではない、彼がすでにわしから奪つた財寶、即ち極めて高價な黄金の鎖や、二重指環などの他に四百クラウンの身代金を添へて拂はねば、殺して了ふぞとおどかしたのだ。そして彼等の荒々しい手で破られ碎かれた物の他に、香箱や、銀の毛捲鏝なども奪はれたのだ。」

「アラン・ア・デールが貴方のやうな立派な人をさやうに取扱ふ筈はございません、」と首領は答へた。

「それは聖ニコデマスの福音のやうにまことの事なのだ、」と僧院長は言つた、「彼は數々の酷い北國の罵言の言葉を以て、わしを綠林の中の最も高い樹の頂きに吊すと誓言したのだ。」

「まこと彼がそのやうなことを申しましたか？　でしたら、僧院長殿、彼の要求にお從ひ遊ばした方がよろしかつたらうと私は存じます——と申しますのは、アラン・ア・デールは一旦誓つた以上はきつとその言葉を守る男だからです。」

「貴方は私に戯れて居られるのか、」と苦笑を浮べながら、驚いた僧院長は言つた、「私は面白い冗談なら、いつでも心から歓迎する。けれど、ハッ！　ハッ！　歓樂が一晩中續けば、翌朝になつたら、眞面目にならなきやなりません。」

「だから私は懺悔聽聞僧のやうに眞面目だといふのです。」と浪士は答へた。「僧院長様、貴僧はどつさり身代金を拂はねばなりませんぞ、さもないと、貴僧の僧院では恐らく新しい僧正を選ばねばなりますまい。と云ふ譯は貴僧は再び元の椅子にお坐りなさらないでせうから。」

「僧侶に對してそのやうなことを言はれるとは——御身達は一體基督教徒なのか」と僧院長は言つた。

「基督教徒かと言はるゝのか！　如何にも、我々は基督教徒だ、そしてその上に我々の間にも僧侶がゐるのだ、」と浪士は答へた。「あの肥つた牧師を呼び出して、このことに關する本文を、この僧正殿に説明させたがよい。」

半ば醉ひ、半ば醒めた和尚は、綠衣の上に僧衣を無造作に纏ひ、今は昔、譯も分らず、空で習ひ覺えた切々のものを、殘らず思ひ出して言つた、「神父殿、御安康をお祈り致

します——貴僧はようこそ綠林へおいでなさいました。」
「これは何んといふ不信な狂言なのか？」と僧院長は言つた。「若し貴僧が本當に聖職について居られるのなら、こゝでモリスダンスの踊手のやうにぴよこ〳〵首を下げたり、顰め面をしたりしてゐるよりは、どうしたらこの人達の手から脱れられるかを、私にお教へ下さる方が、遙かに立派な振舞でせう。」
「いかにも、僧正殿、」と和尚は言つた。「私は貴僧を逃がす唯一つの方法しか存じ申さぬ。今日は聖アンドリューの日（十一月三十日）なので、我等は十分の一の稅を取り立てゝゐるのです。」
「併し、それは教會の稅ではありますまい、」と僧院長は言つた。
「教會と在家との兩方でございます、」と和尚は言つた。「ですから、僧正殿、不義の財を以て己が友とせよ（新約聖書路加傳十六章九節にあり）だ——何故と云ふに、他の友情では御身の今の役には立ちさうもないからな。」
「私は愉快な森の人々が心から好きだ、」と僧院長は調子を和げて言つた。「ところで、御身はわしをあまりひどくいぢめてはならぬ——わしは狩獵が巧みで角笛を朗かに快活に吹き鳴らしたり、すべての樫の木が反響する程喚はつたりすることが出來る——さて、御身達はわしをあまりひどく取扱つてはなりません。」
「彼に笛を渡せ、」と浪士は言つた、「わしは彼が自慢の手並を拜見するとしよう。」
エイマ僧正はそこで一吹き鳴らした。首領は首を振つた。
「僧正樣、」と彼は言つた、「御身は樂しい節を吹かれた、がそれだけでは貴僧の身を購ふことは出來ません——或る立派な騎士の楯の銘に書いてあるやうに、わし等は笛の一吹きの爲めに御身を許すことは出來ない。且つ又わしの知つたところでは——貴僧はフランスの新らしい飾音やトラ・リ・ラで、古風なイングランドの角笛の調べを亂すものの一人なのです。——僧正樣、只今の獵犬を呼びよせる華やかな吹き方は御身の身代金に五十クラウンを增加させましたぞ、古いまことの雄々しい狩獵の調べを墮落せしめたといふ科によつてだ。」
「さうですか、」僧院長は不機嫌さうに言つた、「御身は狩がお氣に召さぬと見えますな。が、このわしの身代金の問題に就いてはどうぞもう少し寬大にして下さい。手短かに申せば——わしは是非とも一度だけは惡人共を助けなくてはならないから——五十人の援兵を連れずにウォトリング街路を唯一人で歩いた爲めに、わしは何程の身代金を支拂はねばならないのですか？」
「かうしたら如何でせう、」と隊長から離れた處にゐた一隊の指揮者が言つた、「僧正樣が猶太人の身代金を定め、猶太人が僧正樣のそれを定めるとしましては。」
「其方はとんでもない男だ、」と首領は言つた、「けれども其方の思ひ付きは至極結構だ！——こら、猶太人、前へ出ろ。其處の神父エイマ樣、福々しいジョルヴォール僧院の僧正樣を見ろ、そして如何程の身代金を僧正樣から取つたらよいか言つて見ろ。——お前はたしかにあの修道院の收入を知つてゐる筈だ。」
「あゝいかにも、」とアイザックは言つた。「わしはこれまで坊さん方と取引をいたしました、そして小麥や大麥や、果物や、それからまた澤山の羊毛を買ひました。あゝ、あれは裕福な寺領です、そして坊さん方は脂肉を食つたり、長く貯へた上澄みのおいしい酒をたらふく召上つてゐます、あのジョルヴォールの坊さん方は。あゝ、若しわしのやうな浮浪人があのやうな家を持ち、年々月々あのやうな收入が得られますなら、わしは捕虜の身を脫れる爲めには澤山の金銀を拂ふでございませう。」
「猶太人の犬め！」僧院長は叫んだ、「我等の僧院は禮拜堂を建てる爲めに借財を負うてゐるといふことはお前位よく知つて居る者は他にはない筈ではないか——。」
「そして又この前の季節の穴藏の貯へと申しますと、ガスコンの葡萄酒も相當にお納め致しました筈で、」と猶太人は言葉を挿んだ。「が、それは——いや、それはほんの些細な事で。」
「この不信な犬の吠えるのをお聞きなされ！」と僧侶は言つた、「きやつは愚僧共が必要の爲めに、又塞さを防ぐ爲めに呑む許しを得てゐる酒の爲めに、寺領内の者が借財に苦しむやうになりでもしたやうに吐し居ります。この猶太の惡者は神聖な教會を罵倒してゐる、而も基督教徒はそれに耳を傾けてゐて、彼を責めようともしないわい！」
「そんな事は、何の口實にもならない、」と首領は言つた。——「アイザック、僧正が文なしの、丸裸とならない範圍で、支拂ひ得る金は幾らか申せ。」
「六百クラウンならば、」とアイザックは言つた。「僧正樣はあなた方に立派に支拂つて、そして今迄通り立派に暮してゆけますでせう。」
「六百クラウン、」と首領は嚴かに言つた。「俺は滿足するぞ——お前はよく申した、アイザック——六百クラウン——これを申し渡しますぞ、僧正樣。」
「申し渡す！——申し渡す！」と一群の者は叫んだ。「ソロ

モンでもこんな立派な申し渡しはしなかつたらう。」

「僧正様、貴僧は貴僧への宣告を聞かれたであらうな、」と首領は言つた。

「各々方、それはとんでもないことだ、」と僧院長は答へた。「そんな大金を何處で耳付けられませう？　たとひわしが祭壇にある聖體器（聖餐用の聖餅を入れる器）や燭臺を賣り拂ふとしても、その金額の半分も得られますまい。してその目的の爲めには是非ともわしが自身でジョルヴォールへ參らねばなりません。で、人質として二人の僧侶をお預けしてもよろしい。」

「そんな當にならぬものを信用するわけにはいかん、」と浪士は言つた。「わし等は貴僧を留めて置かう、僧正様、して彼等二人を遣はして貴僧の身代金を持つて來させるといたさう。その間、貴僧には一杯の酒と一片の鹿肉とを差上げませう。若し貴僧が狩が好きなら、貴僧のやうな北國人が見たこともないものをお目にかけませう。」

「それともまた、お氣に召すなら、」浪士達の機嫌を取らうとしてアイザックは言つた、「わしがヨークに使をやつて、わしの手にある金の中から六百クラウンを持つて來させることにいたしませう、若し僧正様がわしに受取證を書いて下さるなら。」

「アイザックよ、お前の望むものは何でも彼からとつてやらう、」と首領は言つた。「してお前はエイマ僧正の身代金とそれからお前の分も一緒に支拂はねばならんぞ。」

「わしのものとは！　あゝ、勇敢な皆樣方、」と猶太人は言つた、「わしは零落れた人間でございます。わしがあなた方に五十クラウンを支拂はねばならぬといたしましたら、わしは生涯乞食の杖をついて歩かねばなりますまい。」

「そのことに就いては、僧正樣に判斷して貰はう、」と首領は答へた。「エイマ神父樣、どうお思ひになりますか？——猶太人めは澤山の身代金を出すことが出來るでございませう？」

「身代金を拂ふことが出來るかと問はれるのか？」と僧院長は答へた——「彼はあの有名なヨークのアイザックではないですか、アッシリアの奴隷にされたイスラエルの十種族の身代金をも拂へる程富裕なヨークのアイザックではないですか？——わし自身は彼をあまり存じませんが、わし共の土藏番と出納係とは彼と手廣く取引を致して居ります。その言ふところによると、ヨークにある彼の住居には基督教徒の何處の國でも恥辱と思はれる程金銀財寶が一杯だとのことでございます。こんな兇暴な蝮蛇が國家の臟腑、いや神聖な教會のはらわたにまでも喰ひ込み、汚らはしい高利貸とゆすりとを働いてゐるまゝに任せておくのは、世のあらゆる基督教徒の胸には、實に不思議に思はれることなのです。」

「一寸お待ちなさい、」と猶太人は言つた、「貴僧の怒をお鎭めなさい。そしてどうぞわしがどなたにも金を無理に貸したことがないと云ふ事を心にお留め置き下さい。ですが僧職の人にしろ在家の人にしろ、皇子にしろ、僧正にしろ、騎士にしろ、坊さんにしろ、アイザックの家を訪れて金を借りる時には、そのやうな無禮な言葉を使ふ人は一人もございません。その時には、『わが友アイザックよ、どうぞこれを肯いてくれぬか、期限は堅く守るが、どうだ？』——とか、又は、『親切なアイザックよ、若しお前が人の爲めにつくす人なら、この急場でわしに友情を示してくれ、』とかと申します。それに、約束の期限が來て、わしが自分のものを請求いたします、するとその時には『猶太人の畜生め』とか、エヂプトの疫病でも（出埃及記第九章八—一二）貴樣の種族にとつつくがいゝ」とか、その他無禮な粗々しい人々を動かして、あはれな流浪人達に反感を懷かせるやうな言葉ばかりを聞かされます。」

「僧正樣、」と首領は言つた、「猶太人ではあるが、彼の言つたことは如何にも尤もである。それ故、これ以上の惡口は止して、彼奴の身代金の高をお言ひなさい。彼が貴僧の高を言つたやうに。」

僧院長は言つた、「基督教國の僧侶と洗禮も受けない猶太人と同列に置かうとするのは、ラトロ・ファモスス（惡名高い盜賊）より他にはない——この言葉の意味はいつか他の機會に話して聞かさう。然し御身達がこの惡者に要求すべき身代金を聞かうと望むからには、わしは明かに申すが、若し彼から千クラウンより一ペニイでも少く取つたなら、御身自ら不當の罪に陷るぞ。」

「宣告だ！——宣告だ！」と浪士の首領は言つた。

「宣告！——宣告！」と課稅係は叫んだ。「從來、基督教徒（僧正）はさすが物分りがよくて、猶太人よりもずつと鷹揚に我々と取引をしてゐます。」

「我が先祖代々の神樣、どうぞ私をお助け下さい！」と猶太人は言つた。「あなた方は貧乏な、零落れた人間を破滅させようとなさるのか？——わしは最早子供もない、その上あなた方は、わしから生活のたつきまでも奪はうとなさるのか？」

「猶太人よ、若しお前が子無しなら、それだけ負擔も少いわけではないか、」とエイマ僧正は言つた、

「あゝ！　殿樣、」アイザックは言つた、「われ〳〵の一番可

愛い子供がわれ〳〵の情の紘で、どんなに絡められてゐるか、あなたの掟では知る事が出來ないのだ——おゝレベッカよ、わが愛するラッセルの娘よ！　あの木の上の葉が一つ一つ一金貨であり、その一つ〳〵の金貨がわしの物であるとしたら、わしはその殘らずの富をお前が生きてゐるかどうか、又あのナザレ人の手から脫れたかどうか知る爲めに捨てようものを！」

「お前の娘は黑い髮をしてはゐなかつたか？」と一人の浪士が言つた。「そして銀で刺繍をした、絹のヴェールを掛けてはゐなかつたか？」

「その通りだ！——その通りだ！」老人は前には恐怖に顫へたやうに、今度はわが子を思ふ熱烈さに顫へながら言つた。「ヤコブ樣の祝福があなたの上にありますように！　あなたは娘の安否に就いて、何かわたしに知らせて頂くことは出來ませんか？」

「そんならあの女だ、」と鄕士は言つた、「昨日の夕方、あの傲慢な寺侍が、我等の隊伍を突破つた時、つれて行つたのは。わしは彼に向つて一矢を放たうと弓を引き絞つたが、あの娘が傷を蒙つてはならぬと思つて容赦した。」

「あゝ！」と猶太人は叫んだ、「たとへその矢が娘の胸を貫くにしても、矢を射て下さればよかつたのになあ——あの淫らな野獸のやうな寺侍の、穢れた寢床よりも先祖代々の墳墓の方がよほどましだつた。イカボド！　イカボド！（ヘブライ語で「光榮去れり」と云ふ意、舊約聖書撒母耳前書四章二十一節參照）あゝ、光榮は我が家から立ち去つて了つたのだ。」

周圍を見廻しながら首領は言つた——、「各々方、かの老人は一猶太人に過ぎないが、然も彼の悲しみはわしの心をば動かすわい。——アイザックよ、正しくわし等と取引せよ——千クラウンの身代金の支拂はお前を全く無一文にするのか？」

アイザックは金錢に對する愛が、永年の習慣の力で、父親としての愛情とさへ爭ふほどであつたので、自分の財貨を思ひ起し、色靑ざめ、口籠り、なほいくらかの餘りがあるかも知れないといふことを、否定し得なかつたのである。

「よろしい——行け、」と浪士は言つた、「何はともあれ、わし等はお前に對してあまりに詮索はせぬつもりだ。金なしでその娘をサア・ブリアン・ド・ボア・ギルベールの爪から取り返さうとするのは、丁度尖のない矢で十二以上も叉のある角を持つた立派な牡鹿を射ようとするのと同然だ——わし等はお前の身代金をエイマ僧正のと同額にしよう、或ひはまた百クラウンだけ下げてもよろしい、それはわし自らの損失として、その貴い團體には及ぼしはしない。さうすれば、わし等は猶太人の商人を基督敎徒の僧侶と同等に取扱ふと云ふ由々しい僻事を免れ得るし、お前は娘の身代金として五百クラウンだけ手許に殘ることになるのだ。寺侍達は黑い眼の閃きと同じに、銀貨の輝きを愛するものだ——風向きが惡くならないうちに急いで金貨の響きをド・ボア・ギルベールの耳に響かせるがよい。わし等の斥候の報告によると、彼は隣にある彼の敎團の僧院にゐると云ふことだ。——わしの樂しい仲間よ、わしの云ふことに間違ひはあるまいな？」

鄕士達はその首領の意見にいつもの通り贊同の意を表はした。そして、アイザックは、自分の娘が生きてゐて、しかも取り返すことが出來るかも知れないと云ふことを知つて、心配の一半を取り除かれたので、寬大な浪士の足許に身を投げ出し、自分の髯を長靴にすりつけながら、浪士の緣の衣の緣に接吻しようとした。首領は身を引いて、猶太人の手から脫れた、いさゝかの輕蔑の表情を示しながら。

「いや〳〵、これ、立ち上れ！　わしはイングランド生れなんだから、そのやうな東方の禮拜は、あまり好まぬ——神に跪づけ、わしのやうな、哀れな罪人に跪づくには及ばない。」

「その通りだ、猶太人よ、」とエイマ僧正は言つた。「祭壇の下僕によつて代表される神に跪づけ、お前が眞實に後悔し、聖ロバート（シートー敎團の建設者）の宮に適當な捧げ物をするなら、お前自身やお前の娘レベッカの爲めにどのやうな惠みが下らうも知れぬではないか？　わしはあの少女の爲めに悲しむものだ、と申すのは彼女は色白く容貌うるはしいからだ。わしは彼女をアシュビーの試合場で見た。そしてブリアン・ド・ボア・ギルベールは、またわしの大に信賴することの出來る男だ——わしの口添へが、どんなに御身の爲めに效果があるか、考へて見るがいゝ。」

「あゝ！　あゝ！」と猶太人は叫んだ、「四方八方から掠奪者がわしに刃向つて來る——わしはアッシリアの掠奪者の餌食であるばかりでなく、エヂプトの掠奪者の餌食とまでなつてしまつたのだ。」

「貴樣の呪はれた種族の運命がそれでなくて何だらう？」と僧院長は答へた。「そのわけは聖書にも書かれてある通り、『彼等は主の言葉を顧みず、されば彼等には何の叡智なし。それ故われは彼等の女を異邦人に與へん。』つまりこんどの場合のやうに寺侍に與へるのだ。『而して彼等の財寶をば見知らぬ人に嗣がしめん。』丁度こんどの場合のやうにこの正直な紳士達にな。」

アイザックは深い溜息を吐いて、兩手を振り絞つたり、悲

哀と絶望の狀態に戻つたりし始めた。併し鄕士の首領は彼を側へ呼び寄せた。

「アイザック、」と首領は言つた。「こんどの事でお前がしようと思ふことをよく考へてみるがいゝ。わしの考ではあの僧侶と友達になる方がいゝと思ふ。アイザック、彼は虚榮の強い男で、然も貪慾な男だ、少くとも彼は豪奢な暮しをする爲めに金が入用なのだ。お前はたやすく彼の欲望を滿たすことが出來る筈。貧乏だなぞといふお前の言ひ拔けにわしが欺されると思ふな。アイザック、わしはお前が金袋を入れて置く鐵の箱をさへ知つてゐるのだ——はて、お前のヨークの屋敷の地下室に入る所に、林檎の木の下で道しるべとなつてゐるあの大きな石迄も知らないでどうなるものか？」猶太人は死人のやうに蒼ざめた——「けれど少しもわしを怖れるには及ばない、」と鄕士は言葉を續けた、「何故と云ふにわし等は昔からの馴染だからな。お前はお前の美しい娘レベッカが、ヨークの牢獄から救ひ出して、病ひが癒るまで家に逗留させ、それから恢復すると一片の金を添へて送り出した、あの病氣の鄕士を覺えてゐないのか？——お前は高利貸ではあるが、あの僅かな銀貨ほどよい利子で金を貸したことはあるまい、と云ふのはあれが今日お前に五百クラウンといふ金を得させたからだ。」

「ではあなた樣は、あのわし等がディッコン・ペンド・ザ・ボウと呼んだ方ではございませんか、」とアイザックは言つた。「わしはどうもあなたの聲の調子に聞き覺えがあると思つてゐました。」

「いかにも、わしはペンド・ザ・ボウだ、」と首領は言つた、「そしてロックスリイとも云ひ、それらのほかにもなほよい名前を持つてゐるのだ。」（他のよい名とは「ロビンフッド」のこと）

「然し、親切なペンド・ザ・ボウ樣、その地下室のことに就いては、あなたは間違つて居られます。たしかに、その部屋にはわしが喜んであなたに差上げてもよいやうな二三の商品しか入つてはゐません——あなたの部下の胴着をつくる百ヤードの綠のリンカン布と、弓を作る百ステーブのスペインの水松と、強い、丸い、丈夫な絹の弓弦の百筋と——これらのものは、あなたの御親切に對して差上げます、正直なディッコン樣、若しあなたがあの地下室に就いて祕密を守つて下さるならば——私の親切なディッコン樣。」

「やまね（栗鼠に似た獸で、語原的に言ふとドオマウス「やまね」といふ語は「眠れる鼷鼠」といふ意）のやうに默つてゐよう。」と浪士は言つた、「そして又わしはお前の娘のことを悲しんでゐないなぞと思つてくれるな。けれどそれは已むを得ない。寺侍の槍兵達は席野では、わしの弓兵隊にはとても敵對出來ないほどに強いのだ——彼等は魔界のやうにわし等を蹴散らして了ふだらう。だが、若し連れ去られるのがレベッカと知りさへしたら、施す術もあつたかも知れなかつた。がそれも今となつては策略をめぐらすより他に道がない。さあ、お前に代つて僧院長と談判するとしようか？」

「ディッコン樣、若しあなた樣で出來ます事なら、どうぞわしの一番可愛い子供が戻りますようにお助け下さいませ！」

「お前の時を考へぬ貪慾で、わしの妨げをしなければ、」と浪士は言つた、「わしはお前に代つて僧院長と談合しよう。」

彼はそこで猶太人の處から離れて行つた、けれども猶太人は影のやうにぴつたりと彼の後に跟いて行つた。

「エイマ僧正樣、」と首領は言つた、「わしと一緒にあの樹の下まで貴僧だけおいでを願ひたい。噂によると、貴僧はその職掌にも似合はぬ程、酒と婦人の笑顏をお好みなさるとやら、僧正樣、けれどもわしはそんな事は何んとも思つてゐない。また聞くところによると、貴僧は一對の見事な犬と、一頭の神速な馬とを愛して居られるさうだな。金目のかゝる物をお好みになるからには財布一杯の黃金がお厭でないのも尤もな次第だ。けれどもわしは貴僧が壓制か殘虐をお好みになつたことを、これ迄聞いたことがございません。——ところで、若し貴僧がお友達の寺侍におとりなし下すつて、彼の娘の自由を得られますれば、百マルクの銀貨の入つてゐる財布をお慰みやお氣晴しの料としてアイザックが貴僧に喜んで差上げようと申して居ります。」

「わしの手から奪ひ取られた時と同じやうに恙なく、穢されもしないで、戻つて來ますれば、」と猶太人は言つた、「さもなければ談判は無用でございます。」

「默れ、アイザック、」と浪士は言つた、「さもないとわしはお前の爲めに盡すことは止めにするぞ。——エイマ僧正樣、このわしの申出に對して何とお答へ召されるでせうか？」

「その事たるや、」と僧院長は言つた、「實に複雜な問題なんだ。何故と云ふに、若しわしが一方に於いて善事を行ふとしても、他方に於いて、一猶太人の利益となることによつて、わしの良心に背くことになるからだ。とは云へ、若しそのイスラエル人が我等の寄宿舍の建設に幾らか寄附して教會を賑はさうとすれば、わしは良心に誓つて彼の娘の事に就いて盡力するだらう。」

「御意には叶ふまいが、その教會の寄宿舍の爲めに、二十マルクの寄進をするか、」と浪士は言つた、——「默つてゐろ、こらアイザック！——それともまた、祭壇に一對の銀の燭臺を獻ずることゝするか、どちらでも厭とは言ひません。」

「いや、だが、親切なディッゴン・ペンド・ザ・ボウ樣」——ロ

を捕まうとしながら、アイザックは言つた。
「この猶太人め――この獣め――この吝嗇者奴！」たまりかねて郷士は言つた、「若し貴様が何時迄も貴様の娘の命と名譽とを貴様の汚れた利益に比較して、輕重を量つてゐるならば、三日と經たぬうちに、わしは貴様がこの世で持つてゐるだけの金を、一厘も殘らず全部屹度取り上げてやるぞ。」
アイザックは縮み上つた、そして口を噤んだ。
「してこの擔保として、何をわしは受け取つたらよいでせう？」と僧院長は言つた。
「若しアイザックが貴僧のとりなしに依つて成功して歸りました時には、」と浪士は言つた、「わしは聖ヒューバートにかけて誓ひますが必ず彼にその金額を銀貨で拂はして御覽に入れます。さもなければ彼がその金額の二十倍の金を支拂つた方がましだとかうわしは彼と談判するつもりです。」
「では、猶太人、」とエイマ僧正は言つた、「わしが是非ともこの事件に與かる以上は、お前の筆箋を使はして貰ひたい――いや〳〵、お前のペンを使ふのは御免だが、それを使ふ位ゐなら、寧そ、一日中絕食でもした方がましだ。と云つて何處でペンを手に入れようか？」
「若し貴僧が我慢して猶太人の筆箋を使用する事がお出來になれば、ペンはわしが代りを見付けることにしよう、」と郷士は言つた。そして、弓を引き絞つて彼等の頭上を飛び翔つてゐる雁に矢をねらつた、その雁は遙かに遠い、そして物淋しいホールダネスの沼澤の方へ向つて飛んでゆく一列の雁の先頭であつた。その雁は郷士の放つた矢に刺し貫かれて、ひら〳〵と舞ひ落ちた。
「そら、僧正様、」と首領は言つた、「ジョルヴォールの僧侶どもが、年代記なぞ書かなければ、百年間も使へる程澤山な鷲ペンが出來ました。」
僧院長は腰を下ろし、ゆる〳〵とブリアン・ド・ボア・ギルベールへの手紙を認め、そして、注意深く手紙の封をして、次のやうに言ひながら猶太人に渡した、「これさへあれば、お前は無事にテンプルストウの分院へ行くことが出來る、そして、お前の手から用を辨じたり、金錢を差出したりすれば、お前の娘の救助は非常に甘く行くだらう。何故と云ふに、實際、あの親切な騎士のボア・ギルベールは、唯では何事もせぬといふ手合だからな。」
「では、僧正様、」と浪士は言つた、「貴僧が約束の身代金六百クラウンの受取證を猶太人に渡しさへすれば、この上貴僧を引き止めはしますまい――わしは彼をわしの勘定方と認めるのです。して若し貴僧に代つて今彼の拂ふ金額を後

に彼との取引になつて、貴僧がそれを承認することを躊躇されたと聞き及べば、屹度わしは貴僧の居られる僧院を燒かずには置きませぬぞ。たとひその爲め、わしが十年早く絞首臺にかけらるゝといたしましても！」
ボア・ギルベールへの手紙を書いた時の鄭重さとは打つて變つた亂暴さで、僧院長は借用證一札を書いた――即ち彼が身代金に困つた折、立換へて貰つた六百クラウンを彼がヨークのアイザックに返濟し、而もその金額に就いては、寸厘の違算のないことを堅く約束すると認めた。
「さてそこで、」とエイマ僧正は言つた、「わしはわしの騾馬と乘馬との御還附と、わしにつき從ふ僧侶達の御解放と、又組合せ指環（二つも三つも環を組み合はせて作つた指環、記念の印として用ゐる）や寶石や、美しい衣裳などの御返還とを貴方にお願ひするのだ。それらの物は先きにわしが强奪されたのだが、眞の捕虜としての身代金は、もう御意を滿たしたわけですからな。」
「僧正様、貴僧の御仲間に就いては、」とロックスリイは言つた、「彼等はすぐさま追放することにしよう、引止めるのは正しくあるまい。それから貴僧の馬と騾馬に就いては、ヨークに着くまでの路銀を添へてお返ししませう、と云ふ譯は、貴僧から旅行の手段（馬や騾馬や駱駝などをさす）まで奪ふのは殘酷であらうからな――けれども指環や、寶石や、鎖や、その他の物に就いては、我々は感じ易い良心をもつ人間なのですから、現世の浮華虛榮に無頓着であるべき貴僧のやうなお方には、指環や、鎖や、それから、他のつまらぬ華美な裝飾は身につけて、僧侶の根本教則を破るやうな强い誘惑を感じないやうに、お返しはしない積りだ。」
「各々方、各々方が教會の財產に手を觸れないうちは、」と僧院長は言つた、「なんとでも勝手になさるがよい――これらのものは神聖なものなのだから、若し俗人の手がそれに觸れたら、いかやうな神罰が降らうも知れぬ。」
「わしがそれを預ることに致しませう、僧正様、」とコプマンハーストの隱者は言つた、「と申すのは、わしが自分にそれをつけたうございますので。」
「友よ、いや兄弟よ、」自分の疑惑のこの解決に對する答として僧院長は言つた、「若し御身が本當に聖職にずつと前から就いて居られるのなら、どうか御身が今日の働きに與かられた事に對して、どんな風に宗教裁判の役人に答へなさるか知りたいものだ。」
「僧院長様、」と隱者は答へた、「わしは自分自身で監督をする小さな僧正管區に屬してゐます、そこでヨークの大僧正もジョルヴォールの僧院長も、全修道院も何んとも思ひは致しません。」

「御身は全く正規を外れてゐられる、」と僧院長は言つた、「適當な理由もなしに神聖な役目を僭し、神の儀式を穢し、助言を求むる人々の魂を危險に陷いれる變則な僧侶の一人だ。卽ちラティン譯聖書にあるやうにパンの代りに彼等に石を與へる徒ぢや。」（新約聖書、〈加傳十一章、十一節に在り）

「いや、」と和尙は言つた、「若し愚僧の腦天の皿がラティン語（ならない勉强の意）で碎かれでもしてゐようものなら、それは疾くの昔に亡くなつて了ひましたらう、が、幸ひ、下らぬ勉强に腦をなやまさなかつた爲めに、わしの頭腦は健全です。――たしかに、貴僧のやうな傲慢な僧侶の仲間から、その所有の寶石や、虛飾品などを奪ひ去りますのは丁度昔イスラエルの子等が神の惠を受けて、エヂプト人から金銀珠玉を奪つたやうに、正當の事でございます。」（舊約聖書出埃及記十二章三十五節―三十六節）

「御身は賤しい無學の坊主だ、」と非常に怒つて、僧院長は言つた、「わしはお前を破門するぞ。」

「あんたこそわしよりもつと賤しい泥棒か異教徒らしいわい。」和尙も憤つて言つた。「わしはそのやうな侮辱を、教區の人々の前で忍ばうとは思はない、わしは御身に對して法の兄弟であるのに、御身が愚僧を誤魔化すことを恥辱と思はない上はな。ラティン譯聖書にあるやうに、わしはあんたの骨々をへし折つてくれようぞ。」（舊約聖書以賽亞書、第二十八章十二節參照）

「こら〳〵、」と首領は言つた、「僧侶同志がそんな言葉使ひをしてよいものか？――和尙殿、靜かになさい。――僧正樣、たとひお心が未だ十分に和らがれなくとも、これ以上、和尙を怒らせてはなりません。――隱者殿、この神父樣を身代金を支拂つた人として、穩やかに出發させてお上げなさい。」

鄕士達は激怒した僧侶達を引き離した、二人は互ひに下手なラティン語で罵しり合ひながら、なほも聲を高めるばかりであつた、そのラティン語を僧院長は相手より流暢に發音し、隱者は相手より猛烈に吐き散らした。僧院長はとう〳〵自分に氣が附いて、浪士の牧師のやうな微賤無學の僧侶と爭つては、自分の威嚴を害ふことを悟り、部下を從へて、彼等に出會ふ以前から見ると、遙かに威儀も張らず、扮裝なども一層使徒らしくつくろひ、馬を驅つて馳せ去つた。

が、こゝに猶太人が僧院長の爲めに支拂ふべき身代金と、自分のそれとに對し何か保證になるものを示すことが殘つてゐた。そこで彼は、署名をして封をした手紙をヨークにゐる彼の種族の兄弟に送つて、その手紙の持參者に千クラウンの金額を支拂ひ、且つ列擧してある品々を使に手渡すことを要求した。

「わしの兄弟のシーバが、」深い溜息を吐きながら、彼は言つた、「わしの倉庫の鍵を持つてゐます。」

「それからまた地下室の鍵もな？」とロックスリイは、小さい聲で言つた。

「いや、いや――とんでもない！」とアイザックは言つた。

「誰にしろ、その祕密を知る時は凶事が起るのだ。」

「わしには大丈夫だ、」と浪士は言つた、「そして又このお前の手紙がその中に指定して、書き記されてある金額を產み出すことも――だがどうした、アイザック？　死んだのか？　正氣を失つたのか？　千クラウンの支拂が娘の危難をお前の頭から逐ひ出して了つたのか？」

猶太人は吃驚して立ち上つた――「いや、ディッコン樣、いや――わしはすぐに出發いたします。――さやうなら、善人とも言ひかねるし、思ひきつて惡人とも呼びかねるし、また呼びたくもないあなた樣。」

然しアイザックが出發する前に、浪士の首領は彼に次のやうな別れの勸告を與へた。――「アイザックよ、賜物を十分にしろ、そして娘の安全を計る爲めには財布を惜しむな。確かに、お前が娘の爲めに物惜しみじた金は、後になつて丁度溶した鐵を嚥み下すやうな、無量の苦悶をお前に與へることだらう。」

アイザックは深い溜息と共に肯いて、彼の旅路に就いた、供には二人の丈高い森の浪士が立つたが、彼等は彼の道案內を勤めると同時に　森の中で彼の護衞人となつた。

少なからぬ興味をもつてこれらの成行きを眺めてゐた黑裝束の騎士は、今度は自分が浪士に暇乞ひをする番になつた。彼は又法律の正當な保護と威光とを受けない人々の間に、斯くも澤山の禮節のあることを見て、驚嘆の言葉を禁ずることが出來なかつた。

鄕士は言つた、「騎士殿、いゝ果實が往々哀れな木に生るものだ。そして又惡い時勢が必ずしも全くの惡いもののみを生ずるとは限らない。このやうな法律のない境遇に置かれた人々の間にも、疑ひもなく、その特權を控へ目に用ゐようとするものもあり、またこのやうな生計を營まねばならぬことを悔んでゐるものもございます。」

「してその中の一人に、」と騎士は言つた、「恐らく、わしは今話してゐるのだらう。」

「騎士殿、」と浪士は言つた、「わし等は互ひに祕密を持つてゐます。御身はわしについて御隨意に判斷を下さるゝがよからうし、わしも亦御身に就いて勝手な想像をめぐらしてもよいわけです。尤も我々の矢は孰れも狙つた的を外れるかも知れませんが。けれどわしは御身の祕密に立ち入らうとは願ひませんから、わしが自分の祕密を打ち明けぬと

てお腹立ち下さるな。」

「お許し下さい、勇敢な浪士殿、」と騎士は言つた、「貴方の非難は道理至極だ。けれども恐らく我々はこの後、互ひに會ふ時にはもつと分け隔てなく出來るだらう、——先づそれまでは友達としてお別れする事にしよう。」

「手をかけて誓ひます、」とロックスリイは言つた。「そしてわしはそれを生粋のイングランド人の手と呼びます、たとひ今の間は浪士であつても。」

「わしの手も差出します、」と騎士は言つた。「わしはこの手が御身の手に握られて光榮に存じてゐます。何故と云ふに、幾らでも惡事を犯す力を持ちながら、それを耐へて善事を行ふ人は、たゞその善行の爲めにのみ褒むべきばかりでなく、惡事を心に戒めて耐へ通した事に對しても亦褒むべきです——。勇ましい浪士殿、さらばだ！」

かうして麗はしい友達は別れた。そして柳錠紋の騎士は、彼の強健な戰馬に跨つて、森の中を馳せ去つた。

（三十四）

ジョン王。これ、予が友、

彼は予が行く手に横はる毒蛇だ。
予がこの足の向ふ處いづこにも、
彼は予が前に横はるのだ。——
予が言葉の意味が分つたか。

（ジョン王）

ヨークの城（一〇六八年此都を占領した）では、素晴らしい饗宴が催され、ジョン親王は兄の王位を奪はうとする野心を遂げるのに力を貸してくれさうな貴族や、高僧や、首領等をそれに招待した。彼の役に立つ、拔目のない家來ワルデマール・フィッツァーズは、その間にあつて密かに畫策をめぐらし、自分等の計畫を公に宣言するのに必要な程度の勇氣を煽り立てゝゐた。然し彼等の計畫は、その同盟の二三の主な手足ともなるべき者の缺席の爲めに遲らされた。フロン・ド・ブーフの獸的ではあるが、頑強な、向う見ずの勇氣と、ド・ブラシイの陽氣な氣質と、大膽な振舞と、ブリアン・ド・ボア・ギルベールの賢さと、戰爭の經驗と、有名な豪膽さとが、彼等の陰謀の成功の爲めには頗る大切であつたのだ、それで、內心では彼等の不必要な、意味の解らぬ不參を忌々しく思ひながらも、ジョン親王もその補佐役も、彼等なくては思ひ切つて事を行ふことは出來なかつたのである。それに續太人

のアイザックも亦行方不明となり、それと共にジョン親王がそのイスラエル人とその同胞達と約束した一定の額の軍用金を得る望みも消え失せてしまつた。この缺乏はかゝる危急の場合に當つて、殆ど致命傷となりさうであつた。

ド・ブラシイとボア・ギルベールとが、その盟友フロン・ド・ブーフと共に、捕はれたか殺されたかしたと云ふ取り止めもない噂が、ヨークの町に弘まり始めたのは、トオキルストーン城が陷落したその翌朝のことであつた。ワルデマールがその噂をジョン親王に傳へ、且つそれに附け加へて、彼等はサクソン人セドリックとその家來とを攻撃する目的で、僅かの手兵を引率して出發したのであるから、その噂は或ひは本當かも知れないと言つた。外の時なら親王もこの亂暴な振舞を面白い冗談として取扱つたであらうが、今はそれが彼自身の計畫と衝突したり、それを妨害したりするので、彼はその違犯者の非を鳴らし、アルフレッド王にもふさはしいやうな調子で、法律の無視だとか、公の秩序を紊し、個人の財產を侵害するものだとか云ふやうなことを盛んに口走つた。

「不埒な掠奪者達！」と彼は言つた——「若し予がイングランドの君主ともならば、予はそのやうな違犯者を、彼等自身の城の跳橋の上に晒首にもしてくれよう。」

「併し、イングランドの君主とおなり遊ばす爲めには、」と彼の腹心の家來は冷やかに言つた、「殿下はこれらの不德の掠奪者達の犯則をお堪へ遊ばすばかりでなく、彼等が始終犯してゐる法律を擁護して、彼等を懲らさうとの當然な御熱意はお抑へ遊ばして、却つて彼等に保護をお與へなさる事が必要でございます。若しもサクソンの下言共が殿下の御夢想を十分に悟つてゐましたら、城の跳橋を絞首臺に變へるといふ面倒も無くて、私達も大變助かることでございませう。そしてかの大膽不敵のセドリックはそのやうな考の浮びさうな男のやうに思はれます。殿下はよく御心付きでもございませうが、フロン・ド・ブーフと、ド・ブラシイと、寺侍との留守の間に事を擧げるのは危險でございませう。とは云へ、我々は最早無事に退くことが出來ぬ程深入り致して居ります。」

ジョン親王は焦々して自分の額を打つた、それから部屋を大股にあちこちと歩き始めた。

「惡黨め、」と彼は言つた、「卑劣な、裏切者め、こんな危急の場合に予を見捨てるとは！」

「いや、寧そ愚かなふら〳〵した狂人と仰しやつた方がよろしうございませう、」とワルデマールは言つた、「かうした大事が抄られてゐる最中に、たはけた振舞ひ許りしてゐ

るとは全く呆れた狂人どもでございます。」

「どうしたらいゝのか？」とワルデマールの前に突然立ち止まりながら親王は言つた。

「どう致しましたらよろしうございますか、私には一向に解りかねます。」と彼の補佐役は答へた、「但し私が既に命令を下しました事だけは存じて居ります。——私はこの不運を救ふ爲めに出來るだけの力を盡しもせずに、たゞ殿下とそれを歎く爲めにやつて參つたのではございません。」

「ワルデマールよ、其方は實に予の立派な天使だ、」と親王は言つた。「予が御身のやうな補佐役を持つてゐるからには、ジョンの御代は我が國の歷史にも名高いものとなるだらうぞ。——其方は何を命令したのか？」

「私はド・ブラシイの副官であるルイ・ウインケルブランドに命じて、乘馬の用意の喇叭を吹き鳴らさせ、軍旗を打ち振らせ、味方の救助の爲めに尙ほ出來るだけの事を試みる爲めに、フロン・ド・ブーフの城を指して早速出發致させました。」

ジョン親王の顏は、侮辱だと自分で思ふやうな事をせられた我儘な子の持つ憤慨の念で赤くなつた。

「本當にまあ！」と彼は言つた。「ワルデマール・フィッツァーズ御身はあまり遣り過ぎたぞ。予のゐる町で、予の特別な命令も待たずに、喇叭を鳴らさせたり、軍旗を揭げさせたりするとは、餘りに差出がましい振舞ひぢやないか。」

「何卒御勘辨を願ひます、」と內心では、主君の下らぬ虛榮心を呪ひながらフィッツァーズは言つた。「然しながら、時期が切迫して、一刻の猶豫も、重大な結果を惹起さうも知れなかつたので、殿下の御利害にかうも關係の深い大事件に、これ位ゐの責任をわしの身に引受けるのは、當然と考へたのでございます。」

「フィッツァーズよ、許して遣はすぞ、」と重々しく親王は言つた。「御身の志が御身の早まつた行ひを償うてゐる。——だが其處へ來るのは誰か？——確かに、ド・ブラシイだ！——然も彼は妙な風采をしてやつて來たわい。」

それは果してド・ブラシイであつた——「餘り激しく馬に拍車を入れた爲めに血に染まり、急いだ爲めに烈火のやうに眞赤になつてゐた。」（シェイクスピヤの「リチャード二世」三幕三場五十八行にある言葉）——彼の甲冑は、破れたり、損はれたり、處々方々に血が着いてゐたり、前立から拍車まで埃や塵に蔽はれたりしてゐて、最近の物凄い戰鬪の名殘を止めてゐた。冑を脫いで、それを卓の上に置き、彼は自分の消息を述べる前に、氣を取り直さうとするやうに一瞬間立つてゐた。

「ド・ブラシイよ、」とジョン親王は言つた、「これはどうした譯か？——話せ、命令だ！——サクソン人が叛逆を企てたのか？」

「話せ、ド・ブラシイ、」主君と殆ど同時にフィッツァーズは言つた、「貴方は、いつも男らしさを失つた例しがない。——寺侍は何處にゐますか？——フロン・ド・ブーフは何處に？」

「寺侍は逃げてしまひました、」とド・ブラシイは言つた。「フロン・ド・ブーフとはもう二度と會ふ事はございますまい。彼は自分の城の燃え盛る梁の間に眞紅の墓を見出したのです、そして私一人がそれを告げに遣れて參りました。」

ワルデマールは言つた、「我等に取つては、冷たい知らせだ、貴方は火事に就いて語つてゐられるが。」

「尙ほ悪い報告がございます、」とド・ブラシイは答へた。そして、ジョン親王のそばへ寄つて、低い力強い調子で言つた——「リチャードがイングランドに戻りました——私は彼に逢ひ、彼と語りました。」

ジョン親王は蒼白になり、よろめきながら身を支へようとして樫の腰掛の背に捉まつた——まるで胸に矢を受けた人のやうに。

「貴方は讒言を言つてゐるのだ、ド・ブラシイ殿、」とフィッツァーズは言つた、「そのやうなことがある筈はない。」

「いや全く本當です、」とド・ブラシイは言つた。「私は彼に捕はれ、彼と言葉を交へたのです。」

「リチャード・プランタジネットとですか？」とフィッツァーズは言葉を續けた。

「リチャード・プランタジネットとです、」とド・ブラシイは答へた、「獅子心王リチャードとです——我がイングランドのリチャードとです。」

「して貴方は彼の捕虜となられたのですか？」とワルデマールは言つた。「では彼は軍勢を率ゐてゐるのでせうか？」

「いや——僅か數人の追放された鄕士が彼の周りに居りますが、それらの人々にも彼の身分は知られてはゐません。私は彼がその人々を後に殘して立ち去らうと言ふのを耳に致しました。彼はたゞトオキルストン城攻擊の助力をする爲めに加はつたゞけです。」

「實際、」とフィッツァーズは言つた、「それがリチャードのいつもの流儀なのだ——全くの漂浪騎士である彼は、サー・ガイ（ヲリックのガイと云つて口碑によく出る勇者）や、サー・ビース（その冒險談はアーサア物語に有名である）のやうに、王國の重大事件がなく、しかも彼自身の安全が危險に瀕してゐる時には、自分の一本の腕の力を恃んで、向う見ずにさまよひ歩くのが常なのです——ド・ブラシイ殿、貴方はどうなさるおつもりですか？」

「私？——私は部下の傭兵共の奉公をばリチャードに捧げました、所が彼はそれを斥けました——私は彼等をハル（ヨークシャーの海岸にある小都會）へ連れ行き、舟を裝ひ、フランダースへ向けて出帆するつもりです。亂世のお蔭で、働きのある男ならば、如何なる時でも雇つて貰ふ事が出來るのです。そして貴方は、ワルデマール殿、槍と楯とを取り、貴方の策略を拋つて、私と同行して、神が私共に與へ給うた運命を分たうとは思はれませんか？」

「私は餘りに年を取り過ぎました、モーリス殿、その上私には娘がございます、」とワルデマールは答へた。

「フィッツァーズ殿、お娘御を私に下さい、さすれば、私がお娘御の御身分にふさはしいやうに、弓矢にかけて保護致しますでせう、」とド・ブラシイは言つた。

「いや〳〵、」とフィッツァーズは答へた。「私は聖ピーター寺院（イングランド中最も立派な大伽藍の一。昔は寺院にのがれこむ罪人は保護を受けるのが常であつた）に身を隱すつもりです——あそこの大僧正は、私の義兄弟でございますから。」

この會話の間にジョン親王は、思ひも掛けぬ報道の爲めに陷つてゐた茫然自失の狀態から次第に目覺めて、彼の家來達の間に取交はされてゐる會話に注意を拂つてゐた。彼等は予から離れ去つて行く、」と彼は呟いた、「彼等は丁度風が吹く時、枯葉が枝から離れ落ちるやうに、予の許を離れて行く！——が、一體全體、これ等の卑怯者に見捨てられた曉には、自分の獨力では策の施しやうもないであらうか？」

——彼は言ひ止んだ、そして遂に彼が彼等の會話に割込んだ時のその苦笑の中には、惡魔的な熱情が現はれてゐた。

「ハッ、ハッ、ハッ！　御一同、確かに、予は御身達を賢明な人、大膽な人、機敏な人だと思つてゐた。それに御身達は富も、名譽も、快樂も、又我等の氣高い企てがない方がよくはありませんか、御身達に約束する總ての物をも投げ捨てられるとな、しかもそれが大膽な一擧に依つて、手に入れることが出來ようとするこの際に臨んで！」

「私には殿下の仰しやる事が解りかねます、」とド・ブラシイは言つた。「リチャードの歸國が觸れ廻はされゝば、忽ち數萬の軍が彼の麾下に馳せ參ずるでございませう、さすれば我々は萬事休する事になります。我が君樣、フランスへお逃げ遊ばすか、母君陛下の保護をお求めなさるか、切にお勸め致したうございます。」

「予は自分一人の安全は求めはしない、」とジョン親王は傲然と言ひ放つた。「たとへ一言兄君に言ひさへすれば、それが得られるとしても。よし又、御身、ド・ブラシイと、御身、ワルデマール・フィッツァーズとが予を見捨てようとしても、予は御身達の首が彼方のクリフォード城樓の門に曝されるのを見ては餘り嬉しくは思はでぬあらう。ワルデマールよ、御身はあの狡猾な大僧正が、リチャード王と和睦をするやうなことがあれば、御身を神壇の保護から追放するやうなことはあるまいなど〳〵思ふのか？　又、ド・ブラシイよ、御身はロバート・エストートギルが部下の軍勢全部を率ゐて、御身がハルに行く途を遮つてゐる事と、エッセックスの伯爵がその部下を集めつゝあることゝを忘れたのか？　我等がリチャードの歸國よりも前にこれ等の募集兵等を恐れる理由があつたとすれば、今や彼等の首領がどちらに味方するかは最早疑ひを容れないではないか？　實に、エストートギルだけでも御身の率ゐる傭兵を悉くハンバーへ追ひ遣るに足るだけの軍勢を持つてゐるのだ。」——ワルデマール・フィッツァーズとド・ブラシイとは、全く狼狽して互に顏を見合せた。——「安全を得る道は唯だ一つあるのみだ、」と親王は言葉を續けた。そして彼の額は深夜のやうに暗黑になつて行つた。「我々の恐怖の的となる者は、たゞ一人旅してゐる——然しながら彼に出會はねばならぬ。」

「私は御免を蒙ります、」とあわてゝ、ド・ブラシイは言つた。「私は彼の捕虜となり、彼の惠みを受けた身でございます——私は彼の胄の前立の毛一筋も、傷つけることを欲しませんが。」

「誰が彼を傷つけよなどゝ申したか？」と無情さうに笑ひながらジョン親王は言つた。「此奴は今度は予が彼を殺せと命じたなどゝ言ふかも知れぬ！——いや——牢獄の方がましだ。たとひイングランドでもオーストリヤでも、牢獄はどちらでゞもかまはぬ——予等のこの計畫を始めた時と同じやうに、萬事はなり行くであらう——もと〳〵この計畫は、リチャードが永く獨逸に捕はれてゐるだらうといふ見込みに基いて起つたことである——予等の叔父上のロバートはカーディフの城に於いてその生を終へられたのだ。」

「その通りでございます、然しながら、」とワルデマールは言つた、「殿下の祖父上のヘンリイ陛下は、殿下よりももつと嚴然と王座にお座り遊ばしました。最も良い牢獄は寺男の造つたものでございます。——寺院の圓天井の窖ほどよい牢獄はございません！　私はもう言ひたいだけの事を言つてしまひました。」

「牢獄にしろ墓場にしろ、」とド・ブラシイは言つた、「私はこの事件からすつかり手を引きたいものです。」

「卑劣者め！」とジョン親王は言つた、「其方はまさか我々の相談を他へ洩らすことはあるまいな？」

「私は相談を決して洩らしは致しませんでした。」傲然と

ド・ブラシイは言つた、「又卑劣者と云ふ名前も頂戴いたす筈がございません！」

「お靜かになされい、騎士殿！」と、ワルデマールは言つた。——「して又、我が君樣、どうぞ勇敢なド・ブラシイの取越し苦勞をお許し下さいまし。私がやがてそれを取除きます程に。」

「それは貴方の辯舌を以てしても及ばぬことです、フィッツァーズ殿、」と騎士は答へた。

「はて、モーリス殿、」と狡猾な政治家のフィッツァーズは答へた、「少くも、貴方の恐怖の的を見究めもせずに、驚いた馬のやうに飛び退り召さるな。——このリチャードと——もう一日前であつたら、戰ひに伍して彼と接戰することが貴方の最も切なる願ひではなかつたか——私は貴方がそれを願はれるのを百度も耳にしたものです。」

「左樣、」とド・ブラシイは言つた、「けれどもそれは貴方が今言はれた通り、接戰、しかも戰ひに伍してならばです！貴方はよもや私が彼一人を、しかも森の中で攻撃したいなぞと申したのをお聞きなすつたことはあるまいな？」

「若しその樣なことを心配なさるな、貴方は決して立派な騎士とは申されません、」とワルデマールは言つた。「ランスロット・ド・ラックとサア・トリストラム（二人ともアーサア物語における有名な騎士）とが譽れを得たのは戰場に於てぢしたか？　それは深い人知れぬ森の蔭で、巨人のやうな騎士と戰つた爲めではございませんか？」

「如何にもさうです、けれども私は誓つて申しますが、」とド・ブラシイは言つた、「トリストラムもランスロットも、一騎打では到底リチャード・ブランタジネットの敵ではなかつたでせう、して又たゞ一人に對して多勢で立ち向ふことは、彼等の習ひではなかつたと存じます。」

「ド・ブラシイ殿、貴方は氣でも狂はれたか——傭兵隊の隊長として、金で抱へられた貴方に、私等が望むことは何でせう？　貴方達傭兵隊の劍はジョン親王の御用を勤める爲めに需められたものではなかつたですか？　貴方は我々の敵の事を知つてゐられる、さうして、貴方の主君の運命と、貴方の朋輩の運命と、貴方自身の運命と、私共すべての生命と名譽とが危險に瀕してゐるにも拘らず、貴方はくよくよと心配して居られるとは！」

「實のところ、」と不機嫌さうにド・ブラシイは言つた、「彼は私に命を與へたのだ。本當に、彼は私を側から遠ざけ、私の臣服の禮を退けたのだ——それだけ私は彼に恩寵も忠節の念も感じてはゐません——けれども彼に對して弓を引くつもりはございません。」

「その必要はありません——たゞルイ・キンクルブランドと貴方の槍兵を二十人許り派遣なされば宜しいのだ。」

「貴方は御自身で十分な兵士を持つて居られる筈だ、」とド・ブラシイは言つた。「私の部下は一人たりともそのやうな役目に使ふことはなりません。」

「ド・ブラシイ、其方はそんなに迄片意地を張るのか？」とジョン親王は言つた。「して、あれ程度々予に對する忠節の誓ひを立てながら、今になつて予を見捨てゝ行かうとするのか？」

「私はそのやうなつもりはございません、」とド・ブラシイは言つた。「私は試合場にしろ、陣營にしろ、騎士にふさはしい事にはいつも殿下のお供を致します。けれどもこの追剝の振舞だけは私の立てた誓ひに含まれては居りません。」

「ワルデマールよ、此方へ來てくれ、」とジョン親王は言つた、「予は不幸な王子なのだ。父君ヘンリイ王は忠實な臣下を持つて居られた——父王は、亂を好む僧侶に惱まされてゐるとお言ひになりさへすればよかつたのだ、するとトマス・ア・ベケットは、聖者ではあつたが、父王の臣下に殺されて、血潮は彼自身の祭壇の階段を染めた。——トラシイよ、モウヴィルよ、ブリトーよ、忠節にして大膽な家來達よ、お前達の名も、お前達の精神も消えてしまつた！　そしてルジナール・フィッツァーズは一人の息子を遺したが、その子には、彼の父親の忠義と勇氣とが失せてしまつたわい。」

「彼はその孰れをも失ひは致しません、」とワルデマール・フィッツァーズは言つた。「外に仕方もございませんから、私がこの危險な企ての指圖を引受けるつもりでございます。とは云へ、私の父も熟誠な臣下の譽を購ふには隨分高い價を拂つたものでございます。でも父がヘンリー王に對する忠義の證も私がこれから力を盡さうとする事には遠く及びません。何故と申しませば、獅子心王に向つて槍を構へるよりは、寧ろ記錄にある限りの聖者をみんな攻撃した方がましでございますから——ド・ブラシイ殿、貴方には危惧の念を抱く者共の士氣を引立て、ジョン親王の御身を護ることを依賴しなくてはなりません。若し私が貴方に送らうとしてゐる報告をお受取り下されば、私共の企ては最早あやふやの狀態ではなくなりませう——小姓、」と彼は言つた、「私の館へ急いで參り、甲冑方にすぐさま用意をするようにと傳言しろ。そしてスティヴン・エザラルと、ブロード・ソアーズビィと、それからスパイングハウの三人の槍兵とに直ぐに私の許へ參るやうに命じろ。そして又斥候長のヒュー・バードンも參るやうに致せ。我が君樣、時節到來します迄さらばでございます。」から言つて、彼はその室を立ち去つた。

ジョン親王は、極めて打解けた親しみの様子を現はしながら、かう切り出した、「我がド・ブラシイよ、御身はあのワルデマール・フィッツァーズをどう思ふ？——彼は予の大臣にならうと當てにしてゐる。リチャード排斥の陰謀を易々と引受けることによつても解る通り、予の血族に對して明かに尊敬の念を抱いてゐぬ男に、そのやうな高い位を授けることは考へものだ。御身はこの不愉快な仕事を遠慮なく斷つた爲めに、予の寵を幾分失つたと思つてゐるに違ひない——だがさうではない、モーリスよ！　予は寧ろ御身の立派な節操を尊敬してゐるのだ。是非なさなくてはならない緊要な事が幾つもある、それを好くなし得ないやうな者は、予は愛しも敬ひもしないのだ。併し又、予の役に立つやうな拒絶があることもある、その爲めに、予の要求を拒む者を却つて予が尊敬するやうになることもある。予の不幸な兄君を何の躊躇もなく捕縛するやうな奴には大臣なぞと云ふ高官に就く資格を與へはしない、これに反して、御身の騎士にふさはしい勇敢な拒絶は、御身に元帥の官杖を持たせるのだ。ド・ブラシイ、このことをよく考へてくれ、そして御身の任務に就くがいゝ。」——

「氣の變り易い暴君よ！」と親王の前を立去るや否や、ド・ブラシイは呟いた。「殿下に信頼する者は不幸だ。成程、殿下の大臣！——殿下の良心を司つてゐるのは容易い仕事だ。だがイングランドの元帥！　それは、」とその官杖を摑まうとするやうに腕を差延べて、控への間を一層尊大ぶつて歩きながら彼は言つた、「それは手に入れる價値のある褒美に違ひない！」

ド・ブラシイが部屋を立ち去るや否や、ジョン親王は一人の近侍の士を呼んだ。

「予の斥候長のヒュー・バードンにワルデマール・フィッツァーズと話を濟したなら——直ぐ此處へ來るように言へ。」

斥候長は暫らく經つて入つて來た、その間ジョン親王は不揃な亂れた歩調で部屋の中を行つたり來たりしてゐた。

「バードン、」と彼は言つた、「ワルデマールはお前に何を望んだのだ？」

「北方の荒野をよく知り、人馬の足跡を辿ることに妙を得た二人の勇氣ある男を望まれました。」

「してお前は彼の賴みを叶へてやつたか？」

「私がその望みを叶へる事が出來ないなどゝお思ひ下さいますな、」と斥候長は言つた。「二人はヘグザムシャーの人間でございます。彼は獵犬が傷ついた鹿の足跡を辿るやうにタインデイルとテヴィオットディルの盜賊共の跡をつけることに慣れて居ります。もう一人はヨークシャーの生れで、

屢々樂しいシャーウッドの森で、その弓弦の響きを立てゝ居りました。彼は此處とリッチモンドとの間にあるあらゆる林間の空地も、深い谷も、雜木の林も、喬木の森も知つて居ります。」

「宜しい、」と親王は言つた。「ワルデマールも彼等と一緒に出發するのか？」

「直ぐさまでございます、」とバードンは答へた。

「どんな供を連れて行くか？」と、ジョン親王は無造作に訊いた。

「ブロード・ソアーズビーが一緒に參ります、それから冷酷なので、世間に鐵心スチーヴンと呼ばれてゐますエザラルも、それからラルフ・ミッドルトンの部下に屬する三人の北國武士も一緒に參ります——彼等はスパイングハウの槍兵と呼ばれて居ります。」

「宜しい、」とジョン親王は言つた。それから一寸躊躇つた後附け加へた、「バードン、お前はモーリス・ド・ブラシイを嚴重に見張りすることが何よりの大切だ——然しながら、彼に氣取られぬようにしなくちやならない——そして時々彼の擧動を知らしてくれ——彼が誰と會談するか、彼が何を目論むかと云ふやうな事をな。拔からぬやうに致せ、それはお前の責任だからな。」

ヒュー・バードンは一禮して退いた。

「若しモーリスが予を裏切つたなら、」とジョン親王は言つた——「彼の態度からの疑ひなのだが、若し彼が予を裏切つたなら、たとへリチャードがヨークの關門に押寄せて來てゐても、先づ彼の頭を刎ねずには措かぬぞ！」

（三十五）

＊ヒルカニアの荒野の虎を立たしめ、
飢ゑたる獅子と餌食を爭はしめよ、
而も假睡める狂信の火を搔き起さんより、
その危險や尠し。
（＊ヒルカニアは歐洲と亞細亞との間の
カスピアン海とオクサス河との間の地）
（作者不明）

さて物語はヨークのアイザックの身の上に戻る。浪士の與へられた騾馬に跨り、警護と道案内の役を務める背の高い鄕士兩名に伴はれて、かの猶太人アイザックは娘の身請けの談判にテンプルストウの教堂をさして出發した。この教堂は落城したトオキルストーンの城から約一日の行程であつた。で、アイザックは、日暮前にはそこへ到着すべき豫定であつた。そこで森の端れ迄來ると、道案内の鄕士に銀貨一枚與へて別れ、それから、疲れた體の許す限り、馬を速めて步き出した。併し教堂の境内に、もう四哩と云ふ處迄にも達しないうちに力は盡き果てゝ、絞るやうな疼痛は脊筋を流れ、四肢を傳はり、言ひやうもない胸の悶えは、體の苦しみにつれて增し、今はとある小さな市の立つ町から一步も先きに進むことが出來なくなつて了つた。その町にはかねて昵近にしてゐる、醫術に長けた、同族の醫者が住んでゐた。そのネーザン・ベン・イズラエル先生はその惱める同胞を迎へて、捉の定める、そして猶太人が互に實行してゐるあの親切を盡してやつた。彼は進むのを止めて、休むようにとアイザックに無理やりに勸め、そして當時非常に評判の妙藥を服ませて、恐怖、疲勞、虐待、悲嘆などが原因でこの哀れな老猶太人に發した熱の高まるのを止めようとした。

翌朝、アイザックが起きて道中を續けたいと言つた時、ネーザンは亭主役として又醫者として、その所存に反對を唱へた。そんなことをすると命を失くするかも知れない、と彼は言つた。が併しアイザックは、生死以上の事が今朝自分がテンプルストウに行く行かぬ一つにかゝつてゐるのだと

答へた。

「テンプルストウへ！」と主は驚いて、再びアイザックの脈をとつて見たが、やがて我れと呟いた、「熱は下つてゐる、が氣分はまだぼんやり亂れてゐるやうだ。」

「何故テンプルストウへ行つてはならないのです？」と病人は問うた。「ネーザンさん、成程其處は蔑すまれた神約の子（猶太人）を罪の種、憎むべきものとして封ける者共の栖處に違ひない。併し急な商賣上の用事があれば我々も隨分あの血に渴いたナザレ兵共の中へ行くし、又あの寺侍の教堂長の處へも、それから救護僧兵の上役の處へも出向いて行くといふ事は、あんたも御存知の筈だ。」

「いやそれはよつく知つてゐる。が、あんたはあの寺侍團の頭で、彼等が大長老と呼んでゐる、あのリューカス・ド・ボーマノワールも今テンプルストウにゐる事を御存知かな？」

「いやそれは知らない。此間巴里の仲間から來た手紙では、彼はあの市にゐて、フィリップ王にトルコ王サラヂンを征伐する援軍を乞うてゐるといふ事だつたが。」

「彼はそれから寺侍團の者にも知らせず、不意にこのイングランドに渡つて來たのだ。懲らしたり、罰したりする爲めに延ばした强い手をもつて寺侍團の中へ來たのだ。彼の顏は誓ひを破つた者共に對する怒りで燃えてゐる。で、そ

の惡魔の子等の怖れといふものは、一通りではないのだ、御手前も彼の名は聞かれた事があるに相違なからうがな？」

「わしの耳にも隨分入つてゐる。異邦人はこのリューカス・ボーマノワールはナザレの掟を守らすのに大層熱心で、どの條目でも犯すものはどし〳〵殺すと云ふ人間だと傳へて居る。そして我が同胞は彼をサラセン人の獰猛な撲滅者、約束の子等に對する殘忍酷薄の暴君と呼んでゐる。」

「本當にそれや甘く言つたものだな、」と、醫者のネーザンは言つた。「その寺侍共なら快樂で心の目的を變へさせる事も出來る、金銀の餌で買收する事も出來る。が、あのボーマノワールだけは別の代物だ——肉慾を憎み、財寶を賤しみ、そして彼等が殉教の冠と呼ぶ所のものへ驀地に進む——ヤコブの神樣、その冠を一刻も早くボーマノワールに、それから寺侍全部にお授け下さい！　わけてもこの高慢な男は聖ダヴイデがエドムにしたやうにユダの子等に籠手で固めた手を延ばして、猶太人を殺す事をサラセン人の死に劣らぬ香のよい犧牲（舊約聖書出埃及記二十九章十八節に「汝その牡羊を壇の上に燔、燒くべし是エホバにたてまつる燔祭なり、是は馨しき香にしてエホバにたてまつる火祭なり」とあり）だと思つてゐる。我々の藥の效能の事でも、まるで惡魔の製へた藥でゞもあるかのやうに、隨分勿體ない的外れの事を言つてゐた——畜生奴！」

「けれども、わしはテンプルストウへ行かなくちやならな

い、假令リューカス・ボーマノワールが七倍も熱く熱した爐のやうな眞赤な顏をしてゐたとて。」

彼はそれからネーザンに今度の旅の緊急な原因を說いて聞かせた。ネーザンは熱心に耳を傾け、そして自分の着物を引き裂きながら、かう言つて、猶太人流に彼の同情を示した——「おゝ、娘！——おゝ、娘！——おゝ！ ザィオンの美人の爲めに！——おゝ！——イスラエルの虜囚の爲めに！」

「先生も、わしがどんな事情になつてゐるか、又わしが愚圖愚圖してはゐられないといふことが、お分りになつたでせう。恐らく、このリューカス・ボーマノワールは寺侍團の頭で、今この國に來てゐるからには、ブリアン・ド・ボア・ギルベールに彼が企んだ惡事を思ひ止まらせ、わしの可愛いゝ娘レベッカをわしの手に引渡させてくれよう。」

「行つて來さつしやい、してお拔かりなさるな、獅子の洞穴に投げられたダニエルは智慧に救はれたと云ふからな、そして萬事お望み通りに、好都合に行きますよう。それにしても、出來る事なら、大長老の前に出なさるなよ、我民族の惡口雜言をするのが、あの男の朝夕の樂しみなのだから。若しボア・ギルベールとこつそり話す事が出來れば、彼を說き伏せることは益々甘く行かう、何でも噂ではあの敎堂の呪はれたナザレ人共は意氣投合してゐないさうだから——願はくは彼奴等の會議が混亂して恥を曝しまするように！ とまれ、兄弟よ、今一度御父上の家に戻るやうにわしの處へ戻つて來て、首尾はどうかお知らせ下さい。わしは屹度レベッカさんを連れてお歸りになるのをお待ちしてゐます。レベッカさんと言へば、お師匠のミリアム殿を思ひ出す、あの方の醫療を異邦人共はまるで巫術かなんぞでも施したやうに惡口を吐きましたわい。」

で、アイザックは友に別れを告げて、一時間程馬を驅ると、やがてテンプルストウの敎堂の前に着いた。

この敎堂は前敎堂長が寺侍團に寄附した美しい草原や牧場の眞中に建てられてあつた。それは堅固で、十分な防備を施してあつた。この防備こそこれ等の騎士の忽がせにしないところのもので、又當時のイングランドの紊亂狀態が別して必要にしたものなのである。黑裝束の二人の戰兵が吊橋を護つてゐた、そして、他に同じ陰氣な制服の者が數人、城壁の上を葬式の時のやうな足取りで彼方此方と忍び步きしてゐた。その姿は兵と言ふよりは、寧ろ幽靈に似通つてゐた。又この下級の僧兵共もかうした服裝をしてゐた、一體これ等の僧兵は、始めは騎士や從者のやうに白裝束を用ゐてゐたのであるが、パレスタインの山々に或る僞

宗徒の一團が現はれて、自ら寺侍と名乘り、この宗團の體面を汚す事が甚しかつたので、それ以來ずつと白裝束を改めたのである。一騎士が長い白衣を着け、頭を胸に垂れ、腕を組んで、中庭を橫切るのがちらほらと見えた。彼等は偶々出會すと、悠然とした、嚴かな、無言の會釋を交して通り過ぎた、これが彼等寺侍團の掟で、それには「言おほければ罪なきあたはず、」（舊約聖書「箴言」十九節）と「死生は舌の權能にあり、」といふ聖書中の文句（舊約聖書「箴言」十八章二十一節）が引用してあるからである。つまり、いつの間にか久しい間に亙つて締め括りの無い、放埒な氣儘に變つてゐた寺の嚴しい禁慾的な掟が、今やリューカス・ボーマノワールの嚴しい眼の下で、テンプルストウに一度に復活したかのやうに見えた。

アイザックは門前に立ち止つて、どうすれば最も好意を得られさうな案內を乞はれようかと考へた、と言ふのも、自分の不幸な種族にとつて、今この宗團に復活してゐる狂信が、その危險さに於て元の不規律な放縱に劣らないといふ事や、又彼の富が或場合には無情な暴虐極まる强奪に彼を會はしめる因となり、他の場合には彼の宗敎が憎惡と迫害の對象となるといふ事によく氣附いてゐたからである。

話變つてリューカス・ボーマノワールはこの時、パレスタインから同道した一人の同宗徒と悲しい打明け話を交しながら、外堡の內にある、この敎堂に附屬する小庭を、そゞろ步きしてゐる所であつた。

大長老は可なりの年寄りで、それは長く垂れた白い鬚や、眼の上に差しかゝるむしやくしやした白い眉を見てもそれと頷かれるが、併しその眼の光は、この年齡とも思へぬ程爛々としてゐた。彼が不敵の戰士である事は、痩せた嚴格な顏に兵の猛々しい表情を留めてゐるのでも分る。彼が禁慾的な狂信家である事は矢張りその顏に禁慾からの枯瘦や自足の行者の精神的な誇りの痕が著しいのでも分る。しかもかういふ一際嚴めしい人相の中に、何處か目立つて氣高い所があつた。それは確かに、その高い職掌柄王侯の間で大役を勤める所から、又この宗團の掟で統一されてゐる剛勇な名門の騎士達に何時も最高の權力を揮ふ所から生じて來たものに相違ない。背は高く、步態は、齡にも勞苦にもめげず、眞直ぐで堂々としてゐた。白い外套はベルナール上人（有名なフランスの僧侶、寺侍團の統治の爲に法典々作つた）自身の規定に從ひ一分一厘も違はず正確に作られ、先づ布地は當時バーレル織（粗惡な布の名）と呼ばれてゐたもので、着る人の體の大きさにぴつたり合ひ、左の肩に赤い布で作つた、この宗團に特有の八角形の十字架が着けてあつた。この衣には栗鼠の皮も貂の皮も飾つてない、が年齡の點から、大長老は、掟の許すところに從つて、

最も柔かい小羊の皮で裏をつけ、縁を取り、外側を羊の毛で飾つた胴着を着てゐた。これは寺法の許す限り當時の衣裳としては最も贅澤で、毛皮の使用に最も近いものであつた。手には、職標である妙な形のアバカスを持つてゐた、それは通常寺侍の徽であつて、上端に圓板があり、それへ紋章係の言ふオール卽ち丸に八角形の十字架の紋を彫り付けてある。この高僧に附き添つてゐた連れの者は、凡ゆる點でよく似た衣裳を身に着けてゐたが、その上長に對してゐると云ふ事を示してゐた。この教堂長（と云ふのが彼の位だつたので）は、大長老と肩を列べず、と云つて、ボーマノワールが、首を廻さなくては話せないほど、後ろでもない位の位置を保つて歩いてゐた。

「コンラードよ、」と大長老は言つた、「わしの數度の戰ひ、わしの數々の勞苦の親しい友よ、獨り御身の忠實な胸にだけ、わしの悲しみを打明ける事が出來るのだ。獨り御身にだけ、この王國に來て以來幾度わしがこの世を去つて正しい者と一緒になる事を望んだかを語る事が出來るのだ。イングランドではわしの目の止るもので、愉快な物は一つもない、但し、彼方の立派な首府（ロンドンを指す）にあるテムプル教會（ロンドンに於ける寺侍り昔の宿泊所インナア・テムプルの境界内にある。この寺院内の古い部分で「ラウンド・チャーチ」と稱せられる所に有名な寺侍の像がある。その中にはペンブローク伯たるキリアム・ド・マレッシャルやロベール・ド・ローなどがある）のどつしりした屋根の下にある我々の兄弟の墓だけは別だ。『おゝ、勇ましいロベール・ド・ロー！』と、わしはこの立派な十字軍士達の名が墓碑に彫刻されてゐるのを見詰める度に、かう心の中で叫んだよ、——『おゝ、尊いキリアム・ド・マレッシャル！あなたの大理石の庵を開けて、疲れ倦んだ兄弟を一緒に休ませてくれ、わしは我が聖團の廢頽を見る位ゐなら百千の異端者と戰ひたいのだ！』とな。」

「それは眞實と申すより外はございません。」とコンラード・モン・フィッセは答へた、「眞實過ぎる程眞實でございます。イングランドの團員等の不行跡は、フランスの者共より尙は一層甚しうございます。」

「それと云ふのもずつと富裕だからだ、」と大長老は答へた。「少々高言を吐くやうだが、勘忍しておくれ。御身はわしが送つて來た生活を知つてゐる。わしは宗規の細目と云ふ細目を守り、有形無形の惡魔共と戰ひ、立派な騎士、敬虔な僧侶のやうに、うろつき廻つて、餌食を探す吼える獅子を、會ひ次第に打ち仆した——正しく尊いペルナール上人が我が掟の第四十五章に『獅子は常に打ち仆されん爲め、』と述べ給うた通りにな。併し聖堂にかけて！　わしの體、わしの生命、さうだ、わしの骨の髓迄も食ひ盡した熱心、聖堂にかけてもわしは御身に誓ふ、御身と今尙ほ我が宗團の昔の嚴格さを失はない少數の人々とを除けると彼の聖い名の下にわしの魂が抱き得るものは一人も見ないのだ。我々の律令は何んと言つてをり、我々の團員はそれを如何に遵守してゐるか？　彼等は世俗の虛飾を身に着けてはならぬ、兜に羽毛を着けてはならぬ、鎧や鞍に黃金を着けてはならぬ、それに誰が今御堂の兵程誇り顏に派手に盛裝して濶歩するものがあらう。甲の鳥を捕るに乙の鳥を使つたり、弓や琴を以て獸を射たり、獵笛に合はせて掛聲したり、又は馬を驅つて獲物を追うたりするのは、我が律令の禁ずる所だ。だのに今、狩獵、鷹狩を始め、森や河のあらゆるつまらぬ娯樂に於て、寺侍程今言つたやうな厭はけた無價値の物に機敏な者が他にあらうか？　彼等は上長が許したもの以外には、讀む事を禁ぜられ、齋の間に高らかに誦してもいゝやうな聖文以外には、讀み物に耳を傾ける事も禁じられて居るのだ、だのに、見ろ！　彼等の耳はつまらぬ吟遊樂人の歌にうつゝをぬかし、彼等の眼は空な稗史小說に曝されてゐる。彼等は魔術や外道を根絕やすように命ぜられた。それだのに！　彼等は忌はしい猶太人の密法や、異教徒サラセンの魔術を究めてゐるといふ嫌疑を受けてゐる。食事の質素といふことも規定されてゐる所だ、草根、汁、粥を常

食とし、肉は一週に三度しか食べてはならぬ、といふのは、肉を常食とすることは、恥づべき體の穢れであるからだ。それに見よ、彼等の食卓は珍味佳肴が山と積まれてゐる！飲料は水であるべき筈だつた、それに今は、寺侍のやうに飲むと云ふことは、陽氣な飲み仲間の自慢となつてゐるわい！　この庭でさへが、この通り東方から送られた珍らしい草樹で一杯だ、基督敎の僧侶が自分達の質素な野菜を作るに專ら用ゐるべき地所であるよりは、不信神のアラビア酋長の閨門の庭に相應しいのだ！　しておゝ、コンラード！　規律の弛緩がこの位ゐで止つたのはまだいゝのだ！御身もよく存ぜられよう、我等は初めの頃我が宗團の姉妹として加盟させたあの敬虔な女人等も迎へる事を禁ぜられてゐたのだ、と云ふのは第四十六章にも言つてあるやうに、古の惡魔は、女性との交際に依つて、多くの者を天の樂園に行く正しい道から引戻したからなのだ。いや、最後の章は、言はゞ、我が有難い開祖が御自分の垂れ給うた純眞で汚れない御敎義にお置き遊ばされた笠石のやうなものである。この最後の章では、愛情の接吻を、我々の姉妹、我々の母にすら、與へる事を禁じてゐるのだ——『何人を問はず凡そ女性の接吻は避くべき事。』わしは洪水のやうに、我々に押し寄せたその悖德の事を言ふを恥ぢる。我

が潔白なる開祖達の御魂は、ユー・ド・ペイヤンやゴドフレイ・ド・サン・オーメル（此等の二人と他の七人とで千百十八年エルサレムで寺侍團を創設した）を始め、初めて御堂の奉仕に加盟して、一生を捧げた尊い御七人の御魂は、天の樂園に行かれた後にさへ攪亂されるのだ。わしはあの方々を、コンラードよ、夜の幻で見申した事がある——この方々の聖い御眼は兄弟の罪や痴業の爲め、又兄弟が浸る穢らはしい恥づべき豪奢の爲め涙を流して居られた。『ボーマノワール』とあの方々は仰しやる、『そちは眠つてゐる——醒めよ！　御堂の建物に汚れがある、それは昔の避病院の壁に癩病の名殘として殘つてゐる汚れ（舊約聖書利未記十三章參照）のやうに深くて穢らはしい。女人の秋波をバジリスク（アフリカの沙漠に棲み、一度睨む人を睨み殺すと傳へられた怪物）の眼のやうに避くべき十字軍士が、たゞに彼等自身の種族の女性ばかりか、呪はれた異教徒、更に呪はれた猶太人の娘とさへ、大びらに罪の生活を送つてゐる。ボーマノワール、そちは眠つてゐる、起きよ、而して我等の爲めに仇を打て！　男女を問はず、罪人を殺せ！　ピネハスの劍を取れ（或イスラエル人がミデアンの婦人と結婚してゐるのを見てピネハスは劍を取つて殺した。舊約聖書民數紀略」二十五章六、七、八の三節にある）』から言つて幻は掻き消すやうに消え去つた。コンラードよ、わしは、はつと目が覺めた時も尚ほ、あの方々の鎖帷子の音を聞き、雪白の外套の搖ぐのを見る事が出來たのだ。でわしはあの方々のお言葉に從つて、御堂の建物の汚れを潔めよう！　そして病根のある不淨の石を、建物から除き棄てよう。」

「でもよくお考へ遊ばせ、大長老樣、」とモン・フィッセは言つた、「その汚れは、時と習慣とで深く染められるやうになつたのでございます、御改革は、それが正しく賢明であるやうに、又用心深く遊ばされませ。」

「いや、」と一徹な老人は答へた——「モン・フィッセ、それは嚴しく又手早くせねばならぬ——この宗團はいま運命の危機にある。我が先輩の謹直、獻身、敬虔は我々を有力な友とした——我々の僭越、我々の富、我々の豪奢は、我々に強大な敵を作つた。我々はこれ等の富を棄てねばならぬ、それ等は王侯の誘惑物だ——我々はあの僭越を捨てねばならぬ、それは王侯に對する罪だ——我々はあの放縱な風俗を改めねばならぬ、それは、全基督教世界にとつての汚辱だ！　さもないと——宜いか——寺侍團は全く潰れて了ふだらう——そしてその地位は、最早諸國民の間には知られまい。」

「おゝ神樣、どうぞ左樣な災を避けられますように！」と教堂長は言つた。

「アーメン、」と大長老は嚴かに唱へた、「併し我々は神の御助けを受ける資格があるに相違ない。なんと、コンラードよ、天の神にせよ、地の神にせよ、もうこれ以上この時代の惡を忍ばれはすまい。わしの言葉に間違ひはない——我が御堂の建つてゐる地は既に下が掘られ、我が宏大な建物に我々が建增しをすれば益々早く泥淵にそれを沈めるのみであらう。我等は歩みを昔に回さなければならぬ、而して獨り我等の血、我等の一生のみならず——獨り我等の强慾我等の惡德のみならず——又我等の安樂、我等の慰藉、我等の自然の愛情をも我等の天職に犧牲に供して、忠實な十字軍士たる事を證さなくてはならぬ、そして他の者には多分正しい多くの快樂も、誓言した御堂の兵には禁ぜられてゐる、といふ事を確信した人間として行動しなくてはならぬ。」

この時、擦り切れた法衣を着た一人の從者（この聖團を慕つて來た者は、修練期間は騎士の脫ぎ捨てた衣類を着てゐるからである）が、庭に入つて來て、大長老の前に丁寧にお辭儀をした、そしてぢつと立つたまゝ、來意を語る許しを待つてゐた。

「某督教の謙讓の德を示す衣を纏ふこのダミアンが、」と大長老は言つた、「斯く己れの上長の前に恭々しく口を噤んで現はれる方が、ほんの二日前、この呆け者が、色取つた上衣を着飾り、鸚鵡のやうに生意氣にべちやくちや喋つてゐた時よりも、ずつと相應しくはないか？　言へ、ダミアン、許す。用事は何んだ？」

「大長老樣、一人の猶太人が門外に立つて居りまして、ブリアン・ド・ボア・ギルベール樣に、お目に掛つて話したい事があると願つてゐます。」

「それはよい事を知らせてくれた。予が前では一教堂長はわが寺侍團の普通の一同輩に過ぎない、自分一人の思ひの儘に歩いてはいなけい、自分の長老の意志の儘に歩かなくてはならない——聖文に從つても、『耳に聞きて彼怨ちわれにしたがひぬ』（舊約聖書詩篇十八篇四十四節にあり）とある。このボア・ギルベールの所爲に就いて知ることは、殊に予に重要の關係があるのだ、」と伴の方を振り返つて言つた。

「噂によりますと、あの男は勇敢で剛膽だといふことでございます、」とコンラードは言つた。

「してまた實際、あの男はさう言はれてゐる、」と大長老は言つた。「我々は剛勇の點だけでは、十字軍の勇士である我我の先輩より劣つてゐない。が併し、あのブリアン兄弟は、我が寺侍團に入つた時、陰鬱な失意の男で、眞面目に心からではなく、何かちよいとした不滿の氣持から懺悔の道に入つた者のやうに、我が宗團の誓ひをたてゝ浮世を捨てる氣になつたのではないかとわしは思ふのだ。その時以來、彼は

活潑熱心な煽動者ともなり、不平家ともなり、陰謀家ともなり、そして我が權威を非難する者共の首魁ともなつた、錫杖と鞭——弱者を助ける錫杖——過まてる者を矯す鞭——の標章に依つても分るやうに、統治の權は大長老に與へられてゐる事を忘れて。——ダミアン、」と彼は更に語を繼いだ、「その猶太人をわしが面前に案内せい。」

従者は最敬禮をして立ち去つた、そして二三分經つてから、ヨークのアイザックを同道して戻つて來た。どんな裸體の奴隷が、強大な王侯の面前に案内されたつて、猶太人アイザックが今大長老の前に近づいた時程、深く尊敬と恐怖とを懐いて、裁きの席に近寄る事はあるまい。彼が三ヤード程の所迄進むと、ボーマノワールは錫杖を擧げて、それ以上近寄つてはならぬと合圖した。猶太人は地面に跪いて、尊敬の印に地に接吻した。それから身を起すと、彼は手を胸に組み合せ、頭を胸に埋めて、東方の奴隷のあらゆる柔順の態度を現はして、寺侍の前に立つた。

「ダミアン、」と大長老は言つた、「退れ、そして一人の番兵に、いざと云へば直きに間に合ふように支度をさせて置け、そして予等が去るまでこの庭へ何人も入らすな。」従者は一禮して退いた。「こりや猶太人、」と傲慢な老人は語を繼いで言つた、「わしをよつく見い。そちと長く談話をする事は予が身分に相應しくない、いや又予は何人とも徒らに言葉を交はし、徒らに時を費すことはしないのだ。だからどんな問ひをそちにかけても答へは簡單に致せ、又そちの言葉に嘘僞りがあつてはならぬぞ。萬一二枚舌を使ふやうな時は、その舌をそちの不信神な顎から抜き取つてくれるからさう思へ。」

猶太人は何か答へようとした、が大長老は尚ほ言ひ進めた。

「默れ、不信者め！——予が面前では、予が問ひに答へる外一言たりとも口外してはならぬ。ブリアン・ド・ボア・ギルベールへの用事とは何か？」

アイザックは恐れながら又不安さうに喘いだ。自分の話をすると、この寺侍團に泥を塗るやうに取られるかも知れない。でも、これを話さなくては、娘をうまく救ふことがどうして出來よう？　ボーマノワールはアイザックの言ひ知れぬ懸念を見て取つて、彼に幾分の安心を與へる爲めに今度は低く出た。

「なんにも心配する事はない、」と彼は言つた、「猶太人、そちの哀れな身の上に就いて何も心配する事はない、今度の事は眞直ぐに申立てるがいゝ。もう一度訊ねるが、ブリアン・ド・ボア・ギルベールに對する用件とは何か？」

「恐れながら、」と猶太人は口籠りつゝ答へた、「手前はジヨルヴォール寺の僧正エイマ樣から、あの騎士樣へ宛てたお手紙を持參致しましてございます。」

「この頃は悪い事ばかり續く時だと言つたぢやないか、コンラード、」と長老は言つた。「シートー教の僧正が御堂の武士に手紙を送つて、不信者の猶太人より適當な使者を見出すことが出來ないのだ——どれ、その書面を見せえ。」

猶太人は手を震はせながら、アルメニア帽の襞を開けて、其處に大事に藏つて置いた僧正の手紙を取出し、それを怖い顏をした訊き手の手の屆く所に置かうと思つて、手を延ばし體をすくめて、進み寄らうとした。

「退れ、犬め！」と大長老は一喝した、「わしは劍で觸れるより外には、不信者に手を觸れぬわい。コンラード、その書面を猶太人より受取つて、わしに吳れい。」

ボーマノワールは、かうしてその手紙を手に取ると、表書を丹念にしらべて、それから封のからげ絲を解かうとした。「御上人樣、」とコンラードは、横合から口を出した、但し非常に遠慮がちに——「その封をお破りなさるのでございますか。」

「予が破つては悪いか、」とボーマノワールは顏を顰めて言つた、——「第四十二章、『手紙閲讀の條』中に、寺侍はその父からの手紙は別として、その他の手紙は受取ると必ず大長老の面前で讀み上げなくてはならないと書いてはなかつたかな。」

彼はそれから驚きと怖れとの表情を浮べながら、手紙を急いで默讀した、そして更に今一度もつとゆつくり讀み返した、そして片手でコンラードの方へそれを差出し、別の手で輕くたゝきながら、叫んだ——「こゝに基督教徒から基督教徒へ送る手紙の、いゝ手本がある、して兩人共僧職にあるものだ、そしてどちらも相當の身分のものだ！　一體何時、」と彼は嚴かに、天を仰いで言つた、「御身は箕を持つて禾場を淨めに來り給ふのか？」（新約聖書、馬太傳三章十二節に「手には箕を持つて禾場を淨め云々」とある）

コンラードは長老から手紙を受取つて、それを默讀しようとした。「聲を擧げて讀め、コンラード、」と長老は言つた、「してそちは（とアイザックに向つて）その文面を謹んで承はれ、今それに就いて訊ねるから。」

コンラードは手紙を讀み始めた、それにはかう書いてあつた。

『神の惠みによりジヨルヴォールなる聖母マリヤのシートー派寺院の住職エイマより、聖き寺侍團の騎士、ブリアン・ド・ボア・ギルベール卿へ。

バッカス王（ラテンの酒神）及びギーナス姫（愛の女神）の御恩恵を得て貴下の益々御健勝ならんことを祈り申候。降つて愚僧等の現狀に就いて申上候へば、愚僧等は或無法無神なる徒の手に捕虜と相成居申候。彼等は何等躊躇する所なく愚僧等の體を抑留し、身代金を要求致し候、御蔭を以てフロン・ド・ブーフの不幸、及び貴殿が美しき猶太の女魔法使の黒眼に魂を奪はれ、その娘と共に脫走被致候趣きをも承り申候。御無事の程心より御慶び申上候。されども、この第二のエンドルの女魔法使の件に就てはくれ〴〵も用心被遊度、櫻色の頬、黒き瞳には豆程も心を寄せざる貴下の大長老、間もなくノルマンデイより御渡海、貴下の樂しみを減じ、貴下の非行を匡さん事、愚僧等心密かに信ずる所に御座候。されば何卒御注意、御警戒の程心より願はしく、聖典にも「目を覺まし居るを見らる」と申候。尙、かの娘の父なる物持ちの猶太人、ヨークのアイザックなる者、自己の爲めに、手紙をば愚僧に懇請仕候間、この書面相認め遣し申候に付、彼が身代金を支拂ふ節は何卒娘を御解放なされ候やう切に御勸告申上候。否懇願申上候。さすれば、猶太人はその財布より更に安全なる條件にて五十人の娘を得らるゝ程の金額を支拂ひ申すべく候。願くは愚僧もやがて、眞の兄弟として、共に愉快を盡し申すべき節、愚僧の分別も頂戴し得ることゝ信じ居候。尙その折、勿論酒盃を忘れ申すまじく候。蓋し斯く申上ぐるも聖經に、「人の心を歡ばしむる葡萄酒」、更に又「王はなんぢの美しきをしたはん」との御言葉を拜讀致す故に候。

何れその樂しき御會合の機を期し、先はこれにて失禮申上候。朝禱の頃、盜賊の巢窟より以上申上候。

ジョルヴォールなる聖母マリヤの住職エイマ拜

二伸。實は貴下の黄金鎖夙に愚僧の手を離れ申候。斯くて、今は浮浪の鹿泥棒の頸にかゝりて、獵犬の呼笛を附け居る事と存じ候。』

「これを御身はどう思ふ、コンラード？」と大長老は言つた。「盜賊の巢窟！　あんな住職には盜賊の巢窟こそ似合ひの住居だ。このエイマのやうな出家があるのだもの、神の御手が我等の上に在るのも、聖地で我々が、不信者の前に、一場所又一場所、一歩又一歩と地歩を失ふのも何の不思議もない。そしてこの第二のエンドルの女魔法使とは一體どう云ふ意味か知らん？」と、彼は少し離れてゐる腹心のコンラードに言つた。

コンラードは、長老よりも艶事の通語に（多分經驗によつて）よく通じてゐた、で大長老を當惑させた文句は、俗人どもが情人として自分の愛する者に對して用ゐる一種の言葉だと說明した、が、その說明は頑迷なボーマノワールを滿足させなかつた。

「この言葉には御身が察することの出來ない所がある、コンラード、御身の純朴な心は到底このやうな邪惡の深淵の相手ではないのだ。このヨークのレベッカは御身も聞き及んでゐるあのミリアムの弟子であつた。この猶太人が今ここでそれを白狀するのを御身に聞かせてやらう。」それからアイザックの方を向いて、聲高に言つた、「ではそちの娘はブリアン・ド・ボア・ギルベールの捕虜となつてゐるのだな？」

「左樣で、お上人樣、」と哀れなアイザックは口籠りつゝ答へた、「してこの哀れな爺は娘の解放の爲めに、幾らの身代金を拂ひましても……」

「默れ！　その貴樣の娘は療法を施したんだらうが？」

「左樣でございます、お惠み深い且那樣、」と猶太人は前よりも度胸を固めて、答へた、「して騎士も、鄕士も、從者も、家來も、天の神樣があの娘にお授け下さいましたあの立派な賜物に感謝しても宜いと存じます。誰が手を盡しても駄目でした時に、娘が自分の技であの人々を活してお上げした事は、多勢の人々が證人となつて下さいます、ですが娘にはヤコブの神樣のお蔭があつたのでございます。」

ボーマノワールはモン・フィッセを振り返つて、凄い笑ひを洩らした。「見よ、コンラード、貪り食ふ惡魔の瞞着を！　彼奴が魂を釣る餌を見よ、あの世の永遠の幸福と引換へに、この世の果敢ない時間を與へる。我が尊い宗規は旨い事を申したものだ、『センペル・ペルキュシアチュル・レオ・ヴォランス』（貪り食ふ獅子は常に打ち仆さるべきなり）――獅子に打ちかゝれ！　破壞者を仆せ！」と彼は不思議な錫杖を、宛で惡魔に挑みかゝるかのやうに、高く打振りながら言つた。「そちの娘は、」とかう彼はまた猶太人に話し掛けた。「咒文、咒符、その外の不可思議な祕法によつて治療するのだ、それに相違ない。」

「いえ、尊い勇しい騎士樣。大抵は驚くべき效能ある膏藥で治します。」

「何處でその祕傳を得たのだ？」

「それは、」とアイザックは氣が進まぬ樣子で答へた、「我が種族の賢明な刀自、ミリアム樣から傳授されました。」

「おゝ、人たばかりの猶太人！　その魔法は忌はしい魔法が何處の基督教國でも嫌はれた、あの魔法使ミリアムからではなかつたか、」と大長老は、十字を切りながら叫んだ。「あの女の體は火刑柱の上で燒かれ、その灰は四方に吹飛ばされて了つた、若し予があの女の弟子を同樣の目に會はせ

なければ、いや又もつとひどい目に會はせなければ、予及び予の寺侍團が、却つてひどい目に會ふだらう！　尊い御堂の武士の咒文やまじなひを投げかけるときかないぞ。ダミアン、この猶太人を門から逐ひ出せ——手向ひしたり又戻つて來たり致したなら射殺して了へ。彼奴の娘は基督教の掟及び予自身の高い役目が許す通りに處分しよう。」

哀れなアイザックはそれで追ひ立てられて、教堂から放逐された、あらゆる歎願も、捧げ物さへも、聽かれず、顧みられなかつた。彼は例の醫師の家に戻つて、彼の智慧を借りて、娘がどう處分されるかを知るように努めるより外、仕方がなかつた。彼はこれ迄娘の節操を心配してゐた、今は娘の生命を氣遣はねばならなかつた。話變つて一方では、大長老はテンプルストウの教堂長を此處へ呼んで來いと命じた。

（三十六）

我が術を詐欺と云やるな——
　すべて見せかけならぬものはない。
下は乞食の物乞ひから、上は燦びやかな廷臣の
土地や稱號位階權威を手に入れるも、皆見せかけに外ならぬ。
僧侶もそれを侮らず、剛勇な兵は
それで己が勤めの不足を補はう。——すべての者皆それを認め、
すべての者皆それを行ふ。されば
僞りならぬ本性を甘んじて現はす者は
僧侶となるも、軍人となるも、さては役人となるも、
信用少ないは必定。
　これこそ世の中といふもの。
（古劇より）

テンプルストウの教堂長アルベール・マルヴォアザンは、この物語に既に折々その名を擧げられた、かのフィリップ・マルヴォアザンの兄弟で、その領主と同じく、ブリアン・ド・ボア・ギルベールと深く結託してゐる者であつた。

寺侍團中に非常に多い放埒無規律な者共の中でも、このテンプルストウのアルベールなどは殊に拔群の方かも知れない、が、大膽不敵なボア・ギルベールとは、己れの惡德や野心の上に僞善の被ひを掛け、內心では賤しんでゐながら、表面に狂信を出す術を心得てゐるだけが違つてゐた。若し

大長老の到着があんなに意外に突然でなかつたなら、恐らく大長老は規律の頽廢の證據となりさうなものは、何もこのテンプルストウで見なかつたであらう。で、驚きもし、又或る程度迄は見破られはしても、アルベール・マルヴォアザンは、上長の懲戒を非常に恭しく、又非常に後悔したらしく傾聽し、彼が難じた細目を、大急ぎで改めたので——要するに、つい今迄放縱と快樂とに耽つてゐた一門に、禁慾的な精進の樣子を與へる事に見事に成功した。で、リューカス・ボーマノワールはこの教堂長の素行について、最初この教堂を見た時に思つたより、もつと高く評價するやうになつたのである。

然し大長老のこの好感情は、アルベールが教堂內に猶太の捕虜、而も恐るべし、同じ團員の情婦を入れたと知るに及んでひどく動搖を來したのである。で、アルベールは彼の前に現はれると、常ならぬ險しい眼で睨まれた。

「聖い寺侍團の爲めに奉納されたこの寺院內に、」と大長老は嚴めしい口調で、言つた、「一人の同宗徒がこれへ連れて來た猶太の女がゐることを其方は見逃してゐるな、教堂長。」

アルベール・マルヴォアザンは狼狽して爲す所を知らなかつた、と云ふのは不幸なレベッカは遠く離れた祕密の一室に監禁せられ、而も彼女の其處にゐることは、人に悟られぬやうに十分の注意が拂はれてあつたからである。彼は、ボーマノワールの顏色を讀んで、若しこの難關を切り抜け損つた日には、ボア・ギルベールと我が身は、てつきり破滅の外ないと感づいた。

「其方は何故默つてゐる？」と大長老は言葉を續けた。

「お答へしても宜しうございませうか、」と教堂長は非常にへりくだつた口調で反問した、だがこの反問は、自分の考へを纏める寸時の合間を得る算段に外ならなかつたのである。

「よい、言へ、」と大長老は言つた、「語れ、其方は我聖い宗規の中の、『肉體的快樂の爲め最も身分低き女性と關係せる寺侍に關して、』といふ條を存じてゐるか。」

「確と存じてゐます、長老樣、」と教堂長は答へた。「私はその最も重要なる禁令の一つを知らずに、この役に昇りはしませんでした。」

「然らば今一度訊ねるが、團員の一人にこの神聖な場所へ情婦を、しかも人もあらうに猶太の魔法使を伴れ込む事を許し、此處を穢したのはどうしたわけだ？」

「えツ、猶太の女魔法使！」とアルベール・マルヴォアザンは鸚鵡返しに答へた、「まあ、本當に困りましたな！」

「さうぢや、猶太の女魔法使だ！」と大長老はきつと言ひ放つた。「予はさう言つたのだ。よもや其方は、このレベッカが、あの浅ましい高利貸ヨークのアイザックの娘で、穢らはしい巫女ミリアムの弟子である者が、今――考へたゞけでも言ふだけでも汚らはしい！――この其方の教堂内にゐるといふことを否みはすまい？」

「唯今承はつて初めて合點が行きました。實は放つて置いては、我々の勇敢な信仰深い兄弟が墮落するのもかまはず一緒になるかも知れないと存じ、兩人が親しくなる邪魔をしたいばつかりに、その女をこの家へ入れたのでございますが、ブリアン・ド・ボア・ギルベール程の立派な騎士が、どうしてあんな女の色香にあゝまでたあいもなく醉ひしれたかとひどく不思議に存じてゐた次第でございます。」

「では、兩人の間には、未だ彼の誓ひを破るやうな事は何も無かつたのだな？」と大長老は訊ねた。

「なんと仰せられますか？　この家根の下でございますか？」と教堂長は十字を切りながら言つた、「斷じて！　斷じて左樣な事はございません！　若し私があの女を此處へ入れて罪があると致しますれば、それはかうすればこの猶太女に對する我々の兄弟の醉ひしれた狂熱を冷されるかも知れないといふ誤つた考にあつたのでございます、實際、あの熱心さは、餘りに激しく不自然なもので、發狂の氣味のせるとしか思へませず、さうとすれば責めるよりは憐れむ方が、却つて治し易いかと存じましたのでございます。併し尊師の御叡智がこの猶太の娘つ子を魔法使であるとお見破り遊ばしたからには、恐らくそれはブリアンの愚かしい繊慕を十分に説明するかも知れません。」

「する！　確かに説明する！」とボーマノワールが言つた。「見い、コンラード、惡魔の第一の計略や、甘言に從ふ危險を！　我々は女性をたゞ眼の慾を滿たし、男に美しいと言はれて嬉しがるものとしか思はない、昔の仇、吼ゆる獅子は我々を支配して、懶惰と愚とで始められた仕事を、護符と咒文とで仕遂げるのだ。恐らくボア・ギルベールは今度の問題で嚴しい懲罰よりも寧ろ憐憫を受くべきものであらう。鞭の打擲よりも、寧ろ錫杖の助けがふさはしからう。そして恐らく我々の訓戒や祈禱で彼の愚行を思ひ止らせ、兄弟達の處に再び歸らせる事が出來るであらう。」

「この聖い團體がその子等の助けを最も要します時に、槍の名手の一人を失ひますことは、如何にも惜しうございます、」とコンラード・モン・フィッセは言つた。「三百のサラセン人を、このブリアン・ド・ボア・ギルベールは彼一人の手で殺しました。」

「あの忌はしい犬共の血は、其奴等が賤しみ瀆した聖徒や天使樣達には馨しい喜ばしい供物であらう、そして我々はあの聖徒や天使樣のお助けに依つて、我々の兄弟が網にかかつたやうに卷き込まれてゐるその咒文や、まじなひを破つてやらう。彼はサムソンがフィリスティン人等に縛られた二本の新しい網を打ち切つたやうに、このデリラ（女惡魔卽ちレベッカのこと）の紐を斷ち切り、不信者を殺して山をも築くだらう。さて、寺侍の一人に魔術を掛けたこの穢はしい巫女だが、それは間違ひなく殺してしまはう。」

「併しイングランドの法律は、」――教堂長は、大長老の怒りが、かうして幸ひにも自分やボア・ギルベールから轉じて、他の方向を取つた事を喜びながらも、今やそれが餘り極端に走らうとするのを心配し始めて、かう言ひ掛けた。

と、ボーマノワールはその言葉を遮つて、「イングランドの法律は、どの判事にもその權限内で裁判する事を許しもし、命じてもゐる。で、最も小さい領主でも自分の領地内で見付けた巫女を捕へて、裁いたり、宣告したりする事が出來るのだ。すると、その權力が御堂の大長老に、その宗團の教堂内で、與へられないと云ふ事があらうか？　そんな事はない！　――予は裁いて宣告する。巫女をこの土地より放逐し、その罪を赦して取らせよう。城の廣間に魔法使の女の審問の準備をせい。」

アルベール・マルヴォアザンは一禮して退いた――が廣間の準備の指圖をする爲めではなく、ブリアン・ド・ボア・ギルベールを探し出して、事がどう落着しさうかを傳へる爲めであつたのである。間もなく彼が行つてみると、ブリアンが、又も美しい猶太娘から受けた反抗に、泡を吹いて怒つてゐる所であつた。「血と焔との中を潛つて、自分の生命を賭してまでその生命を助けた男を嘲るとは、何と云ふ無分別の恩知らずな女だらう！　本當に、マルヴォアザン殿！　私は天井や楠が、身の周りで裂け碎ける迄摑み留まつてゐた。私は百の矢の的となつた、その矢は格子窓に雹が當るやうに私の甲冑に當つて音を立てた、して私が楯を用ゐたのはあの女を保護する爲めばかりにであつた。かやうな事もあの女の爲めなればこそ私は忍んだのだ。然るに今この我儘な娘は、私が彼女が死ぬる儘に放つて置かなかつたと言つて私を責め、露程の感謝の印も見せてくれない許りか、何時かは彼女も私に許すであらうといふ極く淡い望みさへ私に懷かせてはくれない。彼女の種族に執拗く憑いてゐる惡魔が、彼女一人の軀に全力を集中してゐるのだらう。私は、假令節慾でなくとも、せめて御用心なされとお諫めした事が

何度あつたでせう。私は貴方に、この世には二つ返事で來る基督教の娘がどつさりゐる、その娘達は貴方のやうな勇ましい騎士の戀の情なら、謝絶するこそ罪だと思ふだらうと申さなかつたか、それなのに、貴方は、我儘な強情な猶太娘を戀ひしなくてはならないとは！　成程、あの女が貴方に呪文を掛けたのだと主張せられるとはリューカス・ボーマノワール老はよく察せられた、」

「リューカス・ボーマノワール！」とボア・ギルベールは、咎めるやうに言つた、「それが貴方の豫防策なのですか、マルヴォアザン殿。貴方はレベッカが教堂にゐるといふ事をあの耄碌爺にお告げなすつたのか？」

「私にどうしてそれが露見するのを防ぐことが出來たでせう？　貴方の祕密を隱すだけの手段は、何一つ疎にはしなかつた、が露見して了つた、惡魔の故か故でないかは、惡魔でなくては分らない。併し私は及ぶ限りうまく取りなして置きました、貴方はレベッカを棄てさへすれば安全です。貴方は同情を寄せられてゐる——魔法の犧牲だとてな。あの女は魔法使だ、魔法使として死刑を受けなくてはならない。」

「誓つて、そんな事はさせない！」と、ボア・ギルベールは言つた。

「誓つて、あの女は受けなくてはならず又受けるでせう！」とマルヴォアザンが言つた。「貴方だつて、誰だつて、あの女を救ふ事は出來ない。リューカス・ボーマノワールは、一人の猶太女を殺せば、寺侍のあらゆる色情的放縱を償ふに足るだけの罪滅しになると極めてしまつた。彼がさう云ふ無理ならぬ敬虔な目的を、遂行する力も意志も兩方持つてゐる事は貴方も御承知の筈だ。」

「後世の者はそんな愚かな頑迷が、嘗つてあつたと信ずるだらうか！」とボア・ギルベールは、部屋の中を大股にあちこち歩きながら言つた。

「後世の者が何を信ずるか、私は存じません、」とマルヴォアザンは冷然として言つた、「併し私は、この今の時代では、僧侶も俗人も、百人の中九十九人迄は、大長老の宣告に同意するだらうと云ふ事をよつく存じてゐます。」

「解りました、アルベール殿。貴方は私の友人だ。是非彼女の逃亡を見逃がして貰ひたい、マルヴォアザン殿、すれば彼女を何處かもつと安全な、人に知れない場所へ、移します。」

「それは爲たくとも私には出來ません、」と教堂長は答へた、「この館は大長老のお側仕へを始め、彼に忠實な者で一杯です。して、打明けて言ふが、私は假令私の船を港に寄せる望みがあつても貴方と一緒にこの事件に乘り出し度くはない。私は今迄でも十分貴方の爲めに危險を冒してゐる。高が色彩つた猶太娘の肉と血の爲めに地位を下げられたり、いや、教堂長の位を失つたりしたくはないのだ。又貴方も、若し私の忠告を容れられるなら、この當ても無い企てを思ひ止まつて、何か他の獲物に鷹を放たれたがよいでせう。まあ、考へても御覽なさい、ボア・ギルベール殿、貴方の今の御身分、將來の榮達、すべて皆寺侍團に於ける貴方の今の位置をうまく保つて行かれるかどうかに繫つてゐます。飽く迄このレベッカに對する熱情に執着なさるなら、貴方はボーマノワールに、貴方を放逐する權力をお與へになるばかりです、又彼はその權力を打ち捨てはしますまい。彼は彼の震ふ拳に握つてゐる權標（我が國の笏に類する權威を象徵する短棒）を人手に渡すことを厭がつてゐます、而も彼は貴方が大膽に手を延ばしてそれを取らうとしてゐる事も知つて居る。若し貴方が猶太の女魔法使を保護したなどゝ云ふ立派な口實を彼に與へたなら、彼が貴方を滅すのは疑ひのない事だ。今度の事件では彼の思ふ儘にやらせるがいゝ、貴方には彼の頭を抑へる事が出來ませんからな。やがてあの錫杖が貴方自身の固い拳に握られた時こそは、猶太の娘を可愛がらうと、燒き殺さうと、貴方の自由になさるがよい。」

「マルヴォアザン殿、貴方は餘りに冷酷な——」とボア・ギルベールは言つた。

「——友、」と教堂長は、ボア・ギルベールが恐らくもつと悪い言葉を吐きもしたらうに、さうは言はせず、急いでかう續けて言つた、——「私は冷酷な友だ。それだけに猶更貴方に忠告するにふさはしいのだ。今一度申上げる、貴方はレベッカを救ふ事は出來ない。更にもう一度申上げる、貴方はあの女と一緒に死ぬるより外には途がない。急いで大長老の處へ參られい——彼の脚下に身を投げてお話し！」

「彼の脚下に跪くなどゝは飛んでもない事だ！　が、あの老耄に面と向つてかう言はう——」

「では面と向つてかう言はれるがいゝ、」とマルヴォアザンは冷かに言ひ續けた、「あの捕虜の猶太娘に惚れ過ぎて、氣が狂ひさうだと。貴方が繼慕の情を增せば增す程、愈々彼の憎しみは大きくなつて、果てはこの美しい妖婦の死となるだらう。一方貴方は、誓言に外れた罪を告白して世に隱れない犯罪を身に受けたからには、最早仲間の者の助けを賴みにするわけにも行かず、貴方の華やかな野心と權力の夢をすてゝ、恐らくフランダース（昔、伯爵に治められたオランダの一小國）バーガンディ（昔、フランスの國境にあつた一小國）兩國の間の、小さな爭ひに雇はれて槍を取る身にならねばなりますまい。」

「その通りだ、マルヴォアザン殿、」とブリアン・ド・ボア・ギルベールは、少時考へた後、言つた。「私はあの白髪頭の頑固親爺に凱歌を擧げさせはいたすまい。又レベッカには、彼女の爲めに私が位も名譽も賭する程の値打はなかつた。私はあの女を棄てよう——さうだ、あの女を彼女の運命に任せて思ひ切る、若し——」

「賢明な、餘儀ない決心に、若しなどの言葉をお加へなさるな。婦人は我々が下らなく過ごす時になぐさむ玩具に過ぎない——功名心こそ人生の重要な事柄なのだ。この猶太娘のやうなつまらない慰み物は、百人千人殺したつて構はない、貴方の前に擴がつてゐる華やかな前途を貴方が雄々しく進んで行かれる爲めには！　差當り我々は離れてゐよう、いや又ひそ〳〵語り合つてゐる所を見られてもならない——私は廣間に彼の裁きの席を設へねばならない。」

「なに！　そんなに早く？」

「さうだ。裁判官が前以て宣告を決めてゐる時には、審問は早く進むものだ。」

「レベッカ！」とボア・ギルベールはたゞ獨りになつた時、我れと呟いた、「そちの爲めにわしは飛んだ事になりさうだ。何故わしはあの冷淡な僞善者が勸めるやうに、そちをそちの運命に任せて置く事が出來ないのか？　今一奮發そちを救ふ爲めに盡くさう——だが搆へて恩を忘れるな！　萬一再びわしをはねつけたなら、わしの戀心が烈しいだけそれだけ、わしの復讐の心はひどくなるのだ、ボア・ギルベールの生命と名譽とはたゞ侮られ、非難される許りの時には決して捨てはしないのだ。」

教堂長が緊要の命令を與へるや否や、直ぐさまコンラード・モン・フィッセは遣つて來た、そこで彼は猶太娘を魔法の廉で即時審問に掛けるといふ大長老の決意を傳へた。

「それは確かに夢だ、」と教堂長は言つた、「此處には多くの猶太醫者がゐるが、我々は彼等が不思議な療法を施しても魔法使とは言はない。」

「大長老はさうは思つて居られません、」とモン・フィッセは言つた、「所でアルベール殿、これは正直な話ですが——魔法使であつてもなくても、兎も角この不幸な娘が死ぬことは、ブリアン・ド・ボア・ギルベールが、この寺侍團から失はれたり、この寺侍團が內訌で分裂したりするよりはましでせう。貴方はブリアンの高い位、ブリアンの武名を御存知だ——貴方は我々の多くの兄弟が、彼に非常な敬意を拂つてゐることも御存知だ——併し萬一我が大長老がブリアンを、この猶太娘の軆性でなくて、共謀者だと見做したなら、彼の高位も、武名も、兄弟から受ける餘敬も、すべて大

長老に對しては彼を保護する役には立つまい。若し十二支族（ヤコブの十二人の子の子孫）の魂があの女の一身に宿つてゐるなら、彼女があのボア・キルベールを自分の破滅の巻添へにするよりは唯だ一人でお仕置きになる方がいゝだらう。」

「私は今もブリアンを動かして、あの女を棄てさせようとしてゐる所なのです、」とマルヴォアザンは言つた。「併しそれにしても、このレベッカを魔法の廉で死刑に處するに十分な理由があるでせうか。大長老は證據が非常に薄弱だと氣付かれたなら、お心を變へられはすまいか。」

「證據を十分にしなくてはならない、」とモン・フィッセは答へた、「證據を十分にしなくてはならない。貴方は私の心がお解りですか。」

「解ります。いや又わしはこの寺侍團の發達の爲めとあらば何事でも躊躇致さぬ。が、それにしても適當な手段を見付ける時間がないのです。」

「マルヴォアザン殿、それはどうあつても見付けなくてはなりません、」とコンラードが言つた。「これは寺侍團にも貴方にももつけの幸ひでせう。このテンプルストウは貧乏な教堂だ、メイゾン・ディウの教堂は此處より倍も富んでゐる、——貴方は私と我々の老首領との關係を御存知だ——今度の件を遣り遂げられる者を探し出しなさい、すると貴方は肥沃なケントのメイゾン・ディウの教堂長となられる。どう思召さるゝな？」

「さあ、ボア・ギルベールと一緒に此處へ參つた者の中に、わしのよく存じてゐる奴が二人ある、」とマルヴォアザンが答へた。「もとわしの弟フィリップ・ド・マルヴォアザンの僕であつたが、その後フィリップの處からフロン・ド・ブーフの僕に轉りました。恐らく彼等なら、この女の魔法に就いて何か存じてゐませう。」

「では早速行つて、その者共をお探し下さい——して宜しいか、若し金貨一二枚で彼等の記憶を瞭然させられるなら、それらに不足はさせません。」

「あいつ等は一ゼチンもやれば、自分の生んだ母でも魔法使と誓ふでせう、」と教堂長は言つた。

「ではお行きなさい、」とモン・フィッセが言つた、「正午には事は捗りませう。これ迄大長老殿が、こんなに準備に熱心におなりの事はアメ・アルファディと云つて囘々教信者に墮落した政宗者を火刑に宣告せられた時以來嘗てない事です。」

重々しい城の鐘が正午を告げた、とその時、レベッカは自分の閉ぢ籠められた室に通ずる、人目につかぬ階段を登つて來る人の跫音を聞いた。その跫音で數人の者の來た事が分つた、そしてそれと知つて、レベッカは却つて喜んだ、と云

ふのは、自分の身に如何なる凶事が振りかゝつても、あの猛々しい多情なボア・ギルベールがたゞ一人で訪ねて來るほどには恐ろしくなかつたからである。部屋の扉は開かれた、そしてコンラードと教堂長マルヴォアザンとが、戟を持つた黒裝束の四人の番兵を隨へて、入つて來た。

「呪はれたる種族の娘！」と、教堂長は言つた、「起つてわし等に隨いて參れ。」

「何處へ、何の爲めに參るのです？」とレベッカは訊ねた。

「娘、」とコンラードは答へた、「訊くのはそちの爲めでない、隨いて來さへすればよいのだ。けれども、これだけは知らせて置く、そちは我が聖團の大長老の法廷の前に連れられて其處でそちの罪責を背負はなくてはならないのだ。」

「あゝ有難や、アブラハムの神樣！」と、レベッカは信心深く手を合せて言つた、「判官といふ名は、假令私の種族の敵でございませうとも、私には保護者の名のやうに聞えます。喜んで喜んで皆樣に隨いて參ります——たゞこのヴェールで顏を包む事だけをお許し下さいませ。」

彼等は靜かな嚴かな足取りで階段を下り、長い廊下を通つて、その突當りにある開き扉を押開いて、大廣間へと出た。其處には大長老が臨時に設けた審判の席があつた。

この廣い部屋の下手は從者や鄕士で一杯だつた。レベッカは教堂長やモン・フィッセに伴れられ、戟を持つた番兵を隨へて、その多勢の中を掻き分けつゝ、定めの席へ進んだ。腕を組み頭を垂れて、この群集の中を通つた時、突然一片の紙が彼女の手に押込まれた。彼女は殆ど無意識にその紙片を受取つて、その內容を驗べもせず握り續けてゐた。この恐ろしい集合の中にも、誰か味方がゐるといふ確信が生じた。で、邊りを見廻し、誰の前に出されるのかを見定めるだけの勇氣さへ出た。そこで、彼女は次の章に述べようとする光景をぢつと眺めたのである。

（三十七）

ひたに掟を奉ずる輩に、人の子を嘆きに
委せよと命ずる掟は情なかりき。
公明にて害もなき歡樂の、心惹くそのたくらみに、
微笑むを禁ぜし掟は情なかりき、
されど、暴虐なる力の鐵の笞を高く振り上げ、
それを神の御力と呼べる時、その掟は更に
情なかりき。

（「中世紀」）

無辜の不幸なレベッカの審問の爲めに設けられた法官席は、大廣間の上段と呼ばれる上手の小高いところを占めてゐた、——その上段と云ふのは、既に述べたやうに、舊家の最も羽振りのきく家人又は賓客の占めるべき定めの上席である。

被告の直き前の小高い席には、この御堂の大長老が、長く垂れた、白の大ぶりな長衣を纏ひ、手にこの宗團の標章のついた不思議な錫杖を握つて坐つてゐた。足許には、一脚の卓子が置いてあり、それへ、この宗團の牧師である二人の書記が着席してゐたが、その役目は、この日の議事を正式に記錄に留めることであつた。この僧侶の縞衣、圓顱、それから鹿爪らしいその樣は、この教堂の住者格か、若しくは、大長老の隨行員格かで、この席に參列した騎士達の戰好きな容貌とは、非常に違つてゐた。教堂長は、此處へは都合四人出席してゐたが、大長老のよりも高さの低い、やゝ後ろに引込んだところにある席に着いてゐた。寺侍團でまだこれほどの階級に昇つてゐない騎士達は、尙一層低い處にある腰掛に座を占めてゐた。そして彼等は教堂長達が大長老から離れてゐると同じ位ゐの間隔をその間に置いてゐた、彼等の後ろではあるが、矢張りこの廣間の上段即ち小高いところに、粗末な白裝束の、この宗團の從者達が立つてゐた。

この集會には全體に亙つて最も深い莊嚴の氣が漲つてゐた。そして騎士達の顏には、僧職の人にふさはしい嚴かな態度と共に、大長老の面前では、誰の眉目の間にも必ず現はれる武勇の印が認められた。

廣間の殘りの更に低い處は、矛を持つた番兵や、大長老と猶太の女魔法使とを同時に見るといふ好奇心に驅られて、此處へ來た他の見物人で一杯であつた。が、この下級の者共の殆ど大部分は、この宗團と何等かの關係をもつてゐた。で、彼等は黒い服裝でそれと見分けられるようになつてゐた。が、隣り國から來た百姓共も入場を斷られはしなかつた、と云ふのは、自分の執行する裁判の敎化的の光景を出來るだけ公けにするのがボーマノワールの誇りであつたからである。滿堂を見廻した時、彼の大きな碧い眼は一層大きくなり、彼の面貌は、自分がいま勤めようとする役の尊嚴を意識し、效果を想像して、その得意さに滿たされてゐるやうに見えた。鬚にもめげぬ底力のある柔かな美しい聲で、彼自身も共に合唱した讃美歌に、この日の審問は始まつた、そしてその莊嚴な歌——寺侍等が現世の敵を打つ前によく歌つた「いざわれら神に向ひてうたはん」（舊約聖書詩篇

九十五篇一節）を、このリューカスはやがて悪魔に打勝つ（とかう彼は思つた）その手始めには最も適はしいと判斷したのである。日頃合唱しつけてゐた百人の男性が歌ふ底力のある、ゆるやかな調は、廣間の圓天井に昇つて、その迫持の間を、大河の奔流するが如く、快い、而も莊嚴な響きを立てゝ鳴り渡つた。

歌聲が止んだ時、大長老は靜かに群集を見廻した、そして教堂長の席が一つ空いてゐるのに氣が附いた。その座席の主のブリアン・ド・ボア・ギルベールは、この時自分の席を去つて、寺侍の占めてゐた腰掛の一つの一番隅の處に立つてゐた、——片手では幾らか顏の隱れるやうな具合に長い外被を攬げ、又片手では劍の十字形の柄を握り締めて、鞘に納めた儘ではあるが、その劍尖で褥の床に靜かに線を引きながら。

「不幸な男だ！」と大長老は、同情の眼でちらと彼の方を見遣つてから、言つた。「どんなにこの審判が彼を心配させてゐるか、コンラード、御身にも分るだらう。女性の浮氣な目付も、惡魔の助けで、勇ましい立派な騎士を斯樣な目に會はす事が出來るのだ！　彼は我々を見る事が出來ないのだ、又あの女を見る事も出來ないのだ、そして彼を苦しめる者から、何か刺戟を受けて、彼の手はあの神祕な線を床の上に書いてゐるのかも知れない。——恐らく予の命や安全を詛つてゐるのだらうが予は忌はしい惡魔に唾を吐きかけて侮つてやる。『永久に獅子を打つべし』！」

これは彼の股肱の臣コンラード・モン・フィッセにだけ話されたのである。大長老はそれから聲を擧げて、會衆に挨拶した。

「敬愛なる勇ましき諸君、予が兄弟また予が子なる騎士、教堂長、及びこの聖團の團員諸君！——又この聖い十字架を掛けんと志す、家柄の好い、敬虔な從者達よ！——そして又、あらゆる段階の基督教の同胞よ！——この度の集會を催すに至つたのは、予に力が缺けてゐたからではないといふ事を知られたい。何故ならば、予不肖なりとも、予には、この官杖と共に、この聖團の幸福に關する總てを裁き試みる全權を委ねられてあるからだ。ベルナール聖人樣は我が僧兵團の規則中、第五十九章に、長老の意志と命令に依る外、團員を會議に召集してはならぬと申された、そして又ベルナール聖人樣は、寺侍團の全部又は一部の僧會を召集してもいゝ機會なり、時間なり、場所なりを指定する自由を、予と同職であつた、ずつと尊い教父達に與へ給うたと同時に、予にも亦與へ給うたのだ。それから一切の斯樣な僧會に於いて、兄弟達の助言を聽き、我々の意の儘に處置するのは我々の義務だ。併し、暴れ狂ふ狼が羊の群を侵して、その中の一匹を引攫つた時には、親切な羊飼の義務として、その仲間の者達を呼び集め、弓や投石器を以て力を合せて侵略者を平げるのは當然だ、これ卽ち、獅子は常に打倒すべしと云ふ、我等周知の規定に從ふ所以である。であるから、予はヨークのアイザックの娘、名はレベッカと云ふ猶太の女を、予が面前に召し出したのだ——神籤と魔法とで惡名の高い女だ、それを以てこの女は、下郎でなくて騎士の——それも俗の騎士でなくて、聖堂の奉仕に身を獻げた騎士の——平の寺侍ではなくて、名譽も、地位も第一の、我が教團の教堂長の血を狂はし、腦を鈍らしたのだ。我が兄弟、ブリアン・ド・ボア・ギルベールが、眞實な、熱心な十字軍士であること、自分の腕を奮つて聖地で多くの武勳を現はしたこと、聖地を汚したあの不信者共の血で以て、その穢れを潔めたことなどは、予自身にも、又予の言葉を聞かれる諸君にもよく知れてゐる。いや又、我が兄弟が悧巧で、拔け目のないことは　その剛勇で鍛錬の出來てゐるのに劣らない評判を仲間の間に得てゐる、だから東西兩國の騎士達は、ド・ボア・ギルベールを、天意により予がこの官杖を持つ勞を免ぜられる時、その繼承者に指定してもよいと以前から言つてゐる程である。若しかうも尊敬され、かうも尊敬すべき人間が、突然その人格、その譽ひ、その兄弟、及びその前途に對する顧慮を棄てゝ、或る猶太の娘と交り、淋しい場所を、この淫蕩な伴侶と彷徨ひ、自分の身を差し措いてその女の身を庇ひ、遂に、自分の愚かさの爲めに、全く目も晦み、醉ひつぶれ果てゝ、その女を我が教堂の一つにさへ連れ込むやうになつたと聞いたなら、この立派な騎士は何か惡い惡魔に憑かれたか、何か邪まな呪文に掛けられたかしたのだと言はないで、何と言はう？　若しそれがさうでないと想へるならば、御聖文の『汝等身を潔めよ』に從つて、惡を除く爲めには、地位も、剛勇も、高名も、乃至は、どんなこの世の理由があつても、予は彼を罪せずには置かれないのだ。何故かと云へば、この歎くべき事件には我が聖い宗團の規則に違犯する行爲が澤山あつて而もそれが極惡であるからである、——第一、彼はつい最近自分の思ふが儘に歩き廻つた、これは第三十三條、『何人も己れの意志又は望みに從つて歩く可からざる事』といふ條に反してゐる。第二に、彼は破門された者と交つた、これは第五十七條、『團員は破門せられたる者と交際せざる事』といふ條に背いてゐる、されば彼は永遠の呪詛を受けなくてはならない。第三に、彼は見知らぬ女達と言葉を交はした。これは『團員は見知らぬ婦人と談話すべ

からず』の條に反してゐる。第四に、彼は女の接吻を避けなかつた、いや、恐ろしいことには、彼は女の接吻を需めた、令名高き我が宗團の規定の最後の條にも『接吻は避くべきこと』と言つてある通り、接吻によつて十字軍士も罠にかかるのだ。かうした言語同斷の重なる罪に依り、ブリアン・ド・ボア・ギルベールは、たとひ我が宗團の右の手、右の眼であつても、そこから切り去り、抉り出されなくてはならない。」

彼は言葉を切つた。低い囁き聲が會衆の間に傳はつた。「接吻の囘避に關する」宗規を聞いて微笑ひかけた若い連中も、今は全く眞面目になつて、大長老が次にどんな事を言ひ出すかと熱心に耳を澄まして待つてゐた。

彼は再び口を開いた——「我れからかうした重大な數々の點で自分の宗團の規定を犯した寺侍の刑罰は、非常に大きいのだ。だが若し、この騎士が少女の美にうか〳〵と目を奪はれた爲めに、惡魔が魔術と呪文とを用ゐて、彼を虜に致したのなら、その時は彼の墮落を懲罰するよりは、寧ろ彼の爲めに嘆いてやるべきである、それで、彼にはたゞ彼の罪を潔める爲めの悔罪を課して、我が憤りの鋭鋒は、斯くも彼を殆んど全く墮落せしめるに至つた、あの憎むべき惡魔の道具に向けらるべきである。されば、この不幸な所業を目

擊した人々は、進み出て證言せられよ、さすれば予はこの所業の大體と關係とを判定し、又予の裁判がこの不信神の女の處罰だけで滿足してもいゝかどうか、それとも更に進んで、涙を振つて、我が兄弟に對しこれ以上の處分に及ばなくてはならないかどうかを判定する事が出來よう。」

數人の證人が呼び出されて、ボア・ギルベールがレベッカを燃える城から救ひ出さうとして冒した危險や、彼女の安全を許り心にかけて我が身の防禦を疎にした實事などの證言を求められた。するとその證人は、異常の出來事といふと何事に拘らず強く刺戟される低級な人の一般にやるやうにいかにも大袈裟にこれ等の事を細々と述べ立てた、それに彼等の生來不思議を好む氣質は、酷く煽り立てられた。と云ふのは自分等の證言が、大長老のやうな傑い人に判決の參考資料を供し滿足を與へたらしい樣子を見たからである。ボア・ギルベールの冒した危險は、事實可なり大きかつたのであるが、右の證人の言葉によつて、ます〳〵奇怪至極なものになつた。この騎士がレベッカの保護に盡した熱心は、ただに思慮分別に外れてゐると誇張した許りか、最も狂亂的度外れの武俠的精神の範圍をも超えたものと誇張された、そして假令彼女の言葉が、屢々手嚴しく叱責的であつても、彼女の言つた事に彼が服從したと云ふ事が、非常に大袈裟

に話されたので、彼のやうな傲慢な氣質の人間には、殆ど有り得べからざることのやうに思はれた程であつた。

その次にはテンプルストウの教堂長が呼び出されて、ボア・ギルベールと猶太娘とが、この教堂に着いた時の樣子を述べさせられた。マルヴォアザンは巧みに用心して證明した。併し明かにボア・ギルベールの感情を損ねないように努めてゐながらも、彼はボア・ギルベールが或る一時的の精神錯亂の爲めに惱んだほど深く、連れて來た少女に戀慕してゐたらしい、と言はぬ許りの暗示を、ちよい〳〵話の間に挿むのであつた。悔悟の嘆聲を洩しながら、教堂長はレベッカとその戀人とを教堂の敷地内に入れた事をひどく悔いてゐる由を公言した、そして彼はかう言葉を結んだ——「併し私の辯明は、既に我が最も尊い大長老樣に申上げた懺悔の中になされて居ります。大長老樣は、私の行爲こそ違法であつたかも知れないが、動機は惡くなかつたといふ事を御存知でございます。私は罪障消滅の爲め、喜んで大長老樣がお定め下さるどんな難行苦行をも致す覺悟でございます。」

「よく言つた、アルベール、」とボーマノワールは言つた、「そちの動機はいゝ、あの心得違ひの兄弟の輕率な馬鹿げた行を途中で喰止める事を正しいと判斷したのだからな。だがその行爲は惡かつた、例へば、こゝに人がゐて放れ駒を留

めようと思つて、手綱の代りに鐙を摑んだならば、目的を遂げないで、自ら傷を負ふのは必定だ、そちの行爲もこれと同じ道理だ。我が敬虔な教祖に依つて我々は朝禱に十三囘の、晩禱に九囘の主の祈りをするやうに定められてゐる、そちはこの勤めの二倍をするのだぞ。寺侍は一週に三度肉食を許されてゐる、がそちは七日間打つ續けに精進をするのだぞ。これを向う六週間怠るな。さうすれば、そちの悔罪苦行は達せられるのだ。」

テンプルストウの教堂長は、表面如何にも恭順らしい顏付をしながら、大長老の前に地へ額づいて、自分の席に歸つた。

「兄弟等よ、」と大長老は會衆に向き直つて言つた、「予は特にこの女が魔法や呪文を用ゐさうな者であるかどうかを發見する爲めに、この女の既往の生活や行狀を少し取調べるのがよくはなかつたかと思ふ、と云ふのは外でもない、予が聞き及んだ事實によると、この度の不幸な事件で、我が心得違ひの兄弟は、何か忌むべき誘惑と迷想とに影響せられたものと想像され勝ちであるからだ。」

グッダルリークのエルマンは居合せた第四番目の教堂長であつた。他の三人は、コンラード・マルヴォアザン及びボア・ギルベールその人であつた。エルマンは囘教徒の軍刀

に依つて負はされた顔の傷痕に、その名殘を留めてゐる古い戰士で、同宗徒の間に高い位と深い尊敬とを得てゐた。その彼がこの時立上つて大長老に一禮した、そして直ちに發言を許された。「最も尊むべき御神父樣、私は我が勇敢な兄弟、ブリアン・ド・ボア・ギルベールに就いて承りたいことがございます。それは、彼がこの驚くべき間罪に對して何と言ふか、又如何なる眼で今この猶太の少女との不祥な交りを見るか、をでございます。」

「ブリアン・ド・ボア・ギルベール、」と大長老は呼んだ、「我がグッタルリークの兄弟がそちに答へて貰ひたいといふその間ひを聞いたであらう。予の命令だ、彼に答へよ。」

ボア・ギルベールは大長老がかう言ひ掛けた時、その方を振り向いたまゝ、たゞ默つてゐた。

「彼は唖の惡魔に憑かれたな、」と大長老は言つた、「去れ、惡魔！言へ、ブリアン・ド・ボア・ギルベール、この我が聖團の章徽にかけて、そちに命ずるぞ。」

ボア・ギルベールは込み上げて來る侮蔑と憤怒の念を、辛つと抑へた、それを面に現はしては自分の身の爲めにならない事をよく知つてゐたからである。彼は答へた——「最も尊むべき御神父樣、このブリアン・ド・ボア・ギルベールは、そんな亂暴な、ぼんやりした命令にはお答へ致しません。若しこのボア・ギルベールの名譽が彈劾されるならば、自分は身を以て、又屢々基督敎の爲めに戰つたこの劍を以て、それを防禦するでございませう。」

「予はそちを許す、ブリアン、」と大長老は言つた、「そちがそちの武藝を予が前で自慢するのは、そち自身の所業を自分で褒めそやす事であり、人を誘惑して自分の德を自慢せしめる惡魔の業ではあるが。だがそちが吐くやうな事は、そち自身の發心よりも、神の御許しで我等が我等の集りから平げて追ひ出さうとする者（惡魔）に刺戟せられて言つたものと判斷して、赦してやるのだ。」

ボア・ギルベールは黑い鋭い眼をちらと光らせて、侮蔑の心を現はしたきり、彼は一言も答へなかつた。「所で、」と大長老は尙ほも續けて言つた。「クッダルリークの間ひに對する我が兄弟の答がかう不十分であるからには、予は予が審問を續け、我が守護神のお助けにより、この罪惡の祕密を十分に調査致さう。この猶太の女の生活及び行狀に就いて何か證據となるべきものを持つてゐる者は、予が前で申立てるがよい。」その時廣間の下手がざわめいた、そして大長老がその理由を訊ねると、この囚人に不思議な膏藥で、病んだ手足を元通り完全に使へるやうにして貰つたよぼ〳〵な男が、今群集中にゐるのだといふのがその答であつた。

生れはサクソンの、その哀れな百姓男は、猶太の娘に中風を治して貰つた罪でどんな刑罰を受けるかも知れないと脅えるところを、無理に審問場へ引摺り出された。彼は確かにすつかりは癒り切つてゐなかつたと見え、撞木杖に縋つて證人に出た。彼の申立ては如何にも氣乘りがしないしく、涙さへぽろ〳〵零してゐた、が結局彼は二ヶ年前、ヨークに住つてゐる折、金持の猶太人アイザックの註文で商賣の指物に精を出してゐる間に、突然或る難病に罹つたといふ事、彼は床から動く事も出來なかつたが、レベッカの指圖で施された治療法や、殊に一つの香りのよい、溫め膏藥のお蔭で、幾分手足が使へるやうになつた。と云ふことを承認した。それ許りか、彼の言ふには、レベッカはその貴重な軟膏を一瓶くれた上に、テンプルストウ附近の父の家へ歸る旅費をも惠んでくれたのであつた。「恐れながら、」とその男は言つた、「あの娘さんは、不幸にも猶太人に生れつきはしましたが、手前に惡意を持つたとは思へません、と申しますのは手前はあの娘さんに療治をして貰ふ時でも、主の祈や信條を誦しましたが、矢張りその療治は神の御療法と同じく效目があつたからでございます。」

「默れ、奴隷め、」と大長老は一喝した、「退れ！　貴樣のやうな畜生には、地獄の治療法でいぢくられたり、弄ばれたり、憎むべき種族の爲めに働いたりすることが丁度いゝのだ。これよつく聞け、惡魔は惡魔流の治療法を信用させる爲めに、病氣を除く積りで病氣を與へる事が出來るのだぞ。貴樣は今申したその軟膏を所持してゐるか。」

百姓は、震へる手で胸を手探りして、小さな箱を取出した。その蓋の上に何か猶太の文字が書き付けてあつたが、それが大概の傍觀者には、惡魔が調劑師だつたといふ確かな證據と思はれた。ボーマノワールは、十字を切つてから、その箱を自分の手に取つて、大抵の東方語に通じてゐたので、蓋の上の題句をすら〳〵と讀んだ、——「猶太の種族の獅子勝てり」、「惡魔の奇妙な力は、」と彼は言つた、「聖文を冒瀆の言葉に轉へ、我等の缺く可からざる食物（聖書の言葉）に毒を混ぜる事が出來る！　此處にはこの不思議な軟膏の成分を、我々に語ることの出來る醫者はゐないか？」

自ら醫者と名乘る二人の者——一人は修道僧で、今一人は理髮師——が現はれて、その原料に就いては、東方の藥草と思はれる、沒藥と樟腦との香りがすると云ふ外に、何も分らないと明言した。併し彼等は、勝れた同業者に對する眞の職業的の憎しみから、この藥は自分達の知らないものであるからには、必定不法な魔法的な處方で造つたものに相違ない、何故ならば、自分等は、魔法使でこそなけれ、

苟も基督教徒の立派な信仰を以て行はれる範圍内なら、醫術のあらゆる細目に渉つて十分に會得してゐる、といふ意を暗に仄めかした。この藥の詮議が終つた時、かのサクソンの百姓は、自分が非常によく効く事を知つてゐるこの藥を戻してくれるようにと畏る〳〵頼んだ、が大長老はその頼みを聞いてひどく顔を顰めた。「貴樣の名は何んと云ふ？」と彼は足蹇の百姓に言つた。

「スネルの子、ヒッグにございます、」とその百姓は答へた。

「ではスネルの子ヒッグとやら、」と大長老は言つた、「よつく聞け、立つて歩きたいばかりに、不信心な者の醫藥を受けるよりは、床に就いてゐる方がよいのだ。異端者共から慈善の贈物を貰つたり、給料欲しさに彼奴等の處へ奉公するよりは、彼奴等の財寶を腕力で奪ひ取る方がよいのだ。退れ、而してわしの今言つた通りにしろ。」

「やれ〳〵、」と百姓は言つた、「恐れながら、折角の御教へでございますが、手前にはあんまり遲過ぎました、何分手前は不具の人間でございまするで。ですが手前の二人の兄弟が金持のラビ・ネーザン・ベン・サミュエルの處に奉公致して居りますで、御上人樣は、サミュエルに忠實に奉公するよりも、サミュエルの物を奪ふ方が正しいと仰しやつたゞと言つてやりませう。」

「この口うるさい奴を逐ひ出せ！」自分の一般的に諭した箴言が、かう實際に適用されたのを說破する準備がなかつたので、ボーマノワールはかう言つた。

スネルの子ヒッグは群集中に身を退いた、が恩人の運命が心がゝりであつたので、彼はそれを知る迄其處を去り兼ねてゐたが、再びかの峻嚴な法官に睨まれて、その恐ろしさに心の臟の縮まる思ひをしながらも、尙ほ愚圖々々してゐた。

吟味が此處迄進んだ時、大長老はレベッカに面帕を取れと命じた。この時初めてレベッカは唇を開き、凝と胸を抑へて、然し威儀を正して、かう答へた、——「わたしの民族の娘達の習はしとしてたつた一人、見知らぬ人々の集會の場所にゐる時は、顔をむき出しには致しません、」その聲の快い調子やその答の穩かさは聽衆の胸に憐憫と同情との感を起させた。が、ボーマノワールの心では、自分の義務と想つたことを邪魔する人間の感情は、どんな感情でも抑へるのが自から一つの道德であると思つたので、彼は冷然としてレベッカに面帕を取れと、もう一度命令した。その聲に應じて番兵共はあはやレベッカの面帕に手を掛けようとした、とその時、彼女は大長老の前に立ち上つて言つた、「いえ、けれどあなた御自身のお孃樣が可愛いとお思召したなら——おゝ、」とはつと氣が付いて言葉を換へた、「御上人樣はお孃をお持ちでない！——でもお母樣の事を思ひ出し遊ばしたら、——御姉妹を可愛いと思召したら、又女の嗜みと云ふ事をお考へ下さいましたら、何卒御面前でこんな扱ひを受けさせて下さいますな。こんな亂暴な下司男に剝がれるのは、少女に似合はしくございません。私はあなたの御言葉に從ひませう。」と彼女は、聲にぢつと堪へた悲しみを籠めて、言ひ足した、その音聲には流石のボーマノワールの心も、やゝ動かされた——「御身は御身の民の間の長でございます、で、御命令に從ひ私は不運な少女の顔をお見せ申しませう。」

レベッカは面帕を取つた、そして威ある中に羞ひを含んだ面持をして人々を眺めた。彼女の並勝れた美貌は驚きの囁きを起した、そして若手の騎士達は暗默の裡に、目と目で互にかう語り合つた——ブリアンの一番の言譯は自分達の想像したこの女の魔法よりも、寧ろその女の實際の美の力にあると。併しスネルの子ヒッグは、自分の恩人の顔を見て最も深く感銘を受けた。「俺を出してくれさつしやい、」と彼は廣間の入口の番兵に言つた、——「俺を出してくれさつしやい！　あの女を二度見ると死んじまふ、俺はあの女を殺す手傳ひをしたやうなもんだ。」

「安心おし、氣の毒なお方、」とレベッカは彼の叫び聲を聞き付けて言つた、「本當の事を言つたつて、私の害にはなりません。——不平や歎きで私を助ける譯には行きません。どうか安心して下さい——家に歸つて危ない目に會ふのを免れなさい。」

ヒッグはこの時番兵共の情で押出されようとしてゐた、彼等は彼が餘り喧ましく喚き立てるので、彼を出してやらないゝつてはならないと心配したのである。併し彼は靜かにしてゐる事を誓つて、留まる事を許された。今度はアルベール・マルヴォアザンから自分等の證言の重大な事を注意されてゐた二人の兵士が證人に呼び出された。二人共無情で、因業な惡者であつたけれども、捕虜の少女の優れて美しい姿を見ては、流石に躊躇ふ樣子であつた、がテンプルストウの教堂長から意味ありげな目配せを受けると、また元の强情な平靜な心に歸つて、彼等はさま〴〵の事柄を述べた、而もその事柄と云ふのが全く愚にもつかない作りごとであつたり、その事柄だけなら、尋常の事であるが、彼等の誇張した話振りや、又事實に附加へた彼等の曲解などの爲めに非常に怪しげなものとなつてしまつた。全く右の陳述はあやふやで、もつと公平な判官ならば、誰でも怪しみさうなものであつた。彼等が證據として擧げた事件は、現代ならば、

二種に分けられるであらう——即ち、重要でないそれと、實際上又は自然の法則上不可能であるそれと。併し、兩方共、この無智な迷信的な時代にあつては、容易に犯罪の證據として信用されたのであつた。第一の方は、レベッカが自分達に分らない言葉で我れと我が身に呟くのを聞いた事や、彼女が時々思ひ出したやうに歌つた唄は奇妙に快い響を持つてゐて、聞く者の耳を戀らせ、胸をときめかせた事や、彼女は折々獨り言を言つては、天を仰いでその答へを待つやうに見えた事や、彼女の衣服は奇妙な、不思議な形で、良家の婦人のものとは異つてゐた事や、彼女は神祕的な模樣を刻つた指輪を嵌めてゐた事や、そして怪しげな文字が彼女の面帕に縫取りしてあつた事などであつた。

すべてかう云ふ實に當り前な、實に何でもない事柄が、レベッカが惡魔と不法の交りを結んだといふ證據として、いや少くとも、强い嫌疑を與へるものとして、眞面目に耳を傾けられたのであつた。

併しこゝにそれ程いかゞはしくない證言があつた。輕々しく信じ易い會衆は、いやその大部分は、それがどんなに怪しくとも、直ぐに眞に受けたのである。一人の兵士は彼女が彼等と共にトオキルストオンの城へ連れて行かれた負傷者の治療をしてゐる所を見たと云ふのであつた。彼女は負傷者に或る合圖をし、幾度か或る神祕な言葉を繰返した。自分は有難い事にそれが何の事か解らなかつたが、兎に角その時四角な琴の鐵の鏃が傷から脫れて、出血は止まり、傷口は塞ぎ、そしてこの死に瀕してゐた男は、十五分も經たない中に、城壁の上を歩き、斯く云ふ證人が射石機で石を射るその手傳までしてゐた、とその兵士は言つた。この物語は恐らくレベッカがトオキルストーン城にゐた折、傷ついてゐるアイヴンホーの看護をしたといふ事實に基いたものであらう。併しその兵士が自分の言葉を補つて實際の證據を提出する爲めに、革の袋から、琴の鏃を取出して、これは奇蹟によつて負傷者から引拔かれたものだと自分で物語つたので、以上の證言の精確さを攻撃することは猶さら困難であつた。そしてその鏃の鐵の目方はたつぷり一オンスもあつたので、どんなに不思議であつても、それがこの話を十分確實にしたのである。

彼の仲間の者は、レベッカが櫓の天邊から身を投げようとした刹那の、彼女とボア・ギルベールとの間の場面を、近くの胸壁から目擊してゐたのである。此奴も仲間の者に負けてはゐず、レベッカが櫓の胸壁の上に立つて、そこで眞白な白鳥の姿となり、その姿で三度トオキルストーン城の周りを飛び、それからまた櫓に下りて、再び元の女の姿に歸つ

たのを見たと述べ立てた。

かう云ふ重大な證據ならその半分以下でも、どんな貧しくて醜い老女（昔、醜い老婆は魔々魔法使ひの嫌疑を受けて刑に處せられたものである）であらうと、假令それが猶太人ではなくても、有罪の宣告を受けるに十分であつたであらう。この致命的な事柄と一緒にされては、以上の證據は、假令絶世の美を以てしても、レベッカの若さにはとても耐へられない程重いものであつた。

大長老はこれで證據の蒐集を終つた、で今度は嚴かな口調でレベッカに、自分がこれから宣告しようとする刑の申渡しに對して、何か言ひたい事があるかと訊ねた。

「お情けを乞ふ事は、」と愛らしい猶太娘は、感餘つてやゝ震へを帶びた聲で言つた、「卑しい業と思ひます上に、又甲斐ない事でもあらうと承知して居ります。他宗の病人や負傷者を救ふ事は、私共兩宗派の何人もの仰ぎまつる神樣のお氣に召さぬ筈はないと申しましても、これも亦何の甲斐もございますまい。この人々が（神よ、願くはこの人々を赦し給へ！）私に對して惡しざまに申しました多くの事柄が、それは有り得ない事だと抗辯致しましても、あなたがさう云ふ事の有り得る事を信じていらつしやる以上、露いさゝかも私の益にはなりますまい、そして私の衣服や言葉や振舞の變つてゐるのは、私の民族の持前だと說明致しましても尙更役には立ちますまい——私は今少しで私の國の事を申す所でした、が、あゝ！　私共には國といふものがないのです。そして又私は、あそこに立つて、自分を犧牲にしようとするやうな拵へ事や、臆測に耳を傾けてゐる、あの私の壓制者に迷惑を掛けて迄身の證を立てようとは致しません。神樣、願くはあなたがあの人と私との間に立つて判官となつて下さるようお祈り致します！　ですがベリアルの男が私に——味方もなく、防ぎやうもない、彼の捕虜である私に迫つた結婚を聽き容れる位ゐなら、寧そ私はあなたが私に宣告されるやうな死に十遍でも從ひませう。ですけれども、あの人はあなた御自身と同宗派でございます、そしてあの人の最も輕々しい斷言も不幸な猶太娘の最も嚴かな主張よりは重うございませう。ですから私は私に課せられた罪を、あの人に歸しは致しますまい——ですが、あの人自身に——左樣、ブリアン・ド・ボア・ギルベール樣、御身自身に私は訴へます、かう云ふ咎めは誤つてゐないでせうか、どうでせうか？　恐ろしいと同樣に言語同斷で中傷的ではないでせうか？」

一座は一寸しんとした、並みゐる人々の眼はブリアン・ド・ボア・ギルベールに注がれた。彼は默つてゐた。

「仰しやつて下さい、」と彼女は言つた、「御身も男なら——

―そして基督教徒なら、何とか仰しやつて下さい！　折入つてお頼み申します、御身の纏はれる法衣にかけて、御身の誇りとなさる騎士道にかけて、御身の母上の名譽にかけて、御身の父上の血肉にかけてお頼み申します、かう云ふ事が、本當であるかないか仰しやつて下さい。」

「あの女に答へて見よ、」と大長老は言つた、「そなたと闘ふ惡魔が、そなたに力を與へるものならば、あの女に答へて見よ。」

實際、ボア・ギルベールは胸に爭ふ激情の爲めに心が擾れてゐたらしく、彼の顏はその爲めに殆どひきつツてゐた、そして遂に彼はレベッカの方を見ながら、如何にも苦しさうな聲でかう答へた、――「あの卷物！――卷物！」

「さうだ、」とボーマノワールは言つた。「これこそ立派な證言だ！　その由々しい卷物に記してある咒文こそ、正しく彼女の魔法の犧牲を默らした因なのだ、で彼が出來るのはその卷物を名指す事だけだ。」

併しレベッカは言はゞボア・ギルベールの口から無理に引き出されたこの言葉に、又別の解釋を附けてゐた、そして手の中に握り續けてゐたあの羊皮紙の袋にちらと眼を走らして讀み下すと、そこにはアラビア文字で、「代戰士を要求せよ！」と認めてあつた。ボア・ギルベールの奇妙な返事を聞いて、會衆がいろ〳〵と囁き聲で取沙汰してゐる暇に、レベッカは祕かに書物を驗めて、直ぐ破り捨てゝ了つた。群集の鎭まるのを待つて、長老は言つた。

「レベッカ、そちはこの不幸なる騎士から何の有利な證言も得る事が出來ない。予もよく認める通り、この騎士に憑ついた啞の惡魔は、未だ仲々威勢があるやうだからな。そちには未だ何か外に言ふ事があるか。」

「あなた御自身の嚴しい掟によりましても、未だ私には一つの生きる機會が殘されて居ります、」とレベッカは言つた、「私の一生は悲慘なものでございました――少くとも、近頃は悲慘でございました――ですが、神樣の賜物である生命を、折角神樣がそれを護る手段を私に授け給ふ間は、投げ捨ては致しません。私は今度の嫌疑を否定致します、私は身の潔白な事を主張し、この告發の僞りであることを斷言致します。私は決鬪による裁き（この習慣はノルマン人に依つてイングランドに輸入されたものである）の特權を要求し、そして私は代戰士を立てませう。」

「してレベッカ、」と大長老は答へた、「何者が魔法使の爲めに槍を取るだらう？　何者が猶太娘の代戰士となるだらう？」

「神樣が私に代戰士を出して下さいませう、」とレベッカは言つた。「この樂しいイングランドに――慇懃な、大度な、自由なイングランドに――義理の爲めには何時でも生命を賭ける方々が、あんなに澤山居られるイングランドに、誰一人正義の爲めに戰つて下さる人がないといふ筈がございません。よし又ないと致しましても、私は決鬪による裁きを要求するといふ事だけで十分でございます――こゝに私の挑戰のしるしを置きます。」

彼女は手に篏めてゐる刺繍した手袋を脫いで、大長老の前に投げ出した。その態度には無邪氣と威嚴とが交つてゐて、並居る人々の驚きと賞讚とを惹き起した。

（三十八）

わしは此處に挑戰の印を投げる、
武勇の有りつたけを出して
お主にそれを證明する爲めだ。
（リチャード二世）

流石のリューカス・ボーマノワールもレベッカの態度や容姿には動かされた。彼は元々殘酷な、いや嚴格な人でもなかつた、それが天性情熱が淡く、又誤つてはゐるけれども、高い義務觀念を懷いてゐたので、彼の心は、自分が選つて來た禁慾生活や、自分の享けた無上の權力や、又彼が特に自分の雙肩にかゝると考へた不信者を降服せしめ、異端者を根絕やす假想的の必要などで、次第にかたくなになつたのである。彼の面貌は彼の前に、誰一人味方もなく、而も非常な元氣と勇氣とで自分の擁護に努めてゐる美しい女を凝視すると、再びいつもの嚴しさが和らいだ。彼は、二度十字を切つた、こんな場合にはいつも腰の劍と硬さを競ふ彼の胸が、どういふ譯で何時になく柔かになつたかを疑ふかのやうであつた。遂に彼は口を開いた。

「娘、若し予のそちに對して懷く憐憫の情が、そちの邪まな術が予に作用したので生じたのなら、そちの罪は更に大きいぞ。だが、そんなに美しい體が墮地獄の身であるとはと予の歎くのは、それこそ親切な自然の情だと、予は寧ろ思ふよ。娘、悔い改めよ、そちの魔法を懺悔し、そちの邪宗をすてゝ、この聖い標章（十字架）に縋れ、さすれば何事も、現世でもかの世でも、屹度そちに好都合になる。又この最も嚴格なる宗團に屬する何處かの尼僧團に入れて、祈禱とふさはしい悔罪をする時を得させてやらう、而もこの悔罪はさうして安心を與へこそすれ、後に悔いるべきものではない。さう